

豪華絢爛たる緑谷出久 のヒーローアカデミア

両生金魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※クロスオーバー要素はほぼ最初のみ、クロス先を知らなくても問題はありませ

ある日、無個性であるが故にヴィランに狙われた緑谷出久は、とあるHEROに助けられて諦めていた夢を再燃させる。目指すは、どんな人でも救けられる最高の、そして豪華絢爛たるヒーロー。己の存在全てを懸けて、緑谷出久はヒーローへの道を歩み出す。

※強い緑谷君が見たい欲求に駆られて執筆しました。色々と強化されます

※爆豪ファンは回れ右を推奨します

※チラシの裏にて、”豪華絢爛たる緑谷出久のこぼれ話”
乗つけていきます。 という名前で適当な話を

目次

緑谷出久：アナザーオリジン	1
緑谷出久：オリジン	16
覚醒・熱血・努力！	33
訪問！ I・アイランド！	45
雄英入試前、色々な出会い	62
雄英高校入試	71
78 入学、そして入学直後のイベント達	
雄英生活の開始！	87
襲撃！ヴィラン連合！	95
強敵！ 敵連合脳無！	105

ヒーローに立ち止まる暇は無い！	114
訪問、シールド一家！	123
三つ巴！障害物競走！	132
大混戦の第二種目！	143
トーナメント、第一回戦	152
轟焦凍：オリジン	163
夜嵐イナサ：オリジン	175
誰よりも輝くように	186
邂逅、グラントリノ	196
職業体験初日	207
突然の訪問者	221
保須市、炎上	231

保須市の長い夜	245
一夜明けて	266
激闘！期末試験！	275
期末試験総括	295
ドキドキの授業参観	303
ドキドキのヒーロー参観	321
閑話	
体験学習：東京編	337
映照才子の運命の出会い	354
A組B組有志合同特訓の一コマ	383
女子三人集まれば……？	383
林間合宿	
合宿初日	405
特訓！ 特訓！ そして女子会！	419
僕のヒーロー	437
混沌の森	450
長い夜の終わり	463
病室にて	477
決戦前	493
常闇踏陰：オリジン	506
託される想い、受け継がれる意志	521
533 始まりの終わり、終わりの始まり	533

新たなる誓いと母の思い

539

変わる日常、変わる人々

550

仮免試験へ向けて

558

新しい力、新しい日常

570

磨け！ファッションセンス！

582

ヒーローの在り方

590

緑谷出久：アナザーオリジン

本当は、6年前から分かっていた。

”無個性”のくせに、ヒーロー気取りか、デク!!”

人は、生まれながらに平等じゃない。

勉強が出来るだけじゃヒーローになれねえよ!”

ゲラゲラと笑うクラスメート達の笑い。これ見よがしに、手で爆発を起こすかっちゃん。

「あー、ほら、もうちよつと現実を見据えてだね……」

僕がイジメられていることを見て見ぬふりをして、ただ現実を見据えさせてくる先生。

そして、何よりも――

「出久、ごめんね、ごめんねえ……」

6年前からずっと、僕に謝り続けるお母さん。昔はほつそりしてたのに、今ではずいぶん太っちゃった。お母さんはバレてないと思ってるけど、実は夜中にたくさん食べているのを僕は知ってる。だから、僕がみんなにイジメられてる事なんて言えない。そ

んな事がバレたら、きつとお母さんは倒れちゃう。

それでも、諦めたくはなかった。

『もし、物を引き寄せる個性が僕に現れたら……』

個性研究ノートは、もう10冊も書いた。

「97……98……99……100！」

体だつて頑張つてこつそり鍛えた。でも……個性を持つてるみんなと、個性を持たない僕の体は作りそのものが違うみたい。力が増強されない個性でも、個性の存在自体が体を強くするんだろう。身体能力増強系じゃないサポート型の個性を持つヒーローだつて、ヴィランとちゃんと戦えてる。

「エンデヴアーの個性だと、空に浮かべるんだ……でも自由には飛べないって事は炎つて軽いのかな？」

ヒーロー達の個性も、出来る限り調べた。もし、一緒に戦えたらどんな事ができるだろうつて。

「銃は買えないよね……。あ、このプロテクター、凄いい……。」

ヒーローたちはコスチュームに色々な仕掛けを組み込み、ガジェットを使いこなしてる。でも、だからこそとっても高い。僕のお小遣いじゃ、とても手が届かない。

どんなに頑張っても、努力だけじゃ届かない。他の人だけじゃない。社会だけじゃない。この世界のすべてが、緑谷出久個性はヒーローになれないと言っているようだった。

放課後、今日も僕は一人で家まで帰る。僕と居るとイジメられるから、いつの間にか助けていた友達も、僕に近寄らなくなった。

「このまま、ずっと個性が出なくてヒーローになれないのかな……?」

諦めの気持ちと、諦めたくない気持ち。その2つがずっとぐるぐると、僕の心の中で回り続けている。思わず出た涙を拭いて、トボトボと歩く。

「……あれ?」

今日は何か、変だ。夕方、いつもなら人が居るはずなのに妙に静かになってる。不思議に思ってたキョロキョロと周りを見たら、いつの間にかそれは居た。

「……緑谷出久、間違い無いな」

写真に向けていた視線をこちらに向ける。深く被っていた帽子の下から、何を考えているかわからない目で、見られた。バクバクと心臓が早く動く。逃げなきや。そう思うと、足が勝手に動いた。

「だ、誰か「察しが良いな。だが、無駄だ」

叫びながら走り出すのほとんど一緒に、影が足元に伸びてきて、その中に落ちる。

意識が無くなる前、僕が覚えていたのはそこまでだった。

「ぐすつ……」 「ふえええええええええんっ！」 「パパ、ママ……」 「出して、ここから出してよ……！」

色んな声が聞こえて、目が覚める。周りを見ると、色んな年齢の子供たちが居て、透明な壁の向こうから怖い顔をした人たちがこつちを見ていた。広い研究室みたいな所に、沢山の人が居る。

「随分と時間がかかったな」

「無個性で生まれてくる子供は年々減っている。それぞれの行動パターンを調べるだけでも一苦労だったぞ」

「まあこれだけ検体が居れば暫くは問題あるまい。この子らも新しい世界の礎となれる。その名誉が実に羨ましいよ」

ところどころしか分からないけど、恐ろしい話をしているのは分かった。

「では、どの程度の年齢から始めようか？」

「10歳前後ではいかがでしょうか？ 成長過程であり、あらゆる意味で中途半端です。その結果を基に調整してみましよう。成長してる個体では無理か、そうでないかの指針にもなりやすいですしね」

「ヒ、ヒーロー……?」

「そう、HEROよ! 何でこんな場所に来ちゃったかわからないけど、とりあえず泣いてる子が居るなら助ける、悪党が居るならぶつ飛ばす!」

優しい笑顔で、僕を護るように立ちはだかると、両手に持つてるペン……多分、シャーペンを構えた。え? それが武器?

「プロヒーローか!」

「画像照合……いや、こんな奴は登録されてない! ヴィジランテか!」

「どうやって入ってきたんだ!」

慌てふためく人達の前で、その女の人は不敵に笑った。

「何かよく分からないけど隠し通路っぽいところから! 警報鳴らせるほど速い人は居なかったわね」

そのセリフに、悪党の人たちはすごく警戒して、身体を変形させ始めた。

「かなりのやり手か……試すのにちょうどいい」

うねうねと触手が生えてきて、それぞれの触手が炎や電気や氷や風を纏ってる。

「この数の”個性”に勝てると思ってるのかね?」

沢山の腕が生えて、とても筋肉が付いている。

「数は力だよ、無謀なヴィジランテ」

翼が生えて、爪が伸びる。手から毛が生えて、いろいろな動物が合わさったみたい。呼吸、心拍数、筋肉の動き、骨のきしみ、服の擦れ……君のすべてが分かるよ」

目が増えて、耳が大きくなって、すべてを見通すような言葉。

他にも、沢山の個性・個性・個性・個性。でも、一人に付き、沢山の……個性が有る。でも、みんなどこか何かが『歪んでる』

「そ、そんな、何で、こんなに……」

僕が目を向けると、変身した人たちがそれぞれ笑う。

「どうだね、少年。これが、『未来』だよ」

「個性の人工的な付与、奪取。『あの方』の個性の人工的な再現、それができれば素晴らしい世界が訪れるのだ……」

「そんなみすぼらしい格好をして、そんなにボロボロで、どうやって私達を倒すのかな？」

恍惚とした表情で、個性を見せびらかしてる大人たち。それが、凄く怖くて、怖くて、でも、何処か“個性”を貰えることを望んでいる自分が居て……。

「だからどうした!」

「何?」

「何度でも言うわ。数が多いか、能力が沢山有るとか、だからどうした！あんた達が子供を拐う悪党なのは変わり無いわ。私はそれが気に食わない、だから……ワン・ツー・スリーでふつとばす！」

その女の人の言葉と、動きがもよもよを全部吹き飛ばしていった。邪魔にならないように遠くへ逃げながら、僕はその姿に目を奪われた。

攻撃が飛んでくる前に、シャーペンを投げて攻撃をずらした。沢山の攻撃の中、ほんの少しだけの隙間に身体をねじ込ませて中央に飛び出して。まるで踊っているような綺麗な脚さばきで、ヴィラン達の間から、攻撃を繰り返した。

最初はやや大きめに避けていたのが、攻撃を見る度に、移動を見る度に、身体に近づいていく。躲して光った手足をカウンターで叩き込み、手足の動きで視線を誘導して、置いてある機械やコップやメスやペンを利用して気をそらし、ヴィランとヴィランの間で同士討ちを誘う。

数も個性も無視して、ヴィランの圧倒的な有利を気にもしないで、自分の思うがままに叩き潰していく。

沢山の、本当に沢山のヒーローを見てきた。だけど、あのオールマイイトですら見せたことのないような動き。全てを見通すような、別の強さ。

ヒーローを見つけてきたからこそ、なんとなく分かったんだ。この人も、きつと、最

高のヒーローなんだって。

「ば、馬鹿な、我々の、我々の力がっ……!?!」

「大勢の人から奪った力でしょ？ 使いこなすことは出来なかったみたいね」

「ま、まだ、まだだっ……!?!」

苦しそうな声を上げていた一人が、触手を仲間たちに伸ばした。

「がっ!?!」「うわっ!?!」「や、やめろっ!?!」

そうして伸ばした触手が、何かを吸い取っていく。

「ふは、ふははははははははは！ これだけの個性があれば、私は、無敵！ 『あの方』にさえも、並べる……!?!」

身体が半分崩れかけながら、今までの奴らの個性を、全て集めたような恐ろしい姿になっていく。だけど、その女の人は、恐ろしい姿のヴィランにぜんぜん怯むことは無かった。

「だから、どうした!?!」

色々なヒーローやヴィランの個性を集めたような、攻撃の嵐。でも、それは一切傷をつけられなくて。女の人の動きは、全て把握されているはずなのに、全く捉えられなくて。

「何故だ、何故だ、何故だああああああああああつ!?!こんな、でたらめなああああああ

あああー！」

狂ったような攻撃を振るうヴィランの叫び。それに応えるのは、静かな声。

「でたらめの中で見つけられない輝きもあるのよ。あの人の眼差しのように」

蒼く光る手、それでヴィランの顔面を思い切り殴り飛ばした。そして、光が弾けて、大きく歪んだ身体が、元に戻って。床には、個性が消えたヴィラン達が倒れ伏していて。

「わ、わた、私の、力、が……『あの方』にさえ届く、この、力、があああああ……」
そう言ったときり、意識を失ったみたい。死んでは、いない。

「お、終わったの……?」

「うん！ もう大丈夫よ！」

そう、につこり笑ってくれるヒーローに、喜びの声を上げたんだ。助けてくれた、僕
のヒーロー。聞きたいことは沢山有るけど、一番聞きたいことが有って。

「ね、ねえお姉さん！ ぼ、僕も、ヒーローに、なれるかな!?」

涙と言葉が、同時に溢れ出してきた。

「……そうね、少し昔話をしてあげる。……えーと、これで良いのかな？」 機械をい
じって何処かに通信を入れつつ、そのヒーローは話し始めた。

それは、全く別の世界の英雄譚。絶望に支配された世界、それでも明日を見ようと
思った人たちの物語。ただの人間から生まれ、自分自身の力と意志で、人でない何かに

生まれ変わった物語。消えていた僕の心の火が、また燃え出した。

「あつ、もう時間切れみたい……それじゃ、行かなくちゃ」

「ま、待って、お姉さん、な、名前は!？」

「ニーギ・ゴージャスブルー。豪華絢爛にしか生きられない、そういう女」

「お、覚えたよ! きつと、また会えるよね!？」

「きつと、いつかね。あ、じゃあ……いつか、これ、返しに来て?」

そう微笑みながらシャーペンを僕に渡すと、何処からか現れた……ゲート?に、そのヒーローは消えていった。それからすぐ、沢山のヒーローや警察がやってきて、ヴィランを確保。機械も徹底的に調べて、そして僕たちを助けてくれた。

わんわんと凄く泣いているお母さんに抱きしめられた後、僕たちを助けてくれたヒーローについて色々聞かれた。監視カメラにも動画が残っていたけど、誰も知らない、ヴィランテですら無かったみたい。でも、当然なんだろう。あの人は、きつと、沢山の世界を駆けるヒーローだから。

家に帰ったら、お母さんがカツ丼を作ってくれた。僕の大好物。泣きながら笑うお母さんに、僕は誓う。

「お母さん、僕、ヒーローになる」

そう言うのと、目を丸くするお母さん。慰めようとしてくれるのか、頭に手を伸ばしてくる。

「違うんだ、お母さん。僕は、もう諦めない」

そう言いながら、まっすぐ目を見る。多分、いつもと違う表情なんだろう。お母さんの表情も変わる。

「……そう、頑張つてね」

何も聞かずに、そう微笑んでくれた。そして、その日から、お母さんの夜食の量は、ちよつとずつ減つていった。

「もう止めなよ！ かっちゃん！」

「ああん？ なんだあ、デク？ 弱えくせにまたいつちよ前にヒーロー気取りか？」

また、3人で一人の子をいじめていたかっちゃん。そして、こうやって助けに入ると次は僕をイジメ始める。個性まで使つて。かっちゃんは手を爆破させながら、他の二人は羽をはやして、そして指を伸ばして。僕に見せつけるように。だけど、もう、負けな

い。
「……んだあ？ その目は？」

ギロリと睨みつけてくるかっちゃん。いつも僕が怯えた表情を見せるのに、今日は違

うのが気に食わないみたい。そして僕が両手を構えると、もつと不機嫌そうになった。

「僕は、出久だ！デクじゃない！」

「うるせえ！ テメエはでくのぼうのデク何だよ！ お前が下だ！」

そう言いながら、手を爆破させて突っ込んでくる。いつもの、右の大振り。それを避けながら手を掴んで思い切り投げける。初めて、かっちゃんを地面につけた。

「がはっ!? て、てめえ!」

怒って爆破しようとする手を避け……ると後ろの子に当たる。だから手を蹴り飛ばして、爆発をずらした。そして指を伸ばしてくる子の方へ突っ込んで、手の向きを翼の子の方に変える。イジメ方は何時も通り。パターンは、読めてる。

「ふぎやっ!?」 「痛っ!」

指が翼に絡みついて、二人共もみくちゃになって地面に転ぶ。倒れた二人を踏みつけ、かっちゃんを睨み付けると、ごちゃごちゃと訳わからなくなってるみたいだけど、だんだんまた怒り出してきた。

「デ、デク……てめえ……!」

蹴られた手が痛いのか、さすりながらこつちを睨みつけてる。でも、僕はもう怖がらない。

「もう、誰も、イジメるな！ イジメるなら、何度だって止めてやる!」

「ふ、ふざけんじゃねええええええええええつ！」

凄く興奮して突っ込んでくるかつちゃん。横に回り込んで足を伸ばすとすぐに転んだ。戦ってる時の判断力が、凄く落ちてみるみたい。これでいじめっ子3段重ねの出来上がり。両手を押さえつけてかつちゃんを強く睨み付ける。

「僕は、もう君から逃げない！ 負けない！」

「んだとこのクソモブがあ！ テメエが下だ！ テメエが一番凄くねえんだ！」

「それは、君が勝手に決めたことだ。僕はもう、デクにならない！」

立ち上がって離れようとしたら、またかつちゃんが立ち上がった。今まで見たこと無いような凄い顔してる。

「ム・カ・ツ・クなあああああああつ！」

完全に頭に血が登ってる。左手の爆破で加速して、また右の大振り。そして、ムカつくムカつくって言うけど……

「それは、僕も同じだああああああああつ！」

もう負けない。もう屈しない。過去の自分を捨て去るように、右手に想いと力を込めて

「がああつ！」

かつちゃんの顔面を、思い切り殴り飛ばした。

「そっちの二人も、まだやるか!？」

かっちゃんが殴り飛ばされたからか、怯えたように横に首を振る二人。そして、まだ起き上がれないかっちゃんを尻目に、後ろを見る。昔からずつといじめられてたその子は、泣きそうな顔で、僕を見ていた。だから、笑顔でこう宣言しよう。僕が憧れた、ヒーローたちのように。

「もう大丈夫だよ。だつて……僕が来た!」

6年前、最高のヒーローマイトに憧れた。そして、もう一人、違う英雄HEROに憧れた。これが、僕のもう一つの——オリジン。

緑谷出久：オリジン

僕がヒーローをまた目指し始めてから、僕の周りは変わった。いや、正確には僕が変えたんだと思う。かっちゃんを殴り飛ばしてから、もう無個性だつて事で正面からバカにしてくる子はほとんど居なくなった。

代わりに、物を隠されたり落書きされたりつて直接じゃない方法に出てきたけど、そういうのはこっそりカメラを仕掛けてたら一発で捕まえられた。イジメは、犯罪。やられる方もやる方も何も良いことがないから、ヒーローを目指す人として止めておかないとね。

「そのイジメ、ちよつと待ったつ！」

そして、僕以外にされるイジメも、見つけ次第止めている事にした。目標は遠いけど、まずは出来る事から。身近に起きてる悪いことを止める。僕も含めてみんな子供だからこそ、強い個性の子は弱い個性の子をイジめる事がそれなりに有る。だから……

「何だよお前？ 邪魔だからあっち行つてろ！」

「ん？ テメエが緑谷か？ おい、お前らやっちまえ！」

「無個性の癖に、ムキムキ、の俺の個性に勝てるもんか！」

こんな風に、だいたい喧嘩になっちゃうんだよね。怪我させないようにって、凄く難しい。こういう時は先手必勝！隠し持ってたこの手作り催涙弾を……

「シューーーーーート！」

思いつきり投げつける！空っぽのクッキーの中に唐辛子とか胡椒とか混ぜて入れた簡単なんだけど、効果バツグン！

「ぶへっ!? ゲ、ゲホッゲホッ!? いたっ、からっ!?」

「て、テメー！ ヒキョーだぞ！」

「ふざけやがって！」

打たれ弱いのか、ちよつとした反撃で動揺しちゃうみたい。まだ一人にしか当ててないのに。

「寄ってたかってイジメてるくせに何言ってるのさ！ さっ、早く逃げて！もう大丈夫だよ！」 笑顔を見せることも忘れずにとつと。

複数を一度に相手にするときには、まず数を減らすこと。だから出来れば遠くからまずは攻撃。銃も弓もボウガンもダメ、なら手で何かを投げる。怪我をさせないように、長引かないように、投げる物もよく選んで。

「どうだ無個性！ 俺の個性のバネならそんな奴すぐ避け「シューーーーーート！」う

えっ!？」

バネで大ジャンプして避けられた。同じくらい歳ののに、僕の身長より高く飛んでる。でも、それが命取り。その着地際に縄跳びの縄と大きいスーパールールで作ったポールを投げる。足に絡まって……あ、転んだ。

「い、痛い……」

「寄つてたかつて殴られる方は心も痛いんだよ!」

そう言いながら、おろおろしていた最後の一人を睨み付けると、気圧されたのか後ずさった。

「またイジメてたら、何度だって止めに来るからね。分かった?」

そう言うと、こくこくと頷く3人。うん、特性催涙弾もこの位の量と比率なら長引かないね。ふう、と一息をつくと、後ろから足音。振り向いたら、イジメられてた子。

「あ、あの、その……あ、ありがとう!」

「どういたしまして」

お礼の言葉に、ニッコリと笑って返す。多分、この言葉がヒーローの一番の報酬。

「す、すげー、あれがいじめられっ子のヒーロー、緑谷……」

「本当に無個性なのか……?」

何だか、僕もちよつと有名になったみたい。でも、無個性でこんな事やってたら当然

かな？

ヒーローたちが相手をするヴィランより、ずっとずっと弱いけど、それでも個性持ちと無個性の差をすごく感じる。知覚とか、身体能力とか、攻撃手段とか、個性持ちは無個性よりただそれだけで強い。僕のお母さんの物を引き寄せる個性だつて、本気で使われたら凄く強い個性だと思う。道のりは険しすぎるけど……だからと言って、諦めてなんてやるもんか。

それから月日は流れて小学生から中学生へ。小学校ではもうイジメをする子は居なくなつたし、僕を真似てイジメを止めようつて子たちも後輩にそれなりに出来た。だからこっちはもう大丈夫……と思つたら、やっぱり中学にもイジメっ子は居た。しかも、小学校で僕がやった事は有名になつてるらしくて、通い始めて1週間で5回も体育館裏や校舎裏に呼び出された。

だから早めに呼び出された場所に行つてトラップを仕掛けたり奇襲したらあっさり片付けられたけど。小学生より、個性の使い方もより強力に、そして洗練されていつている。全くもう、やつぱり今は強力な個性を使いたい時期なんだなあ。将来を台無しにしないよう、今のうちにちゃんと正さないとね。それに僕も良い訓練になるし。

ただ、中々治らない人もいるけど……。かつちゃん、今も喧嘩売ってくるんだよなあ。

もう中学も3年になるのに、ずっと、ずっと。殴り倒したあの日から、納得いつて無いんだろう。あの手この手で突つかかってくるし、個性も使ってくるから怪我させないようにするのが大変。かつちゃん、警察に連れて行かれちゃう前にどうかした方が良くと思うんだけど。そして、今日も……

「えーおまえらも三年ということで!! 本格的に将来を考えていく時期だ!! 今から進路希望のプリントを配るが皆!!! だいたいヒーロー科志望だねよ」

『ハ―イ!』

テンション高く個性を剥き出しにしながら返事をするみんな。そして

「せんせえ――!! 『皆』とか一緒にすんなよ!」

相変わらず全方位を見下して喧嘩を売ってるかつちゃん。机の上に土足で乗っちゃって独演会……相変わらず行儀悪いなあ。

「あ、そいやあ緑谷も雄英志望だったな」

その言葉で、途端に静かになる教室。そして睨みつけてくるかつちゃん。先生、何もこんな所でバラさないでも……ああ、ほらやっぱりこつちに向かってきた。

「こらデク!!!」

僕の机を爆破しようとするから、横に……ずらしたら他に当たっちゃいな。ああ、机が焦げた……

”没個性”どころか”無個性”のてめエがあく、何で俺と同じ土俵に立てるんだ!!?”

ちらりと左右を見渡すと、クラスの半分は似たような事を思ってるんだろう。だから言ってる。

「意志と、そして憧れ」

「はあ!!? それで、てめエが何をやれるんだ!?”

血走った目で叫んでくるかつちゃんに、言ってる。

「君に、勝てる」

その言葉の効果は劇的だった。

「う・る・せえええええええええっ! てめえは、俺より下なんだよおおおおっ!」

叫びながら手を振り上げてくるから、机を蹴り上げて視線を塞ぐ。それから身体を足元に滑り込ませて、足払い。そして打ち付けないように顔と腕を押さえつける。

「ねえ、かつちゃん。こんな事してたら受験どころか警察に捕まっちゃうよ? もう、止めようよ」

「うるせえ! てめエは、てめエごときに、てめエなんか……!」

どうして、こうなっちゃったんだろう? 昔は一緒に遊んでたのに。先生も面倒そうに僕らを止めてくる。

「あく、二人共だな、もう止めなさい。ほら、爆豪も戻って」

「チツ！」

机や散らばったノートなんかを戻して……と。はあ、ヒーロー目指すのも大変だ。

放課後、スマホでニュースを見つつ今日のトレーニングの予定を考えているとまたかつちゃんに寄ってきた。

「話はまだ済んでねーぞデクウ！」

「何なの？ 僕、これでも忙しいんだけど」

「無駄な努力にかあ？ 一線級のトップヒーローは大抵、学生時から逸話を残してる。おれはこの平凡な私立中学から初めて！ 唯一の！ 『雄英進学者』つつー”箔”を付けてーのさ。ま、完璧主義な訳よ」

「で？」

我ながら冷たい目で睨むと、更にかつちゃんはキレ気味になりながら言葉を続ける。

「つーわけで一応さ、雄英受けるなナード君」

「嫌だ」

「つゝゝゝゝゝゝ！ てめえ、てめえは、何処までも、俺の、邪魔を……！」

「邪魔なんかしてない、何時も突つかかってくるのは君だろ！」

「うるせえ！ そんな無駄な努力するより、来世は”個性”が宿ると信じて屋上からワ

ンチャンダイブでもしやがれ！」

そんな捨て台詞を吐いて友達と行ってしまった。あ、あの、かつちゃん、それ僕が飛び降りてたら自殺教唆で下手すると殺人罪だよ？

ため息を吐きつつ、いつもの道を帰る。偏差値79、そして実技テスト……。勉強は何とかなるけど、実技はガジェットを持ち込めるのかな？そんな事を考えていると、ふと変な音が足元からする。咄嗟に、飛び退いたところを、ヘッドロ色の何かが通った。

「へえ、勘が良いじゃねえか……」

この獲物を見るような目、間違いない……。敵！！
サイラン

「大丈夫、身体を乗っ取るだ……。へべっ!？」

ベルトに下げたポーチから、催涙弾を目と口へ放り投げる。この、投げる練習はずっとやってきた。外しはしない!

「て、てめえええええええ！ ふ、ふぎっ、ふぎけやがってええええええっ!？」

やっぱり、感覚器官が残ってる個性なら刺激物は有効!そして、ただ己の力に溺れているヴィランは、こういう痛みや刺激の中では集中力を保てない!でも、次はどうする……? 敵は液体、掴めない、拘束できない、パワーは高い。ひとまず、電話して逃げ回るしか無い! そう思っただけでスマホに手をかけると、その人は僕の前に現れた。

「もう大丈夫だ少年!! 私が出来た!」

聞き間違えるわけがない。僕が、憧れ続けた、最高のヒーロー……

「オールマイト!」

「H A H A H A! 私のファンかね? ではご期待に応えよう!」

「T E X A S S M A S H!!」

速い! 一瞬で通り過ぎる右の拳、それだけで巻き起こる圧倒的な風圧、そして目にも止まらない回収作業。これが、ヒーローの最高峰!

「あ、あのあの、ありがとうございました! ぜ、ぜぜ是非コレに……!」

とりあえずサインサインサイン! そう思つてノートを取り出すと一瞬で僕の前に来てサインを書き上げる。さ、流石だ!

「H A H A H A! この位お安い御用さ少年! しかし、さつき投げた物は何だね?

ああ言う物は大概ヴィランを怒らせるから感心しないよ?」

「え、えつと、手作りの催涙弾です。4年前、何も出来ずに拐われちゃったから……!」

「なるほど、確かにこんな時代では自衛の手段を持つのも当然かも知れないね、ヒーローとして情けないことでは有るが……つて、んんつ?」

僕の顔をじくと見るオールマイト。どうしたんだらう?

「4年前、この街……拐われた……少年、もしやとある研究所に拐われた少年と言うのは

!？」

「あつ、は、はい！ 僕です！」

「そうか、無個性の……」

「え、えつと、オールマイトは何故知ってるんですか？」

思案するオールマイトの顔はレアで写真を撮りたくなるけど、とりあえず今は本題の方が大事だろう。惜しいけど、すつごく惜しいけど！

「……君を拐ったヴィラン達は私が追っているヴィランと関わりが有つてね……。あそこで行われていた研究も、正に悪夢としか言い様がない物だった」

「悪夢、ですか……」

今でも思い出せる。力を手に入れた代わりに、崩れていく身体。強すぎて多すぎた力の代償。そして、豪華絢爛な、あのヒーローを。

「そう言えば、君は登録の無いヒーローに救けられたんだったね。彼らの実力は、控えめに言ってもとんでもなかった筈だ。しかし、あの事件以外、どんな記録を調べてもあんなヒーローは見つからない。だから、君に聞きたいんだ。彼女は、どんなヒーローだったんだい？」

「凄く、綺麗な人でした。服装はボロボロで、くたびれてるはずなのに、笑顔で。何よりその戦い方は、どんなヒーローとも違っていました」

「ほう、どんな感じだったんだい？」

「武器を使い、技術を磨き、地形を利用して、敵を操って戦術を行使する……。謡うように、踊るように、戦ってました。離れて見ていたけど、それは……まるで、神話の様な様子でした」

「そうか。君は彼女に憧れたんだね……。もっと聞かせてくれるかい？」

「はい！」

そうして、人目につかない所であの日見たことを話した。あの人の言葉、表情、戦い方、武器の使い方、足運びまで。あの日見た戦いは、僕の魂に焼き付いていた。

「……色々とありがとう、少年。色々と、興味深い話が聞けた。しかし、人工的な個性の譲渡に付与、やはり奴の……ゲフツ！」

いろいろと考え込んだと思ったらオールマイトが……血を吐いた!?

「お、オールマイトオオオオツ?!」

血を吐いたら煙が出たかと思うと、オールマイトが居た場所にはガリガリの……骸骨!?

「お、オールマイト、その姿は……?!」

「驚いてるけど、私と認識してくれるのだね。そうだな、君になら話してもいいだろう。

あれは……」

それから、オールマイトに教えられたのは5年前の戦い。オールマイトにその傷をつけたヴィランこそ、僕を拐った連中と関わりのある奴だったんだ。そして、今では1日3時間しかヒーロー活動が出来ない事、オールマイトの信念、うちに秘めた恐怖など……。

「プロはいつだって命懸け……」個性^{ちから}がなくなるとも成り立つとはとてもじゃないが口に出来ない……が、君は、諦める気は無いようだね」

最高のヒーローからの否定の言葉。10年前からずっと分かってた現実、だけど。

「はい。だからどうした、です！ 諦めてなんて、やりません！」

まっすぐオールマイトを見据えると、ほんの少しだけ、優しく微笑んでくれた。

「そうか……君の行く末に、幸多からんことを祈るよ、少年。では、またな……」

歩いて去っていく背中。あの、筋肉に包まれた姿より随分と小さくなってしまうだけ。その背中からは前よりもずっとずっと大きく見えた。……って、あ、フォームを戻して飛んでった!? あ、時間はちよっとだけ残してたんだ……。

オールマイトに助けられ、サインを貰った帰り道、商店街前へ差し掛かった時、突然大きい爆発音が聞こえた。でも、聞き覚えが有るような……まさか、かつちゃん!? 慌て

て野次馬の居る方へ近づいてみると、さつきとは違う色のヘドロ。まさか、双子なんだろうか!? 取り込んで、かつちゃんの個性を利用して爆風であちこちに被害が出て、ヒーローも迂闊に近寄れない。しかも、周りにいるヒーローは相性の悪い個性ばかり。近くにいるであろうオールマイトはもう活動限界。どうすれば……

「が、がああああああつー！」

その時、遠くから見えたのは、かつちゃんの、本当に助けを求める顔。そうだ、こんな時……救けないで何がヒーローだっ！

近くのコンビニへ突撃して……有った、激辛スナック！そして義務付けられてる消火器！

「すいません、お金後で払いますからちよつと待つてくださいー！」

「なっ?!何するつもりだ?!」

「人助け、です！」

そう叫んでハバネロを開けて中に消しゴムを放り込む。たつぷり粉をまぶして手に持って、突撃！

「馬鹿ヤロ——!!止まれ!!止まれ!!」

「何だあのガキ」(デク!!?)

何か有れば当然こつちを向く!そこを狙って!

「シューシュート！」

目に、直撃させるっ！

「GYAAAAAAAAA!？」

目への刺激物の直撃！ これで拘束が緩んでかっちゃんの間が出たっ！

「なっ、で、デクっ、何でてめエが!!」

「君が、助けを求める顔してた！」

「やめっ……r……」

「大口開けてくれてありがとうっ！」

その馬鹿口に、一袋全部突っ込んでやる！

「辛ええええええええええええええええ!!」

更に暴れて、拘束が緩む！ 最後のダメ押し消火器っ！ ヴィランとかっちゃんの間

ホースを差し込んで

「離れろおおおおおっ！」

噴射させながら全力で引っ張って……取れたっ！

「こ、の、デクっ、俺は別に一人でもっ……!」

「後でいいから、逃げるよ！」

手を引っ張って避難をしようとしたら、直ぐ側に、一陣の風。

「君を諭しておいて……己が実践しないなんて!!」

もう、活動限界の筈なのに……!これが、プロの覚悟か!

「プロはいつだって命懸け!!! DETROIT SMASH!!!」

僕とかつちゃんを確保しつづつ、たった一撃で、ヴィランを吹き飛ばして風圧で天候まで変えちゃった。周りは熱狂的な歓声……と、僕に怒った顔で近づいてくるヒーロー達。

この後散ったヴィランはヒーローたちに回収され、オールマイトの一本と一緒に無事に警察に引き渡されたみたい。そして僕には凄くお説教。プロのヒーロー達が、本気で僕の身体を心配して怒ってる。あ、でも激辛スナックと消火器の代金は勇気に免じてついでことで立て替えてもらっちゃった。色々と凄く、申し訳ない。そして逆に称賛されるかつちゃん。確かに、あのヴィラン相手に粘ってたのは凄い。サイドキックにも誘われるし、性格さえどうにか出来たら将来は安泰……かな?

帰り道、かつちゃんがやってきてお礼を言われるかな……と思ったら自分で助かれたか。プライド、また傷つけちゃったと思うけど、救けたことは間違っていないと思う。さて、改めて帰る「私が来た!!」「わっ!!」

「オールマイト!? 何でここに!」

「抜けるくらいワケないさ!! なぜなら私はオールマゲボオツ!!!」

「無茶しないでくださいっ!?!」

心配したけどいつものことなのか落ち着いて血を拭うと、オールマイトはまつすぐこちらを見てきた。

「少年、礼と訂正、そして提案をしに来たんだ」

「?」

「君が居なければ…君の身の上を聞いていなければ、口先だけの二セ筋となるところだった!! ありがとう!!」

「に、二セ筋……い、いえ、こちらこそ仕事の邪魔して、迂闊に飛びだしちゃって……」

「そうさ!! あの場の誰でもない、”無個性”の君だったから!!! 私に動かされた!!」

頭の中がごちゃごちゃする。言いたいことが湧き出てくるけど、胸がドキドキして止まらない。

「トップヒーローは学生時から逸話を残している……彼らの多くが、話をこう結ぶ!! 『考えるより先に体が動いていた』!! と」

思い出したのは、もう一人、心に残っているヒーローの姿。

「君も、そうだったんだろう!?!」

「……はいっ!……」

個性を調べた日、あの時お母さんが言ってくれなかった言葉。あの日、もうひとりの最高のHEROが、僕に言ってくれた言葉。それを、最高のヒーローオールドマイトが——

「君は、ヒーローになれる」

諦めていた夢、再燃した夢、そしてそれは今、最高のヒーローにも、認められたんだ。

これが、僕の——オリジン

覚醒・熱血・努力!

「君なら私の”力”、受け継ぐに値する!!」

「ち、から……? ひよつとして、”個性”ですか?」

「その通りさ! 私の”個性”は、聖火の如く引き継がれてきたものなんだ」

「引き継ぎ……ひよつとして、僕が拐われたあそこの研究所つて!」

まさか、あの研究所はオールマイトの個性を極秘裏に研究して!? と思ったけど、顔に出てたのかな? 思いつき否定されてしまった。

「いや、あそこで研究していたものは私の個性とは似て非なるもの……あそこで研究していたものは、他者の個性を奪うことが出来る”個性”なんだ」

個性を、奪う。確かに、オールマイトの個性とは似ているようで正反対だ。奪うと、継ぐ。ひよつとして、起源は同じなのかも!?

「H A H A H A、少年、どうやら深く考えるとブツブツ呟く癖が有るようだね」

「はっ!? すいませんっ!」

一瞬で見抜かれた! オールマイトの前なのに!

「まあ兎も角、だ。私が受け継いだもの、それは個性ちからを譲渡する個性ちから……それが私の受

け継いだ”個性”！ 冠された名は

「ワン・フォー・オール」

「ワン・フォー・オール……」

一人はみんなの為に。正に、オールマイトの生き方そのもの。そしてきつと、オールマイトの前の人も、その前の人も、他の人のために生きてきたのだろう。

「二人が力を培い、その力を一人へ渡し、また培い次へ…そうして、救いを求める声と義勇の心が紡いできた力の結晶!!!」

凄く、光栄だ。けど……

「そんな大層なもの何で…何で、僕に？」

「元々後継は探していたのだ…そして君になら渡しても良いと思つたのさ!! ”無個性”で、それでもヒーローを目指し続けていた君は、あの場の誰よりもヒーローだった!!」

視界が滲んだ…あ、これ、僕の涙……う？

「まあしかし君次第だけだよ！ どうする？」

迷うことなんて無い。涙なんて今は邪魔だ。最高のヒーローが僕を認めてくれたなら！

「お願いします！」

断る理由なんて、無い！ 僕がそう宣言すると、分かってたと言わんばかりにニヤリと笑うオールマイト。

「即答、そう来てくれると思つたぜ」

それから2日後、朝5時。僕はゴミだらけの海浜公園に居た。

「さて、緑谷少年。どうやら君の身体は私の個性を身体に入れるだけの器は既に有るようだね。おめでどう、君の努力は無駄ではなかった！」

H A H A H A と笑いつつ、褒めてくれるオールマイトの言葉。それだけで、これまでの苦勞の全てが報われる気がする。嬉しくて、つい全力で頭を下げちやう。

「ありがとうございます！」

「H A H A H A ! では、善は急げだ早速君に個性を渡そう！」

一体、どんな風に継承をするのか。オールマイトが一本髪の毛を抜いたけどそんな事は気にならないくらいドキドキで――

「食え」

「へあ!？」

えっえっえっ?

「別にDNAを取り込められるなら何でも良いんだけどさ！ さあグイツと！」

「な、なんとなく仕組みは想像できるけど思ってたのと違いすぎる……」

とりあえず、持ってきたスポーツドリンクでぐびっと飲み込む。あ、めっちゃ長い……

「あれ、何の変化もない？」

身体を見下ろして手足を動かすけど特に何も変わったようには感じない。

「そりゃそうさ!!君胃腸を何だと思ってる! まあ2〜3時間もすれば実感湧くさ」

「観念的と思っただらすっごい生物学っぽい!」

「H A H A H A! まあ細かいことは気にするな! それよりその器を更に強化するために、とりあえず今日からここの掃除だ! 海岸線を蘇らせ、空き缶一つ落ちてないようにするんだぞ!」

ヒーローの基本は奉仕活動、その一歩か! よーし、やるぞ!

「はー!」

掃除をする、ただそれだけなのにこのボランティアはかなり効く。下は砂地だし、割れてたらそこは避けて持たなきゃならないし、重いし普通の器具を使ったトレーニングとは違って、色々なところの筋肉をランダムで使うから、体感でかなり効果がありそうだ。

少し休憩を入れつつ、汗だくになりながら運んでいると、それは突然僕の中から湧き上がってきた。

「つゝつゝ、こゝ、これが、ワン・フォー・オール……?」

「受け継いだか、少年! では、早速試してみよう! 全力を出す時はだね、ケツの穴をグツと締めて心の中でこう叫べ! スマツシユと!」

これが、オールマイトから受け継いだ力! 早速全力をためし……

「あ、あの、オールマイト。オールマイトから受け継いでさらにパワーが上がった個ワン・フォー・オールで全力出したらここのゴミ全部吹き飛んじやうんじや……」

「あ」

あ、オールマイトの笑いが止まった。じやなくて!?

「あ、あの、いきなり全力はまずいと思うんでとりあえず1/10位の力で試したいんですけど、どんな感じでしょう!」

さあ、オールマイトはどんな感覚で普段から……

「こう、あれだよ。うっかりドアノブを捻り切らないようにとかそういう力加減で……」
「……」

多分、僕今笑ってるけど表情が引きつってる。

「そ、そうだ! こう、そつとふつて風をぶわー! じやなくてぶわつ! 程度にするよう

な感覚で……」

この言葉で確信する。オールマイトって……

「……わ、分かる?」

「分からないです」

「だよね……」

超天才型だ! 天才過ぎてコーチに全く向いてないタイプのも! ま、まさか全く参考
にできないなんて考えてもなかった!?

「と、とりあえずだね〜緑谷少年、ま、まずは力を自覚したら適当に動いてみよう!」

「は、はい!」

そ、そうだ、何を贅沢な! 元々無個性が最高の個性を受け継いだんだ! 戸惑って
る場合じゃない!

座って、目を閉じる。指、手首、肘、肩……順々に筋肉の、骨の動きを意識する。体
中、動かせる箇所を全て一つ一つ確かめるように動かして、自分というものを把握
する。

そうする事で、少しずつ見えてきた。今までの自分とは違うモノ。少しずつ、僕の身
体に溶け込んでいく。どこまでも、果てが見えない眩しい光。その光を、ほんの少しだ
け自分の体の隅々に行き渡らせる。きつと、この感覚!

「で、できたぶわっ!?!」

「み、緑谷少年っ!?!」

た、立ち上がるうとしたら動きが速すぎた! まるで自分の体じゃ無いみたい!

これが、”個性”!

「だ、大丈夫です! で、でも、少し分かってきました!」

目を開けると、僕の身体を走る緑の光。これが個性発動の印か! ……か、かつこい
いけど隠密作戦に向かなそう……ってそれはどうでもいいから!

「個性を入れる比率はさつきと一緒……立ち上がるっ!」

もはや意識すらしない繰り返し続けてきた動き。でも、意識するとこんなに沢山の動作と力の配分をしていることが分かる。個性を維持したまま、立ち上がって、構える。
放つは、オールマイトの技!

「スマアアアアアアアアッシュユ!」

叫びを上げて、虚空を殴りつけると同時に感じたのは、経験のない速さと、風圧。周囲の軽いゴミがみんな吹っ飛んだ。

「は、はは、ははは、ははははははは!」

「しよ、少年?」

「で、出来た! オールマイトから受け継いだ個性で、オールマイトの技を、半端だけど、

出せたんだ！」

胸の奥から湧き上がる喜びが止まらない。

「や、やった！ やった！」

飛び跳ねてみると、身体がこんなに軽い！ ほら、こんな高さから自分の力で見下ろすなんて、今までで初めての経験！

「あはっ、あははははっ！」

景色が、すごい速さで流れる！ 砂の重さなんかちつとも気にならない！ 小さなゴミ山なんてひとつ飛び、凄い、凄い、すg「STOOOOOOOOOP！」「ぐえっ!？」

しよ、衝撃がっ……

「HHHHHHH！ 少年、嬉しいのは分かるが落ち着くんだけ！ 君が今しなければならぬ事は違うだろうか？」

ふと気がつくと、オールマイトが僕の首根っこをひつつかんで持ち上げた。こ、これじゃ猫みたいって言うかちよつと苦しい……でも、少し落ち着いた。

「そ、そうでした！ これから、特訓の続きですね！」

力を維持したまま、誰が捨てたかわからないロツカーを持ち上げる。必要な分の力を維持したまま、バランスを取り、軽トラまで運ぶ。今までの苦勞が、まるで嘘のように楽々と運べた。

「H A H A H A！ これでは少し楽過ぎるかな？ よし、では少年。個性有りと、個性無しで交互に運び給え！ 筋力と個性のコントロール、両方を鍛えるんだ！」

「はいっ！」

こうして、僕の本格的なヒーロー特訓が始まった。勿論、ただ体を鍛えるだけじゃなく、技術の方も。

片付け始めてから段々暑くなってきたとある日。流木を、海に思い切りぶん投げて、拾ってきた石を足元に置く。それでもつて、狙いを定めて……

「シユートオツ！」

10%位の力で、投げつける！ あ、ちよつとズレた！ やつぱり、パワーが変わると軌道も変わっちゃう。

「ふむ、投擲を鍛えるのかね？ 緑谷少年？」

オールマイトも興味深げだ。

「はい。オールマイト程のフィジカルがまだ出せないですし、遠距離攻撃にはメリットも多いですから！」

オールマイトほどのパワーとスピードが有れば、ヴィランにすぐに追いついて救出も出来るけど、僕はまだまだ。なら、出来る手段を増やしていくしか無い。

「シューーーーーーシュート！」

今度は命中！ だけど……

「ふうむ、見事にへし折れてしまったね」

「はい。これだと並のヴィランじゃ当たったら死んじやいますね……。トリモチ玉や催眠玉みたいなガジェットが有れば良いんですけど……」

そう言いつつ、今度はビー玉サイズの小石を幾つかと、10円玉を3枚重ねて貼り付けたものを幾つかポケットに入れる。

「いいアイディアだ！ それは何処かに依頼するでしょう……。おや？ 次は何をするつもりだい？」

「えっと、次は指弾を試してみようかと」

適当に空き缶をゴミの山に配置して……と。

「ショット！」

思い切り親指で弾く！ 弾く！ 弾く！ 小石の方はそこそ外れたけど、10円玉の方は結構良い命中率を出せていた。

「ほう、動作がこんなに小さいのにこの威力とは」

「まだ、全然力を出せていないのに、本当に凄いですよこの個性は！」

指弾は命中率に不安が残るけど、手首だけで投げるのはどうだろう？ 紐を通した5

円玉の束を出して、一つ掴んで、と。10m位離れた目標に……

「ショット!」

命中!

「ショット!ショット!ショット!ショット!」

命中命中命中!

「WOW! びっくりだ! まるで時代劇のヒーローみたいだね!」

「はい、そこからアイディアを貰いました! で、でも5円玉だと小さいし、500円玉に穴を開けるのも勿体無いし……」

つい癖で、またブツブツ呟きながら自分の考えに没頭する。でも、オールマイトはそんな僕を笑わないでじっと見ていた。

「はっ!? す、すいません八木さん!」

「少年、夏休みに時間は取れるかね?」

「あ、は、はい! 勿論! 作ります!」

「H A H A H A! それは結構! ではパスポートを用意しておいてくれ!」

「へ? ぱ、パスポート?」

な、何で外国に?

「まあ、正確には外国では無いのだが……私と一緒に、I・アイランドに付いて来て欲し

い。君に、会わせたい男がいる。私の親友であり、スーツの製作者だ」

「ま、まさか、デヴィット・シールド博士!？」

オ、オールマイトのコスチュームを作った天才博士！ ま、まさかそんな人に会わせていただけるとは！

「君の才能とその技術と努力は、そんな子供の手作り工作のガジェットだけを利用させるには惜し過ぎる！ デイヴなら、きっと君の相談に乗ってくれるだろう！」

「は、はい！ 光栄です！」

個性を受け継いでから、僕の世界はまた変わった。毎日が、訓練と勉強の日々だけど、僕は、これ以上無いほどの充実感に包まれていた。そう、目指すはオールマイトをも超える、最高のヒーロー！

訪問! I・アイランド!

すっかり暗くなつてから家に帰ると、今日も台所からリズムの良い包丁で何かを切る音と、鍋で何かを煮込んでいる音が聞こえた。

「あ、出久、お帰りなさい」

「ただいま〜!」

今日も洗面所で汚れた服を全部脱いで、着替えて手を洗つてからリビングへ戻る。匂いからすると、今日はカツカレーみたいだ。僕がオールマイトの下で訓練をするようになってから、お母さんはより体を作るためのメニューを考えてくれている。

「訓練は順調に進んでる?」

「勿論だよ! オールマイトが僕の修行を見てくれてるんだ!」

僕がオールマイトからワン・フォー・オールを受け継いだその日、お母さんにはやつと個性が発現したつて嘘をついちやつたけど、それでも泣きながら喜んでくれた。

ようやく、胸のつかえが取れたんだと思う。泣きながら、僕のことをぎゅ〜と抱きしめて、何度も「良かったね、出久、良かったね……」つて呟いてた。

そして、お母さんが落ち着いてからオールマイトに弟子入りしたことを話すと、今度

はものすごく驚いていた。まあそれは当然だよね……なんてったって世界的に有名な日本ナンバーワンヒーローだし。次の日には慌てて菓子折りと僕をお願いする旨の手紙を持たされて送り出されて、またお母さんの生活も変わったんだと思う。リビングに真新しいトレーニング器具や、運動用のBDが置かれてた。そして、少しずつ痩せてきている。この調子だと、昔のほっそりしたお母さんに戻るのも近いかも知れない。

福神漬を用意したり、お皿を運んだり手伝いながら、一息をつく。帰る時も重りを付けたマラソンだったし、今日も疲れた。

「それで出久、海岸は片付いてる？」

「うん、トラック一台じゃ足りなくて、何台もオールマイトの伝手で来てもらってる」

もう半分以上は綺麗になったかな？もう少しすれば本格的な訓練に移れそう。

「あ、そうだお母さん、今度の休みの日、パスポート取りに行きたいんだ」

「え？ どこに行くの？」

「オールマイトが、僕の装備を作るためにI・アイランドへ連れてつてくれるって」

「そ、そこまでしていただけるなんて……本当に良かったわねえ、出久」

ホロリと涙を流しながら、カレーにルーを投入してる。僕が涙もろいのって、絶対お母さんの遺伝だ。

お母さんに愛されて、オールマイトからは個性を託されて、僕は本当に幸せものだ。

だからこそ——どんな事をして、オールマイトを超えるヒーローにならなくちゃ。

「うわあ……凄い」

長い間飛行機の上で時間を過ごして、ようやくI・アイランドの中に入ると、その規模に圧倒されちゃう。人工島なのに広々とした道や、個性的な建物達。今はエキスポの期間じゃないから、人は多くないけど、その分オールマイトの長身長は凄い目立つ。

「あ、あれは、オールマイト!」 「ほ、本当だ!」 「な、ナンバーワンヒーローだ!」 「サインプリーズ!」

うわっ!? あつという間に人が群がってきた!?

「H A H A H A! みんな、何時も応援ありがとう!」

それに全く動じること無く、目にも止まらない速さでサインを書いて写真を撮っている。さ、流石NOーヒーロー……しばらくすると人の波が収まり、ようやく静かになった。

「いやあ、今日は人が少なくて助かったよ! さて、そろそろ来ると思うのだが……」 「迎えの人ですか?」

「ああ。日時は教えてあるからね。……それと、ワン・フォー・オールの事は話してないからそのつもりで」

えつ、デヴィット博士と言えばオールマイトのアメリカ時代の相棒なのに……

「親友にも言つてないんですか？」

「ワン・フォー・オール секретを知るものには危険がつきまとうからね」

「はい。それは分かります。でも……」

「緑谷少年、私からワン・フォー・オールを受け継いだものは……いつか巨悪と……オール・フォー・ワンと対決する運命を背負っている」

「……はい」

「そうだ。それが僕も背負うことになる運命。だからこそ、どんな手を使つても、オールマイトを超えるようなヒーローにならないと。」

そんな考えが表に出たのか、僕の表情を見たオールマイトもちよつと笑顔が曇つた。お互いちよつと微妙な空気が流れる中、遠くから変な音が聞こえる。そつちを向いたら……ホッピング？ に乗つた女性がやって、オールマイトに抱きついた!?

「マイトおじさまー!」

「OH! メリッサー!」

おじさま……つて事はオールマイトの知り合いの人の娘さん……かな? メリッサーと呼ばれた人は凄く嬉しそうだ。今は16歳みたいだから、僕より年上だ。それにしても、身長高いなあ。

「おお、そうだ紹介が遅れたね緑谷少年。彼女は私の親友の娘で……」

「メリッサ・シールドです。はじめまして」

テクテクと近寄られて、人懐っこい笑顔で手を差し出された。な、何か凄いドキドキする……そ、そう言えば僕、お母さん以外の女のひととそんなに話したこと無い!?

「は、はじめまして。緑谷出久と言います。今は中学3年で、来年ヒーロー科のある高校に受験予定です」

挨拶しながら握手……つて、うわっ!?! 手が凄い柔らかい!?

「来年に受験予定……じゃあまだヒーロー科に在籍してないのね? でも、手、凄いゴツゴツしてる……」

メ、メリッサさんも何か僕の手を興味深げにしてるし何だか気恥ずかしい……! そんな事を考えて、顔に血が集まるのを感じると、メリッサさんが慌てて手を引つ込めた。

「あ、あら、ごめんなさい。えーと、じゃあイズク君はどうしてここに?」

「実は、デイクに彼の装備を作って貰おうと思つてここに来たんだ」

オールマイトが説明すると、メリッサさんの顔が凄くびっくりした表情に変わった。

「えっ、ま、まだヒーロー科にも通つてない人の為におじさまが……?」

オールマイトはナンバーワンヒーローだ。なのに、そのヒーロー活動を削つてまでここに来た理由は、まだヒーロー候補生でさえ無い僕の為なんだ。それはびっくりするだ

ろう。

「ああ……実は、彼は私の弟子なのだ」

「おじさまの弟子……じゃあ個性はパワー系かしら……？」

女の子の顔から真剣な顔に変わり、僕の身体を眺めるメリッサさん。半袖だからか、腕の筋肉をじくと見つめられる。……な、何だか凄く恥ずかしいかも。だけど、そんな時オールマイイトから「コホン！」と咳払いの助け船が入った。

「メリッサ、そろそろ……」

「あつ、ご、ごめんなさい！」

ペコリとお辞儀をして、自立していたホッピングのボタンを押すと紐状になって、ポケットサイズまで巻き取られた。す、すごい技術だ！

「あはっ？ 興味有るのね？ それじゃ、これから行く研究室もきつと気にいるわ！

ガジェットたくさん有るのよ！」

そう笑顔になったメリッサさんは歩き出す。僕とオールマイイトも顔を見合わせて笑顔になった後、メリッサさんの後を追いかけた。

「私がああああ！ 感動の再会に震えながら来た！」

「オールマイイト……いや、トシ！」

研究室についた途端、ポーズを決めながら叫ぶオールマイトと、満面の笑みでオールマイトの側に行つて抱きつくおそらくデヴィット博士。あ、オールマイトが抱きしめたまま一回転……こ、これは物凄くレアなシーンなのでは!!? しゃ、写真に撮っておきたい……!

「しかし、何年ぶりだ?」

「よしてくれ、お互い歳の事は考えたくないだろう」

「H A H A H A! その通りだな!」

オールマイトはナンバーワンヒーローとして日本中を駆けずり回っていたし、デヴィット博士は高名な研究者だからずっと研究室だろうし、親友なのにずっと会えなかったのか……すごく大変だなあ……

「ところでトシ、そちらの子が……」

あ、博士がこつちを見た!

「はじめまして、緑谷出久です! よろしくおねがいます!」

両手を伸ばして90度礼! 上げ!

「はっはっは。礼儀正しい子だね。私はデヴィット・シールド。トシ……いや、オールマイトの装備の開発者だ」

「は、はい! お噂は常々聞いてます! オールマイトのヒーローコスチュームを、ヤン

グエイジから始まりブロンズエイジ・シルバーエイジ……」

興奮して思わず夢中になって話していると、オールマイトに途中で遮られてしまった。

「H A H A H A！ ほら、デイヴ、君の紹介の必要は無かっただろう？」

「そうだね。僕もすつかり有名人だ」

あつ、み、みんなから生暖かい目で見られてるっ!?

「さて、ゆっくり話でもしたいところだが、私はともかくトシの時間はとても貴重だ。では、早速データ採取に移ろうか。ここはヒーロー関連のガジェットの研究もやっているから、テスト場も沢山有るんだよ」

「あ、は、はい！ 是非お願いします！」

世界中のプロヒーローが憧れるような研究所の施設が借りられる。その特別性と僕にかけられているオールマイトの期待に、喜びやプレッシャーなどがごちゃ混ぜになった感情が、心の中で渦巻いた。

こうして移動することになったのが、研究所の訓練・実験区画だ。ここはその一角で、人口的に岩場が再現されている。訓練所に入る前に着替えて……と。タンクトップのシャツと短パン、そして足は素足だ。け、結構恥ずかしいけど仕方ないよね……

そして、オールマイトとデヴィットさんは高所にあるモニタールームに二人で入っ

て、メリツサさんは訓練所の外側で待機している。これはデヴィットさんがメリツサさんに「間近で見えてみないか?」と提案したせいだ。多分、オールマイトをなるべく長くトウルーフオームで過ごさせるためだろう。

更衣室から訓練場へ向かうと、メリツサさんがしげしげと僕の身体を見つめてきた。結構どころか凄いいぢずかしい……!

「イズク君、随分と身軽な格好ね……ああそうか、イズク君の個性に耐えられる服が無いのね?」

「ええ、全力で動いちゃうと服は破れちゃうし靴はボロボロになっちゃうしで……」

気恥ずかしくて顔を合わせないようにして、ストレッチを始めるとデヴィット博士の声が響き渡った。

「さて、イズク君。まずは君にヴィラン・チャレンジを試してもらおう。これは来年のエキスポでもパビリオンの一つに選ばれた訓練でね、ロボットを複数体出すのでこれを戦闘不能にしてみたい」

「え、えっと、本格的な戦闘初めてだからかなり派手に壊しちゃうかもですけど!」

こ、こういうのって凄いい高いんじゃないかな!?

「ははっ、心配いらぬよ。このロボット達もどのみちテストしなければならぬし、良いデータ収集になる。遠慮なくやってくれ」

「頑張つてね、イズク君！」 「緑谷少年、ファイトだ！」

「は、はい！」

「では行くよ……スタート！」

うわっ!?! カウントダウン無し!? いや、ヒーローは不測の事態に対処できて当然!

11%のフルカウルで一気に加速するっ!

「えっ、速いっ!?!」

ロボットは岩山の頂上に向けて順に配置、敵はほぼ近接型。ならこつちも接近戦でだ。振るってきた腕を躲してまずは「スマッシュ！」 1体目! 2体目の尻尾を伸ばした攻撃はそのまま掴んで3体目に「シュート！」 そのまま岩山を駆け上って、体ごと突っ込む! 連携は無しの個別対応、ならこのままスピードを維持してスマッシュ! スマッシュ! もひとつスマッシュ! そして頂上の最後の敵には、高く飛んで、空中で回転して、踵落とし! ……つて、あ、岩山のとっぺんにおもいつきりヒビが!?

「テスト終了、お疲れ様。記録は……14秒。まさか、初挑戦でここまで速いとは……」

「H A H A H A! 流石だね、緑谷少年!」

「あ、ありがとうございます!」

良かった、褒められた! スタート地点に戻って……と、あ、メリッサさんが近づいてきて……

「凄いのねイズク君! まるでおじさまみたい!」

「は、はい! オールマイトの弟子ですから!」

「なるほど、こんなパワーなら確かに普通の服や靴じゃ破れちゃうだけね……早く装備を作ってあげないと……流石はおじさま! 弟子の育成も上手なのね!」

「え? は、hahaha! 勿論さ!」

あ、多分今微妙に顔が引き攣ってる気がする。

「さて、ひとまず身体能力のデータは取れた。では、君の手作りガジェットを見せてもらおうかな? 次は遠距離攻撃訓練場へ行ってくれ」

「は、はいっ!」

「えっ、イズク君、ガジェットも手作りしてるの?」

「あつ、い、いえ、中学生だから大したものも作れなくて……」

訓練場を移動しつつ、そこそこカバンを開くと、出てくるのは昔から使ってた手作りガジェットたち。それをメリツサさんは一つ一つ手に取り、しげしげと眺められちゃってる。

「これは……銅のコインをびったりくつつけてるのね。こっちは、丸いクッキー? でも軽い……あ、空洞なんだ。こっちはボラね! アメリカでも使ってたヒーローは居たわ! それにこっちは……」

「あ、あはは……本職の人達が作るガジェットに比べると本当に粗末なんですけど……」
「そんな事無いわ、ヒーローの装備はアイディアとカスタマイズよ。一人一人の個性に合った装備を、どれだけそのヒーローの理想に近づけられるか。イズク君も、コインの重さや玉の大きさを自分に合わせて作ったんでしょ？ その努力が、ヒーローの装備を作る第一歩なの」

優しい笑顔でそう諭されると、認められたようで胸が熱くなる。

「あ、ありがとうございます！」

そんな事を話しながら目的地に着くと、目の前には映画なんかで見たような射撃場の光景が広がっている。300メートル位の奥行きは有るんじゃないかな……？

「ではイズク君、まずは近距離から試してみよう。的を出すから、それに当てていってくれ」

ポケットにありつたけ玉を突っ込んで、腰には5円玉の束をぶら下げたと。

「はいっ！」

「では、スタート！」

流れてくるのは人型的。でも、一つ一つ姿が違う。海岸での的撃ちとはまた違う感覚だ。とりあえず銃持ちにはトリガーに指をかけている方の手を狙って……

「シヨット！」

親指で100円玉を弾いて、命中!

「これは、かなりの威力だね……」 マイクからデヴィット博士の呟きが聞こえる。

次々に的が流れてくるから、両手を使って交互にショット! 初速が速くなるほど、偏差を気にしなくて撃てるのは良いけど、強すぎると大怪我をさせてしまう。そのバランスが凄く難しい。それにせっかくだか動いてる的だし、いろいろと試さないとい!

2%、8%、6%、10%、1%……って、あ、少しズレた。

「凄い、こんなに強力な個性で微調整も出来るのね」

メリッサさんは少し後ろでタブレットと僕を交互に見ている。

「わ、わかります?」

「ええ、的が受けた衝撃も数値として出てるの」

「流石I・アイランドの施設、凄いハイテクだ……」

感心しつつ、次は50円玉投げ。手首だけ、腕全体、体全体を使った投げを試して、投げへと変更。野球ボールやハンドボールやテニスボールなど、様々な大きさのボールを持つて、50m位先の的にシュート、シュート、シュート! ボーラも投げしてみたけど、これも命中つと!

「いやはや、パワーが強いというのはそれだけで脅威だね。物を投げる、ただそれだけでこれだけの威力が出るとは。銃のように火薬の衝撃で撃ち出す必要も無いしこれは幅

が広そうだ。トシはほぼガジェットに頼らなかつたからこれは新鮮な仕事になりそうだね」

「H A H A H A ! 私はこの肉体が最高のガジェットだからね！」

マッスルフォームのオールマイト、身長も体重も物凄いなあ。そのかわり、屋内での小回りは僕のほうが利く……はずだよな？

「さてイズク君、お疲れ様だ。今日はこの程度にしておこう。そうだ、メリツサ。よかつたらイズク君を案内してあげたらどうだい？ 私はトシと積もる話が有るからね。その間暇だろう」

「はーい、パパ。イズク君もそれでいい？」

「あつ、は、はい！是非お願いします！」

え、えつと、返事しちやつたけど女の人と出かけた事なんて無いからどうしよう!?

あ、あんなシャツで大丈夫かな!?!と、とりあえずまず早く着替えないと……! なんて、色々な思考がぐるぐる巡りつつ、僕は更衣室へと戻っていった。

セントラルタワー内の診察室、そこをデヴィットは貸し切りにしてオールマイトの診察を行っていた。カプセルの中のオールマイトは、普段の彼を知るものなら彼とは気付

け無い程に、弱々しかった。

「!?」

検査が進み、モニターが映し出した数値にデイヴィットは愕然とする。数値が、あまりにも異常過ぎた。

「どういう事だ、トシ……個性数値が何故これほど急激に下がっているんだ!」

モニターに映し出された数値は今まで緩やかに下降していた物が、ここ数ヶ月で急激に落ち込んでいた。今は全盛期の6割程だろうか? 全盛期を知るものとしてはどうしたって危機感を覚えざるを得ない。

「オール・フォー・ワンとの戦いから数値が下降したのは臓器を摘出したから分かる。だが、この数ヶ月で何が有った!」

必死の形相でオールマイトに確認するデイヴィットだが、オールマイトは心配かけないように弱々しく笑って言葉をかける。

「ゴホツ……長年ヒーローを続けていれば、ガタも出るさ」

言葉もなく俯くデイヴィットに、同じくかける言葉が見つからないオールマイト。

(すまない、デイヴィット。君を、君たちを巻き込むわけには行かない……)

だが、時に想いは言葉に出さなければ相手に伝わらない。それは、お互いに。

「このままでは、希望の象徴が失われてしまう。君のお陰で日本のヴィラン犯罪発生率

は世界平均より遥かに低い……。何度、君がアメリカに残ってくれればと思つたことか……」

親友が見せた不安に、改めてオールマイトは己の存在の大きさを確認させられる。しかし、今出来るのは親友に言葉をかけることだけだった。

「……それほど悲観する必要は無いさ。私以外にも優秀なプロヒーロー達や、君のようなサポートしてくれる人間も、そして今もヒーローを目指して研鑽を積んでいる有精卵達も居る。それに、私もまだ一日数時間はオールマイトとして活動を……」

「だが、オール・フォー・ワンの様な敵がまた現れる可能性も……」

「デイズ」

言葉を遮り更に不安を述べるデヴィットに、マッスルフォームに戻つて力強く目を合わせせるオールマイト。

「その時の為にも、私は平和の象徴を降りるつもりはないよ」

（それに、希望は在る……。私が見つけた、少しずつ輝き始めた希望が）

心の中に浮かべたのは、まだ出会つて数ヶ月の愛弟子。しかし、オールマイトには確信があった。彼ならば、きっと自分を継いで次代の希望になると。

だが、オールマイトの親友に有るのは、必死に希望を探そうとする足掻きだった。

(オールマイトの個性は日に日に低下し続けている……。彼を治すには多角的なアプローチが必要だ……。私の今の発明は、個性の潜在能力を人工的に強化すること……。だが、それだけではダメだ。オールマイトの個性が消えてしまえば、強化はできない。0にいくらかけても0から増えないように。なら、別の方向とは……。彼に、新たな個性を入れること……。そういえば、4年前、オール・フォー・ワンも関わっていたという日本での研究所の事件……。あの研究内容は、個性の人工的な移植……。これも、調べてみよう……)

お互いがお互いを想い合っている。表面上は分かっている、その想いの内までは、お互いに伝わることはまだ、無かった。

雄英入試前、色々な出会い

「うわあ、凄い……」

「イズク君、そんなに珍しい？」

「はい！　こんな最新の研究施設とか入ったこと無かったので！」

メリッサさんに連れられて、右へ左へキヨロキヨロと視線をやると、ちよつとからかうように笑われてしまった。なんだか凄く田舎者っぽいけど、それでも珍しくて止められないや。

「着いたわ。ここが私が使っている研究室。散らかっていてごめんね」

「いえ、そんな事は無いです！　こんなところで研究できるなんて、やっぱり凄いですね！」

大量の資料と研究資材に囲まれて、雑然としてるけど見ると凄いワクワクしちゃう。それに、謙遜してるけどこんな研究室を使えるってことは凄い優秀なんだろう。トロフィーや盾も、そのへんに無造作に置かれている。

「実はね、私そんなに成績が良くなかったの。だから一生懸命勉強したんだ。どうしてもヒーローになりたかったから」

「プロヒーローに？」

どうしてヒーローになれなかったんだらう。……あ、ひよつとして……。

「ううん。それはすぐに諦めた。だって、私無個性だし」

「！……」無個性……」

何でも無い様に話すけど、その辛さは本当によく分かる。

「勿論ショックだったわ。でも、私にはすぐ側に目標があったから」

「目標、ですか？」

「ええ、私のパパよ」

そう言つて笑うメリツサさんはとても誇らしげで、とても綺麗で。メリツサさんが飾っている写真のデイヴィットさんやメリツサさんも、みんなとても素敵なお笑顔をしています。

「パパも、ヒーローになれるような個性は持っていなかったけど、科学の力でマイトおじさまやヒーローをサポートしている。間接的にだけど、平和のために戦っている」「ヒーローを助ける存在……」

「そう。それが私の目指すヒーローのなり方」

そういいながら、メリツサさんは倉庫の奥から箱を持ってきて、ボクの目の前で開けてくれた。中にあるのは、ボタンの付いたベルトのようなものだった。それを、僕の手

に巻きながら説明してくれる。

「これはね、マイトおじさまを参考に作ったものなの」

「オールマイトを？」

ピツとボタンを押すと、ベルトが伸びて僕の腕に巻き付いて、籠手みたいになった。軽く動かすけど、一体感がとても凄い。

「これは……」

「名付けるなら、”フルガントレット”かしら？ イズク君、腕に生傷が一杯だし、テストの時も本気を出せてなかったわよね？ 多分、イズク君は強すぎる個性に体がついていない状態なんじゃないかなって」

「あつ、はい、その通りです」

見抜かれていたなんて！ やっぱリメリツサさんも凄い科学者だ！

「このフルガントレットは、マイトおじさま並のパワーを出しても、3回は耐えられるくらいの強度が有るわ。きつとイズク君の本気にも耐えられると思うの。だから、是非イズク君に使って欲しい」

「えっ、でも大切なものなんじゃ……」

「だから使って欲しいの。おじさまの弟子なんでしょ？ あなたに渡せば、きつと人を救けるために使ってくれると思うから」

じつとまっすぐ見つめられる。その表情は、とても真剣で。だから、僕は頷く以外の選択肢が見つからなくて。

「……はい。大切に使用させていただきます」

ヒーローはひとりじゃない。戦いの場に立つ時も、常にたくさんの人に支えられている。そう覚悟を新たにすると、メリッサさんが笑顔で誘ってきちゃって……

「うん。良かったわ。それじゃ、そろそろお腹空いたでしょうし、何か食べに行きましょう！」

「あつ、は、はいっ！」

で、でも女の人と二人で食べにとかはどうすればいいんだっ!?

そんなこんなで、僕とオールマイトのデータ取りが終わり、オールマイトは日本の用事も有るので僕と共に日本に帰ることになった。一泊二日位の忙しい日程だったけど、凄く楽しかった……。

日本に帰ってから、オールマイトに見守られたり、一人で自主トレだったりで訓練の毎日！メリッサさんから連絡先ももらったから、フルガントレットのつけ心地も報告したりで、あつという間に月日が過ぎ去っていった。

……かつちゃんは相変わらず、僕に個性を使って突っかかってくるから、一度本気で取り押さえて犯罪になる前にかつちゃんのご両親と相談して……それで転校することになっちゃった。……このまま顔を合わせてもいい結果にならなかったしきつとこれでよかつたんだと思う……うん。

そうして、月日は流れて冬休みのある日。

「そうだ、雄英にちよっど行ってみよう」

なんて思い立った僕は、とりあえずランニングしながら雄英を訪れてみた。オールマイイトやエンデヴァーも在籍していた憧れのヒーロー校を、是非一度見たくなくなっちゃつて。

そして、そう考えているのは僕だけじゃ無かつたようで。

「おおお！　ここが雄英ツスカ！」

身長が……190位有るのかな？　角刈りの多分同級生な人が雄英の門の前で叫んでいた。しかも、僕と同じ様にランニングスタイルで。それで、僕に気がついたようですんずんとこつちにやってきたけど、近い近い!?

「こんにはツス！　君も雄英入学を狙ってるツスカ!？」

「うん、そうだよ。一般入試でだけけど」

ちよつと圧倒されちゃうけど、それより濃いオールマイトで慣れてるから受け答えは普通にできる。そして、それが嬉しいのか彼もグイグイ話しかけてくる。

「そうツスカ! 俺は推薦をもらってるからそつちで受験をするんだ! あ、俺は夜嵐イナサツス! よろしく!」

「僕は緑谷出久。宜しくね!」

でも、こういう熱血は嫌いじゃない。思わず、挨拶に熱が入っちゃった。

「そうだ、入学を狙っているもの同士、ちよつと勝負してみないツスカ!? マラソン辺りで!」

「うん、いいね! 雄英一周とかどう?」

「よし、決まりツス! じゃあ、行くぜつ!」

「スタートは、この小石が落ちたらで!」

僕がそう言うと、イナサ君も走る体勢になる。ひよいつと上に小石を放り投げて……スタートつ!

「うおおおおおおおおおおつ!」

「ぬおりやああああああああああつ!」

お互い負けないように走るけど、やっぱり歩幅が大きいぶんイナサ君が有利かつ!?

でも、負けないっ！

「うおっしやあああああああ！」

「負けるかあああああああ！」

でも、お互いノリで雄英一周なんて言っちゃったけど、考えてみると雄英って凄い広いから……。

「ぜえ……はあ……！」

「まだ……まだあ……！」

一周する頃にはお互いクタクタになっちゃった……あはは……。

『ぎ、ゴール……っ』

「同着、かな……？」

「多分、そうツスね……」

雄英の門の前、二人で倒れちゃった。す、凄い疲れたけど……凄い熱かった……！

「引き分けか……へへッ、これでも俺、地元じゃ一番だったんすけど」

「僕は、比べる人が居なかったから……やっぱり、雄英に入ろうとする人って凄いや」

倒れながら、お互い笑って拳を合わせる。何かライバルっぽくて、凄く良い。

「なあ緑谷、雄英に絶対に入れよ。そして、また俺と勝負ツス」

「うん、勿論。あ、これってライバルって奴かな？」

「ああ、そうだな！俺たちはライバルだ！」

また拳を合わせる。ライバルか、凄い良い関係だ。

「はあああああああゝゝゝん♡ 良いわあ、この青春、凄く好い……♡」

「なっ!?!」「ふえっ!?! ミッドナイト!?! どうしてここに!?!」

そんな風に笑っていたら、いつの間にか18禁ヒーロー、ミッドナイトが側につ!?!

「どうしても何も、私はこの教師だし。何か表で騒いでる二人がいるって聞いたから覗いてみたんだけど、ヴィランじゃなくて青春する学生ですごい得したわねえ♡」

「あつ、すみません、すぐに別の場所に行くのでっ!」

「申し訳ございませんでした!」

二人共謝るけど、イナサ君は地面に頭つけて凄く謝り方だっ!?!

「良いのよ別に。じゃ、二人共気をつけて帰りなさい♪ 二人に教える日が来るのを楽しみにしてるわ♡」

そう言うのと、僕とイナサ君それぞれにスポーツドリンクを渡して学校に戻っていった。開けて飲むと、体の隅々にまで行き渡る感じがする。

「あつ、そうだ、僕のアドレス、教えておくね」

「おう、頼む！ 交換しようぜ!」

メールアドレスを交換してから、別れる。ふとしたきっかけで、出会いが有って。雄

英での学園生活がますます楽しみになると同時に、絶対に受かってやると心に誓ったのだ。

雄英高校入試

「出久、忘れ物はない？」

「うん、バッチリだよ母さん！ もう10回は確認した！」

オールマイトとの特訓の日々も過ぎ去り、いよいよ受験の日だ。

「出久ならきつと受かるわ。だから頑張つて来てね」

「勿論だよ！ じゃ、行つてきます！」

母さんに見送られて家を出る。目指すは雄英だ。倍率300を超えるのは伊達じゃないのか、電車の中にも似たような雄英受験生だつて思えるような人たちが沢山居る。彼らみんながライバルと思うと、自然と気が引き締まる。

雄英の前につくと、大きな門の前は人でごった返していた。一度マラソンでここに来たとはいえ、人が多いと随分と景色が変わつて見える。でも、知り合いは居ないし、やることは一人だけだ。後はやることをやるだけだ！

「今日は俺のライブにようこそー!!! エヴィバデイセイヘイ!!!」

うわっ、声が凄い……!! 筆記試験は何とか終わった。多分点はかなり取れていたと

思うし大丈夫。なら、後は実技試験だ。プレゼントマイクの凄く大きい声をした説明によると、仮想敵を狩っていく試験らしい。10分間は短く感じるけど、まだプロになってない受験生のスタミナだとこれくらいの長さがちょうどいいのかな？

案内されるままにやってきたのは市街地を模したフィールドだけど凄く広い。雄英つて本当にお金かかってるんだ。

『ハイスタートー！』

えっ!? カウントなしにいきなりスタート!? とりあえず体が勝手に動き出しちゃったけど!! 仮想ヴィランを見つけて!

「標的捕捉! ブツ殺す!」

「邪魔っ! スマアアアアッシユ!」

脆い! どうせ壊しちゃったし、この残骸を使って!

「シヨット! シヨット! シヨット!」

3、1、2。仮想敵は沢山居るし、手当たり次第だ!

「うわ、すげえ……」 「何だ、あのパワーとスピード」

この辺りの敵は一通り倒したかな? なら次は……

「20%……ジャンプ!」

近くのそれなりなビルの上で索敵する。ただ、初めての实战もどきにビビっちゃう人

も多いのか、苦戦している姿があちこちに見られる。ほつとくわけにもいかないし、飛び降りて……

「スタンプ！」 思い切り踏みつける！

「あつ、ありがとうございます！」

「うん、気をつけて！」

わわっ!? 露出が凄かったけど体から何かを出す個性かな？

「あの、素手や素足で大丈夫ですか？ 服がボロボロになつてる様ですが……」

「あはは……まだ僕の個性に耐えられる服が無くて……」

いつの間にかジャージは破け、靴なんて跡形も無くなっている。

「そうでしたか……では、せめてこれをどうぞ」

そう言うと、胸の間から靴を出してつてうわわっ!?

「超合金のブーツですわ。素足だと何を踏むか分かりませんし……」

「あつ、ありがとうございます！」

つい受け取ってブーツを履いてみたけど、大きさがぴつたりで、凄い！ 目分量でこんななきつちり合わせられるのか！

「それでは、お気をつけて！」

「はいっ！」

その後も、雑魚を蹴散らしながら危ない人を助けていくと、急に地響きが。音のする方を見ると、市街地を壊しながら超大型の仮想敵、しかも0点の奴がやってきてる。これがお邪魔キャラか！

得点にもならないしさっさと逃げようと思うけど、足元には女の子が！

そう思うと、無意識の内に駆け出していた。点にはならないけど、この力は救ける為
に！

「30%……デトロイトスマッシュユー！」

そう叫んで殴りかかると、装甲がひしゃげてかなり傾いたっ！でもまだ浅い！

「その人、早く逃げて！」

「は、はいっ！」

ふわふわと瓦礫を浮かせて逃げよう——あれが彼女の個性かな。なら、僕はできることを！ 狙うは関節とか、脆そうな部分！ 左手で装甲に指を突き入れて掴んで、右手で……

「30%……ラアアアアアアアアアアッッシュユー！」

連打っ！ この大きさだ、四肢の一本でも壊せば、動けなくなるっ！

「なっ……」 「うわ、凄い……」 「ヤベえぞあのパワー……」

ゴゴゴゴゴゴと大きな音を立てて崩れていくお邪魔ギミックから離れると、さっきの

女の子のところへ。

「えっと、大丈夫ですか？」

「は、はいっ！ あ、ありがとうございます！」

「うん、無事だったら良かった……」

「終了〜！」

「あつ、丁度終わったみたい」

服はボロボロになっちゃったけど、何とかポイントは稼ぐことができた。後は結果を待つだけと。その前にお礼が言いたくて、ブーツを作ってくれた人を探してお礼を言うておこう。特徴的な見た目をしていたからちらつと見えれば……と。

ジャンプして無事な建物の上に着地してと、あ、居た！

側に降りると、びっくりした顔をされた。

「あつ、貴方は……」

「どうも、ブーツありがとうございます！ お陰で試験終了時まで足が無事で居られました」

い、いざ女の人と面と向かって話すのは恥ずかしいけど、ちゃんとお礼は言わなきゃ。顔が赤くなるけど、我慢我慢……。

「いえ、お役に立てたなら何よりです。もしお互い合格していたら、よろしくおねがいし

ますわね」

「はい、こちらこそ！」

え、えーと、もしみんなが受かってたらだけど、これで更に知り合いの人数が増えたかな？

そして一週間後。

筆記試験は自己採点の結果合格ラインは楽々超えていた。そしてポイントも自分で数えたら大体84ポイント位で、多分合格域だろう。そう話したら、母さんは心配してないのか何時もと同じくゆったりした表情だ。

「あつ、出久、雄英から手紙来てるわよ〜」

「ほんと!?!」

大丈夫だと思うけど、ドキドキするのは仕方ないし、部屋で早速開けると、オールマイトの姿がっ!?

『私が投影された!!!』

「オールマイト!?!?」

雄英からの手紙だよね!?

『諸々、手続きに時間がかかって連絡が取れなくてね いやすまない!! 実は、来年度か

ら雄英で教師をすることになってね!』

ええつ、雄英で教師!? だ、大丈夫かなオールマイト……。

『おおつと、心配そうな表情とかは止めてくれよ少年! そして結果だが、撃破ポイント86ポイント、レスキューポイント84ポイントで、ぶつちぎりの一位! 主席合格さ!』

「やった、やったあああああつ!」

「う、受かったのかい、出久!」

「うん、受かったよ! 主席合格だつて!」

「ほ、本当に!? 良かったわね、出久……」

部屋で思わず叫ぶと、部屋の外から母さんが声をかけてきた! 本当に受かったんだ!

『来いよ、緑谷少年!』

『雄英が君のヒーローアカデミアだ!』

「つつはい!!!」

一時期は諦めていた夢。でも、それが今は現実になった。これから、始まるんだ! 僕の夢の高校生活が!

入学、そして入学直後のイベント達

春、合格通知を受けてからも勿論特訓は続け、今日はいよいよ雄英生活初日だ！中学では唯一の雄英合格者って事で校長先生から呼び出しを受けたり、卒業式でスピーチをさせられたりもして大変だったけど、多分今日からが人生で一番大変な日が続くんだろう。

「出久！ テイツシュ持った!?」「うん」「ハンカチも!? ハンカチは!? ハンカチーフ！」「うん!! 持ったよ！ 大丈夫だって!」「出久!」「なアにイ!!」

何時もの、心配性な母さんとのやり取り。でも、最後は母さんが色々と思いを込めた後、

「超かっこいいよ」

そう言ってくれたんだ。

「……………！ 行ってきます!」

地下鉄を乗り継いで40分、僕の母校になった学校の校門を抜け、とつても大きなビ

ルの中へ。廊下もドアも、この学校は全部大きい。様々な個性の人が通うから、完全な個性バリアフリー設計だ。

一般入試定員36名、18人ずつでなんと2クラスしかない。そんな人達と一緒に学ぶことになるのかと思うと、凄くドキドキする。地図を頼りに1—Aの前に行くと、既に聞き覚えのある、賑やかな声が聞こえてきた。

「ウツス！ はじめまして……つて緑谷あ！ 久しぶりだなあ！ お前も受かったツスね！」

「夜嵐君！ 君こそ、入学おめでどう！」

「おつ、何々？二人共知り合い？」

「おや、彼はあのお邪魔ヴィランに向かつていった……」

夜嵐君とグツと拳を合わせていると、他のクラスメイトの人たちも集まってきた。

「えつと、はじめまして。緑谷出久と言います！ どうぞよろしくお願いします！」

初対面だし、挨拶は大事だし腰を曲げてちゃんと挨拶をしとかないと。

「うおつ、すげー丁重だな。俺上鳴電気、よろしくな！」

「俺は切島鋭児郎だ！ お前から何か熱そうだし、よろしく頼むぜ！」

「俺っちは瀬呂範太、よろしくな」

うわわっ、一斉に来たっ!? ひよつとして高校デビュー成功かもっ!?

「う、うん、みんなよろしくね！」

それに、そばに来てくれたのは男子だけじゃなくて……。

「あつ、あのもさもさ頭はっ！ 試験の時は助けてくれてありがとうございました！」

お陰で助かりましたっ！」

「同じく、助かりましたわ」

「メルシー☆ 君のお陰で助かったよ☆」

わわっ!? 一斉にやっつてこられて何が何やら!? でも、嬉しい、楽しい！ そんな風

に感じていると、急に廊下から声が聞こえてきた。

「お友達ごっこしたいなら他所へ行け」

「ここは、ヒーロー科だぞ」

寝袋に入つて、ゼリー飲料を飲んですつごく怪しい!?

『何かいるうううううっ!?!』

多分、クラスのみんなの心が一つになった瞬間だと思う。

「ハイ、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね」

そんなこんなで、この先生の空気に飲まれてあつという間にグラウンドに連れ出されてしまった。そこでやらされるのは個性把握テスト——”個性”禁止ではなく、フルに使つての体力把握テストみたいで不謹慎だけど少しだけワクワクしちゃう。

「緑谷、中学の時ソフトボール投げ何メートルだった？」

「70mです！」

「じゃあ、”個性”を使ってやってみろ。円から出なきゃ何しても良い。早よ、思いつきりな」

「はい！」

ワン・フォー・オール……フルカウル！35%！

「シユートオツ!!!」

「うわっ」「おっほ!」「すげえ……」

「809・3m……良いな。だが、最大距離を出すにはまだ角度が甘いぞ」

「は、はいっ!」

それから各種目の測定に入ったんだけど、最下位は除籍なんて言われたからみんな気が入っていた。勿論、僕も負けるつもりはない!

第1種目：50m走

「2秒54!」

「くっ! 得意分野で負けるとは……!」

「短すぎて飯田はトップギアまで持っていけなかったか……100mではどうなるか分からんな」

第2種目：握力

「999.9キロって!？」

「カウンターストップかよ!？」

第3種目：立ち幅跳び

「うわっ!?! 調整がっ!?!」

「それでも50mは飛んでるぞ……」

「この勝負は俺がもらったツス!」

「うわっ、風すげえ!?!」

「夜嵐は∞か! どんでもねえな!?!」

——と、そんなこんなで色々と種目を終えたんだけど、最下位除籍は嘘だったみたい!
! みんなその事に安堵していたけど、雄英がすごい学校だって改めてみんな良く分か
かったみたいだ。

放課後になると、みんな疲れたのかそれぞれ帰っていくけど僕には夜嵐君が話しかけ
てきた。色々と試験が有ったのに、全然疲れが見えないや。

「オツス、緑谷！一緒に帰ろうぜ！」

「うん、僕は地下鉄だから、そこまででいいなら」

「俺も電車だ！でも、せっかくだし何処かに寄ってこうぜ！」

「そうだね、雄英の側は何も知らないし何か食べていこうか」

そんな事を話していると、委員長気質な……飯田君だったかな？が僕らの傍にやつてきた。凄くキビキビしていて真面目っぽい。

「君たち！学生の身であまり遊び呆けるのもいかなものかと思うよ！」

「えっ、でも同じクラスメイトだし、親交を深めるのも大事じゃないかな……？」

「むっ、それもそうだ……では俺もついて行っていいかい？」

怖そうに見えたけど、実はすごい真面目なだけみたいだ。プレゼントマイクにも臆せず質問をしていたし。

「うん、僕は良いよ。あ、緑谷出久って言います。改めてよろしくお願いします！」

「俺は夜嵐イナサツス！宜しくツス!!」

「飯田天哉だ。よろしくお願いするよ！」

そのまま3人で校門を出て、スマホで近くのショッピングモールを探してそこに歩い

ていつてみる。雄英の一般学生の御用達なのか、同じ制服の人をあちこちで見かける。

「飯屋・ゲーセン・本屋と、一通り遊べるところは有るツスね!」

「じゃあ、ちよつと何かつまんでいかない? 結構お腹空いちやって」

「うむ、俺たちのように激しい運動をする物なら間食も必要だろう。賛成するよ」

そんなわけで、僕らは近くのファミレスへ。ここにも、雄英の制服を着た人たちが多数。だけど、何とか待ち時間は無く席へ案内された。僕はカツ丼、夜嵐君はカレー、飯田君はビーフシチューを頼んだみたいだ。

「さて、親交を深めるに当たって一体何から話すべきであろうか」

わいわいするだけなのに、飯田君が居るとまるで何かの会議をするみたいだ。ちよつと気が引き締まっちゃう。

「ウツス! とりあえず、自分の好きなでも話すとしなかつスか! ちなみに俺の好きなものは熱血ツス! ヒーロー、熱いつすよね! 昔からそんな熱いヒーローに憧れて、俺もそうなりたいと思つたツス! あ、後カレーも好きツス! 特に辛いのは身体が熱くなつて大好きツス!」

そう話す夜嵐君の表情はとても楽しそうだ。それに、その元気さにも圧倒されそうになる。

「うむ、では次は俺の番だね。俺の好きなことは勉強だ。兎にも角にも、ヒーローになる

ためには何でも学ばねばならない……。僕の兄、インゲニウムに負けないヒーローになるためにも、この雄英で学べることは何でも学ばなくてはならない。あ、それとビーフシチューも好きだね」

「おおつ、あのIDATENのインゲニウムの弟さんツスか！ それに負けないようにって熱いツス！」

「うん、個性が似てるなって思ってたけど兄弟だったのか！」

「ははっ、でもまだ俺は兄貴に勝てないものだからだけだね」

そう笑う飯田君は、でもとても誇らしげだった。

「えーと、最後は僕だね。僕が好きなのは、オールマイト！ ずっとNOーヒーローで、その活躍は海外にまで知れ渡り、アメリカなどでもファンが多数。それに今年から雄英での教師にもなり、その他沢山の賞を総嘗めにもしていて……」

「み、緑谷……」お、オールマイトのファンなんだね……

はっ!? 5分位時間が飛んでたと思ったらちよつと引かれてるっ!?

「あ、あと、カツ丼も好きかなっ！ 特に、母さんが作ってくれる手作りの奴とかが」

「なるほど……そうになると、みんな好きな物を頼んでたんだね」

「やっぱり好物を食べるのが一番ツス！」

それぞれお腹が減ってたのか、みんな大盛りで頼んでる。飯田君は行儀よく、夜嵐君

は豪快に食べてるのを見ると、僕もお腹が減ってきて丼を持ち上げてどんどんお腹に入れちゃう。

同じヒーローを目指す友達同士、こうして話すのが凄く楽しくて、高校生活もきつと楽しくなるだろうって僕は確信するのだった。

雄英生活の開始!

波乱の入学初日が終わって、いよいよ雄英の通常授業の日々に入った。でも、午前中は普通の学校とあまり変わらない。必修科目や英語みたいな、普通の学校と同じ科目が出るからだ。でも、教師がヒーローなのが普通の学校と違うところかな? プレゼント・マイクの英語とか凄いレア授業で興奮する!

そして、昼はクックヒーローのランチラッシュュが作るご飯を安価で頂ける!これも雄英生の特権だろう。そして、午後からがいよいよヒーロー科としての授業、ヒーロー基礎学!!

「わーたーしーがー!! 普通にドアから来た!!!」

とうとうナンバーワンヒーロー、オールマイトの教えてくれるヒーロー基礎学だ!

「ヒーロー基礎学! ヒーローの素地を作るための様々な訓練を行う科目だ!! 単位数も最も多いぞ。早速だが今日はコレ!! 戦闘訓練!!!」

「戦闘!」「訓練!」

オールマイトの登場から、みんなのテンションもぐんぐんと上がっていく。みんなそれぞれに、ヒーローとしてのコスチュームも与えられるし当然だ!

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女!! 自覚するのだ!!! 今日から自分は
……」

「ヒーローなんだと!!」

わざわざ、オールマイトがI・アイランドに連れて行ってくれ、僕一人のために作ってくれたコスチューム。無駄にする訳にはいかない。パーツひとつひとつを装着するたびに、僕の意識が学生から”ヒーロー”へと切り替わっていく。

「さあ、始めようか有精卵共!!!」

こうして、僕のヒーロー科としての初訓練の熱気は最高潮に——達したんだけど中途半端に終わってしまった。

原因は相性だろうか？ 僕と麗日さんのペアは、飯田君と夜嵐君のペアと戦うことになったんだけど、夜嵐君が僕と一対一で戦うことになって、麗日さんはその隙に飯田くんのところへ行くことになったんだけど、夜嵐君との戦いが千日手になっちゃった……。

「引き分け……かな」「そうツスね……」

お互い本気を出して個性を使うと暴風で建物が壊れちゃいそうだし、加減するとお互い決め手が無いし、僕の投げる物は全部夜嵐君の烈風で弾かれちゃうので、お互いどう

しようもなかった。上では麗日さんが飯田君との戦いに勝ったんだけど、僕は全く関係してないし……ううう、何も出来なかった。

でも、何も出来なかったら次はできるように特訓すればいい！ 雄英入学前は、オールマイトの監督が無ければ個性を使った特訓は出来なかったけど、この雄英の中ならきつと特訓ができる場所があるはず！

そんな訳で、放課後にいざ職員室h……「おーい、緑谷あ！ 一緒に帰ろうぜー！」
と思つたら、夜嵐君が誘つてきた。ついでに、切島君も居た。夜嵐君、どんどんみんなと仲良くなつていくなあ。

「あつ、ごめん、ちよつとこれから職員室へ行こうと思つて」

『職員室?』

二人声も動作も揃つて首を傾げられた。

「何か呼び出しを受けたのか?」 「ひよつとして、今回の試験がダメだったから……」

「いや、そういうのじゃなくて! ただ、今回の授業の結果が納得行かなかつたから、訓練できる場所が無いか先生に聞こうと思つて……」

「なるほど! 確かにお前ら引き分けてたもんな」

「特訓か! くーっ! 熱いッス! 燃えるッス! 緑谷あ! 俺も一緒に特訓してい

「いか!？」

「あつ、俺も俺も!」

「うん、もちろんだよ! 一人より、三人でしたほうがきつと良い意見も出るだろうし!」

男3人で『オー!』と盛り上がっていると、後ろから気配が。

「あ、あの……私も参加させてもらっても宜しいでしょうか……?」

「えっ、八百万さん? もちろん大丈夫だけど」

そう言うのと、ホツとした表情で笑顔になった。おつ、女の子と特訓とか何かドキドキしそう……。

そんな訳で4人揃って職員室へ。相澤先生に話すと、すんなりと許可を出してもらえた。

「問題を把握したらすぐ改善しようとする姿勢……合理的だ。良いだろう、セメントス先生にも協力してもらおうか」

「セメントスにもつ!?!」

そうして連れて行かれたのは、体育館^{ガンマ}。

「通称TDLだよ」

『(TDLはマズそうだ!!)』

「ここは俺考案の施設。生徒一人ひとりに合わせた地形や物を用意できる。台所つてのはそういう意味だよ」

見れば、他の先輩達も、それぞれ場所を用意してもらって特訓をしている人がちらほら見える。

「しかし、入学早々にここを使うようになる1年生も珍しいね。頑張つて特訓するんだよ」

『はいっ!』

わざわざセメントスにもフィールドを作ってもらえて、俄然やる気が出る!

「まあ、特訓と言つても方向性がよくわからないならアドバイスをやろう。個性つてのは筋肉と同じで使えば使うほど伸びていくもんだ。だから、個性を使つて個性自体を伸ばすのも有効だ。もちろん、コントロール自体を伸ばすのもいいが」

「はいっ!」『うつつす!』『了解ですわ』

相澤先生からアドバイスも頂いて、早速特訓開始!……の前に、それぞれ何を伸ばすか話し合いだ。

「俺の個性は硬化だし、やっぱりそれを伸ばすのが良いな」

「俺の烈風は、とにかく風を起こして鍛えるツス!」

「私の個性は……物を作ることで、とにかくたくさん作ることで皆様のサポート

をできれば」

「僕の個性は……上限を上げるには身体を作らないとだし、みんなとやるからには技術を伸ばしたいかな？」

それぞれバラバラな特訓内容だけど、せっかくだし協力して特訓したい……色々考えた結果、思いついたのが。

「私が様々な物品を創造し」「僕が夜嵐君に色々な威力で投げて！」「それを烈風で吹き飛ばし！」「吹き飛んできた物を全部身体で受け止める！」

と、即席だけど凄く効率が良いような特訓が完成した！

八百万さんは、わんこそばみたいに次々と物を作らなきゃならないし

「くっ……次は銅のサイコロを……」

僕は、受け取った形や重さに合わせて投げ方を変えなきゃいけないし

「15%……シユート！ 次、20%、シユート！」

夜嵐君は、そんな物の重さや形に合わせて風を変えなければならぬし

「うおおおおおおおおりやあああああああ！」

切島君は、投げられたものを全部硬化で耐えてるから一番辛そうだ。でも、根性が凄

い！

「まだ、まだあー!」「うおおおおつ! 熱いな! 切島あー!」「おうよ、もちろんだー!」
「男の方々つて、熱いのですわね」

今まで、ずっと特訓や訓練は一人か、オールマイトに見られてやってきたからすつごく楽しい! 友達やライバル、同級生と一緒にどうしてこんなに楽しくなるんだろう?

でも、しばらくすると、まず八百万さんが脂質切れで作れなくなつて、次に切島君が硬化できなくなつて痛いのを直撃してしまった。だ、大丈夫かな?

「ぐ、ぐおおおおお……」 「き、切島あ!」「だ、大丈夫ですの?!」

「へ、へへつ、そろそろ、限界かも……」

「じ、実は僕も……」 「俺もツス……」 「わ、わたくしも……」

こうして4人揃つて、TDLの一角に倒れちゃつた。そんな光景はよく有るのか、回りの先輩たちも苦笑していた。そして――

「全く、お前ら。訓練が終わつた後はクールダウンしないと非効率的だぞ」

『相澤先生?』

「ほら、これでも飲め」

と、相澤先生が何時も飲んでるゼリー飲料を僕らにくれたのだ。あ、美味しい……
「……ま、お前らの担任だからな。頑張つてる奴らはちゃんと見ていてやる」

と、ゼリーを渡した後はまたのっそりとTDLの外に行ってしまった。そうか、見ていてくれたのか……

「ははっ、楽しかったな、またやろうぜ！」

「うん、是非！」

「それは良いのですが、個性は筋力のように超回復はするのでしょうか……？」

「それは色々試すなり聞いてみたりするツス！ そうだ、他の奴らも誘おうぜ！」

みんなで輪になって床に座りつつ、そんなことを話す僕ら。きつと、これから毎日大変だろうけど、楽しくなりそうだ。

襲撃! ヴィラン連合!

授業開始日も波乱の一日だったけど、ヒーロー科の科目は凄く面白かったし、特訓も楽しかったし、母さんに心配されるくらい家に帰るのが遅くなっただけど、同じ立場の人たちが集まる英雄の生活は、凄くワクワクする!

それから数日、日に日に特訓への参加メンバーが増えたり(飯田君からは「どうして誘ってくれなかったんだ!」って言われちゃったし。瀬呂君や上鳴君からは「がっばいイベント良いじゃん!俺たちもやらしてくれよ!」って参加してくれたし。峰田君の「いいところ見せて女子の好感度ゲット!させてくれよ!」は動機はともかく、訓練するのは良いことだし)、最初は僕が学級委員長に選ばれたんだけど、その後の対処で飯田君が満場一致で委員長に選ばれたり、もう1ヶ月は学校に通ったんじゃないかってくらい濃いイベントが目白押しだった。

そして、今日のヒーロー科の訓練は……

「災害水難なんでもござれ。人命救助訓練だ!!」

それを聞いて、ざわつくみんな。これも、英雄の中にある施設で行われる。学校の中なのにバスで移動しなきゃならないなんて、本当にこの学校は広いや。飯田君の熱血委

員長ぶりがちよつと空回りしちやつたけど、みんなでバスの中へ。

ちよつとした待ち時間、そんな時はやっぱりみんなが何かしら話をしちやうもので、早速蛙吹さんが話しかけてきた。

「私思ったことを何でも言っちゃうの緑谷ちゃん」

「ん？ 何？ 蛙吹さん？」 「梅雨ちゃんと呼んで」

急にどうしたんだろう？

「あなたの”個性”、オールマイトに似てる」

うわわわわっ!?

「そそそそ、そうかな!? いや、でも僕はそのえー」

「そうだな、すげーパワーとコントロール、超オールマイトっばい！」 と上鳴君が

「でも、スタイルは全然違うよな。オールマイトは身体一つで戦うけど、緑谷はガジェツト使いまくりだぜ」と、冷静に見ていた瀬呂君が

「俺もパワータイプだけど、あれは参考になるわ……」と砂藤君。

良かった、オールマイトとの関連性から話題が移ったみたい……。

「しかし、派手さで言ったら夜嵐と轟がスゲーよな。風と氷、すっげー派手で強い。プロに行っても人気が出そうだ」

「……ウツス！ ありがとうツス！」 「……そうか？」

あれ、夜嵐君、やっぱり轟君の話題が出るとちよつと顔が曇る……。

「みんな人気が出そうね、ケロケロ」

でも、そんなちよつとした違和感もすぐに流されて。

「賑やかな会話ですわね」

「こういうの好きだ私」

八百万さんはニコニコと、麗日さんはあははと笑っていた。うん、この空気、好きだ！

そして着いたのが、ウソの災害や事故ルーム、通称USJ！ 何処かに怒られそうな名前だけど、その規模がものすごい！

スペースヒーロー13号の監修で作られたこの災害ルームは、あらゆる事故や災害の状況が詰まっっていて、見ただけでワクワク感と怖さの2つが襲ってくる。

「私の力は簡単に人を殺せません。皆の中にもそういう”個性”がいるでしょう。ですが、私の力も皆さんの力も有効に使えば、人を救うことが出来ます。この授業では……心機一転！ 人命のために”個性”をどう活用するかを学んでいきましょう！ 君たちの力は人を傷つけるために有るのではない。救ける為に有るのだと心得て帰ってくださいな！」

そして、13号の訓示。僕たちに心構えを説いてくれて、すごくカッコイイ!

でも、そんな授業が始まる前。昔感じたことが有る感情。これは……途方もない……
悪意!

「ひとかたまりになって動くな! 13号!! 生徒を守れ!」

八百万さんの側に移動して……! トリモチ弾! 狙いは、ゴーグルやマスクを付けている奴!

「連撃……シュートツ!」

「うわっ!? ぐえっ!? な、何だっ!?」

『緑谷あ!?!』

「こいつら、ヴィランだ!」

間違いだつたら謝ればいい、でも、間違いじゃない! この禍々しき、前に感じた奴より弱いけど、ヴィランだ! そして、トリモチを当てた奴はマスクを外したっ! 次、激辛玉っ! フルカウル、10%で指で弾いて……!

「シュット! シュット! シュット!」

「グワツ!?!」 「ぎゃあああああああ!?!」 「辛っ!?!」 「いてええええええええええっ!?!」

敵の目や口に、放り込むっ!

”ヴィラン”に真つ先に気がついたのは自分だ、と思つたが、イレイザーヘッドより先に動いた者が居た。緑谷出久である。階段下へと飛び下りる前に、イレイザーヘッドの横を幾つもの飛翔物が追い抜いていった。

緑谷の、ガジェットの数々である。昔、緑谷出久には”個性”がなかった。故に、”個性”以外の何かでヴィランに立ち向かうしか無かつた。その一つが、”投擲”である。人類最古の武器であるこの手段を、緑谷は幼い頃から徹底的に磨いてきた。そして、個性を得た今、投げられる距離も重さも劇的に向上した。だが、今緑谷の投擲の正確さを支えているのは技術。10年以上、磨きに磨き抜いてきた努力の結晶そのものであつた。

「勝手なことをするな!」と本来は言うべきであつたが、その投擲の正確さにイレイザーヘッドは舌を巻く。

「何だよあいつ、学生なのにいきなりチートのお出ましかよ! 野郎かよ!」

後ろに居た、ひとときわ異形のマスクをしたヴィランが叫んだ。既に敵地であるというのに、子供のように癩癩を爆発させている。故に、緑谷の優先目標からやや遅れてしまったのだらう。

「八百万さん、トリモチ弾、補充できる!?!」

「お任せ下さい!」

自分の持っている弾を投げ尽くした緑谷に、八百万がマトリョーシカを次々と補充する。ただ、その中身は人形ではない。トリモチだ。脆いマトリョーシカがヴィランの顔や足にぶつかると、その部分がくつき動きが鈍る。そして――

「遅い」

動きが鈍ったヴィランは、イレイザーヘッドの敵ではなかった。格闘と捕縛布で、次々と戦闘不能になっていくヴィラン。だが、座して見ているだけの者だけでもなかった。

「厄介ですね。あなた方には、散ってもらいます」

突如緑谷、そしてクラスメイト達の前に現れた黒い霧。それは、それぞれを、各災害ゾーンの各地へと散らしていったのだ。

「っ!? ワープ個性!? しかも水難ゾーンっ!? しまった!?!」

このスーツは、防弾防刃防爆の性能を備えているけど、その分重いつ!

「来た来た!!」

「(ヴィラン!)」

「おめーに恨みはないけど、サイナギヤぼあつ!?!」

とりあえず牙を砕きながらカウンターを仕掛けたけど、他にもヴィランが居るしどうするか……っつて

「緑谷ちゃん、こっちよ」

蛙吹さんの舌っ!?

「ありがとう蛙吹さん」

「梅雨ちゃんと呼んで。しかし大変なことになったわね」

船の上に峰田君と一緒に登ると、回りは水が得意そうなヴィランに囲まれていた。

「んのやろおおおおお! 殺してやる!」

ヴィランは下だけど弾は無い……それじゃあ船の壁をフルカウルでむしり取って団

子状にして……

「シュート!」「ぎやつ!」「ふぎやつ!」「ぎえつ!」

とりあえず3人に当ててと。これでひとまず迂闊に水面には顔を出さないはず。

「み、緑谷あ……」 「顔に似合わず、凄い事するのね緑谷ちゃん」

あつ、峰田君からちよつと引かれてる……。でも、ちよつと安心したのか周りを見て

ふたりとも状況を把握している。

「た、大漁だけ緑谷あ……ど、どうする?」

纏るように見てくる峰田君。

「大丈夫、いざとなつたらどうにかするから」

それを笑つて安心させる。ヒーローは、まず笑顔じゃないと。

「でも、ここを襲つたつてことはオールマイトもどうにかする算段が有るつて事よね。時間を稼いでどうにかなるかしら？」

と、蛙吹さんの冷静な考察だ。それを聞いて、また峰田君が顔を青くする。

「み、みみみ緑谷あ!? な、なんだよあいつ!」

「落ち着いて峰田君。状況をちゃんと把握するのは大事なことだよ。それに、僕らに有利な面も有る」

「ゆ、有利な面?」

少しでもいい材料にすがるうと、僕の袖を握つてくる峰田君。安心させないと。

「ここは水難ゾーンなのに、蛙……梅雨ちゃんが飛ばされた。つまり、敵は僕たちの”個性”までは把握しきれてない。奇襲ができるはず。それに、コイツラ自体はそんなに強くないし」

「そうね。私の蹴りでもどうにかなつたわ」

「うん、3人の個性をあわせてどうにかしよう。一網打尽にするには……」

と、僕と梅雨ちゃんの目が峰田君に向く。

「う、ううっ! わ、わかつたよ! ただ、二人共ちゃんと助けてくれよ、な、な!」

「もちろんだよ!」 「ええ、協力して助かりましょう!」

「う、うわああああああ!!」

峰田君が、パニックを起こしたふりをして、そのもぎもぎを船の周りに投げまくる! 頭から血を流して辛そうだけど、その分沢山のもぎもぎが水に浮かんでる!

”フルガントレット”装着!

「ここで、メリッサさんから貰ったフルガントレットを装着!

「くたばれええええええええつ!」

「こつちも自棄っぽく演技をして!

「やっぱりガキだな」 「調子に乗ってやがる」

「70% デトロイトスマッシュ!」

水に、衝撃波を撃ち込むっ!

「う、うわわわっ!」 「引きずり込まれるっ!」

「いつけええええええええええ!」

そこにさらにもぎもぎがはいりこんで、梅雨ちゃんが僕と峰田君を持ち上げて。

「とりあえず、第一関門突破って感じね。すごいわ二人共」

3人無事で、水難ゾーン突破! そして、70%だしフルガントレットはまだ大丈夫

そうだ。そして、多分……これからが本番だ！

強敵！ 敵連合脳無！

「これからどうしましょう？ 緑谷ちゃん」

ケロケロと、冷静なあさ……梅雨ちゃんが次の行動を聞いてくる。実力が一番高いのは3人の内で客観的に見て自分……か。

「僕は急いで助けを呼びに行きたいかな」

「じゃあ、私と峰田ちゃんは水辺に沿ってこつそり出入り口をめざしましょう。囿にしちやうみただけ……」

「覚悟の上だよ」

力強く、頷く。不安にさせちゃいけない。

「み、緑谷……お、お前だってほんのちよつと前までは中学生だったんだから無理するなよ……」

峰田君は怯えながらも僕を心配してくれるのだろう。でも……

「できればそうしたいけど、ヴィランは待つてくれない。なら、誰かが動かないと」

「う、うう……緑谷あ……」「緑谷ちゃん……」

不安そうな二人の顔。だからこそ、笑顔で。

「大丈夫、僕はそう簡単に負けないから！」
そう宣言して、35%で、出入り口に！

駆けつけると、相澤先生がヴィラン達に囲まれて苦戦していた。あの、変なマスクをした奴が、手強いっほい！なら、まず雑魚に奇襲をかけて……！

「35%、フルカウル……！アラバマスマッシュユ！」

こつちをむいてない雑魚を一気に片付ける！

「緑谷っ!!?」「あのチート野郎かっ!!?」

変なマスクのヴィランは、他のやつより反応が早い！でも、それでも

「遅過ぎるっ！デトロイトスマッシュユ！」

思い切り、殴りつけるっ！

「げはあああああつ!!?」「死柄木吊っ!!?」

これで大体のヴィランは片付いた筈……向こうでは、13号がやられたけど、飯田君が抜けたっ！

「緑谷っ！無茶をする……！だが、助かったぞ」「は、はいっ！」

だけど、この程度でオールマイトを殺せるなんて思わないはず！だから、まだきつと切り札が有る！

「オールマイトのフォロワーか……このチート野郎……」

粘着質で、我儘な子供の様な顔つき……でも、それを補って余りある、悪意が僕に来る。

「なら、チートにはチートをぶつけないとなあ。脳無、行け」

後ろに控えてた、黒い筋肉の塊。見ただけで、それと分かる異形型のパワータイプ!

「ダメだ、緑谷、こいつのは“消せない!”」

「分かりました!」

出し惜しみなんてできる相手じゃない! 初っ端から……! 顔面に!

「100%!!!!デラウエア! デトロイト! スマアアアアアアアッシュー!」

決まった……のに!?

「!!!」 「そ、そんなっ……」

フルガントレットのお陰で腕へのダメージは無いけど、ヴィランへのダメージも、無い……!?

「おいおいおい、本当にオールマイトに匹敵するようなチートダメージじゃないか。でもま、残念。そいつはオールマイトに勝てるよう作られたんだ。じゃ、ゲームオーバーってことで」

どろりと、粘着質な声が響く。そして、迫るヴィラン……って、速い!?

「くっ、このっ!？」

動きは単純、でも速い! オールマイトに匹敵するかもっ!? まずは時間を稼がないと……!」

「フルカウル……40%お!」

痛みは無視しろ! 相手の動きを全部読み尽くせ! 幸い、ワープ個性は相澤先生が消してくれている!

腕の振りは大振り——これは躲す! 踵落とし——にはカウンター! タックル——にはスウエイで!

「なっ!? んでだよっ!? なんで捕まんねえんだよてめえは!」

まるで、チートをしても勝てなかった子供みたいな癩癩! あいつは、あり方が脅威じゃない! かつての、研究所の研究員達みたいな、”狂気”が無い!

「遅いからだよっ!」

思考は子供並——なら、とにかく煽る! でも、稼ぎきれるかっ!?

そう思った時、入り口からけたたましい轟音。そして、やってきたのは、僕らの——最高のヒーロー……

「もう大丈夫……!」

『オールマイト!!!』

「私が来た!」

何時もと違う、オールマイイトが、笑ってない……!」

「待ったよヒーロー。社会のごみめ」

そんな事を言うヴィランを無視し、僕と黒いヴィランの前に割って入るオールマイイト。やっぱり、疾い!

「イレイザーヘッド、皆を頼んだ……」

「了解です、オールマイイト。おい、緑谷、よくやってくれたぞ」

皆がオールマイイトの登場で安心している。けど、ダメだ!

「オールマイイトオ! 僕の、100%が通じなくて! そいつ、強いです!」

不安がる僕の叫びに、でもオールマイイトは笑顔で返してくれて。

「大丈夫だ少年」

根拠も何も無い笑顔。でも、それは今までのオールマイイトの信頼が有って、何より安心させてくれるもので。でも、ダメだ。あれに勝てるとしても、活動時間を、何より命を削る羽目になるだろう。そんなのは……嫌だ!

「しよ、少年!」

ファイティングポーズを取る僕に、驚くみんな。

「オールマイイト。僕も一緒に、戦います!」

「だが、しかし!？」

「手を抜いて、勝てる相手じゃないです! 相澤先生は、他のヴィランの牽制を!」

「っ!? 馬鹿野郎、後で説教だ!」

オールマイトをずっと見続けてきたからこそ分かる。全盛期に届いてない今の力じゃ、『限界を超えないと』倒せない!

「くっ! 仕方ない! 行くぞ少年!」 「はいっ!」

「CAROLINA…SMASH!」

クロスチョップからの続けてのスマッシュ! でも……

「マジで全っ然…効いてないな!」

凄い風圧のオールマイトのパワーが、全部吸収されてる!

「効かないのは、シヨック吸収だからさ。脳無にダメージを与えたいなら、ゆうつくりと肉をえぐり取るとかが効果的だね……それをさせてくれるかは別として」

こいつ、余裕なのかわざわざベラベラと情報を!

「なるほど、そういうことならやりやすい! 少年!」 「はいっ!」

バックドロップに合わせて……地面にぶつかる頭を踏みつける!

『DOUBLE SMASH (スマッシュ)!!!』

響く轟音、上がる衝撃波。

「すげえ!! オールマイトもすげえが緑谷も凄すぎるぜ!!」

「み、緑谷君大丈夫!?!」

「だけど、それでも——」

「へえ、二人共やるじゃん。まあ……無駄だったけど」

「それでも、ゆっくり起き上がってくる! 顔が歪んでるのに、元に戻っていく……!!」

「複数の、”個性”……」

「おつ、当たり前だよ。そいつは”超再生”も持つてる。複数個性持ちの対オールマイト用のサンドバッグって訳なんだが……二人以上に通用するなんていい計算外だ」

「っ! そこまで強力な”個性”が作られていたのか! あの研究所と、同類の物が! 勝ち誇る口調が、無性に腹立たしく感じる。」

「……少年、下がっていなさい!」

「いえ、でも!」

「少年!」

「既に限界ギリギリ、もう血も口から吐いてるのが見えるのに。それでも皆のために戦う。それが平和の象徴……!」

オールマイトが突進した。そして、目にも留まらぬパンチの連撃。

「真正面からの殴り合い!？」

血を吐きながら、皮が剥がれながら、一発一発を100%以上でなんて……! オールマイトの身体が、持たない!

——待てよ。オールマイトに合わせて作られたヴィラン。なら、もし。オールマイト以上のパワーをぶつけられれば? 多分、僕にはそれができる。ワン・フォー・オールは、力を引き継ぐ個性。なら、オールマイトの力を引き継いだ僕なら。きっとそれ以上の力が出せる!

「フルカウル……!」

イメージするのは、オールマイトすら超える、最強の自分。

「120%」

フルカウルで暴風を切り裂き、ヴィランに接近する!

一発で、一発でいい! ただ、限界を超えて! 誰も居ない!! 上へと吹き飛ばす!
「デラウェア・デトロイト・スマアアアアアアアアアアアッシュ!!!」

USJの、壁を壊し天井を壊し、周りのものすべてを吹き飛ばして、ただ上へ! 空の、遙か彼方まで飛ぶヴィラン。でも、その代償は絶大で。

「あ、ああああああああああああああつ!？」

腕が、折れたっ!? フルガントレットも一撃で壊れてっ!? 100%以上の力を使っ
たからかっ!? で、でもっ!

「しよ、少年っ!」

僕を守るように立ちふさがるオールマイト。だけど、多分、勝った……
ヴィランへと撃ち込まれる狙撃。それは……

「スナイプ君!」

「I—Aクラス委員長飯田天哉!! ただいま戻りました!!」

良かった……。そう思うと、僕の意識は、段々と、遠く………

ヒーローに立ち止まる暇は無い！

薬の香り……包帯や布の香り……ここは？

「ん、んん……」

目を開けると、白い天井が見えた。記憶にない、白い天井。

「おや、目が覚めたようだね」

目が覚めると、隣にはオールナイトが同じ様に横になっていて、更に奥にはリカバリーガールが座っていた。

「全く、無茶をしたもんさね。だけど、事情が事情だけに仕方ないか」

手には点滴が付けられていて、起き上がるうとしたら身体が酷くだるくて起き上がれない。

「ああ、もうしばらく寝てなさい。私の”個性”は治療はできるけど、体力を凄く使うんだよ」

「あつ、そうなんですか……すみません」

「謝るんじゃないさね。オールナイトだつて苦戦する相手を倒したんだ。胸を張りな」

「あつ、は、はい……」

そうか、倒せたんだ……。ほっと一安心すると、今更ながらどっと疲れが身体に押し寄せてくるようだった。

「だが、私は言いたいことが有るぞ……」

「お、オールマイト?」

「何故、あんな危険なことをした? 私でも、倒せていたんだ」

珍しく、怒ったような声。でも、ここは引けない。引いちやいけない。

「だって、オールマイトは既に活動限界でしたよね? これ以上無茶したら、命も縮みかねない位に……」

「それが、私の役割だ」「嫌ですっ!!」「!?」

リカバリーガールも、オールマイトも驚いたような目でこちらを見る。

「オールマイトは、今までずつと沢山の人を助けてきたんです。だから、そんなオールマイトが早死にするなんて、絶対に、嫌なんです……」

「少年……」

「あんたの負けだよ、オールマイト」

「リカバリーガールまで……」

「あんたは常に誰かを心配してるけど、あんたを心配してる人だってたくさん居るんだ。あんたの元サイドキックみたいに。あたしだってそうさ。……だから、もうちよつと他

人に甘えてもいいんだよ」

「……………」

オールマイトは何も言わない。……でも、少しは想いは届いただろうか。

その後、オールマイトの友達の家内さんが来て、他の人達の無事を伝えてくれた。本当に良かった……

そして、ふとスマホを見たら、みんなからのメールが来ていた。どれもこれも僕の身を心配してくれるメールで、なんだかともうれしくなった。全部にちゃんと返信をして……つと。

翌日は臨時休校になって、僕は無理やり休まされ。そして、更に翌日。

「緑谷だ！ 緑谷が来たぞー！」

と、峰田君が叫ぶ。

「おい、大丈夫か緑谷あ!?」「緑谷ちゃん、もう平気なの?」「緑谷君、あのヴィランに立ち向かってもう平気なのか!?!」

普段は落ち着ける立場の飯田君まで、みんなに混じって僕の心配をしている。

「うん、うん、メールで書いた通り、もう大丈夫！ さすがリカバリーガール、凄いやね！」

ちよつと疲れたけど、傷はもう治つてすっかり元気だ。それに、あの程度の怪我で済んだのはフルガントレットのお陰だったみたいだし、メリツサさんにも御礼のメールを送つておいた。壊れちゃったのは残念だけど、また送ってくれるらしい。

ああ、良かった……。いざつてときに100%を出せるのと出せないのでは、安心感が違うし。そんな事を考えていると、相澤先生がやってきた。

「うるさいぞお前ら、もうホームルームの時間……つて、緑谷か。もう良いのか?」

「はい!」

「なら大丈夫だな。よし、お前ら席に着け!」

『はいっ!』

「ヴィランとの戦いを生き延びてホツと一安心と言ったところだろうが、まだ終わつてねえ」

「戦い?」「まさか、まだヴィランが!」

「雄英体育祭が迫つてる!」

『クソ学校つばいの来たああああ!』

それからは、みんなで体育祭の話題で持ちきりだった。みんなの体育祭に掛ける思いや、麗日さんのヒーローになるための目的……色々知れた。でも、それでも、僕は負けられない。

そして、そう思ってるのは当然僕だけでは無いようで……

「うわっ、何だこりゃ」「敵情視察だろ」「もう戦いは始まってんのか！ 熱いな！」

放課後、1—Aの前には、人がズラリと取り囲んでる。正直、見に来た人たちの表情を見てると見世物にでもなったみたいだけど……見渡すと、本気の目をした人もいる。そのうちの一人と、目が合った。

「——あんた、凄い目してるな」

「僕？」

凄い目って言われたことは無いや。

「なるほど、あんたみたいのがまだ学生なのにヴィランと真っ向から勝負するんだろうな……。でも、負けたくない」

っ！ 本気で、僕を睨んできている。超えていこうとする、その目——多分、僕もしていたことが有る。

「うん、僕も負ける気は無い」「み、緑谷君!？」

麗日さんがちよつと慌ててるけど、真っ向から睨み合う。同じヒーロー科だけじゃない。彼らだって、ライバルなのだろう。

「体育祭のリザルトによっちゃ、普通科がヒーロー科に転入したり、その逆もあり得る——

「だから、俺はここに宣戦布告しに来たつもり」

「受けて立つよ」

ヴィランだけじゃない。お互い、プロに登るために戦う、ライバル。

「ようよう熱いなあ!」

と、別の人が大きな声を上げる。その制服はヒーロー科だから……B組?

「隣のB組のモンだけだよ!! ヴィランと戦ったつうから話聞こうと思ってたんだが、今駄目な感じか!」

「いや、別に大丈夫だよ? これから体育館Yに行くんだけど、そこに行きながらでもいい?」

「体育館? 放課後に何やってんだ?」

「特訓かな?」

「おお、熱いな! 是非俺もさせてくれ!」 「あ、私も!」 「俺も俺も!」

「うん、良いよ!」

そんな訳で、B組まで一緒に特訓することになった。

「いや、しかし意外だったね」

「何がです?」

色々と話しながら体育館に着き、セメントスにフィールドを作ってもらってさあ特訓を始めようかと言う時に、B組のまとめ役らしい拳藤さんが話しかけてきた。

「実はA組もプライド高い人ばかりでさ、特訓と一緒にやろうって言っても『来るんじゃない!』みたいな事言われて追い出されるかと思ってた」

「あはは……そんな事言う人は多分A組には居ないと思いますね」

「そうなんだ。B組には一人いるんだよなあ」

「そ、そんな人が……」

「うん。恥ずかしながらね……そこまで悪いやつでもないんだけど」

言い淀むつことはやっぱりちよつと問題有るんだろなあ……でも、そんなB組でも鉄哲君や骨抜君なんかも参加してくれて、普段交流が少ないA組とB組が仲良くなる切っ掛けになれるかな?

そしてもう一人、意外だったのが……。

「あれ、君は……」「っ……」

さつき、僕に宣戦布告をしてきた人。敵情視察——と言うより、羨ましそうにこちらを見ていた。

「君も訓練したいの?」

「っ、悪いかよ……。普通科は中々こういう所も使えないんだよ……」

じつと観察してみる。そこそこ鍛えては居るみたいだけど……。異形型でもないし、多分直接戦闘向けの個性でも無いんだと思う。

「何だよ……?」

「ねえ、ガジェットとかアイテムとかは持つてる? 例えばあいぞ……イレイザーヘッドの捕縛布みたいな」

「? 持つてねえよ」

そう言う彼の前で、ポーチから訓練用の玉を取り出して……シヨット! 驚いた顔をしているけど、こんなはまだまだ。指弾で弾いたり、手首の動きだけで的に当てたり、横っ飛びをしながらぶつけたり、一通り見せる。

「それが、お前の”個性” 個性は使っていないよ」 っ……!」

この光景を初めて見るB組の人たちも驚いている。特に、鱗君とかが。

「僕は14まで個性が発現しなかった……。でも、ヒーローになるのを諦めたくなって、ずっとこんな事を練習してたんだ」

「えっ!」 「マジか!」 「個性が出てたった1年であのコントロール!」

まっすぐ目を向けて、彼に言う。

「君は”個性”も有るんでしょ? なら、個性にプラスしてなにか強みを持ったほうが良いと思う」

「……………」

しばらく、驚いたような顔をした後、困った顔をしたり、考え込んだりしながらこつちを見てる。けど、最後には

「……ありがとうな。お前、名前は？」

「緑谷出久。君は？」

「心操人使。——絶対、追いついてみせるからな」

「その時は、僕はもつと先に行くよ」

「ふっ、そうか……」

ちよつとの間二人で笑いあつたけど、少しすると心操君は出ていった。また、将来の強力なライバルができちゃつたかも。

「うおーっ！ 緑谷！ やつぱりお前熱いな！ すっげー熱いツス！」 「緑谷あ！ お

前良いな！ 俺も負けねえぞ！」

うわっ!?! 夜嵐君や鉄哲君がこつちにつ!?

その後、もみくちやにされて特訓の開始が数分遅れちやうのだった。

訪問、シールド一家!

雄英体育祭までの2週間、僕らの特訓は更に進んだ。

峰田君が、僕の投擲技術を覚えようとしてきたり（「つて言っても結局投げ込みまくりじゃねーかよー！ いてええええええつ!」）尾白君と、5%フルカウルの状態でひたすら組み手をしたり（「武術家でない……のに凄いな緑谷、その動きー」）尾白君こそ、しばを使った連続攻撃は本当に変幻自在で凄いやー!」常闇君のダークシャドウを暗いところでも扱えるようにするべく、暗闇の中でずっと彼のダークシャドウと一緒に抑えたり（「すまん、緑谷……!」）「大丈夫、個性を使いこなすためにも、どんどん訓練しようよ!」）すごく有意義だった。

それに、僕以外でも、みんなそれぞれいろいろな個性の組み合わせで訓練しているのが凄く楽しそうだ。切島君と鉄哲君なんか、凄く良いライバルになりそうだ。

そんなこんなで体育祭までの時間がどんどん近づいてきて、残り1日。そんな時にオールマイイトから連絡があった。

「H A H A H A! やあ、緑谷少年、これからちよつと時間はあるかな?」

放課後、オールマイトから呼び出された。もちろん、断るはずがない。他の参加者に謝りつつ、呼び出された部屋へ行く。

「何があったんですか？ オールマイト」

「ちよつとしたサプライズでね……ほら！」

そう言うと、目の前に居たのは……デヴィットさんとメリッサさん!?

「やあ、久しぶりだねイズク君」

「イズク君、久しぶり！」

「お、お二人ともどうしてここに!？」

メリッサさんとは軽くメールとかではやり取りしてたけど、教えてもらってないから凄くびっくりした！

「雄英体育祭はオリンピックにも匹敵する注目度だと言ったろう？ I・アイランドでも学年優勝者は招待されるほどのイベントだね。メリッサが是非見てみたいと言うので招待したんだ」

「私はその付き添いさ。それに、トシの様子も気になるし」

「まあ、そんな訳でこっちは旧交を温めるのですね。もし良かったら、メリッサの案内は君がしてくれないかな？」

「えっ!? 僕がですかっ!？」

「イズク君は、私と一緒に嫌か?」

「そ、そそそそそんな事は無いですっ!?!」

お、落ち着け……前だってI・アイランドでは案内してもらったし……逆に、今度は僕がお礼をする番だ!

「僕もそんなにここに来て長いわけじゃないですけど、こちらへどうぞっ!」

「うん、宜しくね!」

部屋を出るとメリツサさんと二人……うわ、周りの視線が気になる。

「まずは、雄英の名所の一つ、食堂から。ランチラッシュって言うヒーローが作ってるんですよ」

「まあ、ヒーローが? 凄いのね!」

楽しそうに、興味深げに雄英を見て回るメリツサさん。女の人をエスコートするのなんて初めてだけど、何とかなるかな?

「いや、すまないねデイズ。いきなり来てもらって」

「本当だよ。いきなり呼ばれてスケジュールを開けるのが大変だった。一体どんな風の吹き回しだい?」

親友同士の軽口を叩くも、デヴィットの口調には常に心配する響きが混じっている。彼の目から見ても、この一年でオールマイトの体調は更に悪化しているようだった。

「……トシ、一体どうしたんだ。前よりさらに悪化しているように見える」

「……それを、今から話そうと思ってるね」

咳をしながらトウルフオームに戻ると、オールマイトはソファアに腰掛ける。ただならぬ雰囲気を感じたデヴィットも、その正面に座り対する。

「これから言うことは信じられないかも知れないが……」

「トシの言うことだ。信じるさ」

「ありがとう、ディヴ」

迷わず信頼してくれる親友。そんな親友にも今までひた隠しにしてきた事に胸が痛みつつ、一つ深呼吸する。

「もう、私には『個性』が無いんだ」

「——は？」

オールマイトの言うことは全て信じようと思っていたデヴィットだが、想定外の回答に流石に一瞬思考が停止する。だが、デヴィットの記憶の中には幾つか心当たりがあった。

「ひよつとして、オール・フォー・ワンや、それに付随する研究の……!?!」

「いや、違うんだ」

「デヴィットの推察を、ゆっくりと、しかしはつきりと否定する。

「私が持っていた個性は、オール・フォー・ワンと対となる個性。ワン・フォー・オール。これは、オール・フォー・ワンと同時代から、聖火の如く引き継がれてきた個性なんだ」
「っ——!?!」

初めて聞く情報ばかりだが、デヴィットの頭脳は衝撃を抑え、事実を知っていく。

「じゃあ、君の個性数値が急激に下がっていたのは……」

「そう。個性が消えたんじゃない。個性を、次の者に受け継がせたんだよ。それが——」
「イズク・ミドリヤ……」

身体も声も震えるデヴィットに、こくりと頷く。だが、デヴィットは足元がなくなり、ふらつくような感覚を覚える。この親友は、もうナンバーワンヒーローではいられないのだ。自分が彼のためにしてやれることも、もう無い。だが、そんなデヴィットにオールマイトは安心させるように声を掛ける。

「そう悲観しないでくれデヴィ。彼は、少しずつ私を超え始めている」

「トシを……っ?」

学生時代から、オールマイトの活躍は散々見てきた。そのオールマイト以上だとは、到底信じきれなかった。

「ワン・フォー・オールは聖火の如く引き継がれてきた、と言っただろう。この個性は、それぞれの想いと力を次へと託す。……私も、昔は“無個性”だったんだ」

「そんな、トシが……!?!」

あの、圧倒的な強さを持ったオールマイトが、もともと無個性だとは信じられなかった。

「実際、もう彼は全盛期の私ですら100%を超えなければ倒せなかったであろうヴィランを、一撃で吹き飛ばしてしまったんだ」

「なっ!?!」

驚くが、同時に納得もしてしまうデヴィット。あのオールマイトの力すら引き継いだのだ。それ位は出来て当然だろう。

「最も、反動が強すぎてメリッサのガジェットを付けていても腕が折れてしまったのが……。だが、今の状況でももう40%は出力を出せる。もう少し、もう少しなんだ……」

「何がだい、トシ?」

「もう少しで、彼は私を完全に超える。それまで、私の身体が、ワンフォーオールの残り火が持つてくれればいい。それが——お師匠様が私にそうしてくれたように、ワン・フォー・オールを持つものの宿命……」

「トシ……」

今までオールマイトが背負ってきたであろう物の重さを想像し、そして自分にも言ってくれなかったことを悲しみ、そしてもうあのオールマイトは戻ってこないのだと知って絶望し、デヴィットの胸中はぐちゃぐちゃであった。

「大丈夫だ、デイヴ」

「……トシ?」

だが、頭を抱えるデヴィットに、オールマイトは安心させるように言う。

「彼を、緑谷少年を見てやってくれ。新しい希望は、新しい希望達は確実に育っている」
「……そのために、呼んだのか?」

「ああ。私の真実を君に話すため。そして、新しい希望を見てもらうために」

オールマイトの目に有ったのは、昔と変わらぬ深い信頼。それが変わらず、デヴィットに向けられていた。その事に、オールマイトもずっと悩んでいたことを察する。

「……分かった。見させてもらおうよ、彼を」

「……ありがとう」

ほんの1年前、何でも器用にこなし、底知れぬポテンシャルを見せつけてくれたイズク。それが、今ではどれだけ成長しているのか——少しずつ、それを楽しみにしているようになっていることに、デヴィットは気がついた。

「えーと、それでこっちが技術科です」

「わあつ、技術科！ 雄英では、一体どんな物が作られてるのかしら！」

技術科に案内すると、メリッサさんは今までで一番の反応をした。やつぱり、自分も技術者だからとても気になるのだろう。あちこち、物珍しそうに研究成果を見て回るメリッサさんの後ろに居ると、突如轟音が……

「うわわわわわわわわわっ!!? そ、その人っ、どいてくださいっ!!?」

「っ!!? フルカウル！ 5%！」

ガジェットの暴走かっ!!? 何だかブースターが暴走しているようだし、それを止めて

……!

「わわわっ!!?」

落ちてきた人をキャッチ！ わわっ、お姫様抱っこになっちゃった!?

「くっつ、ありがとうございませす、おかげで助かりました！ いや、ベイビーちゃんの機嫌がちよつと悪くなつちやつて！」

「へ？ ベイビーちゃん？」

「はい！ 私のベイビーちゃんたちです！」

そう言うと、外したブースターのところまで行く女の子。でも、その先にはメリッサさんも居て……興味深げに覗いていた。

「あ、回路の……この部分が……」 「分かるのですかっ!？」

うわっ!?! 凄い早く食いついたっ!?

「えっ、うん、私も技術者だから……」 「それは凄いです! この子の特徴をすぐに掴むなんて! ささ、そっちの人もいつしよにぜひ来て下さい!」

「えっ? うわわわわっ!?!」 「きやつ!?!」

メリッサさんと二人連れ込まれたのは、メリッサさんの部屋とも又違う、秘密基地みたいな部屋。飾り気のない無骨な部屋だけど、見るだけでワクワクするような道具やガジェットが並んでいる

連れ込んだ女の子は、早速今のブースターの中身を開けて、メリッサさんと二人で色々と話し込んでいる。

「……この構造が……」 「なるほど! こう変えると……!」 「あつ、こんな材質で加工できるんだ、凄い!」 「あなたのアイデアも、とても参考になります!」

とても楽しそうだ。でも……いつたい、いつまでかかるかな? ちよつと嫌な予感がしたけど……結局その嫌な予感が間違ふことは無かつたんだ……。

三つ巴！障害物競走！

結局、あの後には二人の息がとも合つて（発目さんつて言うみたい）、僕の身体が頑丈だからつて色々なアイテムの実験台にされちゃつた……。危険なものも一杯混ぜつてたけど、メリツサさんの「発明は独りよがりなものじゃないの！ヒーローが使つてこそなんだよ！」つてお説教で、メリツサさんと共同で安全性を確保しながらの実験になつたから何とか助かつたかな？

でも、二人の息が合ひすぎて、案内はここで終わつてすつかり夜になつてしまつた。

「おいお前ら！明日は体育祭なんだしいい加減に今日は帰れ！」とパワーローダーのお言葉で3人揃つて部屋から叩き出されてしまつた。

「もう、ケチですね！」「あ、あはははは……もうこんな時間……」

発目さんは不満そうだけど、メリツサさんは申し訳なさそうにパワーローダーに何度も頭を下げてた。……もちろん僕も一緒。

「メリツサさんのお陰でベイビーたちがもつともつと可愛くなりました！これで、明日の体育祭でもつと目立てそうです！」

「あなたも体育祭に出るの？」

「はい! 出て、沢山目立って大企業に目をつけてもらおうつもりです!」

「そうなんだ、頑張つてね!」

二人はそう盛り上がったけど、発目さんもライバルだと思うと、自然と気が引き締まる。ライバル手伝つちやつたかな?

「ふふふ、緑谷さん、私も明日はあなたに負けずに目立ってみせますよ!」 「うん、望むところさ!」

クラスメイトに他のクラス、他の科……誰が来ても、負けるもんか!

そして、雄英体育祭本番当日、外では派手に花火が打ち上がっていて、外来のマスコミや一般客の人たちもたくさん来ている。外には屋台が沢山有るし、初めて体育祭の現場にいるけど本当にお祭りみたいだ。それに、僕らをスカウトしに来たり警備しに来たプロヒーローも沢山! うわ、シンリンカムイにMt.レディも居る!

「出久君の目が輝いている……」 「流石はヒーローオタク」 「緑谷君、見るのもいいがそろそろ控室に行かねば!」 「あああ、ちよつとまって! せめてサインを!」

僕の願いも虚しく、ズルズルと控室まで連れて行かれちやつた……みんな、酷いや……

控室の中では、みんながそれぞれの方法で精神統一をしている。僕も、心を沈めて――

―と。あれ、轟君がこっちに？

「……お前、凄いや奴だよな、緑谷。オールマイトに目えかけられてるのもよく分かる」

「え、う、うん……」

「だからこそ、お前には勝つ」

「へえ……」 「……」 「意外と熱いところが……」

急な轟君からの宣戦布告。でも、僕だって負けるつもりはない。

「僕だって負けるつもりはないよ。本気でトップを獲りに行く！」

「ああ。俺も、本気で行く」

轟君がライバル宣言してくるのは意外だったな……夜嵐君なんて特に驚いてみるし。あ、負けじと夜嵐君もこっちへ来た。

「緑谷！ 俺も、轟にも、お前にも負けたくない！ 最初に出会った時も、模擬戦の時も

引き分けだったけど、今度は俺が勝つ！」

「いや、僕が勝つ！」

夜嵐君からのライバル宣言。ぐつと拳を合わせ、負けないように見返す！ とつても

熱い！

「おおおお……」「めっちゃ熱い……」「男子のこういうの、かっこいい……」

今日は、みんなが仲の良いクラスメイトじゃない、ライバルだ！

「1年ステージ! 生徒の入場だ!!」

ドームの各入り口から、それぞれのクラスの生徒が入場する。だが、その中で本当に注目されているのは一握り。

『雄英体育祭!! ヒーローの卵たちがわれこそはとシノギを削る年に一度の大バトル!! どうせてめーらアレだろこいつらだろ!!? ヴィランの襲撃を受けたにもかかわらず鋼の精神で乗り越えた軌跡の新星!! ヒーロー科!! 1年!!! A組だろおお!!』

1-Aが出てくると、視線と歓声が一斉に集中する。B・C・D・E・F・G・H組はもはや完全な引き立て役だ。その事に不満を述べる者もいれば……それでも上を見上げるものも居る。

まず壇上に立つのはミッドナイトだ。相も変わらず過激な衣装と道具を持ち、目立っている。

「選手宣誓!! 1-A 緑谷出久!!」

選手宣誓は、一般入試1位の緑谷だ。ドーム中の視線が集中するが、一切の気後れすること無く、独り前へ出る。一呼吸した後、大きく息を吸い込み、大声で叫ぶ。

「選手宣誓! 僕は、ヒーロー科の入試で1位を獲りました。今日も同じです。この雄英体育祭1年の部は、僕が1位を獲ります!」

「なっ!」 「ふぎけんな!」 「生意気言うんじゃねー!」

当然出てくるブーイング。だが、それにもひるむこと無く振り返ると、挑発するような顔と声でこうさけぶ。

「なら、遠慮なくかかってこい! 僕は、一切逃げるつもりも引くつもりもない! 全力で、1位を獲りに行く!」

「うおおおおおっ!」 「上等だあ!」 「熱いぜ緑谷あ! 負けねえぞ!」 「うるせえ、1位は俺が獲る!」 「っ……!」

「(ああああああっ、青春いいわあ……!)」 ゾクゾクツ

だが、ブーイングだけでない。緑谷に触発されて、熱くなるものも多数。そんな彼らに不敵に笑い返すと、早速最初の種目の説明が始まる。

「さあ、種目はこれ! 障害物競走よ! 計1ークラスでの総当たり、4 Kmの外周を巡るレース。わが校は自由さがウリ文句! ウフフフ……コースさえ守れば何をしたら構わないわ!」

そう言うのと、位置につかせるミッドナイト。だが、既に勝負は始まっている。皆が少しでも有利な位置につこうと、押し合いへし合いだ。

そして、そんな中決意を新たにする緑谷。

「君が来たってことを、世の中に知らしめて欲しい!!」

体育祭前、オールマイトの言った言葉が頭をよぎる。

「(とりあえず宣誓で目立った。でも、実力が伴わなきやただの口だけ野郎になる)」
 シューズを確認し、最終チェック。見据えるのは、はるか向こう。

『3!2!1!スターーーーーー!』

スタート地点から入口が狭く、既に押し合いへし合い大混戦だ。だが、そこをさつさと抜けていくものが居る。

「まずは最初の篩……」「うおおおおおおおつ!」「35%!フルカウル!」

先頭を走る轟は、氷結で後続を凍らせ、夜嵐はその個性で頭上を飛んでいき、そして緑谷は選手たちの頭上を、左右に壁を蹴り飛び抜けていった。

『うおおおおおつと!いきなりA組の3人が飛び出たあ!3人共それぞれの個性を使って一気に突っ走っていく!』

実況のプレゼント・マイクも最初からクライマックスだ。隣のイレイザーヘッドは相変わらずテンション低いが淡々と実況をしている。そして最初の妨害ゾーン、入試の時の0ポイントヴィランの群れが出てくる。

「お先に失礼するッス!」

そこで突出したのはやはり夜嵐だ。空を飛べれば、地べたの敵はほぼ無視できるが、

それを想定していたのか雄英も甘くない。

「ヒヤツハー!」「ミサイルだぜー!」

「うおおおおおっ!?! そんなの有りかよっ!?!」

「有りなんだなあ、これが!」

プレゼントマイクの有り宣言により、ツツコミが入る。どうやら音声もバッチリ伝わっているようだ。

「かえって上は危険か……なら!」

上は危険と見て、地面を走りつつ衝撃波でヴィランを吹き飛ばす緑谷。だが、もちろん黙ってみてるだけではない。

「先へは行かせねえぞ!」「っ!」

高速広範囲の氷結が、緑谷の行く手を阻み、またヴィランの体勢を崩させ、緑谷の上に倒れさせる。

「うわわっ!?! 40%スマッシュ! これ、僕じゃなかったら死んでるよ!?!」

「他の奴にやるかよ!」

地べたで二人がトップ争いをしている。だが、もちろん夜嵐もただ上空で迎撃されるだけではない。

「漁夫の利だぜええっ!」

轟と緑谷が争っている横を、夜嵐が風で加速しながら駆け抜けていく。やはり、個性だけより足も使って加速したほうが速いようだ。

「ああつ!?」「てめえ!」

それにより、二人も一時争いを止め、夜嵐をおう。トップは完全に三つ巴だ。

『1—A、3人の三つ巴だあ! 妨害用のヴィランをもともしねえ!』

『うちのクラスでも飛びぬけて優秀な3人だな』

3人の戦闘により、結果的に後続の道を開くことになっているが、もう後続にかまっている余裕はない。ライバルは、横の二人だ。

『さあてあつさり突破された第1関門だが、お次はどうだ!? 第2関門、ザ・フォーール!』

奈落と石柱と縄。大がかりな綱渡りだが、これもまた3人の障害になりはしない。

轟は縄を起点に道を作り、石柱の間が狭いところは直接道をかけ、夜嵐は個性を利用した幅跳びで加速しながら渡り、そして緑谷は……

「35%! フルカウル!」

縄など関係なく、ただ石柱の間をジャンプして駆け抜けていく。

『ああ〜つと! 障害がもう障害になってないー! どうなつてんだこの3人!』

『逆に道ができたな。トップ争いもいいが、フィールドの変化による下位争いも見もの』

だぞ』

後続では、水の橋で作られた一本道を使い、熾烈な闘いが行われている。だが、やはり注目を集めるのは前だ。

『さあてあつさり突破されたが次は最終関門！ 一面地雷原!! 怒りのアフガンだ!!』
『この学校のネーミングセンスどうなってるんだ』

「っ！ 手加減なんて！」 「している！」 「余裕がない！」

轟は水を出して変わらず安全地帯を作り、夜嵐は低空飛行で浮力を稼ぐ。そして緑谷は……

「小細工じゃ勝てない！なら！ 40%……スマッシュ！」

『うおおおおおおおっ！ ここで緑谷、パンチ一発で土を吹き飛ばして地雷を全部露出させたあ！』

『もう障害物がほとんど意味無くなったぞ』

「二人共、先に行かせてもらおう！」

地面が安定しているなら、身体能力は緑谷の独壇場だ。地雷のない地面を選び、二人よりも圧倒的に速いスピードで追い抜かす。

「畜生！」 「緑谷あ！」

二人の必死の妨害も、その俊足には届かない。

『レイザーヘッドおまえのクラスすげえな!! どういう教育してんだ!』

『俺は何もしてねえよ。奴らが勝手に初日から火を付けまくった結果だ』

地雷原を超え、残りのストレートを駆け出す。もはや独壇場だ。

『さあ、トップはなんと! 選手宣誓の宣言通り! 今一番にスタジアムに帰ってきたのは……緑谷出久だああああああつ!!』

今、独走してゴールイン! 続いて、夜嵐、轟がゴールに辿り着く。そしてそれは、緑谷が一人、皆の注目を独占することを意味する。

「あの子って……確か1年前の……!」

かつて出会ったヒーローが

「やった! やったね出久!」

家で応援している母が

「……」ガリッ

悪意を貯め込むヴィランが。各所各様に、緑谷への反応を見せる。

そして、緑谷は一番見せたい相手を貴賓席より探しだし、目を合わせる。そこには、デヴィット博士とメリッサと、オールマイトだ。目を合わせると、ガッツポーズ。そしてそれにサムズアップで返すオールマイト。

「いやはや、トシ、凄いな彼は」

「うん、イズク君凄いな！」

「ああ、私の……自慢の弟子だ！」

だが、1位とは言え、まだ第1関門。体育祭は、まだまだこれからなのだ。独り悔しがる轟。そして

「緑谷あ！」「夜嵐君！」

「今回は俺の負けだ！　だが、勝負はここからだ！　次の種目じゃ、俺が勝つ！」

「ううん、負けないから！」

緑谷に、まだまだ勝負が終わってないと闘志を燃やす夜嵐。

「(うああああああああつ！　この子達凄いいいいいいいいいっ！)」

そしてゴールを果した者たちは、後続の個性をスタジアムのモニターで油断なく見据えるのだった。

大混戦の第二種目!

「ふう……」

僕たちが駆け込んだ後、他のみんなも次々とゴールしてきた。流石に、上位は大体がヒーロー科の面々だ。でも、その中に発目さんやら心操君が勝ち残っているのが見える。

「出久くん！　すごいねえ！」

「この”個性”で後れを取るとは……やはりまだまだだ……僕……俺は……！」

「麗日さん、飯田君」

どうやら、二人も無事に予選突破のようだ。ミッドナイトの言葉とともに順位が表示された後、次の種目だ。

「さーて第二種目よ!!　私はもう知ってるけど………何かしら?!?　言ってるそばから……コレよ!!」

種目は……騎馬戦!?

「騎馬戦……」 「騎馬戦……」 「個人競技じゃないけどどうやるのかしら」

皆の疑問も尤もだ。どんなルールになるんだろう。

「参加者は2く4人のチームを自由に組んで騎馬を作ってもらおうわ！ 基本は普通の騎馬戦と同じルールだけど一つ違うのが、先程の結果に従い各自にポイントが振り当てられること！ 与えられるポイントは下から5ずつ！ 42位が5P、41位が10P……と言った具合よ。そして……1位に与えられるPは、1000万!!!」

瞬間、みんなの視線が一斉に僕に向くのが分かる。

「上位のやつほど狙われちゃう——下剋上サバイバルよ!!!」

上等っ！

「上を行く者にはさらなる受難を。雄英に在籍する以上何度でも聞かされるよ。これぞPlus Ultra！ 予選通過一位の緑谷出久くん!! 持ちP1000万!!」

昔の、僕を見る見下す視線とは違う、抜いてやろうとする挑戦者たちの目。でも、オルマイトのためにも、負けていられない！

「それじゃこれより15分！ チーム決め交渉タイムスタートよ！」

『15分!!』

凄いい短い！ そして——右を見ても左を見ても避けられてるっ。夜嵐君や轟くんは僕に挑む気満々だし、他の人も1000万ポイントのリスクは高くて避け気味だしどうしよう!! せめて一人は見つけないとおっ!!

「出久君！ 組もう！」

「麗日さんっ!?!」

えっ、麗日さんが来てくれたっ?!

「大丈夫? 僕確実に狙われるけど……」

「ガン逃げできたら、出久君勝つじゃん。出久君なら、きっとできるよ!」

麗日さんからの信頼が嬉しい。

「もちろん! じゃ、一緒に組もう!」

一人目は麗日さん! このままじゃ僕が騎馬になるしか無いから、後二人はほしいところだけど……。

「あつ、いました、緑谷さん!」

「発目さん!」

次の人をキョロキョロと探していると、また相手……今度は発目さんから来てくれた。

「二位のあなたと一緒にならすぐ早く目立ちそうです! 私のドツかわいいベイビーのた

めにも、是非一緒に組んで下さい!」

「うん、分かった!」

発目さんは僕を利用するつもりだろう。だから、僕も彼女を利用させてもらおう。これも公平な取引だ! 昨日はさんざん苦勞させられたけど、それに見合う分のガジェツ

トを彼女は持っているだろう。そしてあと一人！丁度僕らの騎馬に足りない一人は—

『さア上げてけ鬨の声!! 血で血を洗う雄英の合戦が今!! 狼煙を上げる!!』

「麗日さん!!」「っはい!!」

「発目さん!!」「ふふふ!!」

「常闇くん!!」「ああ……」

「よろしくっ!!!」

緑谷チーム。合計ポイント10000325ポイント。

『3!!! 2!!! 1!!! START!』

スタートの合図と共に、早速幾つかの騎馬が緑谷の組に襲いかかる。

「実質^{1000万}その争奪戦だ!!! 緑谷！ 貫うぜー!」「はっはっは!!! 緑谷くんいったくよ—

——!!」「緑谷あ！ その鉢巻、貫うツス!!!」

ひたすらに、1000万ポイントを狙っているようだ。隣の騎馬にはめもくれない。

鉄哲、葉隠、

「いきなりの襲来とはな。……まず3組。追われし者の宿命…選択しろ緑谷!」

「とりあえず遠距離迎撃！近づかれたら逃げる!」

そう言うと、緑谷は身体に光をまとわせ、両手でデコピンの構えを取る。

「30%……デラウエアスマツシュ！ 連打！」

右と左、両方の手から繰り出されるデコピンは、それだけで衝撃波の弾丸となって、各騎馬を襲う。それも、連続で！

「うわっ!!」「きゃああっ!!」「どわああっ!!」

『おおおーっ!! 何をやっている緑谷あ!! その手から繰り出される連撃はまるで初期型のガトリング!』

『随分とわかりにくい例えを出すなあお前』

ひたすらのデコピンの連打、ただそれだけで他の騎馬は中々近寄れない。そしてその隙に……。

「もらいつ」「ああっ!! 取られたっ!!」

そこを目ざとく、B組の物間などが、奪う。

「大物ばっかり目をかけちゃダメダメ。甘いねえ、A組は」

『1000万の防御は硬い! その間に大混戦だ! さあ、どうなるどうなる?!』

緑谷組の周囲と、その回りでの大混戦だが、緑谷は自分を狙わない組の騎馬や騎手もあえて衝撃を飛ばす。ヘイトを稼いでしまいうリスクが有るがその分更に混沌とした状況を作りやすいからだ。

だが、そこまで目立てばもちろん……

「つ、氷の盾っ!」「来るぞ緑谷!」

突然現れた氷壁に、衝撃波を弾かれる緑谷。そして、その間隙を縫い、障子の巨体が突進し、地面が柔らかくなる。

「!!?!」沈んでる! 骨抜君の個性だ! 麗日さん! 兎目さん! 顔避けて!」

体勢が不利と見るや、すかさずジェットパックで飛び出す緑谷。だが、空中戦には絶好の好機となる男がいる。

「それは甘いぞ緑谷あ!」

夜嵐だ。騎馬を離れて一人、空を飛んで独壇場だが……

「それは貴様だ!」

飛んできた夜嵐の巨体を常闇のダークシャドウが弾き、更に緑谷が飛びながらデアラウエアスマツシユで迎撃する。騎乗でジェットパックを操作しているのに、隙が殆ど見えない。

「うおおおおおっ?!」

弾かれた夜嵐に、更に伸びる蛙吹の舌。危うく地面に叩き落とされそうになるが、寸前で回避する。

「ケロケロ、敵は緑谷ちゃんだけじゃないわよ、夜嵐ちゃん!」そうだった!もう油断し

ねえ!」

これで、夜嵐は迂闊に飛べなくなる。騎手が落ちれば即脱落だからだ。

「いいぞダークシャドウ。常に俺たちの死角を見張れ」「アイヨ!!」

『緑谷組、近距離・中距離・遠距離と隙がねえ!』

『いいバランスで組んであるな。あれを崩すのは相当キツイぞ』

だが、隙が無いなら作り出すのがこの競技。緑谷組が着地した瞬間、突如、電撃が広範囲に炸裂する。緑谷組毎、回りの騎馬が巻き込まれる。

「しまっ!! 電気っ!! 防げないっ!!」

電撃の光により、ダークシャドウが弱体化し、更にジェットパックまで故障し絶体絶命の緑谷組。そして、その好機をライバル達が見逃すはずもない。

「レシプロ……バーストっ!」「レツプウ!」

突撃してくる騎馬と騎手。避けられない、間に合わない。なら!

「40%……デトロイトスマッシュユ!」

『うおわあああああああつ!!』

今まで封印してきたとっておきのスマッシュユで、根こそぎ弾き飛ばした。

『おおおおおつと! 緑谷、まさかあの連撃をパンチ一発で吹き飛ばすとはあ!』

「きやあああああつ!!」「ぬぐつ!!」「うわわわわわわつ!!」

だが、これは衝撃が強すぎて、自身の騎馬へも衝撃波が伝わってしまう。ギリギリでやむなく使ったが、何度も連発できるわけではないのだ。

「みんな、ごめん!」

「気にするな、緑谷!」「ふ、ふええええ、凄い……」「ううう、私のベイビー達が……」

だが、そこまでしてリスクを払った価値は有った。

「はあ、はあ……」「くそっ!」「リスクが……高すぎる……」

大多数の騎馬に狙われながらも、守り通す緑谷の組に、多数の騎馬が狙うのに消極的になっていく。こうして、割に合わないと思わせることで、余計な横やりは防げるが――
――代わりに残ったのは……

「緑谷あ!! まだ、まだまだ! まだ終わってねえ!」「緑谷……今度こそ、頂く!」

頂点を狙う、餓狼達。

「ああ、かかつてこい!」

『おおー!』つと! これは、最初の再現か!! 因縁のライバルか!! またまた三

つ巴だあああああつ!!!』

『非合理的だな……だが、頂点を狙うには、時としてその選択をしなければならぬ場合も有る!』

奇しくも、第一競技と同じく、緑谷、夜嵐、轟の三つ巴に戦いは移行する。緑谷の超
 フィジカル・夜嵐の烈風・轟の水……この三者の決着は、とうとうつかなかった。

『TIME UP! 早速上位4チームみてみよか!』

「畜生! また届かなかったかつ!」「……………クソッ!」

そのまま、千日手で、彼らの点数は動かなかったのだ。

『二位、緑谷チーム!! 二位、夜嵐チーム!! 三位、轟チーム!! 四位、なんと、心操チー
 ムだあ!!? いつの間に逆転してたんだよ、オイオイ!!』

「(心操君……………! 凄いや!)」

クラスメイトを差し置いているの、意外な勝ち残りに、尊敬の念を抱く緑谷。

『以上4組が最終種目へ…進出だあああああああつ!!!』

勝ち残り組が喜ぶ中、一際悔しそうな表情をしているのが轟だった。

「(また、勝てなかった……………左を使わないと、勝てないのか……………!? いや、そんな事はね
 え…奴らは一種類の個性で勝ち残ってるじゃねえか……………!)」

エンデヴァーへの反発から、炎を使わないと心に決めた轟。だが、その心には、迷い
 が生じていたのだった。

トーナメント、第一回戦

第二種目終了後、ご飯を食べに行こうとしたら轟君に呼び出された。いつにも増して、迫力と威圧感が有る。

「なあ……おまえ、ひよつとしてオールマイトの隠し子か何かか？」

「……へ？」

な……なるほど……そうなるのか……！

「と、とりあえずオールマイトと親子じゃないし！ そんな関係じゃないし！」

「……でも、たしかに感じる……。おまえと、オールマイトの『何か』を。俺の親父はエインデヴァーだ。知ってるだろ」

「！」

「万年N.O. 2のヒーローだ。お前がN.O. 1ヒーローの何かを持つてるなら俺は……なおさら勝たなきゃいけないえ」

それから話されたのは、轟君の過去。エインデヴァーの過程での秘密、個性婚問題……。そして轟君の過去としてきた日々。僕とも違う、壮絶な過去。だけど、それでも……。

「僕は……ずっと助けられてきた。さっきだってそうだ……僕は、誰かに助けられてこ

ここにいます」

そう。母さんやオールマイト、クラスメイトの方々にメリツサさんや発目さんに先生たち……沢山の人の助けが有って、今の僕を形作っている。

「だからこそ、君に勝ちたい。そして、オールマイトも超えて更に先に。No. 1 になりたい！ さつき受けた宣戦布告、改めて、僕からも……僕も君に勝つ！ だから……」
全力で、かかってこい！

「っ……………」

轟君の顔が歪む。まだ、左を使わないつもりか。でも、それなら……負ける気がしない！ 本戦でもし当たるなら、轟君は果たして左を使うだろうか？ そんな事を思いつつ、午後のためにもしっかりご飯を食べなきや。

食堂に行くと、案の定すっかり混んでいた。

「おう、おせーぞ緑谷！ どうしたんだ？」

「ん、ちよつと用事があつてね」

峰田君が見つけてくれて手を振ってくれた。他のみんなはもう自分の分も受け取っているし、僕も並ばないと。今日はゲン担ぎにカツ丼を食べよう。

「おつ、アメリカのチアリーダーじゃん！」

「おおおすげえ！ 外国産は一味違うぜ！」

ランチラツシュのご飯を食べに来たチアリーダーに、上鳴君と峰田君が特に強く反応する。他のみんなも大なり小なり興味津々だし。それに、確かに色々大きい……。でも、ご飯が楽しみなのはアメリカでも同じようだ。ワイワイと、楽しそうに僕の後ろに並び始めた。もちろん会話は英語で、一応それなりには分かる。

「あつ、イズク君！ ここに居たのね！」

と、その中に知っている顔と声を見つけた。まさかの、メリツサさんだ!?

「えっ、メリツサさん、その格好は!？」

遠目に眺めるんじゃなくて、知ってる人がこの格好をしているとちよつと照れてまっすぐ見れなくなっちゃう!

「? どうしたの? この格好、似合つてな「そ、そそそそそんな事は無いです!」

そう、良かった」

につこり微笑んでくれるけど、メリツサさんはただでさえ発育が良いのに魅力的な格好をしていて破壊力が凄い!?! ぼ、僕には直視するのが辛い……!

「アメリカの友達がね、みんなを応援するって言うから私も混ぜてもらったの。それで、ここのランチはヒーローが作ってるって言ったらみんな凄く興味津々で、食べに来たのよ」

「なるほど……昨日は食べられませんでしたからね」

量も質も大満足のランチラッシユの食事なら、きつとアメリカから来たみなさんも満足してくれるだろう。

「それにしても……イズク君、見てたけどとつてもかつこよかつたよ。障害物競走でもえーと、キバセン?でも、すつごく。……それ見てたら、応援したくなつちやつて。だから、最終種目じゃしつかり応援するね?」

「あ、ありがとうございます……」

まずい、顔が赤くなつてまともに見れないつ。女の人から褒められるのつてすつごい恥ずかしい……。ちよつと顔をそらすと、他のみんながつて、あ……

「二み、緑谷あああああああああ!!!?」

上鳴君と峰田君が突進してきたあ!?

「てめえ! 一体何なんだよその外国産美女とお知り合いなんて!」

「神聖な体育祭の最中に何キヤツキヤウフフしてんだゴラア!! 人生ナメてんのか!!」

「わ、痛いやめて!」

ふ、二人の剣幕が凄いつ!? それに他の皆の顔も大なり小なり怪訝だつ!?

「てめえ、あの人と! お前は! どんな関係で!」

峰田君がメリツサさんに指差すけど無礼だから止めたほうがつ! でも釣られてメ

リッサさんの方を見ちやうと。

「お友達？」

につこり笑って手を振ってくれた。あ、どうも……。こつちも振り返して……

「どう見ても仲よさげじゃねーかこのやろおとおおおお!!」

「えっ、ちよつと違うんだ、前にちよつと知り合つて！」

「どういう偶然で日本の地味っ子が外国産美女とお友達になれんだよこんちくしょう！」

「そういう偶然は二次元の中だけで十分なんだよー」

こうして、しばらく二人にもみくちやにされた後、皆に詰問された……。ううう、せつかくのカツ丼の味がよくわからなくなつちやつたよ……。

午後からは、レクリエーションの後に最終種目、トーナメントだ。尾白君や庄田君が辞退したりなんて事はあつたけど、メンバー決めは順当に決まつた。1回戦は心操君か……気合い入れなきや。

……ところで、A組女子のみんながチアガールになつてたのは峰田君たちの陰謀らしかつた……。アメリカ産は凄かつたけど、日本産には可愛さが凄く有るなあ……。つてそうじゃなくて!? レクリエーションの間ではしっかり体を休めると。

いよいよ、第三種目の本番だ。ドームの通路が、やけに長く感じる……。

「HEY！」

「オールマイト！」

振り返ると、後ろにトゥルーフォームのオールマイトが居た。駆けつけてきてくれたようだ。

「少年、第一種目と第二種目、見事だった。開会式での一位宣言から、どちらも一位を有言実行でもぎ取り、「キミが来た！」というのを世間にアピールしてくれたね」

「はい、ありがとうございます！こうやって、自分を追い込みました！」

「うん。追い込まれたときこそ万全のポテンシャルを発揮できるのもヒーローの条件だからね」

優しい笑顔で、労ってくれるオールマイト。

「後4回。後4回勝てば、文句なくキミがNo.1だ。期待しているよ、緑谷少年」

「はい！」

僕は、救けられ、受け継ぐもの。あの人から救けられ、オールマイトから受け継いだ。だからこそ、負けるわけにはいかない——。そう思うと、会場へ歩く足に力が強く入った。

『一回戦!! 一位宣言からずつとそのとおりの活躍をしてきた、ヒーロー科緑谷出久!!』
 VS ごめんまだ目立つ活躍なし! 普通科、心操人使!!』

『ルールは簡単! 相手を場外に落とすか行動不能にする! あとは「まいった」とか言わせても勝ちのガチンコだ!! 怪我上等!! こちとら我らがリカバリーガールが待機してつから!! 道徳倫理は一旦捨て置け!! だがまあもちろん命に関わるよーなのはクソだぜ!! アウト! ヒーローは、ヴィランを捕まえるために拳を振るうのだ!』

「まいった」……か。お前は絶対に言わないんだろうな、緑谷。だけど、俺だって負けたくない。強く思う”将来”があるならなりふり構ってちやダメなんだ……」

その言葉に、頷く緑谷。

『そんじや早速始めようか!!』

「あの猿はプライドがどうか言ってたけど『レディイイイイ!』 STAR!』
 「チャンスをドブに捨てるなんて馬鹿だとは思わないか?」

明らかな挑発。だが、緑谷には分かる。これもなりふりかまっていられない男の、必死の作戦だと言うことが。だから、無言でファイティングポーズを取る。だが、フルカウルは纏われない。完全な生身のままで、心操に近づく。

「っ! ナメられたもんだな緑谷あ!」個性すら使わねえなんて、そこまで、そこま

で俺は弱いかっ!？」

何とかして口を開かせようとする心操。だが、無情にも緑谷は近寄ると、フェイントを入れローキックを叩き込む。

「っ!？」

フェイントに引っかけかり、対応できない心操はそのままローキックをくらい、体勢を崩す。そこへ、更にワンツーからの背負い投げ。派手な個性だけでない、確かな技術が心操を襲う。

「(馬鹿に、してるわけでもない。こいつは……!)」

立ち上がる心操に向け、また油断なく拳を構える緑谷。心操の呼吸が整うと、また向かっていく。今度は蹴り技主体に。右と見せかけて上、左と見せかけてやっぱり左からの回し蹴り。心操の間があるところを狙い、身体に分からせていく。

「(俺を、導いてやがる……!)」

思えば、初めて出会った時も、無個性でできることを教えてくれた。そして、今も。まるで無個性でも、ここまで凄いことができるんだぞと教えてくれているようだった。

初めて、心操が蹴りを止めた。そこから、ストレートで反撃。それを顔面にくらい、よろける緑谷。

『おおーっ!?!?!どうした緑谷、個性を全く使わない!?!』

『……馬鹿野郎、非合理的だ。……だがまあ、嫌いじゃない』

緑谷に導かれるまま、隙を消し、構えを矯正され、どんどん動きが良くなっていく心操。ダメージを受けながら、緑谷は、特訓をしていたのだ。そしてそのまま、二人の戦いは泥臭い格闘戦へ移行する。何も言わず、殴り、蹴り、投げ、お互いボロボロになりつつも、ひたすらに戦う。

「あああああああつ!? 青臭くて、泥臭くて、良いいいいいつ!」

初めは“個性”を使わないことに、ブーイングすら出てきた会場では有ったが、今では鳴りを潜め歓声が上がっている。男と男のタイマン。その熱さに、みんなが虜になっていた。

「お、おとおおとおおおっ!」

だが、それにも終わりが訪れる。同じく体を鍛えては居たが、その強度の差が出た。徐々に身体が鈍くなっていく心操。だが、痛みと疲労が蓄積していく中、腫れ上がった顔はそれでも笑顔だった。

「(ありがとうよ、緑谷!)」

最後の勝負をかけるために、渾身の右ストレート。だが

「うおおおおおおおおっ!」

それに合わせた渾身のクロスカウンターが、心操の顔面に突き刺さった。吹き飛び、

倒れ伏す心操。

「…勝負有り！ 勝者、緑谷出久！」

『うおおおおおおおおおつ！』

とたん、スタジアムから上がる大歓声。

『二回戦進出!! 緑谷出久——!! I Y A H A Y A ! 初戦はまさかの泥臭い殴り合い

！ だがしかし、熱い、熱いぜええええええつ!!』

『……まったく、バカばかりだな』

『そういう事言うなよイレイザー！ 両者の健闘をたたえてクラップユアハンズ!!』

そう言うまでもなく、スタジアムは歓声と拍手に包まれていた。

「……ありがとうな、緑谷」

「どういたしまして。でも、君もすごい根性だったよ、心操君」

倒れてる心操に手を伸ばして起こす緑谷。お互いの顔は腫れ上がっているが、それでも笑顔だ。

「……俺も、絶対ヒーローになる。そして、お前を超えたい」

「ダメだよ、No. 1は僕がなるんだ」

「オールマイトすら超える気なんだな。……ははっ、凄いやつだよ、本当に」

そう言うのと、ボロボロの体を引きずり通路へと戻っていく。そして、そんな彼を迎え

てくれたのは、混じりけのない称賛の声だった。

「かつこよかったぞ心操!」「正直びびったよ!熱かったな!」「俺ら普通科の星だな!」「障害物競走一位の奴とよくあんなに殴り合えたもんだ!」

ざわめきの中、心操に聞こえるのは称賛の声。それは、ヒーローたちからでさえも。
「……………」

思わず涙ぐむ目を押さえ、言葉の代わりに頭を下げるとまた歩き出す。次は。次こそは、負けないように。

「緑谷あ! 負けるなよ!」

「……………」

と、最後に返事をした緑谷にかかったのは洗脳。ちよつとしたお返しというわけだ。

「フツッ構えるんだけどな。俺と話す人は。これからも、油断するなよ?緑谷」

そう言うのと、緑谷への洗脳が解ける。

「みつともない負け方はしないでくれ。……後、あんまり無茶もすんなよ」

「(心操君……) うんっ!……………」

強いのに、どこか抜けてる。そんな緑谷に笑いつつ、心操は去っていった。

轟焦凍：オリジン

「全く、随分と腫れ上がったもんだね」

「あ、あはは……」

リカバリーガールに治癒をされながら、小言を言われるかと思っただけど、笑って来ていたしそれは貰わなくて済みそうだ。

「心操少年は嬉しそうだったね……。彼もこれからどんどん伸びていくだろう」

「はい！ また一人、強力なライバルができると思います！」

「……全く、オールマイトが弟子をとって教師になると聞いた時はどうなるかと思っただけど、弟子はちゃんと育っているようだね。……あんまりあいつのお陰とも思えないけど」

「そ、そんな事ないですよ!?! 今の僕があるのはオールマイトのお陰ですし!?!」

オ、オールマイトにまでダメ出しできるリカバリーガールは凄いなほんと。

「さて、治癒は終わったよ。さ、とつとつと次の試合を見てきな」

「は、はい、ありがとうございます！」

疲れたけど、痛みはすっかり引いた！ これで、もう次は大丈夫だ！

「おつ、おつかれ出久君〜!」「緑谷君、もう大丈夫かい!?」「おつす緑谷!また熱かったなあ!」

A組の席に戻ると、もう次の試合が始まるところだった。最初の試合は瀬呂君と轟君だ。皆の予想では轟君有利、僕もそう思っていたけど試合が始まると不意打ちと早業の速攻で、瀬呂君は最善の選択をしたと思う。だけど、轟君はその上を行った。

「悪いな」

途端、フィールドを凍らせ、その氷はドームすらも超えて、僕らの目の前を通る超巨大な氷壁を作り出した。こ、これが轟君の本気……!

「や、やべえ……」「これがガチンコ戦闘のあいつの実力……」「轟い……」
横にいる皆もびっくりだ。

「や……やりすぎだろ……」

瀬呂君の眩きも尤もだ。

「どーんまい」「どーんまい」「どーんまい」

自然と、会場からも「どーんまい」コールが湧き起こる。正直、これは仕方がない……けど。

自身の出した氷を、左手で溶かしていく轟君の姿が、酷く悲しく見える。……どうに

か、しなきや。

その後、塩崎さんと上鳴君の試合は塩崎さんの速攻で決まり。飯田君と発目さんの試合は、発目さんがサポートアイテムの効果をも日本中に見せつけてから降参。……発目さん、遅しいなあ……。

芦戸さんと青山君は、青山くんのサポートアイテムを故障させてからのアッパーカットで芦戸さんの勝ち。常闇君と八百万さんの試合は、常闇くんが圧倒していた。切島君と鉄哲君は、お互い殴り合いの千日手で、とうとう引き分けからの腕相撲勝負に。そして最後。僕のアドバイスを断り、独り戦うことを選んだ麗日さんは……やはり、みんなの予想通り夜嵐君に圧倒された。

様子を見に行くと、気丈に振る舞っていたけどやっぱり震えていて……下手な慰めも出来なかった。これが、勝負の世界なんだ。

そして、いよいよ2回戦、轟君との勝負だ。この通路が、凄く長く感じr「おっ」

「エ、エンデヴァーっ!？」

「おオ、いたいた」

「エンデヴァー……何でこんな所に……」

その体格。近くで見ると凄い威圧感だ……。

「君の活躍を見させてもらった。素晴らしい」個性」と判断力だね。指で弾くだけでアレ程の風圧、パンチ一つで巻き起こる暴風、そしてその時々を使い分ける判断力……まるで、小さな“オールマイト”だ」

っ!?

「な、何をっ……!? 僕、もう行かないと……!」

知っているのか!? 知らないのか!? とりあえず、この人にだけは悟られちゃ……!

「ウチの焦凍には、オールマイトを超える義務がある。だが、本気の君には勝てるかどうかは怪しい。だからこそ、”左”を使わざるをえない程に追い込まれるはずだ」

っ! この人は……それを期待して!

「是非とも、ウチの焦凍を覚醒させてくれたまえ」

……これが、轟君の毎日受けてきた圧力……決意の根源……。

「いいたいのはそれだけだ。直前に失礼した」

「……僕は、オールマイトじゃありません……」

「そんなものは当たり前」当たり前のことですよ。轟君も、あなたじゃない……!」!

「そして、僕は……あなたも超えて、オールマイトも超えて、No. 1ヒーローになる

……!」

!!!」

『今回の体育祭両者、三つ巴の内の二人!! まさしく両雄並び立ち今!! 緑谷 VS 轟!! START!!』

「っ!!」 「40%! ジョージアスマッシュユ!」

開始早々、轟は全力で氷を出し、また緑谷は威力の強い蹴りを、直接氷に叩き込み、衝撃波で諸共破壊する。

『おおおおおっ!! 相殺されたあっ!! 今体育祭、何度も見た光景だあっ!』

『このままじゃ千日手だな』

「っ!!」 「30%……バージニアスマッシュユ!!」

今度は規模を小さくし、スピードの乗った氷が飛んでくるが、次は緑谷は威力を落とすし、ワンツで弾き飛ばす。お互い消耗戦のようだが、その消耗スピードには差がある。緑谷が四肢を、指まで使い疲労を分散させられ、また回復も望めるのに対し轟はただ消耗していくだけだからだ。故に、緑谷は焦らない。

「デラウエアラッシュユ!」

騎馬戦でも見せた、両手のデコピン——デラウエアスマッシュユの連打だ。

「っ~~~~っ!」

氷壁を出して防ぐが、すぐに割られる。一発の威力は弱くとも、同じ箇所到的確に当

てられれば砕けてしまう。

『お互い遠距離戦に終止している——!! 見た目派手だが進展がなああああいつ!!』
『よく見ろ。進展有るだろ』

少しずつ、轟の動きが鈍ってきた。冷気は、轟の動きも制限する諸刃の剣だ。少しずつ、緑谷の攻撃に対し反応が鈍ってくる。

「震えてるよ、轟君」

「っ！ うるせえっ！」

鈍っているのは自分でもわかっている。故に、短期決着をつけようと焦って大きな氷壁を出す、また蹴りで壊され、防ぎきれなかった衝撃でフィールド端まで弾き飛ばされる。ギリギリ、また氷を出して踏みとどまるがこのままではただ負けるだけだ。

「個性」だつて身体機能の一つだ。君自身、冷気に耐えられる限度があるんだろう？
で、それつて左側の熱を使えば解決できるものなんじゃないのか……？」

冷静に指摘する緑谷。少なくとも、自分よりはるかに消耗していないように見える。
「皆、本気でやってる！ 勝つて……目標に近づくために……っ！ 一番になるために！」

半分の力で勝つ!? まだ僕は君に、傷一つ、ろくに疲れさせられてすらいないぞ！
本気じゃない、！ 全力でかかって来い!!」

緑谷の、おせっかいな叫び。だが、まだそれを轟は受け止めきれない。

「(いいのよ、おまえは——……)」 いつの間にか忘れた言葉。

「……………何のつもりだ。全力……? クソ親父に金でも握らされたか……?」

寒さに震えながら、緑谷に突撃する轟。だが、近距離戦では更に分が悪い。右足が地面から離れた瞬間、突進し腹に一発、殴りつける。

『モロだあ——! 生々しいの入ったあ!!』

「やっぱり、緑谷すげえ……」「轟も強いが、問題になつてねえ……」

周囲の音が聞こえる。自分ではなく、皆が緑谷を見ている。やぶれかぶれの氷も、また軽く避けられ、デラウエアスマツシユのカウンターを食らう。

「がはっ!!」

いいのを貰い、寒さに震え、かなり消耗してしまった。

「君の想いは、その程度か!」

「何をっ……!?! 何も知らねえくせに……!」

「確かに知らないけど! 君も、救いたい! 囚われている、君を!」

「っ!?! 余計なお世話「余計なお世話は、ヒーローの本質だ!」」

更に一発、蹴りの衝撃波で吹き飛ばされる轟。何とか氷で踏みとどまったが、もう寒さでまともに動けない。

「なりたいんだ! あの日、救けられた! 笑つて僕たちを導いてくれる! 最高の、

カッコイイヒーローに！ なりたいんだ！

「焦凍……」 脳裏に響く、母の言葉。

「だから全力で！ やってんだ！ 皆！ 君の境遇も君の決心も、僕なんか計り知れるもんじゃない……でも……！ それでも！ 全力を出せるのに出さないなんて、それは間違ってる！」

「緑谷……」

観客席、夜風も呆然とそれを見ていた。入学試験の時、嫌な目をしていた。エンデヴァーと同じく。だから嫌いになった。でも、自分はただそこで終わってしまった。でも、あいつは、緑谷は――

「うるせえ！」

反射的に否定する。心の中はぐちゃぐちゃだ。

「親父を――……」 君の！ カじやないか!!

緑谷の言葉に、過去がフラッシュバックする。母さんがまだ家に居た頃。優しい言葉をかけてくれていた――。「いいのよ、おまえは。血に囚われることなんか無い。なりたい自分に、なっているんだよ」 いつの間にか忘れてしまっていた、言葉。

瞬間、辺りが熱気で沸騰する。

『これは——……!!?』

大量の蒸気の中、ゆっくりと立ち上がる。震えはもう止まっていた。

「勝ちてえくせに……ちくしょう……敵に塩送るなんて、どつちがふざけてるって話だ……」

ゆらりと立ち上がる、身に纏うは炎と、氷。

「俺だって、ヒーローに……」

「……上等っ!」

涙が溢れるも、笑みも止まらない。父親を忘れて、全てから解放されて。見るのは、目の前の唯一人。最高のライバル 緑谷出久

「焦凍オオオオ!!!」

そして、喜ぶ者。エンデヴァー。やつと、やつと自慢の息子が炎を使うようになった。その事に、歓喜が止まらない。

「やつと己を受け入れたか!! そうだ!! いいぞ!! これからお前の始まり!! 俺の血を以て俺を超えて行き……俺の野望をお前が果たせ!!」

「エンデヴァー……」

そして、それを見やるオールマイト。

「……そうか、君も、託せる相手が居たんだね」

「トシ……」

貴賓席の中、デヴィットと一緒に見ているオールマイトの心中もまた、複雑だ。

「凄いな、彼は」

「ああ、自慢の弟子だ」

戦いの中、ライバルたちでさえも救おうとする。そして、本気を出し、頂点を目指す。その眩しさに、その輝きに、デヴィットは確かにオールマイトと同じものを感じていた。

「凄……」

「何笑ってんだよ。もう、負けねえぞ俺は」

「僕だって、同じさ！」

笑い合う二人、そして、思い切り構える。

「ちよつと、コレ以上は持たなそうだ……！」 セメントスが、フィールドの中央に防壁を張る。だが、そんなもの、もう二人は物ともしない。

お互いが、ありつたけを、全力で。

「50%……ジョージア……スマアアアアアアアアアアアアアアアアッシュー！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ！」

そしてぶつかかる2つの力。轟音——瓦礫——衝撃波——すべてを吹き飛ばすような嵐の後、蒸気が上がる。

『うおおおおおつと、どうなった、どうなった!?何も見えないぞ!』

審判も吹き飛ばされ、様子が見えない。だが、徐々に晴れていく蒸気の中、ギリギリ、フィールドに残っていたのは——

「轟くん、場外——緑谷君は、ギリギリ、フィールドの中に」

見れば、セメントの中に両腕を突き刺し、ギリギリ踏みとどまっていた。

「緑谷くん——……三回戦進出!!!」

とたん、爆発する大歓声。

「うおおおおおつ！ すげええよ二人共!」「エンデヴァーの息子はさすがだけど、緑谷は本当になんなんだあ!？」

万雷の拍手が、二人に降り注ぐ。そんな中、緑谷はセメントから腕を引き抜き、ゆっくり立ち上がると轟の方へと歩いていく。

「……いい勝負だったよ」「……ああ」

手を伸ばす緑谷と、その手を取る轟。瞬間フラッシュが焚かれ、隣ではミッドナイト

が悶える。

「その、なんだ……緑谷」

「えっと、何？」

頬をかきつつ、言い淀む轟。だが、少しすると

「その、ありがとな」

素直に、お礼が出た。

「どういたしまして！」

お節いなやつだった。全力で、ぶつかってきて、暑苦しくて。でも——本当に、凄いやつだった。貴賓席へとサムズアップしている緑谷を見て、そう思う。そして、だからこそ……

「次は、負けねえぞ」「僕だって！」

心の底から、勝ちたいと思った。

夜嵐イナサ：オリジン

緑谷の試合が終わった後も、順調に進行していた。

『おおっと、夜嵐！ 上空から吹き飛ばしを狙うも切島が全く吹き飛ばない——！！』

『緑谷と一緒にセメントに腕を突き刺してるな』

『どうした夜嵐い！ 上に居ちやおれは吹き飛ばせねえぞ！』

『そうらしいなあ！ なら、殴り合うぜえええええええええ！』

遠距離戦が出来ないと見るや、夜嵐は地上に降りて接近戦を挑む。殴り合いは切島に分がありそうだが、夜嵐には突風での加速が有った。そして何より大きいのが……。

「うらあ！」「っ！くそっ！」

体格の差である。切島も決して体格は小さくないのだが、兎に角夜嵐のガタイがいいのだ。殴り合いではどうしてもクリーンヒットの数は夜嵐が多くなる。だが、クリーンヒットしても、切島の硬い体には中々攻撃が通らない。

「っ！ 当たらねえ!?」「硬え！」

そして、殴り蹴る夜嵐の四肢も、硬い身体を殴ることでダメージが蓄積していく。

「はははっ！ 殴りじゃ絶対に倒れねえぞ俺は！」「らしいなあ!! 熱いぜ切島あ！」

殴り合いでは、埒が明かない。そう判断した夜嵐は、捨て身の策に出る。切島に突っ込んだのだ。だが、それに合わせてカウンターが腹に突き刺さる。

「入った……!」

「一発くらい良いのは……くれてやるっ!」

だが、夜嵐は身体がよろけつつも、そのまま腕にしがみついて、烈風で自分ごと、切島を外に押し出す。

「うわ、やべえ!」

一瞬で意図を察する切島だったが、やはり近距離でのみ合いはタツパが大きいほうが有利だった。もみくちゃになりながら、二人共場外に。だが、先に落ちたのは切島の方だった。

「判定の結果、勝者、夜嵐!!」

『勝つたのは夜嵐!! だが、負けた切島もいい線行つてたぜ! 何より熱い熱い熱い熱い熱い!!』

プレゼントマイクの実況に合わせ、スタジアムが湧き、拍手が二人に降り注ぐ。

「いい勝負だったぜ!」 「おう、お互いにな!」

これもまた、倒れた切島を夜嵐が引き起こす、熱い光景だ。そこかしこでこんな光景が起きるので、ミッドナイトの身体は喜びで満ち溢れていてとてもお茶の間には放映で

きない有様だ。

そして、次は準決勝。

「緑谷君……勝たせてもらおうぞ！」

「……うんっ！」

『準決！ サクサク行くぜ！ ヒーロー家出身、飯田天哉 VS 突然現れた彗星、緑谷出久!! START!』

スタートと同時に、エンジンを吹かせ緑谷に突撃する飯田。迎撃しようとする緑谷を、レシプロバーストで狙う。

「速いっ！ でも、その動きは予測できるっ！」

かつて見た、あの人のように。相手の能力から、できる行動を予測し、先読みする。横、縦の動きを躲すと、デラウエアスマッシュで反撃に出る。遠距離攻撃だが、指を弾くだけでできるこの攻撃は、接近戦でも相当に有効である。

「くっ、がはっ!？」

空中へと吹き飛ばされ、何とか体勢をエンジンで立て直すも、そこにさらに追撃が

……

「デラウエア・ショットガン！」

10本の指を同時に開くようにして、精密さを犠牲に面で攻撃する。空中では為す術もなく、そのまま場外へと弾き出される飯田。

「勝負有り！ 勝者、緑谷!! 決勝進出！」

『勝者は緑谷出久！ オープニングで一位を取ると言った男は、この時点で既に暫定3位！ さあ、このまま優勝へと駆け上がれるのか!？』

「くっ、届かなかったか……！ 兄さんっ……」

「飯田君……」

友達の、悔しそうな顔に手を伸ばせない緑谷。

「……………ありがとう、緑谷君。いい勝負だった……」

「……………うん！」

それでも、委員長として自分を律し頭を下げる飯田に、緑谷は最大限の敬意を払うのだった。

そしてもう一方、常闇と夜風の試合は千日手の様相を呈していた。ダークシャドウの防御を剥がすのは夜嵐でも厳しいが、飛んでいる夜嵐への攻撃手段もまた常闇は乏しい。

そんな均衡を破ったのは、夜嵐の新技だった。

「（緑谷は、指や腕や足の動きで衝撃波を打ち分けてる……！なら、似たような事は俺もできるはずだ……！）」

風の動きを収束し、収束し……一点へと集中する。

「雄風!!」

狭い範囲に収束された風、それは多大な衝撃となつて、ダークシャドウに吹き荒ぶ。ダークシャドウで防御するも、緑谷と違い長い長い衝撃波に、とうとう耐えきれず吹き飛ばされる。

「っ?!」

「常闇、場外！ よつて、決勝進出は、夜嵐!!」

「うっしやああああああああああ!!」

「くっ、哮き暴風に破れたかっ……!!」

降りてきてガッツポーズをする夜嵐に、悔しがる常闇。ここでも明暗が、はつきりと別れた。

「（大空を飛翔する敵には無力……！ 方策を探らねば……！）」
だが、敗れた者も、敗れたままで終わるつもりは一切なかった。

そして、とうとう決勝戦だ。

「緑谷、お前本当にすごいよ」

「夜嵐君だつて「いや、違う。個性とか、戦闘力とか、そういうんじゃない、」在り方」って言うか心構えって奴がよ」

「在り方?」

「ああ。実は推薦入試ん時、轟と出会つてたんだよ。その時、いい勝負が出来て良いライバルになれると思つたんだけど、返されたのは、エンデヴァーと同じ、こつちを何も見てない目だつた。……それであいつのことが大嫌いになつちまつたんだけどよ。お前は、それでも真つ向からぶち当たつて、お節介焼いて、あいつの本気の本気を出させちまつた」

深呼吸すると、緑谷の目を見る。

「お前はいい友達だと思つてるし、出会つた時から熱いやつだと思つてる。——そして、今は本当にすごい奴だと思つてる。だからこそ——」

瞳に映るは、緑谷の身体。燃えるのは熱い意志。

「お前に、勝ちたい。お前みたいにお節介で熱いヒーローになって、そしてお前を超えたい! 初めてだ、こんな気持になつたのは!」

「僕もだよ。君に勝ちたい。君に勝つて、一番になりたい!」

「おう、負けねえぞ!」

「僕だって!」

そうやって、拳を合わせてから、離れる二人。

『さあ、お互い拳を合わせたところでいよいよスタートだ! 片や、推薦入試1位、夜嵐! 片や、一般入試ぶつちぎりの一位、緑谷! 奇しくも言うのか、必然と言うのか!?! とんでもない対決だぜえええええつ!』

『泣いても笑つてもこれで最後だ!!! 3! 2! 1! S T A R T!!!』

「うおおおおおおおつ!!!」

スタートと同時に、お互いが個性を使い暴風をぶつけ合う。あまりの風に、緑谷は足をセメントの中に埋め、夜嵐は個性で必死で宙に浮く。だが、夜嵐は先程考案した技がある。

「行くぞ緑谷あ! 何処まで耐えられるっ!」

収束した風は、長期間緑谷を晒し続ける。だが、緑谷も負けていない。

「20%! ラアアアアアッシュ!!!」

あえてパーセンテージを落とし、地に足をめり込ませ、ひたすらラッシュで対抗する。『うおおおおおつ!! とんでもない暴風圏だああああああつ!! 観客の皆さん、物を飛ばされないように気をつけろっ!』

しかし、このままでは勝負がつかないのは自明の理。そして、緑谷は守りに入るつも

りはない。夜嵐に疲れが見え、少し風が弱まった辺りで足を引き抜き、力を貯め始める。「つ、来るか、緑谷あ!」

本来なら真つ向勝負がしたい。しかし、目的は勝つことだ。だからこそ、避ける決心をする夜嵐。

「いくよ、夜嵐君! 30%……フルカウル!」

風の切れ目を狙い、勢いよく飛び出す緑谷。そして、思い切り横殴りの風を自分にぶつけ、すんでの所で避ける夜嵐。

「貰った、緑谷あ……!」 「それはこっちの……!」

だが、避けたと思った時、緑谷は体勢を変えていた。身体を夜嵐に向け、更に力をチャージする。

「セリフだあああつ!」

足に50%の力を込め、空中を蹴り、方向転換。全力で、体の全てをぶつけに行く。

「!!?」

とつさのことに、対応しきれない夜嵐。そのまま、体ごとの体当たりを、緑谷から受け地に落ちる。

「夜嵐君の先に場外!! よって——緑谷君の勝ち!!」

『以上ですべての競技が終了!! 今年度雄英体育祭一年優勝は……A組、緑谷出久!!!!』

「勝った……勝ったあああああああつー！」

「つ、緑谷……やっぱ、お前つて………すげえわ………」

仰向けになりながら、乗っかっている緑谷に対し呟く。その評定は、悔しそうで、涙すら浮かんで。でも、

「いや、本当にすげえやつだわお前は！」

すぐにまた暑苦しい笑顔になり、跳ね起きて逆に緑谷に手を伸ばす。

「うん、ありがとう！ 君も、凄く強かった！」

その手をがっしり取つて、起き上がる。そして、響くのは今日一番の歓声。

「凄かったぞ二人共——」「緑谷、すげえ………」」「是非うちのサイドキックに………」」「おい、抜け駆けはすんなよ!」

緑谷へふりかかるのは、頂点を取ったものこそが感じられる、栄光、注目、人気。

「(そうか、これが)」

追われる時、感じていたのはプレッシャーだった。しかし、No. 1に訪れるのはそれだけではない。

「(これが、一位の栄光!)」

普段、オールマイトが浴びている栄光の1/100にも満たないだろう。しかし、今の緑谷は、初めて1位で有ることの素晴らしさを、肌で感じていた。

手を上げ、回りに手を振ると、応えてくれる。こんなに気持ちのいいことも、初めてだった。そして、貴賓席を見る。そこでは、オールマイトとデヴィットと一緒にサムズアップをして、こちらを見ていた。家では、母親がこの姿を見て号泣していた。何処かのヴィランの基地では、新たな標的を、品定めしていた。

この、注目こそが一位の特権なのだ。

「それではこれより!! 表彰式に移ります!!」

3位には常闇、2位には夜嵐、そして1位には緑谷が立つ。飯田は、諸事情により早退となった。その事に、一時、みんなが無事を祈る。

「メダル授与よ!! 今年メダルを贈呈するのはもちろんこの人!!」

「私が! メダルを持って「我らがヒーロー! オールマイトオ!!」

「(かぶった)」「(カブったな)」「(かぶっちゃった……)」

と、そんなアクシデントも有ったが、順調にメダルが渡されていく。

「常闇少年おめでとう! 強いな君は!」

「もったいなきお言葉!」

3位の常闇に。

「夜嵐少年、おめでとう。最初から最後まで、素晴らしい勝負を見せてくれたね」

「うおおおおおおつ！ オールマイトにかけてもらえて感激ツス！」

2位の夜嵐に。そしてー

「緑谷少年、おめでどう」

万感の思いを込めて、緑谷にメダルを掛けるオールマイト。

「二位を取る宣言、見事に達成したね」

「はい！」

他の二人と同様に……しかし、心中はそれ以上に優しく、緑谷を抱きしめるオールマイト。緑谷は、思わず涙ぐむ。

「サア!! 今回は彼らだった!! しかし皆さん! この場の誰にもここに立つ可能性は有った! 御覧頂いたとおりだ!! 競い! 高め合い! 更に先へと昇つていくその姿!! 次代のヒーローは確実にその芽を伸ばしている!! てな感じで最後に一言!! 皆さんご唱和下さい!! セーの お疲れ様でした!!!」

「そこはプルス・ウルトラでしょオールマイト!!」

よりによって最後に外してしまい、ブーイングを受けるオールマイトであった。

誰よりも輝くように

表彰式も終わり、みんなにもみくちやにされながらの打ち上げも終わって、ようやく一息。すると、どつと疲れが出てきた。色々と有ったけど……宣言通り1位を取った！
そう思うと、凄まじい達成感と心地良いだるさが身体にやってくる。

この僕が、雄英体育祭で1位。無個性だった僕が。オールマイトの期待に応えられて……ふと目についたソファアに座ると、色々とごちゃまぜな気持ち眠気に流されて、だんだん、眠く――

P i P i P i ! P i P i P i !

うわっ!?! この着信音はオールマイトからっ!?! 慌てて跳ね起きてメールを見ると、
貴賓室に来て欲しいって内容が。何があつたんだらう……? と、兎に角急がなきやつ
!?

慌てて走って、息を切らして貴賓室へ。

「お、遅くなりましたっ!」

そこには、マッスルフォームのオールマイトとデヴィットさん、そしてメリツサさんが居た。

「おやおや少年、疲れた身体なんだからそこまで急ぐこともなかったろうに」

オールマイトが苦笑しているけど、あこがれの人に呼ばれたら大体そうなると思うんだ。

「まあ、仕方ないさトシ。それにしても、イズク君、今日は本当に見事だった……おめでとう」

「ええ、イズク君は本当に凄かったわ！ 熱くて！ とつても輝いていて！」

メリツサさんが近寄ってきて、手を取られて……つてうわわわわっ!? ち、近い、近いっ!?

「今日、ヒーロー科のみんなはガジェットを使えなかったけど、思ったの。あなたや、ヒーローを目指すみんなに私の作ったガジェットを使ってもらえたら、どんなにたくさん人を助けてもらえるんだろうって。発目さんが、あんなに頑張っていたんだもの。私も、何かしたくなっちゃって！」

「メ、メリツサさん……」

夢を燃やす、熱い想い。それは僕にも覚えがある。そして、それを語るメリツサさんはとても綺麗で——ってマズい、顔が赤いつ!? そ、それにデヴィットさんの顔がなんだか怖くなってる!?

「——はっはっは。今日の話は、メリツサにもいい刺激になったようだね。……さて、

その事もあつて少しイズク君と話をしたいんだが、メリツサ、ちよつと席を外してくれるかい？」

「え？ う、うん、分かった……じゃちよつとお友達のところ行つてくるね！」

そういうと、パタパタと貴賓室から出ていくメリツサさん。すると、オールマイトがマツスルフォームを解く。今日はほとんどトウルーフォームでいたとはいえ、やっぱり体の負担を減らすに越したことは無いだろう。

「さて、少年。改めて優勝おめでとう。見事、世界に「キミが来た！」ということをしめてくれたね」

「は、はいー！」

もちろんだ。受け継いだ個性にふさわしいと示すため、目指す場所に最短距離で突っ走るため、掴み取つたんだ。それが、凄く誇らしい。

「さて、今日デイヴを呼んだのは……メリツサが来たがったのももちろんのだが、本命はそつちじゃない。君の事を、直に見てもらおうと思つてね」

「僕の、事を……？」

「ああ。デイヴには、私の秘密を話した。もちろん、ワン・フォー・オールの事も」

「えっ!?! そ、それって……!?!」

「ああ。つまり、君が私の後継者にふさわしいところを、ぜひ見てもらいたかつたんだ」

「デヴィンさんを見ると、やさしくこくりと頷いてもらった。」

「イズク君、君は本当に素晴らしかった。個性の使いこなしは言うに及ばず、判断力、そしてライバルも救おうとする熱さ。——昔のトシを思い出してしまったよ」

「すこし、涙ぐむデヴィンさん。」

「もうすぐ、トシはオールマイト^{ヒーロー}では居られなくなる。だが、その後——少し時間がかかってもいい。是非、オールマイトを継いで超えてくれ。そのためなら、僕の頭脳を君の為に使おう」

「っ！ 世界最高峰の頭脳の、デヴィットさんの力を借りることができると……！」

「ただ、その役目はメリツサもしたいようだけだね。——トシの様なヒーローの手助けをするのが、メリツサの夢なんだ。是非、その夢の手伝いもお願いできないかな？」

「はい、勿論です！ メリツサさんのフルガントレットには助けられましたから！」

「迷うことはない。メリツサさんだって、誰かを救う立派なヒーローなんだから！」

「良かった……。しかし、あのフルガントレットはトシの100%にも3回は耐えられないはずなんだが、まさか一発で壊れてしまうとは。——これは、大幅な改良が必要のようだね」

「そういうデヴィットさんの表情はワクワクしていた。そうか、デヴィットさんはこういうのが大好きな技術者なんだ。」

「——是非、お願いします！ オールマイトを狙ってくるヴィランに対抗するためにも！」

「ああ、早速I・アイランドに帰ったらメリッサと開発だ。忙しくなるぞ」

「ありがとう、デイヴ——」

そう言つて、安心したように笑うオールマイト。そうだ、もう、オールマイトだけに重荷を背負わせ続ける訳にはいかない。最短距離で、オールマイトに追いつき超えるんだ！

体育祭が終わつて2日。

「あ、あいつ、緑谷じゃん！」 「おつ、マジだヒーロー科の緑谷！」 「サイン頂戴！ 将来、これ絶対レアアイテムになるよ！」

「わつ、わつ、わわつ!?!」

僕の回りは、ちよつと大変なことになっていた。かつてのオリンピッククに匹敵すると言われる雄英体育祭。でも、オリンピッククと違い、その頂点は1年、2年、3年の3人しか居ない。つまり、僕はその3人のうちの一人になつてしまつたわけで……

「ケツ、いいよな強”個性”持ちは」 「いい気になつてやがる……」

頂点を取つた者の重さ。期待・憧れ・妬み・嫉妬……様々な感情が僕に向かってくる。

でも、これがヒーローになってNo. 1になることだと思うと、ひるんではいられない。「ありがとうございます！」「はい、サインこれでいい？」「うわっ、ヒーローネームもう考えてあるんだ！ これ超レア物！」「マジマジ!? 俺にもサイン一つ！」「あ、こっちにも！」

と、電車に揺られながらこんな感じになって、毎日大変になりそうだ。……朝から疲れたぞ。

「何をのんきに歩いているんだ!!」

後ろから……飯田君がっ！

「遅刻だぞ！ おはよう緑谷君!!」

「カカカカツパに長靴!! 遅刻って、まだ予鈴5分前だよ？」

何時もと変わらないように見える——けど。

「雄英生たるもの、10分前行動が基本だろう!!」

と、僕の様子を察したのか振り向いて話しかけてくる。

「兄の件なら心配ご無用だ。要らぬ心労をかけた」

何時もと同じに見えても、多分、何時もと同じはずがないと思うんだ。

「超声かけられたよ来る途中!!」

「私もジロジロ見られて何か恥ずかしかった！」

「俺も！」

「俺、でけえって言われまくった！」

「俺なんか小学生にいきなりドンマイコールされたぜ」

みんなそれぞれ、注目されていたようだ。

「そーいや、トップを取った緑谷はどうだ？ 何された？」

「ぼ、僕は満員電車で揺られてるからみくちやにされて……後、サインねだられて

……」

「うわ、マジかよサインかよ!」「緑谷君すごい!」「流石トップは注目度ばねえ……」

クラスメイトの皆からも注目度が上がったみたいだ。

あつ、予鈴……と同時に皆がびたつと静かに席に着く。もう慣れた感じだ。

「今日の”ヒーロー情報学”ちよつと特別だぞ」

ヒソヒソ、不安そうに喋る何人か。でも、予想とは違つて――

「「コードネーム」ヒーロー名の考案だ」

『胸ふくらむやつきたああああああああ!!』

盛り上がる皆。でも、相澤先生の一睨みに、一瞬でまた静かになる。

「というのも、先日話した「プロからのドラフト指名」に関係してくる。指名が本格化す

るのは経験を積み即戦力として判断される2, 3年から…つまり今回来た”指名”は将来性に対する”興味”に近い。卒業までにその興味が削がれたら一方的にキャンセルなんてことはよくある」

「大人は勝手だ!」

峰田君の震え…:…まあそう言いたくなる気持ちもよく分かるけど。

「頂いた指名がそのまま自身へのハードルになるんですね!」
「そ。で、その指名の集計結果がこうだ」

A組指名件数

緑谷	5121
夜嵐	3220
轟	3189
常闇	360
飯田	301
上鳴	272
八百万	108
切島	68
麗日	20

「例年はもつとバラけるんだが、三人に注目が偏った」

「だ——白黒ついた！」

「見る目無いよね、プロ」

「1位2位3位は順当すぎるな……」

「ありがとう！ 嬉しいッス！」

「特に緑谷の勝利宣言からの有言実行はそりや目立つわ……」

「緑谷あ、幾らか分けてくれよ……」

「む、無理だよ峰田君!？」

そして、これを踏まえて、職場体験へ行くからヒーロー名をつけることとなった。この仮の名前が、そのままヒーロー名になることも多いから、適当につけたら地獄を見ちゃうとはミッドナイトの言だ。……で、でもなんだか僕や夜嵐君や轟君を見る目がちよつと怖い……。

「まあ、その辺のセンスをミッドナイトさんに査定してもらおう。おれはそういうのできん。将来自分がどうなるのか、名を付けることでイメージが固まりそこに近づいてい

く。それが「名は体を表す」ってことだ。”オールマイト”とかな」

悩んでる人も多いけど、僕はずつと温めてきた名前がある。15分経って、まだ悩んでる人もいるけど真っ先に発表させてもらおう。

「おっ、いきなり緑谷か」「流石No.1」

オールマイトの様に、華麗に、豪華に。豪快に、力強く。カツコよく。あの人のように、豪華絢爛に。

「HERO、”ゴージャスグリーン”。それが僕のヒーロー名です！」

名は体を表す。なら——それを目指して、誰よりも輝くNo.1に！

邂逅、グラントリノ

A組の面々がヒーローネームを決めている頃、オールマイトに1本の電話が入ってきた。知らない電話番号だ。

「一体誰だ……？この番号を知っている人はあまり居ないはずだが……」

首を傾げつつも、とりあえず出てみるオールマイト。

「もしもし、こちら八木ですがどなたでしょうか？」

「おお、お前か俊典。電話番号位教えておけ」

電話越しにも、聞き間違えのないその口調。途端、オールマイトの膝がガクガクと震え、冷や汗が吹き出てくる。

「ぐ、グググググググググラントリノっ!?」

「おう、俺だ。随分長い間連絡がなかったじゃねえか」

恐怖を刻まれているオールマイトには、積極的に電話をしたい理由がなく、忙しさにまかれて意識の外に逃していたのが実情である。

「ほ、ほほホホホホ本日はどのようなご用件なのでしょうよしよしよしよしようか……!?」

「おう！ テレビで見たぞ！ お前の弟子、緑谷出久！ ありやすげえな！」

「はい？」

「あんだだけ活躍をしたんだ。お前の弟子に、オフアーが大量に来とるんだろ？」

「は、はい……5121件の指名が来ています。リスト化するだけでも大変でした」

「そりや凄いな！……だが、そいつらには悪いんだが、是非ウチに来て貰いたい。ワ
ン・フォー・オールを使いこなしているのは、あの体育祭を見れば分かる。……だから
こそ、会っておきたい。頼む」

「……分かりました。伝えておきます。尤も、彼は断らないでしょうが……」

「ありがたいな、俊典。さて、じゃあ俺はこれから準備をしてくる」

「準備？」

「最近あんまり活動しとらんだ。ちよつくら勘を取り戻してくるぜ」

「は、はい、行つてらつしやいませ！」

そして、通話が終わる。

「(し、師匠か……少年、無事で居てくれたまえ……)」

オールマイトには、ただ緑谷の無事を祈るしか出来なかつた。

皆のヒーローネーム決めも終わって、今日も普通授業が終わってやつと放課後だ。今日も体育館に寄っていいのかな？と思っていると……

「わわ私が独特の姿勢で来た!!」

わわわっ!? オールマイトがっ!?

「ど……どうしたんですか? そんなに慌てて……?」

「ちよつとおいで」

と、誰も居ない所に連れて行かれる。

「君に——特別な指名が来ている」

「え? と、特別……? どういう……」

「指名を入れたヒーローの名は、グラントリノ。かつて雄英で一年間だけ教師をしていた……私の担任だった方だ。そして、ワン・フォー・オールのもご存知だ。そして、だからこそ君に来てもらいたいと願ったのだろう。他のオフアーを押しつけてでも」

「そんな凄い方が……! っていうか、”個性”の件知ってる人がまだいたんですね!」

「グラン・トリノは先代の盟友……とうの昔に隠居なさっていたのでカウントし忘れていたよ……」

そして、ガクガクと震えるオールマイト。こ、こんな姿見たこと無いよ!?

「み、みみみ緑谷少年、お願いがあるのだがががが……?」

「な、何でしょう!?!」

オールマイトの頼み事は断れない!

「そ、そのだね、君の個性の扱いは、是非私てずから色々と教えたことに……」
「……………オ、オールマイト……そ、その……ヒーローなんですから大事な人に嘘を吐くのは……」

「た、たたた頼むよ少年!? あ、あの人ガチで怖いんだだだだあ!」

ものすつごいガタガタ震えてる!?で、でも、う、嘘をつくなんて……!

「あ、それとそうだ、コスチューム!」

「!」

「あのUSJでぼろぼろになったコスチュームだが、あの結果を見てデイヴ達がコスチュームをアップグレードしてくれるらしい。改良し次第、超特急で送ってきてくれるそうだ」

「本当ですか?! でも、お金凄いかかるんじゃないや……」

「それくらいは私が出すさ。むしろ、出させてくれ。——お金の工面は、私が君にしてやる数少ない師匠らしいところだからね」

「オールマイト……やっぱり、あなたは最高の師匠です!」

「ああ、ありがとう! ……………だからその、グラントリノには……」

「そ、それはダメです……」

「そ、そんな……」

そう言うと、オールマイトは震えながらトボトボと歩いていつてしまった。

そして、職場体験当日。僕らは大きいターミナルへとやってきていた。ここで学校の引率は終わり、それぞれの場所へと別れていく。

そんな中、気になるのは飯田君だった。再起不能になったインゲニウム。自分に当てはめると、オールマイトがヴィランによって再起不能にさせられたようなものだ。何も思わないはずがない。……でも、でも、僕らには何も言ってくれなかった。

「……飯田君。本当にどうしようもなくなったら言つてね。友達だろ」
「ああ」

返事をしてくれる飯田くんの顔に浮かぶのはいつもの笑顔。でも、僕はまだ不安を感じるのであった。

新幹線で揺られて45分、やってきたのは山梨県甲府市。スマホの地図アプリを頼りに歩く。歩いている最中も、色々な人に声をかけられて、ついでに道も聞きつつグラントリノの事務所へ向かう。

「オールマイトすら恐れるヒーロー……」グラントリノ”聞いたことない名前だけど、すごい人に違いない！……ちがいな……」

指定された地図にあった建物は、4階建てのボロツボロな建物で、壁も剥がれ落ちて危ないのか、工事現場の衝立で囲われていた。い、引退してたつて言つてたけどこんな場所に住んでるのだろうか……？ と、とりあえず入ろう。

「雄英高校から来ましたー……緑谷出久です。よろしくお願いしま……あああああああああつ?! し、死んでるっ?!」

「生きてる!!」「生きてる!!」

血糊と内臓かと思つたら、よく見たらケチャップとソーセイジだった!?

「いやああ、切つてないソーセイジにケチャップぶっかけてたやつを運んでたらコケたア~~~~! 誰だ君は!？」

「雄英から来た緑谷出久です!」「なんて!」「緑谷出久です!!」「誰だ君は!!」

や、やベエ!! オールマイトの先生だ……相当なお歳とは分かつていたけどコレは……

「飯が食いたい。飯が!!」

あああ、服が汚れるっ!?

「俊典!!」「違います!!」

「ま、まずい……オールマイトに連絡をしてきた時より急にボケちゃつたのか……病院? 老人ホーム? いや、まずはご家族に連絡を……オールマイトにも……」

「撃つてきなさいよ! ワン・フォー・オール!」「!」

「テレビで見たけど、実際に体感しておきたい！」

えっ、きゅ、急に何だ……!?

「や……えと……そんなことし「良いコスじゃん、ホレ着て撃て……誰だ君は!？」うわああ!？」

だ、ダメだこの人、大外れだった!?

「僕は……早く！色々と学んでオールマイトを超えないといけないんです！ もう、時間は残されていないから……！ だからこん……おじいさんに付き合ってもらえる時間はないんです！」

途端、空気が変わる。後ろからの轟音と、数回の反射音。そして、出ようとした僕の頭上に来た。

「だったら尚更、撃つて来いや受精卵小僧！」

さっきまでののはフェイク!? とりあえず、迷わずに！

「!？」

室内だし、最小限15%の力でコインを弾くように空気を飛ばす！ それを、避けるグラントリノ。そのまま、上下左右内装が壊れるのもお構いなしに動きまくる。常に僕の死角に来るように！ なら！ 次に来るのはそこお！

「14%……キャッチー！」

屋内だし、衝撃波を出さない程度の速度で動かして、グラントリノを怪我させないよ
うに両脇をキヤツチ!

「つ!? ……まさか、俺がとつ捕まるとはな……しかも、抑えてそれだろ?」

「は、はい……部屋を滅茶苦茶にしないように……」

「個性のコントロールもようできとる! 俺の個性を瞬時に把握と分析もしてるし、その判断も速い! うん、良いぞ君! 本気を出すと、どれ位まで出せる?」

「え、ええと……骨を折らない限界ギリギリが、大体50%程度ですかね……?」

「そのコスチューム、随分と金がかかっているようだが特注か?」

「は、はい! オールマイトがお金を出してくれて! I・アイランドのデヴィットさんとメリッサさんに作ってもらいました!」

「ほう! あの、オールマイトのスーツの開発者にか! そりやいい! ガジエツトもたくさんあるし、俊典とはまた違うタイプだな!」

こうして、色々なことを質問される。表情を見る限り、感触は悪くなさそうだ。

「——で、だ。君はアイツがやらないいろいろな技を使つとるし、ガジエツトも持つとるが……俊典の奴が教えたのか?」

あつ、オールマイトが怯えてた内容だ……で、でもウソは言えないし……

「あ、あの……、これ、全部自分で考えて……」

「……………あの野郎」

ひ、ひいつ!? グラントリノの目が剣呑にっ!?

「あっ!? で、でもでも! デトロイトスマッシュなんかはオールマイトの姿を見て「そりやただの見稽古じやろが!」ひいつ!? おっしやるとおりです!」

す、すみませんオールマイト……………お、怒られて下さい……………。

「と、まあ今は良い。それよりも大丈夫そうなので、これを渡しておく」

「? ……これは……………」

それは一枚のカードで、グラントリノの名前と顔写真が貼つてある。そして、手書きの名前欄。

「これは、職業体験生に渡す、仮免のようなものだ。俺の権限と責任で、職業体験の間、渡したものに“個性”の使用をしたヒーロー活動の許可をする。まあつまりだ、これを持ってヘマをやらかせば俺の責任って事よ」

「っ!」

これが、グラントリノの信頼の証……………!

「良い目をしとる。説明の必要はなさそうだな。じゃ、早速行くぞ」

そう言うのと、グラントリノは新しいコスチュームに着替え、事務所の入り口へ。

「へ? ……ど、何処へ?」

「決まっとるだろ。パトロールだよ。パトロール。ここは県庁所在地だからな。それなりに事件も発生する。グダグダした説明は必要ない、実戦形式で学んでいくぞ。さ、着替えた着替えた！」

「は、はい！」

グラントリノに渡された信頼の証に、初めてのヒーロー活動。その事に、僕は緊張とワクワクが止まらないのだった。

職業体験初日

緑谷がグラントリノの所へ向かっている頃、轟と夜嵐は同じ場所へ向かっていた。すなわち、エンデヴァーの事務所である。息子である轟だけでなく、夜嵐にオフアーを出したのはひとえにその個性と、自分や息子との相性故。風と炎、上手く組み合わせればこれほど強い組み合わせもないからだ。

入学当初は、片や無視し方や嫌悪していた間柄。だが、今日は違っていた。夜嵐が積極的に話しかけていたのである。

「轟よう。好きなものは何スか!!」

「そば。ザルの」

「か〜〜! そばなら俺は温そばだ。そしてウドン派!」

「合わねえな」

「いや! でも近づいた気はするツス!!」

「そばとうどんは近いようで遠い」

「俺!! おまえとも必ず親友になってみせる!!」

「……………あんまり無理しなくても良いんだぞ?」

「いや！無理はしてねえ！　むしろ燃える！」
「そうか」

入試の時、ろくに見ていなかった相手。だが、それでもこうやって話しかけてきてくれることが、轟はなんだかむず痒かった。

「よく来てくれたな、二人共。特に焦凍。ようやく、俺の後を継ぐ気になったんだな」
事務所についた二人を、エンデヴァーが出迎える。だが、二人の表情は芳しくない。
「勘違いするな——そんなつもりはねえ」

入試の時とは違うが、冷たい目——夜風は、その違いを敏感に感じ取る。そして、エンデヴァーの表情も。自分も、隣の轟も見えていない。冷たい目で見ているのは、はるか先——オールマイト。

本来ならお門違いなのかも知れない。それに、余計なおせっかいなのかも知れない。ただ、あの緑谷と轟の会話を聞いてしまった夜風には、どうしてもそのままにしておくことは出来なかった。それに——自分の友だちも、きつと同じことをするだろうから。

「……お久しぶりッス、エンデヴァー……」

「？　君には前に会ったことが有ったかな？」

「まあ、覚えてないのも当然ッスけど。——俺がまだ小さい頃、あんたに「邪魔だ。俺の

邪魔をするな」って退かされた元フアンの一人ツス」

「！」

驚く二人。それに、エンデヴァーは形ばかりの謝罪をしようとする。

「……それはすまなか……それから、ずっと変わってないツス。俺を……いや、ただ一人しか見てない目。そして、その目をあんたの息子にもさせてたツス」

「一体何を……！」

「あんたは！ 一体何処を見てんだよ！ フアンも見ない！ 妻も見ない！ 息子も見ない！ 身近な人を見ないで、一体ずっと何処を見てんだよ！」

「!!!」

夜風の剣幕と言葉に、驚く二人。そして、エンデヴァーは……気圧されていた。自分の息子と、同じ年の男に。

「きさまに……貴様に、何が分かる……！」

「分かんねえツスよ！ あんたの気持ちなんて！ でも、分かるのは……そんな目をして！ 妻も息子も泣かせて！ あんたそれで本当にオールマイトを超えられると思ってるのかよ！ オールマイトは！ 熱い男だろ！ それを、そんな冷たい目をして！ 超えられると思ってるのかよ!!!」

自分に立ち向かってくる、必死の剣幕。その熱気に、エンデヴァーはしばし言葉を失

う。

「夜嵐……お前……」

「悪い！ お前と緑谷の会話、聞いちまったんだ！ それで、ほつとけなくなっちゃった！」

「ゴッ！ と、腰を曲げて曲げて地面に頭を付けて謝罪する夜嵐。だが、轟が怒ることとは無かった。」

「……良いんだ。——いや、ありがとうな」

ふ、と表情が緩む。はじめての時は、熱いだけでウザいやつだと思った。だが、今はその熱さがだんだんと嫌いではなくなっていた。

「……じゃあ、失礼するツス！」

「…………何処へ行く？」

「こんな事言う奴を、職場体験に居させられないツスよね！ だから、失礼するツス！」
 そう言うと、踵を返す夜嵐。それに、ついていこうとする轟。だが、それをエンデヴァーが止める。

「……いや。いい。二人共、是非ここに居てくれ。ここは——No. 2の事務所だからな。学ぶことも多いだろう」

”轟くんも、あなたじゃない!!” ”そんな冷たい目をして！ 超えられると思ってる

のかよ!!”

まっすぐぶつかってくる、熱い少年たち。彼らの熱で、絶対零度の炎が揺らぎ始める。

「……そうツスカ。じゃ、お邪魔するツス！」

「……俺も。学べることは、学ぶ」

彼らは、未来の為に学ぶのだろう。——未来。

「(未来、か……)」

遠い遠い背中。決して超えられなかった断崖。それに眩んで見えなかったものが、少しずつ取り戻されていく気がした。

「キヤーっ!? ひったくりよーっ!? 誰か、助けてええええええっ!」

「ヒヤッハー! 頂いたぜー!」

個性“バッタ”のヴィランが、住宅街でひったくりをしていた。昆虫の力強くしなやかな両足のバネを使い、一軒家やアパートなど、背の低い建物の上を跳び抜けていく。

「はーっはっはっは! この街で俺に追いつけるやつは居ねえ!」

”個性”が世に蔓延することになってから、掃いて捨てるほど生まれた突発的”個性”犯罪の一つだ。これらの犯罪の対処の難しいところは、大抵の犯人は自分に有利な土俵で行うことである。”個性”は大抵一芸特化で有るが、犯罪を起こす犯人はその一芸

を最大限活かせるシチュエーションを選ぶ。今回の事件ならば、犯人は己の個性の有利を把握し、低い建物の多い住宅街で建物の上を跳んでいくことで警察やヒーローを振り切りやすくしている。

「くら……待ちなさい!」

「待てと言われて待つ奴あ居ねえ!」

たまたま自転車で巡回していた警官が見つけるも、道に沿ってしか走れない自転車で追いつけるはずがない。また、発砲も出来ない。

「はーっはっはっは! あばよ、のろまな警官! この町では俺こそがスピードキングだぜ!」

己の持つ“個性”への自信過剰が引き起こす犯罪。これは、どんな街でいつでも起こりうる犯罪だ。そしてだからこそ――

「もう大丈夫です! なぜかって……? それは、僕が来た!」

日本中に、ヒーローが居るのだ!

「あん? ヒーローかと思っただけのガキじゃねえか! そんなんで俺に……」追いつけるさ!」何い!」

フルカウルで、難なく追いつく緑谷。その後ろでは、グラントリノまでが楽々ヴィランに追いついていた。今までスピードで負けたことのなかったヴィランは、酷く動揺す

る。

「ち、畜生！ 負けてたまるかっ！」

そうして、自棄を起こしたヴィランは、リスクを犯し危険な挙動をする。そうなれば、一般市民もヴィラン自身も危ない。だからこそ、早く解決する必要がある。

「止まらない！ なら！」

緑谷は、腰から下げたボールの一つを取り出すと、カチリとボタンを押す。

「1・2・3・4……ネットボム、シュート！」

ボタンを押してから4秒経って投げ、5秒目で爆発し、ボールが人をすつぽりと多い
尽くせる程の大きさのネットへと変貌する。ヴィランを無傷で制圧するため、開発して
もらったガジェットの一つだ。コストは掛かるが、その分性能と強度は折り紙付きであ
る。

「ち、畜生!? 動けねえ!?!」

空中で網に包まれ、動けなくなるヴィラン。そして、落下していくヴィランをキャッ
チして、無傷で事件を解決する。

「ヴィラン、確保しました！」

「おお、やるじゃないの坊主。早速お手柄だな」

「はいー」

警察を呼び、犯人を引き渡しそして――

「本当に、ありがとうございます！」

「いえ、僕はヒーローですから！」

救けた人にお礼を言われる。嬉しそうに、涙すら浮かべて何度も何度も。それを見ると、とても嬉しくなる。そして、それこそがヒーローの報酬なのだ。

夢を追いかけ続けて10年以上。そして、初めて公的な活動で人を救われたのだ。第一歩を踏み出したようで、緑谷は深い充実感に包まれている。

「こりや優秀で俺が教えることもあんまり無さそうだな……ま、後で書類仕事はやってもらうが。もう事務員の姉ちゃんもだいぶ前に辞めちまったしな」

「あ、書類仕事も大事ですもんね」

公的な活動であり、その成果によって税金から支払われる給料の額も、ヒーローとしての順位も変わるのだ。これも凄く大事なことである。

「俊典の奴は、書類仕事は他の人に頼ってたからな……まあ、お前もそうなるだろうが」
「へ？」

「No. 1ヒーローになるんだろ？ なら、書類仕事よりも他にやることがあるだろう。雄英なら経営科も有るし、事務員を見つげとくのも良いかもな」

「は、はいっ！」

最初のボケ老人っぷりは何処に行ったのやら、実に的確なアドバイスをするグラントリノ。伊達に雄英で教師をしたわけではないようだ。

のんびり歩きまわりながらのパトロールであるし、時間はいくらでも有るから話は弾む。

「あ、たいやき屋だ」

「ここのは美味いんだ。どれ、一つおごってやろう！」

「ありがとうございます」

だが、のんびりしている時も気が抜けないもので

「く、食い逃げだー!？」

「ふはははは！この疾風の「スマッシュユー」げはあ!？」

名乗る前に撃沈するヴェイラン。

「いや、楽でいいのう」

「あははははは……」

再び警察に引き渡すのを待つ間、今度は周辺のゴミ拾いをする緑谷。最初の修行が海岸の清掃で、オールマイトの薫陶も有り、ゴミを見つけては拾うので片手には常にゴミ袋をぶら下げてる状態だ。

そして、そんな姿はスマホで撮られ、SNSに拡散される。

” 雄英の緑谷が、ヴィランを捕まえた後街の清掃してたよ!” ” うわ、地味な仕事やってる! 顔と一緒だ!” ” 個性は派手なのにこういう事はしつかりするんだな。何か好感持てるわ” ” と言うか、今日だけでも何件も緑谷の活躍報告されてね?”

そして拡散したSNSの情報は、回り回ってクラスメイトに届いたりもする。

「あ、出久君だ。やっぱり注目されるんだなあ」

ガンヘッドの事務所での休憩中に、麗日が気がついたり

「緑谷さん……堅実に実績を重ねているようで何よりですわ」「でもでも、目立ち具合ならこっちも負けないよ!」

遠い目をした八百万がメイクアップの最中に気がついて拳藤と雑談していたり

「おっ、緑谷も似たような事やってんな!」「何? マジだ!」

切島、鉄哲コンビが公園の清掃の合間に噂を拾ったりと、遠く離れていても注目される雄英生の情報は共有される。

「あ、LINKの通知だ……結構入ってるけどどうしたんだらうって……、え?!!」

ふと、スマホを確認すると、そこには友人たちからのメッセージが。どうやら、大分拡散していたようだ。

「僕の姿が、こんなに……」

ふとSNSを確認すれば、いつ撮られたのかあちこちに有る緑谷の写真。中には、ヴィランを抑え込んでいる姿を激写した物や、大ジャンプで空に滞空している時の写真も有った。

「これが、有名になるってことだ。これも、オールマイトが辿ってきた道だ。気分はどうだ？」

「なんだか……凄く嬉しいです！」

自分の行いで人助けができ、お礼を言われ、拡散される。ヒーローの特権を存分に享受した緑谷は、更に気合を入れてパトロールに励むのだ。

遠くで消防車のサイレンが鳴る。何か事件だろうか。それを聞くと、緑谷はおもむろにメガネを取り出し、咽喉マイクのスイッチを入れる。

「HAL、無線・SNS分析」

「Yes、無線傍受——検索・甲府市——中規模火災と判明。住所・ルート・情報を表示します」

すると、緑谷の着けたメガネに、様々な情報が表示されていく。火災の場所に、地上を移動する場合のルートに、各パトカーの位置。それに、無線で報告される逃げ遅れた人の場所や特徴なども隅に記録される。

これは、メリツサの開発した新装備の一つ、インテリジェンスゴーグルである。極薄の液晶ディスプレイ搭載のゴーグルに、ポーチに入れた超高性能超重量コンピュータ、そしてサポートプログラムのAIが一体となって緑谷を救けるガジェットだ。警察や消防、救急の無線を傍受して音声認識で情報を読み取り、ゴーグルに表示する。また、SNSに投稿される事件や写真を分析し、それをフィルタリングし必要な情報だけを抜き取る。まだ、オールマイイトより機動力が低い緑谷を効率的にサポートするためのガジェットのひとつだった。

「グラントリノ！ ついてきて下さい！」

「おう！」

フルカウルを全身に身に纏い、パルクールの要領で塀、屋根、電柱、屋上などを伝い走り、地上の混雑を一切無視して現場に到着する。5階建ての集合住宅に、火の手が上がついていた。そして、ベランダには助けを求める人々が。

「だ、誰か助けてー!?!」

救急隊員も、必死になつてはしご車を伸ばしているが、いかんせん人が多い。

「HAL、火災モードに変更!」「Yes、火災モードに、移行します」

そう言うと、緑谷の首筋から、液晶張りのフルフェイスヘルメットが昇ってきて、顔を包み込む。これなら煙の中でも、5分間は呼吸が可能だ。両手足のガントレットは、

より深く手足を包み、耐熱性を高める。I・アイランドの超技術により、重量を犠牲にすれば、様々なギミックをコンパクトに仕込める——。故に、ワン・フォー・オールの超パワーを持っている緑谷にはうってつけのガジェットたちであった。

「グラントリノ！ 僕は部屋の中に誰か居ないか調べます！ そちらは、ベランダの人たちをお願いします！」

「任せろ！」

そう言うと、二人共迷わず火災現場に飛び込んでいく。グラントリノは、救急隊員達の手が回っていない人を抱き地上に下ろし、緑谷は火の回っている建物の中を超スピードで見て回る。熱で変形したドアをこじ開け、バックドラフトに注意しながら一部屋一部屋確認していく。そして、とうとう見つけた。

「だ、だれか……」

身体の弱い、お年寄りだった。熱で変形したドアを開けられず、かといって煙で燻されたベランダにも出れなくなりどうしようもなくなっていたのだ。今にも死にそうで、とても不安そうなお老人に、緑谷は——

「もう大丈夫、助けに来ました！」

そう、笑顔で答え抱え上げた。近くにあったタオルで老人の口元を覆い、そのまま抱いて、一気にベランダから飛び降りる。煙の中に居たのは、1秒にも満たなかったらう。

最小の負担で、救えることが出来た様だ。

外では、グラントリノが半分以上の人を助け、息を切らせ地面に座っていた。

「はあ、はあ……小僧、そっちは大丈夫か?」「はい!でも、他の部屋も見てきます!」

「おう、気をつけろよ」

再び炎と煙の中突つ込む緑谷の背中はとても頼もしく、そこにグラントリノはオー
ルマイトを幻視する。

「ふっ……教えること、後ごんだけあるんだっつーの」

こうして、更に3人を助け出した緑谷は、SNSだけでなくその日の夕刊の一面も飾
るのだった。タイトルは——”超新星現る! 雄英のスーパーキー! 大手柄!”
であった。

突然の訪問者

「ふう、疲れた……」

職業体験は1日目から実践実践また実践、帰ってきてからは解決した事件の書類作成にと、休む暇も殆どなかったけど、それでもはじめてのヒーロー活動に、凄く満足できた。いつの間にかSNSとかにも投稿されてるし、あれ、ひよつとして僕ってもう有名な人……? って、駄目だ駄目だ、僕が目指すのはオールマイトを超えること。まだ道の途中だし……

「でも嬉しいiiiiiiiiiiiiっ!」

枕を抱きしめてゴロゴロするけど、まだ衝動が抑えられない!

「うへっ、うへへへへへへへ……」

皆からの連絡もたくさん来るし! 新聞にも乗ったし! 無個性だった僕が初めて公的に認められたようで、とても嬉しい! と、そんな時に電話が。……母さんだ!

「もしもし、どうしたの?」

「どうしたのじゃないよ、凄いじゃない出久! あんたの事、新聞の一面に出てるんだよ!」

「う、うん！ 僕でも、オールナイトみたいに……憧れのヒーローみたいに、人助けができたんだ！」

母さんも、凄く嬉しそうだ。声色だけでその様子が伝わってくる。

「母さんあんまり嬉しくてね、今日の夕刊全部買っちゃったよ。大事にとっておくからね」

「うわ、そんなに？」

「ぜ、全部取ってあるとなるとなんだか恥ずかしい……け、けど、いい記念になるかも！」

「それじゃあ、帰ってくるのを楽しみに待っているからね。怪我しないように気をつけるんだよ」

「うん、うん！ それじゃあ、明日も早いからもう寝るね！」

グラントリノの事務所の、ギシギシ言うボロボロのベッドだけど、今日はとてもよく眠れそうだ。

そして次の日。朝の6時に起きて、ストレッチをしつつ準備体操。知らない街を軽くジョギングして足を痛めた人を家に送ってから、事務所へ戻る。グラントリノの分まで朝ご飯を用意して——と。

「ん？ いい香りがするのう坊主。料理できんのか」

「あ、はい。母さんと二人暮らしなんで、よく手伝うんですよ」

「ご飯に味噌汁、おひたしに焼鮭の簡単な朝食だ。二人分を用意して、と。」

「それじゃ、いただきます」「うむ、いただきます」

グラントリにも食べてくれて、「中々美味しいじゃないの」と言ってくれた。良かった……。

「さて、今日は軽く朝にパトロールしたら、昼からたっぷり寝る。今日は、夜を中心にパトロールする」

「夜ですか。仮眠をとるってことは早朝にまで?」

「ああ。やっぱり夜は犯罪が起きやすくなるし、寝静まった頃に活動するヴィランも多い。だから集中力を保つためにもちゃんと寝ておくんだぞ」

「は、はい! 了解です!」

今日は夜か。色々と実践形式で教えてくれるグラントリノには感謝しかないや。ご飯を食べて、ちよつと休憩してさあパトロールだ! って時に、チャイムが鳴った。……え? こんな事務所に訪ねてくる人がいるの? い、いや、郵便とかかも知れないし……。 「んお? 珍しいな?」

って、グラントリノも珍しがってた! そのまま入り口へ行き、ドアを開けるグラントリノ。

「な、お、お前はっ!？」

そして、凄くびっくりした声。え?え?誰だ?

「どうしました、グラントリノ……って、なあっ!？」

僕も同じ様にびっくりした声を上げてしまった。だ、だってそこにいるのは……

「サー・ナイトアイ!？」

ど、どどどどどうしてここにっ!？」

「二人共失礼な。人の顔を見るなり声を荒げて全く」

「だ、だって、あまりにも意外すぎるでしょう!？」　こんな所に居るなんて!？」

事務所は東京の筈なのに、何でここに!？」

「……グラントリノ、先日連絡を入れた筈ですが」

そう言われ、携帯を確認するグラントリノ。

「……誰だ君は!？」「逃げないで下さい」

グラントリノのポケモ一瞬で封殺するサー・ナイトアイ。元サイドキックだし、用事はオールマイト絡みだろうか?と思っていたら、僕をじつと見つめてきた——という事は、用事は、僕にか。

「ゴージャスグリーン……いや、緑谷出久。君が、ワン・フォー・オールを受け継いだんだな」

「はいー」

真っ直ぐ見上げて、頷く。この力は僕の誇り。事情を知っている人に、気後れする姿なんか見せられない。

「雄英体育祭、スタジアムで余すこと無く見させてもらった。そして、昨日の記事やネットの書き込みも」

「あ、は、はい。ありがとうございます」

オールマイトの元サイドキックで事情を知っている……なら、当然僕のことを見るに決まってる。そして、僕を見るサー・ナイトアイの表情はとても複雑だった。……今まで、何があつたんだろう？

「——確かに、オールマイトの見る目は正しかった。」無個性”である時から君の有り様を見抜いていたんだね、彼は」

「そんなに前から知っていたんですか？」

「ああ。君が後継者に選ばれたその日、彼は私に連絡をとってきてね。」無個性”の中の学生を後継者に選んだと聞かされた時は、正直正気を疑ったよ」

苦笑するサー・ナイトアイ。だが、気持ちは分かかってしまうのが……ちよつと悲しい。

”無個性”とは、それだけハンデが有るからだ。

「私はそれに反発し、独自に後継者にふさわしい人間を育てたんだ。——彼は後継者に

ふさわしいと私は確信しているが……君もまた、後継者足り得る人間のようだ」

そう笑いかけてくるサー・ナイトアイは、少し寂しそうだつた。

「……なら、君に話さねばならないことが有る」

決死、というよりは悲壮な覚悟が見えるサー・ナイトアイ。個性は“予知”だとすると、一体何を話されるんだ……。

「私はオールマイトを“見た”。そして、その結果は……オールマイトは、今年か来年に、死ぬ。言い表せないような凄惨な有様となつて。私の、予知通りならば」

心臓が、止まったかと思つた。手足が震えて、視界が定まらない。

「そ、んな…………」

サー・ナイトアイの“予知”。信じられない、信じたくない。そして、グラントリノも顔を伏せている。

「オールマイトは、そんな事、言つて……」

「言えるわけ、無いだろう。そんな事を言つたら、ヒーロー後継者が笑えなくなつてしまう」
足がふらついて、地面が無いみたいだ。でも、考えることは止めちやいけない。

「……私が今日。ここに来たのは、君を“見る”ためだ。そうすれば、何か未来を変える手立てが思いつくかも知れない……」

「はい！　すぐに、すぐにどうぞ！」

もし、ほんの少しでも助かる確率が上がるなら、僕は何だってやる！　どんなことだって！

僕の言葉に、深呼吸してサー・ナイトアイは近づいてくる。震える足で、普段のヒーローとしての凛々しさは何処にもなくて、重い足取りで。そして、震えているのは僕も同じだ。今までの人生で一番、不安になったかもしれない。グラントリノですら、その表情は険しい。

サー・ナイトアイが、僕の頬に手を当て、まっすぐ目が合う。そして——表情が、困惑に変わる。

「こ、これは……!?　い、一体!?!」 「どうした、ナイトアイ!?!」 「い、一体何が……!?!」

サー・ナイトアイにしか分からないから、僕もグラントリノも凄く不安だ。

「み、見えない……何も。——彼の未来が、見通せない……!」

「……へ?」 「……何?」

”予知”で、見れない?それって……

「今まで、こんな事は無かった。そ、そう言えば……オールマイトを”見た”時も、君の事は一切見えなかった……。つ、つまり……!」

サー・ナイトアイの声が、掠れる。信じられないように、でも、信じたいように。

「わ、私の予知が……初めて、外れる……?」

呆然と、眩いていた。そして、グラントリノもこつちを見る。

「……鍵は、こいつか。」ゴージャスグリーン”……緑谷出久」

神妙な顔で。わずかに、希望を見せて、こつちを見る。

「僕には、運命が、無い……?」

それを聞いて思い出す。かつて、あの人が話してくれたHEROの話。決められたく
だらない運命——それに、”経済”さえも破壊する、HERO。ひよつとして、それに、
僕が……?」

「変わるのか……? 変えられるのか? 運命は……」

呆然としているサー・ナイトアイ。そういう人に、ヒーローがすることは一つ。

「はい! そんなくだらない運命、僕がぶち壊します!」

根拠なんて無い。でも、そうしなきゃいけない! だから、安心させるように、笑っ

て答えるんだ!

「——」

と、二人共ちよつとポケーツとしてるけど、す、滑つてないよね……?」

「そうか、これが……」「オールマイトが見つけた輝き、か」

そ、そう言われるとちよつと照れるな……。

「……御老体、職業体験ですが、私も付き合っていていいでしょうか?」

「おう、この爺を楽させてくれ」

「御冗談を、隠居から復帰したんでしよう?」

「えっ、サー・ナイトアイも一緒に!? す、すすす凄いや!」

元オールマイトのサイドキック! きつと、色々な事が学べるに違いない。思わず笑っちゃう!

「——いい顔をしているな。ミリオと、同じ顔。眩しい笑顔だ」

「さて、それじゃ行くとするか!」

サー・ナイトアイとグラントリノ。格上二人との職業体験は、こうして始まった!

僕とグラントリノは、機動力が圧倒的に上だから、素早い相手は僕が相手をして、主に戦ったり救助した後の手続きなどをサー・ナイトアイは丁寧に教えてくれた。サイドキックだった頃はほぼ全ての書類を処理していたから、本当にあつという間に書類を作ってしまう。

「しかし、そこそこ平和なのは喜ばしいことですが、実習としては些か物足りませんな」

「ああ。だから今日は夜、明日は渋谷の夜パトロールしようと思つとる」

「なるほど。段階を踏むのですね。分かりました。では、もう軽く切り上げましょう——」

「か、火事だー!? 火事が起きたぞー!?」

「ゴージャスグリーン」

「はい!」

休憩の時間でも、何か起きたら即参上! だって、それが絶望を覆すヒーローだから!

保須市、炎上

職場体験の3日目、早朝4時。昨日の深夜から続けていたパトロールがやっと終わった。昼寝していたとは言え、すつごく眠い……。田舎だから、犯罪もちよつとした暴走車とかそれくらいで、やることは殆ど無かった。けど、全く知らない街の深夜の寝静まった姿は、それはそれで凄く珍しくて興味深かったかけど。

「ふあ……」

あ、思わずあくびが。

「退屈だったか緑谷？」

「え、えつと……正直、あまり事件が起きなくて割と退屈でした」

サー・ナイトアイがこつちを見て聞いてきた。下手な誤魔化しなんかはしないで、本音を話すほうが良いだろう。きつとそれが聞きたいはずだし。

「うむ。ヒーローの敵の一つが、この退屈だ。ヒーローは四六時中仕事があるわけでもなく、また事務所待機で居ることも多い。その様な心に隙が出来る時間を、どう消化するかもヒーローの手腕の一つだ。今の内から慣れておくと良い」

「は、はい！ 分かりました！」

プロヒーローだからこそその視点や、実際に起きる問題のアドバイス……サー・ナイトアイとグラントリノの二人の指導は、全てがとても勉強になる。だからこそ、3日目の体調も万全にしないと。歯を磨いて着替えて、ぐっすり眠る準備はオツケー。

そして、起きたのは丁度お昼。顔を洗って歯を磨いて。皆になにか有ったかスマホチエック。

”よう、緑谷。実はサー・ナイトアイの所行ってたんだな” グラントリノって、サー・ナイトアイの別名?”

あ、あれ? 何人かに誤解されてる……って、理由が何となく分かっちゃう……。グラントリノって検索してもあんまり情報出てこないし、それに比べてサー・ナイトアイは現役活躍中のヒーローだし……。

SNSのまとめサイトを見ると、僕がサー・ナイトアイと一緒に写ってる写真が結構乗ってた。……引退してて、ネットにも乗ってない横の小さいご老人が本命ってそりゃ思われないよね……。

「何か失礼なことを考えとりやせんか?」

「い、いえいえそんな事はっ!」

流石ヒーロー、勘が鋭い!?

「まあ、疲れが残つたらん様だったら良い。今日は夜の渋谷に繰り出すから書類仕事は

終わらせとくんだぞ」

「は、ハイカラな街にコスチュームで……!?」

「おう。ヒーロー同伴でなきや着られん服だろ？ 最高の舞台で披露できるのを喜びん

さいー！」

「はい、分かりました！——てなると……甲府から新宿行き新幹線ですか？」

「うん」

「(保須市、横切るな……飯田君、大丈夫だろうか……？ ちよつと連絡を入れてみよう)」

僕がそう思っていると、エプロン姿で昼食を作ってくれていたサー・ナイトアイが顔を出して「おはよう緑谷。昼食を食べたら早速書類作成だ」なんて言ってくれた。サー・ナイトアイの手料理とか超レア……!? そう思うと、僕は急いでリビングに向かうのだった。

一方その頃、保須市にいた轟と夜嵐の二人は暇を持て余していた。エンデヴァーが”ヒーロー殺し”に狙いをつけての出張及びパトロールであったが、当然現地のヒーローたちも警戒している。いわば街中が厳戒態勢のようなものであるので、一般のヴィランも鳴りを潜めていた。

「よし、そろそろ昼だ！ 各員昼食にするぞ！」

『はいっ！』『オッス！』『……ああ』

人間としては不自信感を持っているが、時々起こる“個性”犯罪の対処の素早さ、判断力、事後処理の的確さなど、ヒーローとしての実力には舌を巻かざるを得なかった。万年No. 2と揶揄さえされるが、逆に言えば、上にはオールマイトしか居らず、ずっとNo. 3以下を寄せ付けさえしなかったその実力は本物なのだ。

「……お前、何を食う？」

そんな中、ふと隣のデカくてうるさいのに何気ない会話を振ってみる。熱くてまとわりついてくる奴だが、悪い感情は抱けなかった。

「そばにしてみるッス！ ザルの！」

どうやら、自分の好物を試すらしい。まったく、何処までも愚直な奴だと思ふ。けど——

「……そうか。じゃあ、俺は温そばにしてみるか」

そんな奴に、何故か影響されていた。

「おっ!? これは親友への第一歩ッスか!？」

「……………違エ」

否定する轟。だが、否定するまでにたつぶり10秒はかかったのだった。

「何だど!? そばか! よし、お前ら! そばを食いに行くぞ! いい店にだ!」

そう言うと、スマホでおすすめの店を探し始めるエンデヴァー。

『(……社長、割と親バカだよな……)』

それを、やや呆れる目で見えるサイドキック達。普段は厳格で有能で、怖く感じるヒーローだが、自分の息子と……その友達にだけはどうしていいか距離感を測りかねている様だ。

「ほら、焦凍! この店なんかどうだ!」

親父から差し出されるスマホを見れば、実に美味そうな店だった。それも高そうで、自分としても興味がある。

「……………そこでいい!」

親父の言う通りするには癪を通り越して嫌悪の極みだが、それでも食欲には勝てない。否定する材料も無いし、消極的賛成だと轟は自分に言い訳を聞かせつつ、蕎麦屋に向かった。

「いらつしやいませ……つて、エンデヴァー!」

がやがやと、料亭の雰囲気を感じる高そうな蕎麦屋に入るエンデヴァー御一行。時々、ヒーローが来ることも有るが、流星にN.O. 2ヒーローの来店には面食らう。お

まけに、沢山のサイドキック達も同伴であった。

「エ、エンデヴァー……?」「ウツソだろ!?この街に!」「すげえ! サイン貰えるかな!」

「お、あつちには雄英の学生も居るじゃん!」「この前の体育祭、凄かったぞー!」

途端、一斉に沸き返る店内。その人気を見て、二人共改めてエンデヴァーが凄まじいヒーローなのだ実感する。……尤も、気に入らない様な目をしている人も居るのにも納得したが。

「しよ、少々お時間をいただきますが大丈夫でしょうか?」

「この人数で来たのだ。承知している」

「では先にご注文を取らせていただきますね」

そう言うと、テキパキと注文をこなしていく店員さん。皆がそれぞれ席につくと、思いに注文する。

「俺やる!」「俺はおろしそば!」「鴨南蛮を……」「ランチセット、カツ丼付きで!」

普段は凛々しいヒーローたちだが、やはりお腹が空いたら美味しいものを食べたいもの。普段見えない微笑ましいレアな光景に客達は沸き立つ。そしてエンデヴァーは……

「ギョると温そば、それとカツ丼を」

どうやら、二人が頼むものを頼むようだ。思わず、目を見合わせる轟と夜嵐。この人

は、何処まで不器用なんだ……。見れば、エンデヴァーはチラチラとこちらを見ている。「……何か、意外ツスね、エンデヴァー」「……………」

ぼつりと吹く夜嵐に、顔を背ける轟。憎い憎い父の一面が意外過ぎて、思考が停止してしまふ。

「はい、お待たせしました。ざるそば特盛と、温そば大盛りです。ごゆっくりどうぞ」

「どうも！」

「どせ」

そしてやってくる二人の注文。それぞれ、口をつけ始める。いつも食べてる物とは違う温かさ。でも、それだけで印象がこうも変わる。

「美味しいツス！ やつぱりザルも美味しいツス！」

美味そうにズルズルと食う夜嵐に、やつぱりざるのほうが良かったかと思いつつ、温かいそばを口に運ぶ。温かさと香りが口いっぱいに広がり、そばの香りが柔らかく感じられる。

「どうスか！ 美味しいツスか!?!」

うるさく聞いてくる夜嵐。だけど、まあ……

「……………悪くねえ」

ズルズルと、そばを腹に入れていく轟。本当は美味かったけど、本当のことを言うの

も、癩だった。

「かーっ！ でもまあ、近づいた気がするッス！」

「……………かもな」

今度は、否定はしなかった。

全員が食べ終わると、エンデヴァー持ちで会計を済ませる。大きい金額をカードで支払うエンデヴァーに、近づくと一人の子供。

「どうしたんだ？」

見下ろすと、ちょっとびっくりして一歩下がるも、意を決したように色紙とペンを取り出す少年。

「あ、あの！ ずっとエンデヴァーのファンでした、サイン下さい！」「！」

サインをねだる子供に、一瞬固まるエンデヴァー。その子の目を見た。純粋に自分に憧れる、温かい目。ふと鏡で見た、絶対零度の己の目とはまるで違う。

「(今まで、何も見えていなかったのか…………)」

遠くを、先を、オールマイトを、絶望を見続けてきた。ずっと変わらぬNo. 2の地位は呪いだとさえ思っていた。だが――

「(私は、こんなにも見られていたのだ！)」

あまりにも簡単で自明の事だった。自分も、憧れられるヒーローだったのだ。

「……………ああ、分かった」

ゆつくりと色紙を受け取り、そこに自分のヒーロー名を書いていくエンデヴァー。普段サインなどまるでしなく、オールマイトと比べあまりにも下手なサインが書かれる。

「(……………こんな所も、奴に劣っていたのか)」

だが、その下手くそなサインを貰った子は、満面の笑みを浮かべると胸に抱いて「ありがとうございます！」と言ってくれたのだ。

「……………どういたしまして」

そんな光景に驚愕する一同。

「あ、あの……………是非うちの名前を書いたサインも……………割引しますんで……………」

すると、恐る恐るこっさりよって来た店長からも

「あ、あのエンデヴァー！ 是非これにサイン欲しいです！」

ヒーロー雑誌のエンデヴァーのページを広げ、写真を見せるサラリーマンも

「じゃ、写真一緒に撮っていいですか!？」

お昼を堪能していたOLからも。沢山の人が、エンデヴァーに群がる。

「あ、ああ、分かった！ 並んでくれ！」

押し合いへし合い、サインを求められる経験なんて無かった。拙い対応で、下手くそなサインを書くエンデヴァー。そうか。

「（これこそが、ヒーローなのか……!）」

慣れぬ歪んだ笑を浮かべるエンデヴァーを、見続ける夜嵐と轟。少しの後、血が出るほどの勢いで自分の顔をぶん殴る夜嵐。

「エンデヴァー!!!」

「何だ？」

振り向いたら血を流している姿に少し驚きつつ、不思議に思う。こちらを見る目が少し、変わっていた。

「——俺も、サイン欲しいツス！ 後で書いてくれるツスカ!？」

「……………ああ。勿論だ」

かつて拒絶した相手。——だが、もう一度だけ、自分を見てくれるようだった。

午後5時50分、グラントリノとサー・ナイトアイ、緑谷は新幹線の席に座っていた。そして、そこで行われているのは濃厚なオールマイトトークであった。

「僕はこの顔もいいと思いますね」

そう言うと、顔をオールマイトの笑顔に変形させる緑谷。だが、普通とほんのちよつぱりだけ違うようだ。ぶつちやキモいとグラントリノは思ったがツツコミを入れてくれる人は誰も居なかった。

「ほう、”ビネガースーサイド事件”か……中々良いところをチョイスするな」

「はい！インタビュで事も無げに答えるけど、それでもほんのちよつとしみちやう顔の歪み具合が何時もと違って凄いレアで……」

「うむ。救けられた中学生への返しのリフレが実に彼らしいウィットさに富んでいたな」

「はい！「こちらこそ君のお陰でお肌10歳若返ったよ」って！」

「お肌」というところが実に彼らしい言葉のチョイスだ。これだけで可愛ささえも引き立てる。やはり彼は凄い……」

基本、同じ趣味の話が合うオタクトークというのは際限が無い。緑谷は、本人も居るし友達とも出来なかつたうつぶんを晴らすように。サー・ナイトアイは久々に自分の会話に着いてこれるレベルのオールマイトオタクで有る緑谷との会話にのめり込むように、オールマイトトークを続けまくっていた。そして横のグラントリノはいい加減辟易している。周りの客の、オールマイトオタクも戦慄するレベルの知識の深さのガチトークである。一人ほつとかれて寂しい老人であつた。

——が、その平穩は唐突に破られた。突如、轟音とともに一人のヒーローが新幹線の外壁を突き破り、反対側の壁へと叩きつけられる。凍りつく車内、だが——

「!!」

瞬間、ヒーロー二人と見習い一人は、即座に戦闘態勢へと移行する。そして、姿を確認した緑谷は驚いた。見間違える筈のない、異形の姿。あれは……

「脳無!」

「小僧、フォローを頼む!!」

年季の長さから培ってきた判断力は、一瞬であの異形を驚異と判断する。すると、グラントリノは一発で脳無を車両の外に押し出す。

あつという間に見えなくなったグラントリノだが、即座にHALを起動すると、緑谷も追いかけてよとする。

「サー・ナイトアイ! 無線は常時ONにしておくので、ここの收拾と情報収集をお願いします!」

そう言うと、周波数を書いたメモを渡し、新幹線から飛び出ていった。「了解した!」

まずは、叩き込まれたヒーローの所に走る。どうやら命に別状はないようだ。次に、事態の收拾を図る。

「い、一体何が!」

慌ててやってきた車掌に、話しかける。

「失礼。私は偶然同乗していたヒーロー、サー・ナイトアイと申します。少し車内無線をお借りして宜しいですか？」

「ひ、ヒーローですか!? ぜ、是非お願いします!」

「サー・ナイトアイ!」「ヒーローだ!」「助かるぞ!」

いざという時、ヒーローはその名だけで人々に安心感を与えられる。勿論、彼は最大限自分の名を利用するつもりだ。無線を受け取り、車内に放送を入れる。

「皆さんこんばんは。私は偶然同乗していたヒーローで、名をサー・ナイトアイと申します。この車両を襲ったヴィランは、プロヒーロー・グラントリノと更に、雄英生の緑谷出久の手によつて車外の遠い所へと隔離されました。よつて、この車両は安全です。皆様、パニックにならぬよう落ち着いて行動して下さい。繰り返します——」

「サー・ナイトアイだつて!? 凄いヒーローだ!」「緑谷出久つて、あの……:体育祭で1位を取つた!? 凄い、さすがだ!」「新聞で見たぞ! 流石雄英トップだ!」「流石ヒーローだ!」

サー・ナイトアイの言葉に、急速に車内のパニックが収まっていく。それを確認したら、無線を車掌に返した。

「ご協力ありがとうございました」

「いえ、こちらこそこんなにも早く対処していただきありがとうございます。何か出来

ることはありませんか？」

「このヒーローは怪我を追っていますので、災害現場に対応できる救急隊の要請を」

「はい、分かりました！」

車掌もプロである。この様な災害や犯罪への対応は、マニュアル化されており、乗務員と合わせテキパキと行動していく。

「（こちらはもう大丈夫だ——頼んだぞ、グラントリノ・ゴージャスグリーン。それに——）」

先程、緑谷の名前を出した時、それだけで車内の空気が変わったのを感じた。既に、もうその名前だけである程度の安心を与える事が出来る事を成し遂げたのだろう。

「（その名は、君に栄光をもたらす。だが——確実に深い闇も呼び寄せる。どうか、無事で居てくれ……）」

そう思うと、サー・ナイトアイはノートパソコンと無線を横に起動させ、飛び込んできたヒーローの治療を始めるのだった。

保須市の長い夜

東京にほど近い場所にある、保須市。そこそこの人口を抱えてそこそこ栄え、ヒーロー殺しの脅威は有るものの一般市民には平和だったその街は爆発が起き、多数のヒーローが脳無と乱戦をしている、個性災害地域となっていた。

「ガチ戦闘は何年振りかな。まったくんだ巻き添えだ！ はっちやけやがって！ 何だお前!？」

吹き飛ばした脳無と相対するグラントリノ。だが、その不気味な4つの目からは何の知性も感じられない。

「くっ!」

獣の様な姿勢からの右手の一撃をジェットで躲すグラントリノ。

「(速い! が、まだまだ対応圏内!)」

だが、知性のない相手に後ろに回ったのがまずかった。興味をなくした脳無は、そのまま後ろに居た市民へと襲いかかる。

「(見境なしか!)」

「やめとけ……!」

「うおおおおおおおつ！ 間に合ええええええええええええつ!!!」

だが、グラントリノが攻撃する前に、風と炎が通り過ぎていく。風は市民を舞い上げ安全圏へと運び、炎は脳無を焼く。

「もう大丈夫！ 市民、救出完了ツス！」

「よくやってくれた、”レップウ”。ヒーロー殺しを狙っていたんだがタイミングの悪い奴だ……存じ上げませんがそこのご老人、”俺達”に任せてもらおう」

「あー、あなたは!! マジ!!」「何でここに……」

「ヒーローだからさ」

そう言うと、下手な笑顔で笑いかけるエンデヴァー。そして、その後ろには轟と夜嵐が居た。二人共息を切らせているが、エンデヴァーは事も無げだ。基礎体力の差も、思知らされている二人だった。そして、もう一人この場にヒーローが到着する。

「グラントリノオオオオオオツ！ って、えええええつ!! エンデヴァーに、夜嵐君に轟君!!? どうしてここに!!?」

「君は——」

「そりゃこつちのセリフツス！ 何でこんな所に!!?」「お前は甲府に居たはずだ」

「東京に向かっている最中の新幹線の丁度真ん前に、この脳無が突っ込んできたんだよ
!」

驚くエンデヴァー一行。だがそれよりも――。

「むっ、虚仮威しの低温とは言え、意識を保ったままでいられるのは初めてだな」

「グラントリノ、エンデヴァー！ コイツは様々な個性を複合して持ってます！ 前のはオールマイトの100%にすら耐える衝撃吸収と、再生能力を持ってました！」

「何い!?!」「チツ！厄介な！ 並のヒーローたちでは苦戦するぞ！」

オールマイトの100%にも耐える。その情報はどれほど衝撃か。だが、目の前のは低温の炎でもダメージを負っている。だが、それでも樂觀していられるのは自分がN.O.2だからであり、並のヒーローでは命すら危ないだろう。

「とつとと焼き尽くすか……!」「いや、お前さんの個性は周辺への被害が大きい！」

そう言うと、加速・減速・加速の3噴射からの一撃で、脳無を押し潰す。その一撃で、脳無はノックダウンしたようだ。あまりの威力に、アスファルトの地面が粉々に砕け散る。

「道路割つちまった……久々だと加減がなア……」

「何だ、この程度か？ コレじゃオールマイトに苦戦すらさせられんじゃないか」

事も何気に倒したグラントリノに、驚く他4人。

「すげえ、すげえッス！ グラントリノ！」「こんなに凄かったんだな……」

緑谷から初めて聞いた名前前のヒーローの実力に驚く二人。脳無は、彼ら自身も見てい

るから尚更だ。身長の低い老人だが、人は見かけによらないとはこの事だろう。

だが、ホツとしたのもつかの間、少し離れたところから爆発と叫び声が聞こえる。先程ヒーローが集中していた区画であり、だからこそエンデヴァー達は任せていたのだが、それほどまでにこの脳無といった連中のスベックは高いのだろうか。

「チツ！ そちらに向かいたいが誰かが拘束せねばならん……！」

「ワシに任せろ！ サー・ナイトアイも呼んで一緒に拘束しとく！ お前たちは早く向こうへ！」

「はい、分かりました！」「うつす！了解ツス！」「ああ」

その指示に従う学生3人。エンデヴァーも、その方が良いと思つたようだ。

「ご老人、そちらは任せる。緑谷君！ レップウ！ 君らは先に向かつてくれ！」

「はい！ それと、僕のヒーロー名は、”ゴージャスグリーン”です！ 行こう、夜嵐君！ それと背負うよ、轟君！」

「悪い、任せる」

そう言うと、緑谷は轟を背負い、夜嵐の風を受け加速し、3人共爆心地へと向かつていく。その背中はまだでプロヒーローのように頼もしかった。そして——脳裏によぎるのは、オールマイトの姿。あの、いつまでも追いつけない背中……。だが、オールマイトと違うのは、その周りには友人たちが居た事だ。

「……」ゴージャスグリーン”か……」

走りながら、ふと思う。自分の息子も、レップウも、ゴージャスグリーンも皆ヒーローとして育っている。もうすぐ、次代に託せる日が来るのではないかと。だが、それはまだだ。彼らのためにも、まだ自分のようなものが先でこの平和を守らねばならないのだ。

三人が辿り着いた時、そこでは2体の脳無と多数のヒーローが相對していた。だが、皆一様に苦戦していて状態が悪い。そして、その中でも特に一人は、今にも脳無に攫われようとしていた。そして、自分にふさわしい優先順位を割り振る。

「ワン・フォー・オール……フルカウル、50%お！デトロイトスマアアアアアアッッシュ！」

虚空を見て、こちらを見ていない空を飛ぶ脳無を、下から思い切り殴りつけた。その衝撃で、思わずと言った形にヒーローを離す。それを、下から風でキャッチする夜嵐に、すかさず自分の出せる限界温度の炎をぶつける轟。さっきのエンデヴァアの攻撃で、生半可な火力では通じないのは見ていた。半ば殺すつもりで本気の炎を放ったが、それでもその中で暴れている。だが、夜嵐の風のコントロールにより、翼が役に立たなくなっており外に出られない。

「轟い！ 手伝うぜ！」

その炎に更に風を送り、炎の嵐を作る夜嵐と轟。流石に、その熱風には苦しむ脳無だが、決定打が足りない。炎の中で再生を続けているようだ。

「緑谷あ！ もういつちよ頼むぜ！」

「応!! HAL, 火災モード!」「YES. 火災モードへ移行」

フルフェイスヘルメットとコスチュームで炎への防御を固めると、足に力を込める。目標は、脳無のやや下。巻き上げられる力を計算して――

「セントルイス……スマアアアアアアッシュー！」

炎の渦の中へ突っ込むと、踵落として地面に叩きつけた。炎の渦は、二人が一瞬で消してある。あまりの衝撃に、地面が陥没する。そして、脳無は動かなくなった。

「ウソだろ……!!? 俺らが苦戦していた奴を、こども簡単に……!」「雄英生!? 何でここに!」「えっ、雄英生だっつて!?!」

突然の登場からの撃破に驚くヒーローたち。残った脳無は、一斉に飛びかかられたので地面を殴り、衝撃波で吹き飛ばす。知性が無いように見えるのに、戦闘での攻撃は一々の確だ。まるで、何者かが操っているかのように。

「うわっ、見えねえ……!!?」「何処だ……!!?」

土煙の中、脳無を探るヒーローたち。だが、その僅かな隙が致命傷となりかねないの

が戦場だ。

「危ねえ、避けるー!」——え?」

一部晴れた煙幕の中から、脳無が拳を振り上げるのが見えた。——間に合わない。

「——ふんっ!」

だが、そこに炎を使い猛スピードで脳無を殴りつけた男が居た。

「あつ、あれは……」

『エンデヴァー!?!』

エンデヴァーだ。だが、殴りつけたところが、あつという間に再生する。

「こいつも再生持ちか。なら、これはどうだ!」

エンデヴァーが脳無の頭を掴むと、そのまま膨大な熱量の火を放つ。赤色だった炎は、やがて収束し青色となる。息子との火力の差が、如実に現れていた。あつという間に、頭が炭化する脳無。そのまま倒れ伏し、起き上がることは無かった。

「炭化した細胞では再生できまい——と。出てきた脳無はこれで全部か?」

確認すると、サイレンの音は未だ鳴り続けているものの、戦闘音は無くなっていた。その事に、ほっと一安心する一同だが——緑谷は違和感に気がつく。ノーマルヒーロー・マニュアルがいるのに飯田が居ない。

「あ、あの、マニュアル! 飯田くんは何処に居ますか!?!」

「あ、ああ。それだ！ こいつらが出てから、いつの間にか居なくなっていたんだ！」
「「？」」

ここは、ヒーロー殺しの現れる保須市。そして、飯田の兄インゲニウムを再起不能にしたのはヒーロー殺し……杞憂、と片付けるにはあまりに条件が整いすぎている。3人共、即動く体勢に出る。

「多分、飯田は……」

「ヒーロー殺しを探してる！」

「やべえ……プロヒーローを何人も殺してるやつだ、止めねえと！」

緑谷は、ガジェットの一つ、GPS付き簡易無線を二人に渡す。

「無線だよ！ 状況は逐一報告して！ 何かあったらGPSも有るから！」

「分かった！」

「む、どうした三人共」

ただならぬ様子に、エンデヴァーが尋ねる。一体何が有ったのか……。

「マニユアルの所に来ている友達が、インゲニウムの弟なんです！」

『！』

その言葉で、事態を察する周りのヒーローたち。相手はヒーロー殺しだ。ひよつとし

たら――

「ヒーロー殺しが現れるのは路地裏……マニユアルの事務所の近くの路地裏を、虱潰しに探しに行きます！」「俺もだ」「俺も！」

3人共、今にも駆け出しそうだ。

「分かった！ 見つけたらすぐに連絡しろ！ だが、俺はこの2体を拘束せねばならん！」

もし脳無に何か有った時、止められるのはエンデヴァー位なものだろう。3人共、了承と頷く。

「俺達も探すぞ！」「ええ、こいつら相手には何も出来なかったけど、ならせめてヒーロー殺しの方は……！」

各々が気合を入れると、ヒーローとヒーロー見習い達は、それぞれに散っていった。

保須市のとある路地裏。爆音が聞こえなくなってきたことにより、そこに居る3人は状況を知る。

「もう終わったのか……ヴィラン連合とやらは情けないな……ハア……」

飯田の頭を踏みつけ、腕を指すヒーロー殺し。血を流すためにあえてポロポロにしている刀の刃が、より強く痛みを伝える。

「あ、あ、っ!!」

「おまえも、おまえの兄も弱い……偽物だからだ」

「黙れ悪党……!!」

刺されながらも、飯田の目に宿るのはそれ以上の憎しみ。眼の前のヒーロー殺しが、どうしても許せなかった。そして、兄の仇を目の前にしながら、何も出来ない自分も。

「殺してやる!!!」

「あいつをまず救けろよ」

ヒーロー殺しから言われた言葉に、飯田の声が止まる。今の飯田は、ただ己の復讐のために力をふるおうとする——ヒーローでは無くなっていた。

「自らを顧みず他を救い出せ。己のために力を振るうな。目先の憎しみに囚われ私欲を満たそうなど……ヒーローから最も遠い行いだ……ハア……だから、死ぬんだ」

刀に付いた血を舐めると、飯田の身体が麻痺する。押さえつけられもせず、何もできなくなる。

「じゃあな、正しき社会への供物」

「黙れ……黙れ!!!」

脳裏によぎるのは、兄の言葉。

”天哉が憧れるっつーことは俺、すげえヒーローなのかもな!! ハハ”

涙が止まらない。仇も取れずに、ここで自分の命さえ終わるのか。

「何を言っただっておまえは、兄を傷つけた犯罪者だ!!」

飯田の命が終わろうとした時、彼は現れた。地面に氷を走らせ、

飯田とネイティブをヒーロー殺しから離し、なおかつ炎を飛ばす。だが、ヒーロー殺しはとっさの判断で躲すと、やや距離を取る。

「最初に見つけたのは俺か。救けに来たぞ、飯田」

そう言うと、轟はこっそり緑谷から渡された無線のスイッチの一つを押す。これで、緑谷と夜嵐にも通信が行った。後は時間を稼ぐだけだ。

「轟くん!? 何故……!?!」

「(こいつ……雄英体育祭の……!?)」

「うちの親父がヒーロー殺しを捕まえるために保須に来て網を張ってたんだよ。もっとも、まさか俺が先に見つけることになるとはな」

「ハハア……偽物の息子か……。だが、貴様はいい目をしてるな……」

「人殺しに褒められても何も嬉しくねエよ。兎に角、二人共動けるか? 大通りに行きや他のヒーローとも合流しやすくなる」

「身体を動かせない……! 斬りつけられてから……恐らく奴の“個性”……!」

「成る程、ニユースでやってる推察つてのも中々馬鹿にできねえな(救助対象は二人……とりあえず氷で覆うか……)」

「轟くん……手を……出すな……君は関係ないだろ！」

「飯田、お前……」

「仲間が「助けに来た」。良いセリフじゃないか。だが俺はコイツラを殺す義務が有る。ぶつかり合えば当然……弱いほうが淘汰されるわけだが、さア、どうする」

途端に、轟の肌が粟立つ。U S Jに現れたガキのような奴らの目じゃない。そこいらのチンピラみたいな目でもない。静かに燃える、思想犯の目だ。

「相手は何人もヒーローを殺している……当然戦闘力も高いはず……なら、時間を稼ぐしかねえ」

「やめろ!! 逃げろ!! 言つたら!! 君には関係ないんだからー!」

「関係有る。俺はヒーローだ。殺されそうになつてる人を見つけたら救ける。当然だろ?」

そう言うと、ゆつくりと構える。そして、そのセリフを聞いて笑うヒーロー殺し。

「ハア……」

だが、そう言うと即座にナイフを飯田とネイティブに投げた。目にも留まらぬ早業で、轟は一瞬で余裕がなくなる。

「ちっ! あくまで狙いはそっちかよ!?!」

こちらも一瞬で氷壁を出し、飯田とネイティブを囲うが、氷にナイフが突き刺さる。

「どんな威力してんだー！」

だが、とっさに出した氷壁は、自分の視界も塞ぐ。一瞬見失ったと思ったら、既に頭上に居た。対応するため、少しでも出が速い火を使うが、火事にならないよう範囲を絞るので、空中で壁を蹴ったステインに避けられた。

「これを避けやがるのか!？」

「ハハア……大雑把だが……良い!」

頭上から、幾つものナイフを轟に向かつて投げる。氷壁を出して防ぎつつ、同時に飯田とネイティブを更に遠ざけながら必死に避けて距離を取る。しかし、そのうちの一本がほんの、ほんの少しだけ掠ってしまった。地面に落ちたその一本を拾うと、そのナイフを舐めるヒーロー殺し。途端に、動けなくなった。

「なあっ!?! (バカな、ほんの少し掠っただけで……!?! いや、血……!?!)」

「とっさの判断……人救いを優先する姿勢——時間稼ぎを試みるクレバーさ……お前は、良い。口先だけの人間はいくらでもいるが……お前は生かす価値が有る……こいつらとは違う」

「んなもん……勝手に決めんじゃねえ……! そいつは、俺のクラスの委員長で、何時も真面目にクラスの事を考えていて——俺らの……友達なんだ……!」

「うっ、轟、君……!」

「ハハア……動けなくなっても更に会話で時間稼ぎをしようとするか……良いな……だが、それならコイツは学級委員長で終わらすべきだったな……」

「ぐっ……!（畜生、動けねえ……個性も、出せねえ……）」

改めて、ヒーロー殺しが飯田にとどめを刺そうとしたその時

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」「間に合えええええええええええええっ!」

再び、ヒーローが現れるのだ! イナサの烈風が、倒れている3人をこちらに吹き飛ばし、更に緑谷がステインへと殴りかかるが、バックステップで大きく避ける。だが、深追いはせず、まずは安全確保を最優先する。

「次から次へと……今日はよく邪魔が入る……」

「てめえがヒーロー殺し……その目、俺の嫌いな熱さだ……」

「もう誰一人殺させないぞ!」

夜嵐が、ヒーロー殺しの目を見て思わずそう呟く。遠いところを見ている、妄執の目——かつてのエンデヴァーと同じ類の目だった。

「悪い……しくじった……そいつの能力は、多分血の経口摂取で相手を麻痺させる……」

「成る程、それでそんなに刀がギザギザしてるのか……!」

それを聞いて、緑谷は一瞬で武器の性質を看過する。他の刃物や武器はよく手入れを

されているのに、刀だけがギザギザな理由……刀の一撃で殺す必要は必ずしもなく、動きを封じれば殺したも同然だからだ。

「ハハア……お前らの目も、良い……」ゴージャスグリーン」と、2位の夜嵐か……お前らも本物の様だ……」

「本物お!? 俺は一人しか居ねえ!」

「熱いヒーローの目……友を助けようとする熱さ……殺させない姿勢……貴様らも、良い……」

そう言うと、緑谷と夜嵐にナイフを投げつける。その速さに、二人共避けるが、その間に急速に間合いを詰める。驚くべき身体能力だ。イナサが風で吹き飛ばそうとするが、風の切れ目を狙いナイフが投げ込まれる。

「その歳で良いコントロールだ……だが、やはりまだ大雑把だ……!」
「っ!」

味方に飛んでいくナイフを、弾く緑谷。このままでは、いつ後ろに飛んでいくか分からない。

「やめてくれ……どうして、君たちが……」

「うるせえ! お前も」救けるぞ飯田あ!」「余計なお世話は、ヒーローの本質だってオールマイイトが言っていた……! それに、僕も君を、友達を救きたい!」「そうだ……!」

止めてほしけりや、立て……！　そして、俺たちを救けてくれ……！　なりてえもん
ちやんと見ろ……!!!」

仲間たちの熱い言葉に、よぎるのは、己の言つてしまった言葉——「インゲニウム
お前を倒す、ヒーローの名だ」

「(どこがだ……！　友に守られ　血を流させて!!)」

” あいつをまず救けろよ”

「(罪を思い知らせんが為に、僕は兄の名を使った——そんな、資格なんて有りはしな
かったのに——！)」

己の未熟さに、涙を流す。押し寄せる後悔。だが、それでも——

「(それでも、今ここで立たなきや二度と!!　もう二度と彼らに、兄さんに追いつけなく
なってしまう!)」

「レシプロ——バースト!!」

ヒーロー殺し以上の、目にも留まらぬ速さで、ステインの刀を蹴り飛ばし、へし折る。
その速さは、まさにターボヒーローの名にふさわしい。

「今だ！　スマアアアアアアッシュ！」

そして、その隙を逃す緑谷ではない。刀が折れ、無防備となった腹に、思い切り拳を
突き入れた。

「ゲホア……！」

容赦のない一撃に、そのまま吹き飛ばされるヒーロー殺し。ロクに、身体が動けなくなった。

「ハア……まだだ……まだ、世界を正すために……！」

「終わりだ、ヒーロー殺し！ もう、何もかも……！」

そう言うと、緑谷はガジェットの一つの特殊繊維製の縄を使い、武器を取り外しながら念入りに縛っていく。

「俺は捕まるかも知れない……だが、俺の思想は……死なない……！」

捕まって尚、静かに燃える目に、皆が一瞬言葉を失う。——妄執。まさに、そう言うのが正しいだろう。そして、よろよるとネイティブと轟も起き上がる。効果時間切れの様だ。

「悪い……俺、ヒーローなのに助けられちゃった……」

「いえ、大丈夫ツス！」「俺もやられちゃった……コイツが強すぎたから……」「一対一でヒーロー殺しの”個性”だともう仕方ないと思います……掠っただけでアウトは強すぎる」

申し訳無さそうなネイティブに、皆がフォローを入れる。実際、恐ろしい相手だったからだ。ほんの少し、結果が違っていれば飯田かネイティブのどちらか、あるいは両方

が死んでいたかもしれない。

そして、両手両足を縛った緑谷は、そのままヒーロー殺しを担ぐ。

「じゃあ、表通りに出よう。そろそろ他のヒーローも来るはず」

だが、その前にぞろぞろと歩いていく4人の前に立ち、飯田が頭を下げる。

「三人共……僕のせいで傷を負わせたり……街中を駆け回らせたり……本当に済まなかった……何も……見えなく……なってしまう……!」

泣きながら、頭を下げる飯田。大粒の涙が、ポタポタと地面に落ちる。

「……僕もごめんね。君があそこまで思いつめてたのに、全然見えてなかった……友達なのに……」

「俺も同じくだ、ごめん!!」

緑谷も謝り、夜嵐は凄いい勢いで頭を下げた地面にぶつけて血を流す。

「――!」

更に、後悔がよぎる。「どうしようもなくなったら言っただろ。友達だろ」

そして、謝るだけではない。轟も発破をかける。

「しつかりしてくれよ。委員長だろ」

クラスをまとめるのはお前だと。よくやってくれていると。

「全員、無事か!」「有精卵共、大丈夫か!」「どうやら無事の様子ですよ」

表通りへ出ると、そろそろとヒーローたちが走ってきた。エンデヴァーやグラントリノ、サー・ナイトアイに他のヒーローたちも。更には、マスコミも現着しているようだ。カメラが、路地裏から出てきた5人に向く。

「ほう! そいつが”ヒーロー殺し”か! よくやったぞ、焦凍、それに皆も!」

自分の息子が活躍できたことに、我が事のように喜ぶエンデヴァー。だが、轟の心中は複雑だ。

「……俺一人じゃ無理だった。全員でかかったから勝てた……まだ、修行が足りねえ」

「なら、もつと強くなれ、焦凍。”努力”は、往々にして実を結ぶのだから」

「……………」

複雑な心境の轟。だが、彼らにヒーロー殺しが反応する。

「偽物……貴様のような奴がNo. 2に居座るから……偽物が蔓延る……! 正さねば

——……誰かが血に染まらねば……!”英雄”を取り戻さねば……!!”

縛られているのに、その妄執に圧倒される周りのヒーローたち。縛られてる筈の男に、思わず倒れ込むカメラマンやリポーター。異常な執念は、ヒーローすらも怯ませる。「殺してみる……俺を殺して良いのは……オールマイトだけだ!!」

だが、その言葉に、一際強く反応した男が居た。他でもない、エンデヴァーだ。

「ふん、どんな男か、どんな執念かと思っていれば……貴様はただのミーハーで、しかも己の理想を押し付けているだけだったようだな」

「何だと……！」

馬鹿にするように、無然と、ヒーロー殺しに言葉を投げかけるエンデヴァー。その目には、覚えがある。勝手なものを押し付ける、妄執の目。鏡で見た、自分のあの目だ。凄まじい妄執。だが、もう気圧されることも無くなっていた。

「殺して良いのは、あの馬鹿^{オールマイト}だけだと？ あいつがそんな事をする筈がないだろうが。ヒーローが皆あいつの様になるだ……？ ふざけるのも大概にしろ。あいつは、他を救うために全てを投げ出す狂人の類だ」

「何を……！」 「貴様……！」

その言葉に、ヒーロー殺しだけでなく、サー・ナイトアイも激昂する。

「あいつの様な……すべてを投げ出す男を量産し、あいつの様に、偶像を作り全てを押し付けるつもりか……！ あいつ、一人の背中にすべての重荷を背負わせ……！」

エンデヴァーの言葉に、その場の全員が驚く。万年N.O. 2だった男は——ある意味、誰よりもN.O. 1の背を見ていたのだ。

「そうならないように、”希望”は、あいつだけではないと知らしめるために、ずっと”努力”してきたのだ……!! 追いつくために、あいつを、追い抜くために——全てを、犠

牲にしてしまつて——!」

その威圧感に、周りのヒーロー全てが気圧される。これが、N O. 2の矜持——
「貴様は己がヒーローになつて正そうともせず、希望になろうともせず、ただ弱い者を殺して世を直すだと……? 己がN O. 1になろうとする気概もないものが——正義を……あいつを語るなど——巫山戯るなあ!」

今度は、その場の全員が、ヒーローの威に圧倒される番だつた。

「——っ!?!」

その言葉に、ヒーロー殺しでさえ、何も言えない。英雄ヒーローという存在から、己が真つ先に逃げた男に語る術は何もなかつた。

一夜明けて

「んだヨ、あのヒーロー殺しい！脳無も！まるで役に立たねえじゃねえか！」

とあるビルの屋上——死柄木は、とてつもなくイライラしていた。指をガジガジかじり、足を踏み鳴らし、不機嫌な様子を隠しもしない。せっかく投入した脳無3体も、ヒーロー殺しも、ろくに成果を上げること無く無力化されてしまったからだ。子供のような癩癩が、ますます酷くなっている。ひとしきり喚いた後、懐からスマホを取り出す。

「先生！ あいつら、何一つ使えなかつたじゃねえか！ もう3体送つてくれよ！ 今度こそ暴れさせるからサア！」

だが、激高する死柄木に、電話の先の声はねつとりと優しく諭す。

「落ち着くんだ弔。今からそこに送つても戦力の逐次投入になるだけだよ？」

「だがよ、このままじゃ、アイツラだけに名前が！」

「名前つてのはね、大きくなればなるほど身勝手な感情が付属するもんなんだ……ああ、僕も覚えがある。憧れや敵意が散々に押し付けられ、少しでも違うと失望する——また、出来ないことが有れば他人の何倍も何十倍も失望する——そんな身勝手な感情を押し付けられる立場に、彼はなりつつあるのだよ」

教育を施す声の主は、とてもとても楽しそうだ。相手が強力だと言うのに、とてもとても。

「さあ、今回のことでどれだけ彼らは憧れられるのかなあ？そして、どれだけ畏れられるのかなあ？ それらは理解とは一番程遠い感情だったのにさ！ それはどれだけ彼らにある意味孤独にするんだろううねえ！」

「……何か、作戦でも有るのか？」

上機嫌な電話の主を、訝しむ弔。ここまで上機嫌な声は久々に聞くかも知れない。

「いいや！ まださ！ だが、策を立てる土台も手段も、沢山整ってきた！ ああ、楽しみだねえ！ 塔が高ければ高いほど、崩れ行くさまはそれはもう見事なものになるのさ！」

「……なるほど、分かった。んじや、今日のところは引いていくさ」

「ああ！ 今回のことから、ちゃんと学ぶんだよ弔。それが、君を強くするんだからね」

「わかってる。んじやな」

電話を切ると、そのまま黒霧の中へと消えていく。後には、静寂だけが残った。

「ヒーロー殺し逮捕だつて!! すげえすげえ!!」「マジ!? 誰が倒したん!?」「体育祭で活

躍した、雄英生の一年達だつてよ!」「ウツソだろ!」「あいつらとんだだけ凄いだよ!」「安心したけどなんか残念くくくく」

「うわダサつ、あいつ擁護するのによ。エンデヴァアのセリフ聞いてないのか?」「えつ、マジ何が有つたの!?!」

次の日の朝刊、一面はヒーロー殺しの逮捕の記事だつた。テレビでも連日トップニュースであり、ワイドショーでも繰り返しその様子を伝えている。

「三人のヴィランはいずれも住所・戸籍不明の男。その外見的特徴とNHKテレビが偶然捉えた二人の男の姿から、先日雄英高校を襲つた“ヴィラン連合”との繋がりを指摘する声も上がっています。」オールマイト」以降の単独犯罪者では最多の殺人数。犯罪史上に名を残すヴィラン”ヒーロー殺し・ステイン”、その身勝手でエンデヴァアに完膚なきまでに論破された、その犯行の詳しい動機など追つてお伝えします」

世間では、ヒーロー殺しの事が繰り返し報道されているが、それに関連してエンデヴァアの激昂もまた、それ以上に放映されていた。

”己がNo. 1になろうとする気概もないものが——正義を……あいつを語るなど——巫山戯るなあ!”

恐らく殆どの人が目にしたことのない、No. 2ヒーローエンデヴァアの激昂した姿。それも、話題がオールマイトに関してである。エンデヴァアの、オールマイトを示

した形容詞は、”狂人”、”あいつ”、”あのバカ”など、ファンが聞いたら激怒しそうなものだ。だが——それだけに、見るもの全てに伝える。あの叫びが、エンデヴァーの本音なのだ。皆がオールマイトを仰ぎ見る中、彼だけが本気で横に並び立とうとして、希望の象徴の苦勞を少しでも減らそうとしていたのだと。

「実は、あんなに熱かったんすね、エンデヴァー！ 一気にファンになりました！」
「ずっと、オールマイトを見てたんですね……ある意味、彼が一番のファンなのかもしれない」

ヒーロー殺しと、エンデヴァー。この二人の主張の差は、世間に大きな石を投じたように波紋を広げていく。そして、ネット上でも、ステインを称賛していた声はピタリと止んだ。あの瞬間、ステインの主張は——彼は——ただの負け犬に成り下がったのだ。ただ、弱いやつを殺すだけと。

「……って感じで外は凄いいことになってるね……」

「エンデヴァー……あんなに熱かったんすね……」

「……………」

3人は今、病院に来ていた。怪我をした飯田の見舞いのためである。それと、マスコミ避けの為に有った。学生だけで脳無の1体を倒し、更にはヒーローを救いヒー

ロー殺しまで捕らえたのだ。マスコミが食いつかないはずもなく、”ゴージャスグリーン”、”シヨート”、”レップウ”の名はエンデヴァーと共に全国へ鳴り響いた。——すると当然、マスコミが嗅ぎつけなければならずもなく、その日泊まった保須市のホテルには、マスコミ関係者が詰めかけて大変だった。3人共、見舞いの時間を削られないために今日の朝は裏口からこっそり出たほどである。

ともかく、無事に病院についた3人は待合室の隅っこが目立たないところでそれぞれがスマホを弄っていた。3人共それぞれ、クラスメイトから心配やら色々なメールを送られていて、返信にかかりきりである。

「飯田様のお見舞いの3人はいらっしやいますでしょうか？」

病院側も気を使ってくれていて、3人の名前は呼ばない。

「あ、はい！」「うつつす！」「ども」

看護師さんに付いていくと、病院の個室に案内された。飯田の腕に巻かれた包帯が痛々しい。

「おつす飯田、大丈夫か？」「だ、大丈夫？」「腕……」

三者三様に心配する。見るからにダメージは大きそうだったから、後遺症が残ってないか気が気ではないのだ。

「左手、後遺症が残るそうだ」

「「「ー」」」

「両腕ボロボロにされたが……特に左のダメージが大きかったらしくてな。腕神経叢という箇所をやられたようだ。とは言っても手指の動かしづらさと多少のしびれくらいなものらしく、手術で神経移植すれば治る可能性もあるらしい。ヒーロー殺しを見つけた時、何も考えられなくなった。まずマニユアルさんに伝えるべきだった。やつは憎いが……やつの言葉は事実だった。だから、俺が本当のヒーローに成れるまで、この左手は残そうと思う」

「……あ（あの時、もつと強く言っていおけば……!）」

「……（俺の、馬鹿野郎!!）」

「……飯田……（お節介、か。したほうがいいのかもな）」

「そんな顔をしないでくれ、みんな。日常生活に支障は無いし、今は納得している。——だから、俺はもつと強くなる。君たちのように……いや、君たちを超えられるように!」

「……うん、負けないよ!」「ライバルツスね! 熱いツス!」「おう」

こうして、決意を新たにする3人。

怪我は軽かったので、彼らはまた職業体験に戻る時間だ。

「それじゃ、また来るね!」「土産話持ってくるツス!」「……食いたいもん、あつたら言つてくれ」

「……ああ！」

そして飯田は、彼らのような友人が居ることに心から感謝をした。

一方その頃、グラントリノはオールマイトと電話をしていた。

「緑谷出久……お前、よくあんなのを見つけってきたな。……良い奴だ、戦闘で教えることがほとんどねえ。実戦以外の救助やら法律関連やら、ちゃんと学校で教える諸々を叩き込めればすぐにでもプロで通用する」

「そうですか……グラントリノのお眼鏡にも適いましたか」

「ああ……呼べて、飯田って子が助かって結果オーライだが、本当は悪いことをしちまつたと思ってる。こんな田舎のサイドキックもいねえ事務所に呼ぶべきじゃなかった。……だから、残りはお前の元サイドキックに託すことにした」

「サー・ナイトアイ……！」

「あいつも、気合を入れて緑谷に教えとった。自分が後継者として選んだ他の雄英生も居るのにな。やっぱりお前に選ばれて実力を見せつけたのがきいたらしい。最初に反対したのを悔いてるのかもしれない。……一度、会ってやれ」

「……はい。追々、必ずや」

「しかし、ヒーロー殺しは凄まじかった。実際に相まみえた時間は数分もないが、それで

も戦慄させられた。——まあ、No. 2に諭されちまったがな」

「グラントリノともあろう者を戦慄させるとは……しかしもうお縄になったのに何が……」

それから、グラントリノは己の懸念を口にする。負かされたとは言えカリスマ性や、感化される人間の危惧。エンデヴァーに言い負けたとは言え、言った内容の中身に感化されるものは必ず出るはずだろうと。そして、”オール・フォー・ワン”が動き出したことを。

「……お前のことを健気に憧れているあの子にも、折を見てしっかりと話しといたほうが良いぞ。——サー・ナイトアイはあの子に”予知”を伝えた」

「なあっ!？」

知られたくないこと。まだ、知られてはいけななことが知られたとあって、オールマイトの血相が変わる。まだ、早すぎるだろう。

「サー・ナイトアイ……何ということ……!？」

「落ち着け。どの道いつか教えなきやならん事だ。それに——”予知”が、外れるかもしれない」

「え?？」

”見えない” そうだ。あの子の運命とやらは。そして、お前を”見た”中にもあの子

は出てこなかった。——つまり、あの”予知”は、外れる可能性がある……!」

「……………9代目にして。もしかしたら——とうとう、”オール・フォー・ワン”が終わる時かもしれない。——だから、俊典。……生きろ」

そう言うと、電話を切るグラントリノ。一度に様々な情報が入ってきて、オールマイトの胸中はしばらく混乱を続けていた。

激闘!期末試験!

病院を出た後、グラントリノと一緒にサー・ナイトアイの事務所で職場体験させてもらうことになった。今までは甲府っていう最も人口が少ない県庁所在地だったけど、やっぱり東京の繁華街は、全然勝手が違った。あちこちですぐに小競り合いが起きたり、困ってる人が出たり。それに、外国人も凄く多くて、言葉の問題にすぐ苦勞した。英語だったらまだなんとかなるんだけど、それ以外の言語だと完全にお手上げだ。そんな時は、HALに頼んで翻訳してもらった。このサポートAI、本当に頼りになる……。

そして、僕らがヒーロー殺しを捕まえたことは大々的なニュースになっていて、まだ職場体験の時点なのに、あちこちからサインを強請られてしまった。服とか、写真とか、タブレットへの手書きとか、色々な形で……。さ、サイン、本格的に自分独自の考えていたほうが良いかも……。3年のミリオ先輩からも、「頑張れ!」って励まされたし。

そしてなんだかんだ色々と有って1週間後、とうとう職場体験が終わった。体験——
と言うよりは、もう殆どサイドキックみたいな仕事をしてたけど。

「ははは、細かいことは気にしない！」

「そ、そうですね！ 本当にごく勉強になりましたし！」

この数日で、インターンで来ていたミリオ先輩やバブルガールとも凄く仲良くなれた気がする。サー・ナイトアイもバブルガールも、ミリオ先輩もインターンでも是非来てと言ってくれた。

「なに、インターンでも確実に君は争奪戦になるだろうからね。今の内に引き込んでおこうと思ったのだよ」

「は、はい！ ありがとうございます！ 最有力候補の一つに入れさせてもらいます！」
本当は必ず！ と言って言いたいけど、今回のグラントリノみたいな事が起きないとも限らないし、今はこう答えておこう。

「ああ、それとだ……職場体験と言いつつ、書類仕事からヒーロー活動から、ほぼ正規の仕事をさせてしまったからな……これを持っていくと良い」

そう言っただけで提出されたのは、一つの封筒。恐る恐る受け取ると、結構厚みがある。い、一体幾ら入ってるのだろうか……？

「あ、あの、これって……」

「今回の給金だ。学校側にも話を通しておく。これは、君が稼いだ正当な報酬だ。遠慮はしないように」

今まで、持ったことのないお札の厚さ。ほんの数ミリだけど、それがとても重く感じる。僕が、初めてヒーロー活動で稼いだお金で、沢山の人達の税金から出たお金だ。

「——ヒーローとして活躍できているが——大量殺人犯と相対してご家族は心配しているはずだ。是非、それで何か労うと良い」

「はいっ、ありがとうございます!」

カバンに大事にしまい、頭を下げて部屋を出る。本当に、色々な体験ができてよかった。

「母さん、ただいま!」

一週間ぶりに家に帰ってきた。こんなに長く家をあけるのは、久しぶりだ。

「お、おかえり、出久! 大丈夫!? 怪我してない!」

「うん、スーツのお陰もあって大丈夫だったよ。だから心配しないで母さん」

「よ、良かった……」

何度も何度も連絡したけど、やっぱり心配だったんだろう。だから、沢山の感謝を込めて、これを渡そう。

「母さん、これ」

カバンから封筒を出すすと、母さんが首を傾げる。

「どうしたの？　これ？」

「サー・ナイトアイから頂いたんだ。僕のお給金！　ヒーロー活動したから、その分は払うって！」

それを聞くと母さんは、恐る恐る封筒を開けて——その金額にびっくりする。1万円札がそれなりにまとまった枚数だ。

「ハ、ハハハハハ、こんなに！」

「うん。だから、何時もお世話になってるお礼に母さんに渡すよ。今日は、これで美味しいものでも食べに行こうか」

小さい頃から心配かけて、ずっと育ててくれた母さんへのお礼。これから返す、その始まりのお金。世の中お金が全てじゃないって言うけど、それでもやっぱりお金でも感謝の気持ちは伝えられるのだ。……、あ、母さん、また泣いちゃった。

「うん、うん……ありがとうね、出久」

「どういたしまして！　さ、どこでも良いよ母さん、何でも好きなもの、食べ放題！」
「何にしようかしら……迷っちゃうわね……」

こうして、僕と母さんは精一杯高い服をきちつと着て、ビルの上階に有るような高級レストランで食事をしたのだった。今まで食べたこと無いけど、凄く美味しくて。母さんは嬉しそうに色々と頼んでいて。とっても嬉しかったなあ……

次の日、一週間ぶりにクラスメイトが揃った教室は、勿論職場体験の話題で持ちきりだった。耳郎さんもヴィラン退治に参加していたり、梅雨ちゃんは密航者を捕らえたり、お茶子さんはガンヘッドの所でみっちり訓練をしたみたいだし、皆それぞれ、有意義な体験をしてきたようだ。

「女つてのは……元々悪魔のような本性を隠し持つてんのさ!!」

………大体の人が、ね。

「ま、一番暴れたのは緑谷で、次点は夜嵐と轟だろうな」

「緑谷なんてこの一週間で2度も新聞の一面に乗ったもんな。マスコミ押し付けてきて大変だったろ?」

「う、うん……ホテルとか、病院にまで押しかけられてちよつと困っちゃった……」

「右に同じく!」「左に同じ」

ヒーロー活動の合間、事後処理なんかをしている時、毎回のようにマスコミの人たちが押しかけてきて本当に大変だった……オールマイトとか、トークがうまくなるのもよく分かつちやつた。本当に色々なことを聞かれるんだもん。彼女とか居ないし……

「飯田ちゃんもよく無事だったわね。ヒーロー殺しに狙われて、ケロ」

梅雨ちゃんの心配事だ。飯田君の事を本当に案じていたのだろう。周りの皆も似た

ような感じに、飯田君に視線を集中させている。

「——ああ、彼ら3人のお蔭で助かった。歪んでは居たが——確かに信念は有った。だが、自分ではそれが正しいと思いきこんでいる——思想犯とは、あそこまで精神が強固になるものだったとは」

プロヒーローでさえ、気圧されるほどの威圧感。信念。間違っている、確かにヒーロー殺しは持っていた。

「だから、これ以上俺のようなものを出さぬ為にも!! 改めてヒーローへの道を俺は歩む!!!」

「飯田君……!」「飯田!」「委員長……!」

完全復活した様子の飯田君に、皆が安心したようだ。

「さアそろそろ始業だ席につきたまえ!!」

ちよつと元気すぎるけど……ね。

それから毎日忙しく、月日はあつという間に過ぎ去って、もうすぐ期末試験だ。気合を入れないと! 特に、期末テストで合格点に満たなかったら学校で補習地獄つて言うことで皆が気合を入れている。それは当然僕もだ。No. 1ヒーローになるために、ここで躓く訳にはいかない!

雄英の会議室、本日の議題は期末試験の訓練内容だ。ヴィランの活動が活発になる中、ロボとの戦闘訓練は実用的ではないと言う事で、対人戦闘・活動を見据えたより実戦に近い教えを重視することとなった。

という訳で、早速ペアが振り分けられていく。今までの成績や傾向から、何が弱点かを把握しその弱点を突く教師が振り分けられるスパルタ方式。凄まじく難易度が高い。皆が順当に振り分けられていく中、残ったのが夜嵐と緑谷だった。

「最後に残ったのは緑谷と夜嵐ですが……オールマイトさん、頼みます。この二人が組むと、中々に手がつけれられない。高いフィジカルと強い個性を持ち、やや大雑把なきらいが有るものの繊細なコントロールさえ可能な夜嵐。そして、圧倒的な身体能力と技術に判断力を持ち、更に遠近両用に対応できる戦闘スタイルを使いこなす。おまけに数々のガジェットをさえも身につけ始めた緑谷。お互い推薦と一般の一位同士ですが、正直この二人は、戦闘面だけで言えばすぐにもプロに出して通用します。よって、この二人には——圧倒的な格上の経験を積ませたい。特に緑谷はこれまで負け無しで、強敵のいなし方の経験が少ないです」

『異議なし』

これにもまた、教師陣が満場一致で賛成する。そして、一人決意を固めるオールマイ

ト。

「(思えば……私は教師としても、師匠としても中々彼に教えることが出来なかつた……なら。せめて、立ち塞がる壁としての役割は全うしよう……!)」

……だが、彼は肝心なことを忘れていた。これはあくまで——試験なのだと言うことを。

……と、そんな経緯を説明されるクラス一同それぞれのペアが割り振られていき……

「そして、最後に残った緑谷と夜嵐がチーム……で、相手は——「私がする」

「オ、オールマイト!?!」

「ま、まさかオールマイトが相手なんて……う、うおおおおおおおっ!　こ、これ以上無い熱い展開ツスね……!」

驚く緑谷に、気合を入れようとする夜嵐。だが、流石に相手がオールマイトとあつては動揺が隠しきれない。

「マジか、あの一般、推薦トップコンビとは言えオールマイトが相手つて……」

「緑谷ちゃんと夜嵐ちゃんは大丈夫かしら……」

流石に、これには周囲も心配の視線を向ける。いくらなんでもハードルが高すぎる

「まあ、心配するな。教師陣には、それぞれ体重の半分の重りを装着することになってい
る」

「ちなみに、デザインはサポート科の発目君だぞ!」

これは、生徒達に逃げ以外の選択肢を用意するためのハンデ。確かに、普通に戦闘す
るイレイザーヘッド等には有効なハンデだろう。だが……

「体重の半分……オールマイトが付けるハンデが、たったこれっぽっち?」

『あ……………』

緑谷の眩きに、固まる多数。リニアより速い速度で移動できる男にとつてはあまりに
軽すぎるハンデでは無かろうか。

「……………い、今からでも増やすかい?」

「いえ、予備がなくて……………」

「……………」

微妙な空気の中、イレイザーヘッドが口を開く。あえて読まないようだ。

「さて、それぞれ試験会場に散ってもらおう。……………ああ、緑谷と夜嵐は最後だ。全員、こ
の3人の試験は見てみたいだろうしな。では、それぞれバスに乗って移動しろ」

『はいっ!』

と、それぞれがバスに乗り、各試験場へと向かっていく。

「緑谷あ！ 絶対合格しようぜ！」

「うん、勿論だよ！ 早速作戦会議をしよう！」

ともあれ、気合を入れる二人。相手はNo. 1ヒーローオールマイト。ハンデがあるとは言え、楽観など微塵も出来る相手ではない。

「それで方針だけだよ、どうする？」

「逃げの一択……って言いたいところだけど、オールマイトがそれを許すとも思えない……。多分、二人が背を向けた時点で即捕まえられると思う」

「俺も同意見だ。俺たちは追い詰められたネズミになっても、ネコを噛むことくらいは出来るんだって見せつけてねえとな。だけど、逃げが主体って事では良いよな？」

「勿論！ 隙があれば、お互い即出口に駆け込もう！」

「ウツス！ それで行くぜ！」

方針が決まると、お互い拳を合わせて、気合を入れる。それから、モニタールームへ向かって皆の試験を見学するのだった。各々の先生が、それぞれ弱点を的確についでく様は、流石プロヒーローと言わざるを得ない。

「凄いね……」「ああ……」

砂藤・切島ペアの様にあえなく倒れてしまうペアも有れば、常闇・蛙吹ペアの様に持てる個性を見事出し切り合格したペアも有る。それに、瀬呂がやられ峰田が根性を見せ

て合格するなど、意外な結果を出したペアも有った。そして、どれもが……

「うおおおおおとおっ! 熱いツス! 燃えるツス! これが、雄英の試験ツスカ!」
「うるさいよ、静かにおし!」

「すいませんでした!!」

床に頭を叩きつけて謝罪する夜嵐。だが、興奮が冷めやらぬようだ。元々熱い男なだけに、ここまで熱いものを見せられては我慢もできなくなるだろう。緑谷も、個性ノートを取り出して皆の情報をさらに補充していく。そして、段々と試験を終えたクラスメイト達が戻ってくる。

「だーっ! ダメだった!」

「すまねえ、切島……途中で眠くなっちゃまって……」

「いや、俺の方こそ途中で硬化が切れちゃまって……」

「ふ、二人共どんまい!」 「次、頑張るツス!」

「おう!次はこうは行かねえ……!」 「もっと、個性の持続時間伸ばさねえとな……」

負けたのに次へ切り替えられている切島・砂藤ペア

「あ、梅雨ちゃん、常闇君、合格おめでとう!」

「ケロケロ、ありがとう緑谷ちゃん。夜嵐ちゃんと一緒に頑張つてね」

「敵は強大——遙かなる高み——しかし、貴様らなら超えられることを信じている……」

「おう！ やってやるぜ！」

見事合格してきた常闇・蛙吹ペアなど、見ていた二人はそれぞれに感想や反省点を出し合っていていく。モニター越しに見ていたからこそ、分かる情報も有るのだ。

そして、ほぼ全ペアが終わった辺りで、緑谷と夜嵐も試験会場へと移動する。バスにオールマイトも一緒にちよこんと乗っているのがものすごくシニールである。だが、オールマイトと話せるレア機会なので、夜嵐はこれがチャンスとガンガン話しかけていた。オールマイトも、普段あまり出来ない生徒との交流ができて実に楽しそうだ。そして、ほんの数分揺られてバスが停まる。

「じゃ、これから私は配置につくから！」

そう言うと、一瞬で見えなくなるオールマイト。正直ハンデを付けている気が全くしない。——だが……それを乗り越えることこそ、雄英の校訓。Plus Ultraの精神だ。

「おっし、緑谷！ 行くぞ！」 「うん！」

ガシツとお互いに手を合わせ、気合を入れる。

”うちのクラスのトップスリーの内の二人のペアか……どうなるのかな？”

”あいつら、マジでスゲーからな”

”でも、オールマイトはもつとスゲーぞ”

皆もモニターにかじりついている。これからの試験に、何よりオールマイトが動くことに皆の興奮が高まる。

”緑谷ー！頑張れよー！”

”夜嵐君も！ 熱くなりすぎないようにねー！”

聞こえなくても思わず応援してしまう。気分はなんだかスポーツ観戦だ。

”お前達、真面目に見ろ。何のために最後に回したと思ってるんだ”

と、終わった教師たちもゾロゾロとモニタールームに入ってくる。皆が皆、やはり興味はあるのだ。

『いよおおおおおしー それじゃあ行くぜえー 3ー2ー1ースタートー！』

何故か、スタートの合図をプレゼントマイクが出している。すっかり実況する気満々の様だ。

スタートと同時に、物陰に隠れる二人。やはり、見つからないなら見つからないに越したことはない。物陰から物陰へ、こそこそすばやく動く二人。

”やっぱりそうするよな” ”オールマイトとガチンコとか考えたくもねえ……”

まず、どう動くかにしろ、オールマイトの位置と様子を確認してから……そう思っていた二人だったが——その考えは、甘過ぎた。

突如、轟音と暴風と共に、街の一角が吹き飛ばされる。

「!?」

「うおおおおおおいっ!?」 「マジかよオールマイトオ!?」 「ふ、二人共大丈夫!?」

「街への被害などクソくらえだ。試験なんだと考えると痛い目見るぞ。私はヴィランだ、ヒーローよ。真心込めてかかってこい」

「50%! スマアアアアアアアアアアアアアアアアッシュー!」 「雄風え!」

オールマイトの声が聞こえるや、砂埃の中から後先考えず全力で左右から攻撃を仕掛ける二人。しかも、緑谷は近距離、夜嵐は遠距離の二段構えである。並のヴィランなら、これだけでもうノックアウトされるに違いない。だが――

「いきなり全力ブツパ、良い判断だねえ」

並でないヴィランであるオールマイトは、クロスさせた腕を左右に開く。ただその動作だけで、風を打ち消して夜嵐を吹き飛ばし、緑谷の渾身のスマッシュを受け止め、また反対側に吹き飛ばす。

「やべええええええええ!?」 「何処にハンデが有るんだよオールマイトの!?」

一瞬で弾き飛ばされる二人だが、思考を途切れさせること無く即座に次の行動に移る。緑谷が即起き上がって、オールマイトとは反対方向に走り、それを砂埃で覆い隠して視界を途切れさせる。

「H A H A H A! 煙幕は確かに有効だ——私で無ければなあ!」

緑谷の方に走りつつ、軽く腕を一振りするだけで砂埃を全て払いのける。だが、その払い除けた動作をした後の腕に向かって、緑谷が突っ込んできた。

「逃げたフリか!」

” うおおおおおつ!” ” 凄いですわ二人共!”

「捕獲——!」 「は無理なんだよなあ!」

だが、緑谷が見えてから超反応で上半身をずらすと、そのまま緑谷の足を掴み、そのまま夜嵐に投げつける。タイミングが完璧に決まったのに、それでもねじ伏せるのがN O. 1ヒーローたるオールマイトの底力だ。

「ゲハアっ!」 「うわっ!」

突風で威力を弱めるも夜嵐に激突し、そのまま錐揉みで地面に倒れる二人。

「ヘイヘイヘイ! どうしたどうした、そんなものか!」

「……ヤバいッス……想像以上ッス……!」

「うん、敵にして初めて分かる、この威圧感、判断力……!」

” えつ、ちよつとオールマイト本気出し過ぎじゃ……” ” こ、これつて試験なんだけど……”

実力行使が難しいと判断するや、即逃げる方向に思考を切り替える。しかし、二人共

逃げるだけではダメだ。どちらかが止めねばすぐ追いかけてくる。そして、足止めは今回は緑谷が行う。

クラウチングスタートの体勢を取ると、オールマイトに向かう。

「行くぜ緑谷あー！ ”順風！”」

緑谷のスタートと同時に、風で射出。超スピードで、全力でオールマイトにぶつかる。

「50%……エア・ジョーシアスマアアアアアアアアッシュー！」

オールマイトに蹴りが炸裂し、幾らか吹き飛ばすと、その横を夜嵐が駆け抜ける。

「任せたぜええええええつ！」「行けえええええええええッ！」

蹴りからの着地、更に左右拳のラッシュ、ラッシュ、ラッシュ！ だが――

「同じ攻撃ばかりだと、見切られるぞ少年！」

ラッシュの癖を見抜き、出来た隙に、腹パン一発。その一発で、今まで入れた数十発が全てひっくり返される。うづくまる緑谷をほうっておき、対象を夜嵐に変えると、一気に距離を詰め、足で地面に押し付けた。

だが、そんなオールマイトに飛んでくる衝撃波。腹を押さえながら、何とかデコピンで起こす衝撃波で遠距離攻撃するも、虚しくかき消された。

”や、やばすぎるぞオールマイト……” ”コノ試験、ココマデ厳シクテイイノカ？”
見ている側も戦慄する恐ろしさである。尤も教師陣は訝しんでいたが。

「H A H A H A! パワー・スピードは良いけど意外さが足りないなあ! 君たち、直線的過ぎるんだよ!」

「!」

確かに、今までの攻撃は、兎に角パワーやスピードを上げての攻撃や風をぶつけるだけだった。オールマイトのパワーやスピードばかりに目が行き、技巧にまでは行っていないかった。

「旋風え!」

夜嵐の風が、竜巻のようになってオールマイトを包み込む。一緒に周囲の瓦礫の山が舞い上がるほどの威力である。そして、瓦礫が地味にオールマイトに当たる。

「イチチツ、確かにチョツピリ痛いけど、この程度かい?」

「いや……とっておきの物が有るツス! 緑谷あ!」
「おう!」

その竜巻の中に迷いなく緑谷は飛び込むと、瓦礫を足場に、瓦礫から瓦礫へと飛び移り、オールマイトの周りを回り始める。その動きはまるで……

「グラントリノかつ!」

「はいっ、参考にしました……!」

竜巻の中をピンボールのように跳ね回り、四方八方から手錠をかけようと狙う緑谷。それを目で追って対処しているオールマイトだが、こつそり忍び寄るのはもう一つの手

錠。繊細な風のコントロールで、竜巻の中に手錠を潜り込ませる。

”うおおお!”　す、すげえ……あの二人……!”

そして、タイミングを合わせ、2つの手錠が同時にオールマイトに襲い来るが——
「見事、だが、まだまだあ——」

アッパーカット一発で、竜巻も瓦礫も緑谷も手錠も、全て吹き飛ばした。

「なあああっ!?!」

渾身の一撃を更に外され、二人の心に軽く絶望感がよぎる——が、まだ、終わったわけではない。最後まで、諦めない。

「スマアアアアアアアアアアッシュユー!」 「順風!」

スマッシュで空気を殴り、その反作用でゴールまで一直線に飛んでいく。そして、それを後押しする夜嵐。

「行かせるかああああああああっ!」

だが、阻もうとするのはヴィランオールマイト。空中でも加速しつつ、背中から迫ってくる威圧感に背筋が寒くなりつつ、それでも進み続け——ゴール手前、ギリギリで、止められた。地面に叩きつけられ、動きが足で封じられる。

「ま、まだ……僕は……僕たちは試験に……!」

オールマイトの足の下、それでも地面にスマッシュを撃ち、もがこうとするが最後まで

で脱出はできなかった。そして、追ってきた夜嵐も、ギリギリの所で間に合わなかった。

『終——了——!』

「……………ごめんね、夜嵐君……間に合わなかった……」

「俺こそ、すまねえ……もつと、風の力が強ければ……」

疲労とダメージから、地面に倒れて、お互い謝る二人。歯を食いしばり、涙すら浮かんでいた。すべてを出し切ったのに、勝てなかった。特に緑谷は、オールマイトの期待に応えられなかった様に思えて、余計に涙が止まらない。

「う、ううう……………うああ……………」

「う、ウソだろ、あの二人が……………」

「……………頑張るんだ、少年たち。その悔しさが、涙がきつと君たちをもつと強くする……………。だから、それまでは……………私が壁として立ち塞がろう……………そして、いつか私も超えていく……………」

そんな二人を、優しい目で見守るオールマイト。きつと、彼らなら大丈夫だと、そう信じて。

『あの、オールマイト。なんだかい話でまとめようとしなくて下さい。これ、試験なんです生徒が突破できる難易度にならないとダメなんですけど』

「……………あ……………」

やつちまつた感が、顔に張り付くオールマイト。見ている生徒たちも呆れ顔、教師たちは一様に頭を抱えている。師匠としてはちよつと成長できたけど、教師としてはダメに過ぎた。

期末試験総括

「うう、畜生……」「くっ……届かなかったツス……」

悔しそうに倒れ伏す緑谷と夜嵐。そして、横でオロオロしているオールマイト。そして、めっちゃ気まずいモニタールームの生徒及び教師一同。ドーすんだ、これ感がものすごい漂っていた。だが、オールマイトには制限時間が有るので、とりあえず先に呼び戻すことにした相澤先生。

『……あー、その、オールマイト。ちょっとお話がありますし、気まずいでしょうし戻ってきて下さい。今すぐに』

「あ、うん、わ、分かった。じゃ、そこのお二人、また後で！」

「あ、は、はい……」「うっす……」

そう言うと、逃げるように去っていくオールマイト。心なしか、背中が煤けている。オールマイトが去っていく中、二人はお互い支え合い、何とかバスへと戻っていく。緑谷はフルカウルの上限50%を常に出していたせいで、夜嵐は風の出力を限界まで上げつつ、コントローラーも利かせる両立をずっと続けていたため、消耗しきっていた。バスへ乗り込むと、倒れるように椅子に体を預ける。しばらく、お互いの荒い呼吸だけが響

く。

「……期末、落ちちまつたな……」

「……うん……」

「……補習地獄か……。でもよ、勉強だけじゃもつたないし、他の落ちたやつも巻き込んで、特訓しようぜ。……次は……。負けねえ……。！」

「……うん！」

敗北に打ちのめされる二人。しかし、それでもすぐに立ち上がる。ヒーローに、倒れている暇は無いのだから。

一方その頃、雄英のとある一室。オールマイトは床に正座させられ、回りを教師陣が取り囲んでいた。皆一様に、目が冷たい。

「いいかい、オールマイト君。あのやり取りは確かに美しいし、君が彼らの壁になろうとしたのも分かる。だがしかしだね、これは期末試験の一環であり、全力と最善を尽くした生徒がクリアできる難易度で無くてはならない。どうあがいてもクリアできないクソゲーではいけないでね。他の皆も見ているしあの高さのハードルがデフォルトと思われても困ってしまうのだよ。師弟ならば、最後の最後に超えられる壁でも良いのであろうが、君の立場は教師であってだね……」

長々と、とても長々と続くお説教。トゥルーフォームのオールマイトは、床に座り、平身低頭ひたすら謝り続けている。

「——で、彼ら二人の合否ですが……」

ひたすら校長に説教されているオールマイトをほっといて、判定を始める他の教師達。

「マア合格ダロウ」

「不意打ちを受けてからの素早い反応、攻めと逃げの判断……技の威力や精度にチョイス。どれも適切。惜しむらくは相手が全くハンデを背負ってないに等しいオールマイトが相手だったということですね。これを不合格は流石に不合理に過ぎる」

「どうやら、満場一致で合格のようだ。逆に、試験内容自体は成功だが、不合格に落とされた者も居る。瀬呂に、麗日と青山だ。それでも瀬呂は峰田を逃した分まだいいが、麗日と青山は相手が本物のヴィランだったら何も出来ずに終わっていた。」

「——と、ではこの様な形で。校長、後は頼みます」

「ああ、任せておきたまえ！ 君が平和の象徴として忙しいのは分かる。しかし、教師でもあるのだから——」

「(し、しびれるっ……！)」

こうして、オールマイトはひたすらに校長からのお説教を受けるのだった。

次の日、1—A。そこでは一部のメンバーが、お通夜の様に落ち込んでいる有様だった。

「皆……土産話つ……ひぐつ……楽しみに……ううつ、してるつ……がらー！」

「み、皆様まだ分かりませんわ！　どんでん返しがあるかも知れません……！」

「八百万、それ、口にしたらなくなるパターンだ！」

「なんですつて!!」

生真面目にも動揺する八百万。やはり天然のようだ。

「試験……一矢報いることも出来なかった……」「……ッス」

「うおおおおお!!　テンション低いぞこっちの入試一位コンビも!」

「やむ無し。絶望は歩みを止める……」

隅っここの6人はひたすら落ち込んで、クラス中が心配している。そして、さらにもう一人。

「わかんねえのは俺もさ。峰田のお陰でクリアしたけど寝てただけだ」

それを聞いて、露骨に耳に手を当て称賛を聞く峰田。

「で、でも……それは瀬呂君がミッドナイトから逃したお陰だし……」

「……あゝ、でも、それどれ位加点されるのかな……。兎に角、採点基準が明かされてな

赤点組は、行けることに喜んでいるが、逆に課題をクリアしての赤点組はどん底に叩き落された格好だ。皆一様に頭を抱えている。

「今回の試験、我々ヴィラン側は生徒に勝ち筋を残しつつどう課題と向き合うかを見るように動いた。裁量は個々人によるが、でなければ課題云々の前に詰む奴ばかりだったろうからな」

「本気で叩き潰すとおっしゃってたのは……」

「追い込むためさ。そもそも林間合宿は強化合宿だ。赤点採った奴こそ、ここで力を付けてもらわなきゃならん。合理的虚偽って奴さ！」

「ゴーリテキキョギイー!!」

悪い笑顔の相澤先生に、クラス中から総ツツコミが入る。意地悪な人だ。横では、敗北組がわあい!と喜びを顕にしている。

「またしてやられた……! さすがは英雄だ! しかし! 二度も虚偽を重ねられると信頼に揺らぎが生じるか!!」「わあ、水差す飯田くん」

シユタツと手を上げ起立しツツコミを入れる飯田。だが、今回はそれを受け入れる様だ。

「確かにな。省みるよ。ただ全部嘘って訳じゃない。赤点は赤点だ。お前らには別途に補習時間を設けている。ぶっちゃけ学校に残つての補習よりキツイからな。」

そうして謝ると、あつという間に姿が見えなくなる。相変わらず忙しい人だ。

「……ま、そんなわけだ。お前ら二人はむしろ成績上位での合格。じゃ、合宿のプリント
回すぞ」

何はともあれ、無事に全員で行けることになったのは何よりと皆が思っていた。夏休みまでの残りの期間、それぞれがまた思い思いに過ごしていく。その彼らの日常を、これから覗いていくとしよう。

ドキドキの授業参観

職場体験が終わり、皆が期末に備え始めた頃、各家庭に一通の書類が送られた。授業参観のお知らせである。普段、一般人お断りで中々家族でも見学が出来ない雄英に入る数少ないチャンスと有って、楽しみにしている人も多い。特に、ヒーロー科ともなれば、その授業を見せるだけで見学料を取って良いのでは？と思えるほどだ。

そして、学生らしい事として、授業参観では親への感謝の手紙を読むらしい。皆がそれぞれ気恥ずかしながら、手紙を用意していく。そして、緑谷家では……

「ねえ、出久、どっちが良いと思う?！」

土曜日、クラスメイトと遊びに行こうとした出久の前に提示されたのは、紺色のスーツと薄いピンクのスーツ。それを身体に合わせて心底迷っている顔をしているのは、出久の母親だ。

「何処か行くの?！」

「違うのよ。今度の授業参観に、どっちを着ていこうかと思って……」

痩せている人妻の引子は、正直どっちでも似合う。出久もどっちでも良いと思っていたが、母親含めて当然女性というものはそんな答えを望んでいない。おまけに、あまり

女性と付き合いが無い出久にとっては更に難易度が跳ね上がる。だが、答えないわけにも行かない。少し悩んだ後、とりあえず答えを口に出す。

「……」

控えめで清楚さが出る紺のスーツだ。

「紺？ でもね、なんだか暗い感じに見えない？」

「な、ならピンクのほうが……」

「可愛いんだけど若作りに見えないかしら……？」

「え、えつと……じゃあそこが気になるなら紺で良いんじゃないかな？」

「そうねえ……」

このままだといつまでもつきあわせれそうなので、早く出ていこうとする。出久。だが、玄関横の洗面所で、更に引子は出久を引き止める。

「……ねえ、ピンクって太って見えない……？」

「母さんは太って見えないって……」

昔はちよつと太ってたことも有ったけど、今はちゃんと痩せているのに、と。ため息をつく出久。女性の悩みはやはり難しい。

「目立つのが気になるなら紺の方が良いんじゃない？」

「そうねえ……紺の方が汚れとかは目立たないかもねえ？」

「汚れ?」

「USJとか、凄いとこなんですよ? その時ピンクだと汚れちゃうかもって」

それを聞いて、出久は納得する。確かにあの環境だと、汚れが目立たないほうが良いだろう。

「うん、それじゃ、行ってくるね!」

「気をつけるのよ!」

今日は上鳴や瀬呂、砂糖と遊びに行く予定だ。普段忙しくて中々交流が持てないから、こういう時に遊ぶのはとても大事だ。そう思うと、緑谷は気分良く駆け出していくのだった。

轟は、都内のある病院に来ていた。母親の、入院している病院である。大きく設備が整っていて、今日も多数の人が詰めかけている。そんな彼らを横に、エレベーターに乗ると病室階のボタンを押す。今日もそうだ。母に会いに来るたびに、緊張する。それでも最初よりは随分とマシになった。初めてきたときなど、自分が緊張していることにさえ気が付かなかったほどだ。

こつこつと立てる自分の足音も自覚して、病室まで歩みを進める。途中、知り合った看護師さんが、「あら、珍しいわね、二人同時になんて……」と言ってきた。どうやら、

他の誰かも来ているようだ。

病室の前へ来ると、一つ深呼吸。ポケットに入れてあるプリントがやけに重く大きく感じられる。ガチャリ、とドアを開けると、そこでは母が、鉄格子越しに外を見ていた。「…………お母さん」

「焦凍？」

振り返ると、こちらを見るのは柔らかい笑み。あの日の、怖い光景は何処にもない。ただ、こちらを見た時ちよつと目を見開いた。

「どうかした？」

「あ…………ううん、なんでもないわ。ほら、座って」

そう言うと、母はベッドへと腰掛け、今まで座っていた椅子を焦凍の方へと勧める。そうして、はつとした事に気が付かれるのを察すると、「ごめんね」と謝る。

「…………いや、べつに…………何か、変なところでも？」

と、自分の体を見下ろす焦凍。身だしなみは整えてきたはずだけど、何か変だろうか。「違うの。ただ、その…………平日でゆっくり姿を見るのは久しぶりだったから…………大きくなったなあと思って」

そう言えば、平日に来たのは初めてだったか。今日も平日なのに、花瓶には新鮮な花が生けられている。

「ごめん、急に来て」

「何言ってるの。来てくれるのはいつでも嬉しいわ」

謝れば、母親はきつとそう言ってくれるだろうと思つて。とても、不器用な甘え方。救い出すと誓いながら、母の前だけでは、ずっと昔に時が止まってしまったようで……どうすればいいか、分からなくなってしまう。

「……あ、そうそう。焦凍がそろそろ来るかもと聞いて、買っておいだの」

そう言うと、病室に備え付けの冷蔵庫のドアを開ける。中には、色々な飲み物が詰まっていた。その中で目に留まるのは、牛さん印のヨーグルト。昔、好きでたくさん飲んでいた物だ。

「焦凍、昔から好きだったでしょ？ 売店で見つけちゃったから。つい、ね……でも、もう焦凍も高校生だし……好みが変わってるかもって思つたら気がついたらこんな」

ジュースにお茶に、スポーツドリンクに栄養ドリンクまで。悩みながら買ったのだろう。でも、昔の好物を覚えてくれたことが嬉しくて。牛さん印のヨーグルトに手を伸ばした。それを見て、嬉しそうにニコニコと笑ってくれている母親を見ると、心がぽかぽかする。

中々話せない、もどかしいような時間の流れの中、先に口を開いたのは母親の方だった。「……学校はどう？」

「うん……」

学校と聞かれ、意識がポケットのプリントに行く。授業参観——お母さんが、来れるはずがないのに。

「今日は、救助器具の授業が有った。ヘリコプターに友達を吊るして載せたり、乗ったりした」

「ヘリ？ そんなこともするのね」

思えば、雄英の授業内容は全然話してこなかった気がする。

「ヒーローは、戦うだけじゃなくて人助けもしなきゃならないから、その一環」
「そうね」

「それに、ビルから救助袋で降りて、使い方も教わった」

「うん」

「避難信号の出し方とか」

「そう」

「それと……オールマイトが居るんだ」

「良かったわね。昔から焦凍、オールマイトが大好きだったもんね」

「うん……」

焦凍の話す内容に、優しく相槌を返す母。自分もかつて、オールマイトに憧れていた。

けど、いつの間にか笑顔も、憧れていたものも母の言葉も忘れていた。

「緑谷って奴が居るんだ。あと、夜嵐って奴も」

「クラスメイトの？」

「うん」

夜嵐は、入試の時に酷いことをしちまった。アイツと同じ目で、何も見ないで。そうして——俺と……アイツと同じ目をする奴を増やしちまった。あんなに熱い奴だったのに。……だけど、もう一度向き合ってくれた。緑谷に影響されて。そして、アイツに、真つ向からぶつかっていくくらい、熱いやつだった。俺にも、何度も何度もぶつかってくる。

そして、緑谷。USJの時から、ヴィランに立ち向かっていった。体育祭の時も、俺や夜嵐とも全力でやりあって。——勝手にズケズケと、俺に余計なおせっかいかいをかいてきて。

”君の、力じゃないか!”

ずっと全力で、本気でヒーローを目指して。俺にも、熱く真つ直ぐぶつかって来て。あいつの全力の熱さに、一瞬何もかも忘れた。あんなに憎かった、父親のことですら。忘れて初めて、囚われていたことに気がついた。俺も、夜嵐も。

「体育祭で、戦ったんだ。あいつら、熱くて、強くて、凄くて。——それで、負けたくない

くて。勝ちたくて。初めて、全力で戦ったんだ」

「……本当に、凄い奴らなんだ」

ぼつりとお母さんに溢れたのは、純粋な思い。ヒーロー殺しや脳無と一緒に捉えた、大切な仲間たち。

呟いた焦凍に、母親は優しく微笑んだ。

「良いお友達が出来たのね」

「——うん」

また沈黙が降りた。でも、それは悪くなくて。むしろこそばゆいくらいで。

「あ、焦凍、来てたんだ」

姉の冬美が入ってきた。手には、母親の洗濯物を入れた籠を持っている。

「ああ、冬美姉……」

「何か用事でも有ったの？ あ、洗濯物入れとくね」

「ありがとう、いつも」

「何言ってるのって」

洗濯物を手慣れた様子でしまいつつ、興味があるのは焦凍の用事だ。

「……………これ」

焦凍はしばらく迷うと、ポケットからプリントを差し出す。

「……授業参観のお知らせ？」

「……………うん」

来れないのは分かっていた。でも、つい足を運んでしまっていた。

「そっか……………なるほどね」

「焦凍、ごめんね、お母さん行けなくて……」

申し訳なさそうに謝る母に、焦凍は焦った。

「い、いや、俺こそ……………ごめん。母さんのこと、考えてなかった」

「焦凍……………」

そんな様子に、悲しそうに目を伏せる母と冬美。

「あ、あの、二人共、私が行くよ授業参観！」

だが、そんな空気を払拭するように、冬美が参加の提案をする。

「は？ 学校の授業が有るんだろ？ どうするんだよ？」

冬美は小学校の教師をやっているし、ましてや姉だ。授業参観が出来るのだろうか？

「大丈夫、頑張れば半休位取れるし。そうだ、母さんの為にビデオ撮るよ」

「なっ……………」

「あら、それは楽しみね」

本当に嬉しそうに笑う母に、恥ずかしいから止めてくれとはとても言えない。だが、

口籠る焦凍の様子を見て、心配そうな表情をする母。また、無理を言ってしまったのだろうか……

「あ、いや、その……学校に聞いてみないと分からなくて」

悲しそうな、不安そうな母の顔。

「……で、でも……ちゃんと撮ってもらえるよう、頼んで見るから」

「うん、よろしくね」

自分のことを、楽しみにしてくれる母。あの過去が、またもう一歩遠のいた気がした。

「あ、そうだ、焦凍。その花の水、変えてきて」

「分かった」

花瓶を持ち上げ、水を取り替えに部屋を出ようとする。そう言えば……この花は……。

「気になるの、焦凍？」

「……うん。時々、見かけるから——」

「……それは、私が好きな花なの。……時々、持ってきてくれるみたい」

それを聞いて、冬美の方を見るが、首を振られる。違うようだ。

「それじゃあ、夏兄？」

「ううん——この花はね、昔、あの人の前で一度だけ好きだって言った花なの」

『！』

冬美と焦凍が、同時に驚く。——ずっと、来ていたのか。

「……まだ、怖くて会ってないの。——でも……」

そう呟くと、新聞を取り出す。その先には、ヒーロー殺しへ叫んだセリフや、下手くそな笑顔が乗った記事。

「……あの人も、変わり始めてるのかしら？」

憎かった父親。された事、母にしたことを許すつもりは無い。だが——

「……うん」

緑谷が、夜嵐が。あいつらの熱さが俺を変えていくように——アイツも変わっていくのではないか。そう、思った。

授業参観当日——予鈴前の教室はいつものように賑やかだったが、話題はやはり授業参観のことだ。

「あ、出久君おはよう！」「緑谷ちゃんおはよう」

「おはよう、麗日さんに梅雨ちゃん」

女の子二人に話しかけられてちよつと照れる緑谷。女の子と話すのに慣れるのは、まだまだ先の様だ。

「今日は参観日だね。出久君は誰が来るの？」

「お母さんだよ。二人は？」

「私は父ちゃん！」

「私もお父さんよ、ケロケロ」

緑谷も、女子二人もなんだか気恥ずかしそうだ。やはり、身内が来るといふのは中々に照れる。周りを見渡すと、皆も何処かそわそわしていた。

「やあ、おはよう！ 今日が良い授業参観日和だね！ 緑谷君、麗日さん、蛙吹君！」

「おはよう、飯田君！」「おはよう！」「飯田ちゃんおはよう」

更に、後から入ってくる飯田。だが、心なしかちよつと寝不足のようだ。

「ケロケロ、そんな日にどうして眠そうなの？ 飯田ちゃん」

真面目な委員長らしくない様子に、首をかしげる三人。だが、その理由はとても彼らしいものだった。

「ああ、感謝の手紙を書いたら感謝の気持ちで溢れてしまつてね！ 長くなりすぎてはいけないと削りに削つてようやくこの分量にまで減らせたんだ！」

と、ポケットから取り出したのはぎゅうぎゅうになつて紙の束。とても削つたようには見えない。だが、本当に彼は感謝の気持ちでいっぱいだからここまで書いたのだから。

「うわっ!? 凄いいいね、それ何枚!？」

「40枚から削りに削って20枚だ。……コレ以上は一文字も削れなくてね……」

「そんなにつ!？」

「委員長、流石やん……」

「飯田ちゃんらしいわ」

そのままちよつと雑談に入る4人。と、緑谷は更に新しく入ってきた夜嵐を見つける。

「おはよう、夜嵐君」「おつす! 緑谷! おはよう!」

今日もうるさいくらいに元氣一杯だ。続いて、轟も入ってくる。

「それで、二人共誰か来る?」

「俺は親父が来るツス!」「俺は姉貴が。小学校の教師やつてるんだけど、半休取って来てくれるって」

「へえ、お姉さんが……良かったね、轟君」「来てくれたなら何よりだな!」

事情を知っている二人は、轟の家族が来てくれることを、とても喜んでいる。自分ひとりだけ来ていないなんて言うのは、とても寂しいからだ。

「む、皆そろそろ予鈴の時間だぞ!」

電波式の腕時計を見て、きっかり30秒前に時間を伝える飯田。

「はい、委員長！」「りょうかい」相澤先生は時間に厳しいからな……」

それぞれが席に着くと、静かになる。もう、相澤先生が来るだろうと思つて——予鈴が鳴り終わつても、誰も来なかつた。

「え？ 相澤先生が来ないの初めてじゃね？」

「なつ、見本であるはずの教師が遅刻とは……これは雄英高校を揺るがす一大事だぞ、皆！」

「ええつ、つつても、相澤先生だつて人間だし、たまには遅刻することだつて有るんじゃないかね？」

「しかし瀬呂君、我々が目指すヒーローとは一刻を争う人々を救ける仕事だろう！ 一分一秒の遅れもおろそかにはしてはいけないはずだ！」

真面目な飯田はヒートアップするが、疑問に思うものも多数居る。

「確かに珍しい……相澤先生、どんな時もスケジュール通りに行動するのに」

なにか見落としはないかと、システム手帳をチェックしたり、スマホをチェックしたりしてみるが、特に何もない。そんな中、業を煮やした飯田が立ち上がる。

「よし、僕が委員長として職員室まで確認に行こう！ 皆はまっついてくれたまえ！」

「頼んだ！」「さつすが委員長！」

と、飯田が出ていこうとした際、一斉に皆の携帯が鳴る。何が起きたのかと慌てて取

り出すと、そこには相澤先生からのメッセージが。「今すぐ模擬市街地に来い」というものだった。

「市街地？　なんで……」

「……あつ、オレ分かった！　相澤先生、あつちでまとめて授業……つーか手紙の朗読と施設案内するつもりなんじゃね？　合理的に」

頭の上に電球でも浮いたようにひらめいた上鳴。確かに、相澤先生ならばやりそうなことだ。だが、怪訝そうな顔をしているものも居る。その一人が緑谷だ。

「緑谷君、どうしたの？」

麗日に話しかけられると、疑問を口にする。

「うん、相澤先生がそんな二度手間な事するかと思ってさ。なら、最初から僕らも呼んでおけばいいのに」

そう言われ、またそれもそうだと頭に？マークを浮かべる1-A一同。だが、更に飯田が推論を重ねる。

「ひよつとして、これは指定地に早くたどり着くための訓練ではないだろうか？　ヒーローが呼ばれるのは何時も突然だ！　相澤先生が無駄なことをするはずがない！」

この推論に、これまた頷く皆。それだけ、相澤先生に信頼が有ったからだ。

エリア移動のため、職員室に一報を入れると直ぐにバスが用意される。がたごとと揺

られて、辿り着いたのは市街地エリア。だが、出迎えは無い。バスは来た道に戻っている。

「この中で待っているということか？ さあ、行こう！」

「？ なにか臭うぞ？」

障子が首をかしげる。鋭い五感は、市街地には無い臭いを敏感に嗅ぎ取る。

更に複製腕を伸ばして、位置を探ると、奥からだ。

「これは……ガソリンの様な臭いだ」

「ひよっとして、今日の訓練に使う物でしょうか……外にそのまま出しておくのは危ないのですが……」

八百万が首を傾げる。ガソリンは、170度でも気化するような危ない物質なのだ。臭いが漂うということはただならぬ事を彼女に予感させる。

「ま、とりあえず入ってみようぜ」「そうそう」

だが、悩んでも仕方ないとばかりに峰田と上鳴が先に入ろうとすると、小さく悲鳴が聞こえた。

「今のはっ!?!」「悲鳴……この奥だっ!」

障子の耳を頼りに、全員がその悲鳴がした方へと駆け出す。駆け抜けていく間、悲鳴の声は複数有り、どんどん近くなっていく。

「なん、だよこれ……」

切島が、呆然と呟く。目の前の空き地には、大量の瓦礫の山が隅に退けられており、四角く深い堀が作られ、その中心には四角くて頑丈そうな大きい鉄格子と、それに――

「お、お茶子ー!!!」「と、父ちゃんっ!？」

「しよ、焦凍……!」「ね、姉さん……!？」

「天哉……っ」「か、母さん!？」

「うおおおおおっ! イナサアアアアアアア!」「お、親父いいいいいいいい!？」

鉄格子の中には、20人程度の人数が入っている。それは――I―Aクラスメイトの家族だ。慌てて駆け寄ろうとするも、その深い深い堀の中には、ガソリンが注がれている。

「な、何だよこれ、一体!?!」「相澤先生はどうしたんだよ!?!」

半ばパニック状態に陥る生徒達に、冷たい機械質な声が降り注ぐ。

「アイザワセンセイハネムツテイルヨ。クラクツメタイツチノナカデ」

「なっ!?!」「何だどっ!?!」「そんなっ!?!」

声の主を探ろうと、血眼になるクラス一同。だが、その声は……

「鉄格子の中だっ!」

障子が、場所を突き止める。それを聞いたか、鉄格子に駆け寄って手を伸ばしていた

保護者達が、怯えながら反対側に移動する。

「ヤア、キミたちニハコレカラゼツボウヲぶれぜんとシヨウトオモウンダ」

親に紛れてもう一人、出てきたのは2人目。真つ黒いコートにフードを被り、仮面を付け——死んだような目をした、ヴィランだった。

ドッキドキのヒーロー参観

死んだと言われた相澤先生——それに、人質になっている家族。あまりの事に、みんな理解が追いつかない。

「暗い土の中って……」

「そ、そんな、相澤先生が……」

「嘘つくんじゃないやねえ！ 相澤先生がそう負けるはずがねえだろ！」

「サワグナ。ジヨウダンドトオモイタイナラ、オモエバイイ。ダガ、ヒトジチガイルコトヲワスレルナ」

『人質……』

謎の侵入者は檻に居て、家族とともに入っている。信じたくない現実が、目の前にある。だが、気を立て直してこっそり連絡を入れようとした飯田や緑谷が、止められる。「サキニイツテオクガ、ガイブヘモ、ガツコウヘモレンラクハデキナイカラアシカラズ。アア、モチロン、ソコノデンキクンノ”コセイ”でもムダダ」

飯田、緑谷、上鳴をねっとりとした動きで見渡す。その視線に、連絡を止めるしか無かった。

「マジかつ……くそつ……」

「私達の”個性”も知られている……!?!」

混乱が広がるクラスメイト達に、更にヴィランは畳み掛ける。

「ニゲテ、ソトニタスケヲモトメニイクノモキンシダ。ニゲタラ、ソノセイトノホゴシヤ
ヲスグニシマツスル」

その言葉に、何人か親たちが反応する。まずがつしりとした体格の、人の良さそうな
麗日の父親が、檻を掴んでガチャガチャ揺らすのが、びくともしない。

「ア、アカン！ 檻が頑丈でどうしようもできひんわー!!」

「と、父ちゃん!」

「た、助けて、百きーん……!」

「ああ、お母様があんなに動転して……」

錯乱しているのか、どもり気味に助けを求め八百万の母親。

「ゲコツ……ゲコツ……!」

「危険音……ケロツ……」

普段、冷静沈着な蛙吹ですら、不安そうな声と表情を抑えきれない。そんなクラスメ
イトの姿を見て、ヴィランは楽しそうに笑う。

「な、何でだよ!? 何でこんな事をしたんだよ!?!」

激高する夜嵐の言葉に、一転恨みつらみの籠もった感情を込めて、ヴィランが話す。

「ボクハ、ユウエイニオチタ。ユウエイニハイッテ、ヒーローニナルハズダツタノニ。ユウシユウナボクガオチルナンテ、ヨノナカ、マチガツテイル。セケンデハ、ボクハタダノオチコボレ。ナノニ、キミタチニハ、アカルイミライシカマツテイナイ。ダカラ——」
「要するに、ただの逆恨みじゃねえか！ こんな事ができる実力があるなら、別の学校のヒーロー科で努力すりや良かったじゃねえか！」

切島も、我慢ならないように叫ぶ。だが、別の学校と言ったところが、酷く気に触つたらしい。動きに、イライラしたような身体のゆすりが混じる。

「アア、ネタマシイ。ユウエイニハイッテイルキミタチガイチバンソノカチヲワカツテイナイナンテ……ユウエイトソノホカジャ、チメイドハゼンゼンチガウ……ナノニ、ホカデガンバレナンテ……アア、ネタマシイナア……」

切島の言葉に、いかにも傷ついたようなオーバーなりアクションをすると、切島の母親に手を伸ばす。

「キズツイタナア……コノヒトヲ、ドウシチャオウカナア……」
「や、止めろおおおつ！」

更に感情を高ぶらせる切島の肩を、緑谷が叩く。

「み、緑谷……」

「切島君、深呼吸をして」

「……お、おう！」

そう言うのと、目一杯深呼吸をする切島。そうだ、頭に血を昇らせている場合じゃない。少しでも冷静になって考えなければ。そして、緑谷は一步前に出ると、ヴィランに要求を尋ねる。

「それで、あなたの目的は何ですか？」

まずは、情報を得ること。少しでも、対策を練らなければ。そして、ヴィランを見据える緑谷に、同じくヴィランも視線を返す。

「モクテキハ、ヒトツ。キミタチノカガヤカシイミライヲ、コワスコト。ソノタメニ、キミタチノダイジナカゾクヲコワシテシマオウトオモツテネ」

「……それだけのためにかっ！」

太いしっぽを震わせ、尾白もまた、感情を顕にする。誰もが、この身勝手なヴィランへの怒りを抑えきれない。

「てめえ！ 俺たちが憎いなら、俺達にかかってきやがれえ！」

だが、激高するクラスメイトたちをあざ笑うかのようにヴィランが言う。

「ボクガコワシタイノハ、キミタチノカラダジャナイ。ジブンヲキズツケラレルヨリ、タイセツナダレカラキズツケラレルホウガ、キミタチニハツライハズダ。ヒーローシボウ

ノキミタチナラネ」

「あんただって、ヒーローに憧れてたんだろ!? だったら、こんな事はもう止めなよ!」
「そうだよ! こんな事しても、すぐに捕まるんだからね!」

耳郎と芦戸の説得にも、まるで耳を貸さない。

「ニゲルツモリハ、ナイ。ボクニハ、ウシナウモノナンテナニモナインダ。ダカラ、キミ
タチノクルシムカオヲサイゴニミテオコウトオモツタンダ。キミタチモ、ダイジナカゾ
クノサイゴノカオヲヨクミテオクンダナ。——サア、ダレカラニシヨウカ……」

左右を見渡し、一歩踏み出すたびに、保護者達は怯えて檻の中で精一杯後ずさる。

「やめてえええっ!!」

叫ぶ麗日。それぞれの親に、手が伸ばされるたびに、悲鳴が上がる。中のヴィランは、
そのたびに愉悦に笑う。

「みんなを救けるには、まずは犯人に気取られないように近づかないと……。もし、バ
レたら間違いなく盾にされる……。でも、距離が遠いし、障害物も有る。派手な動きは絶
対にバレちゃうし、まずは気が付かれないように近づかないと……」

心の中で思っていたものが、途中で声になって出ていたようだ。轟が、緑谷の前に
立って注意する。

「緑谷、声に出てる。気いつける」

「緑谷君、何か思いついたかい？」

「いや、まだ……」

「それじゃ、なるべく早く頼む」

「期待してっぞ」

そう言うど、それぞれが緑谷の前に立ち、姿を隠す。そうして、時間稼ぎを始める。「や、止めてくれっ！　ぼ、僕はどうなつても良い！　だからどうかみなさんを解放してくれ！」

「冬……ねえ……」

飯田は犯人に必死の形相で懇願し、轟は、シヨックを受けたように茫然自失を装う。

目的は、1-Aのクラスの希望を壊して、その表情を見ること。なら、こうして満足させるような事をしていけば、いきなり殺される確率は減るだろう。更に、緑谷は夜嵐と切島に、後ろからこっさり声を掛ける。

「二人共、振り向かないで聞いて。聞こえてる？」

そう言うど、二人はこっさり手を後ろにやり、指で丸を作る。それを確認した緑谷は、更に話を進める。

「二人は、熱く怒つて、ヒーローらしくない事をして。言い争つて、喧嘩するとか——無様に見えるように」

更に、丸を出す二人。途端、夜嵐が声を荒げる。

「ふ、ふぎけやがって！ てめえ、絶対に許さねえぞ！」

「ば、バカッ、落ち着けて！」

怒りに震えて向かっていこうとする夜嵐に、それを留める切島。だが、体格の差でどうにも止まらず、火に油を注ぐ結果にしかなくなっていない。

「コレが落ち着いていられるかよっ！」

そう言うのと、思い切り切島を突き飛ばす。硬化で難を防ぐも、後頭部から行って、実に危なかった。そして、切島もまた夜嵐に突っかかっていく。

「て、めえ！ 馬鹿野郎！ こんな事やつてる場合かよ！」

「うるせえ！ 親父が人質にとられてんに落ち着いてられるか！」

「う、うおおおおおおおっ！ イナサああああああっ！」

「お、親父いいいいいいいいっ！」

錯乱し、切島につっかかり、最後は殴り合いまでしてしまう。その様子を、ヴィランは実に楽しそうに見ていた。

「ば、バカヤロおおおおお！ お前らが錯乱したら誰が救われんだよ！」

「お、落ち着いてえええええっ！」

演技だとは知らない峰田や芦戸が必死に止めて、更に緊迫感が増す。

そして、視線が向いている間、障子や砂糖、飯田など体格のいい連中の裏で、緑谷は八百万、麗日、葉隠を呼び出す。

「八百万さん、スタンガン作れる？ なるべく小型の」

「ええ、大丈夫ですわ。土色の迷彩に塗っておきますね。」

「麗日さんは葉隠さんを浮かせて、葉隠さんはスタンガンと、それとこれを持っていて」

と、取り出したのは小さな丸い玉だ。

「なにこれ？」

「小型のスタン・グレネード。これだけ小さいと、手で包めるでしょ？ ボタンを押して

5秒後に爆発するから、お願い」

「うん、任せて！それじゃ！」

葉隠は頷くと、一気に着ている服を全部脱ぐ。見えないとは言え、流石に女子のストリップに、顔が真っ赤になる緑谷。だが、気を取り直して、八百万がスタンガン、緑谷が小型スタングレネードを渡す。スタンガンは極めて見にくく、スタングレネードは完全に見えなくなった。

「ハハハハハ！ ブザマダネエ！ ナンデキミタチガユウエイニハイレタンダ。コロスマエデモコンナニタノシインダ。コロシタラキミタチハドンナカオヲシテクレルカナ」

「や、やめてえ!?!」「やめてくれえ!」

クラスメイトのあちこちから悲鳴が上がる中、ゆっくりゆっくりと近づくと近づく葉隠。そして、鉄格子の間から、ヴィランの足にスタンガンが押し付けられようとしたその時、思いつき蹴飛ばされて、ガソリンの中に落ちた。

「ドウヤラコバエガハイリコンダヨウダネ……!」

怒りに震えるヴィラン。その怒りに、怯えて後ずさる保護者達。

「モウ、イイ。ヒトリヒトリジツクリコロソウトオモツタケド、ヤメダ。ミンナイツシヨニジゴクニオチヨウ」

そう言うのと、懐からすばやくライターを取り出すと、炎の中に放り込む。そうしてから、爆発するスタングレネード。出すのが、ほんの数秒遅かった。ガソリンに着火し、炎上する。

「や、やめっ……!」

叫び声を上げる間もなく、鉄格子の回りは炎に包まれた。

「出久っ!!」

「母さんっ!!」

出久の母親だけでない。皆、それぞれ手を伸ばすが、その姿は揺らめく炎の向こうだ。「うひゃああああああっ!?!」

無重力状態だった葉隠は、熱風で空高くに吹き上げられる。何処かやけどをしたかも知れない。

「ケ、ケロツ!?!」

声ができる方に、慌てて舌を伸ばす蛙吹。運良く、葉隠の身体の何処かに舌が引つかかり、そのまま引き寄せる。何とか、無事のようだ。そして、他のメンバーはヴィランが檻の外に出ているのを好機と見て、一気に突っ込んだ。

「轟いー!」「分かつてる!」「フルカウル!」「レシプロバーストオ!」

轟が氷で橋を作り、ついだとばかりにヴィランの足を凍結させる。氷の橋の上を飯田が突っ走り、緑谷もそれに追従する。夜風は、後方でフォローする態勢だ。更に、これに続いてクラスメイトも走り寄る。

「うおおおおおおっ!」

凄まじい速さで走り寄った飯田は、そのままヴィランを拘束する。緑谷は、鉄格子の鍵を引きちぎり、無理やり開けて、保護者たちを外に出そうとする。

「もう大丈夫、速く!」

そうやって、外に避難誘導をしようとした時、飯田の下でヴィランが、スイッチを取り出す。

「ヤッパリ、キテクレタネ」

そう言うと、迷わずスイッチを押すヴィラン。そして、爆発。緑谷や飯田の居る地面がゆらぎ、りんごの芯のように残っていた地面が、崩れ始める。更には、氷の橋も砕けて、クラスメイトたちも何人が落ちそうになっている。

「爆弾、まさか!？」

「ソウ、スキヲミセレバカナラズキミタチハクル。サア、イツシヨニジゴクニオチヨウ」
崩れ行く地面で、緑谷のロープで拘束されつつカラカラと笑うヴィラン。

「夜嵐くん! 私を飛ばして!」

「おお! 頼む!」

麗日が夜嵐に頼み、自分を軽くして一気に檻まで跳ぶ。これで、鉄格子の重さが0になる。

「お前ら、落ちるなよ!」

崩れた氷の橋を補強するように、更に氷を重ねる轟。下の方はどんどん解けていくが、溶けていく端から補強し続ける。

「こういう時は俺の出番とね!」

瀬呂はテープを伸ばし、檻に幾つもセロテープをくつつける。そして、生徒側のテープの終端は、八百万が作った鉄の棒に巻き付け、その棒を砂糖、障子、口田など、パワー自慢が棒を持つ。蛙吹は、端から落ちかけている上鳴や芦戸を救っている。クラスの皆

が、それぞれ自分のできる最善を尽くしていた。

「よし、氷に乗つけるよ！ 引く準備はいい!？」

「おう!」「大丈夫だ!」「われの準備は何時でも出来ている!」「……………」(こくこく)
「よし! 50%…………フルカウル!」

準備OKの合図とともに、保護者のみの重さとなった鉄格子を持ち上げる緑谷。そのまま、氷の橋に乗せる。

「乗つけたよ! 今だ!」

「うおおおおお!」「でりやあああああつ!」「ダークシャドウ!」「……………」「レシプロバースト!」

力の有る者がひっぱり、また飯田がエンジンの出力で思い切り押しして、氷の上をつるつる滑らせていく。そして、最後に緑谷は、拘束された犯人を担ぐと、ひとつ飛びで脱出する。

『いやったあああああああああつ!』

皆の叫びが、爆発する。犠牲者0で、この場を切り抜けたからだ…………いや、犠牲者は居た…………

「親達は助かったけど…………」「相澤先生…………」「おう、呼んだか?」「はい。…………つて」「ええええええええええつ!?!』

今度はほぼ全員叫びが重なった。

「いや、皆さんお疲れ様でした。中々真に迫ってましたよ」

「いや、お恥ずかしい、先生の指導の賜物ですわ」

「中々貴重な体験ができました」

「いやあ、役者になったみたいでドキドキしましたわ」

保護者達に向かつて、深々と頭を下げる相澤。そして、保護者達の顔に浮かぶのは笑顔。ようやく、皆が事態を呑み込めてきた。

「という事は……」「これって……」「ドッキリかよおおおおつ!？」

一同、ガビーンといった顔で叫ぶ。

「と、言うことは……ヴィランも?」

「はい、とある劇団員の方に協力していただきました」

相澤先生がそう言うのと、緑谷に担がれながら

「ア、ハイ。ミンナオドロカセチャツテゴメンネ?」

と可愛く首を傾げて謝られた。

「マジかよ!?!」「キャラ、全然ちげえええええええええ!」

上鳴も切島も、がつくり肩を落としながら叫ぶ。なんだか皆叫んでばかりだがそれほどシヨックだったという証拠だろうか。

「ちよつと待つててください！ 流石にやりすぎではないのでしょうか！？ もし、万が一があつたら誰かが怪我をしていたかも知れませんか！」

「そうです！ もし、母さんに何かがあつたら……」

相澤先生にくつてかかる八百万に飯田。珍しい光景だ。だが、相澤先生は冷静に合理的に返す。

「万が一には備えてある。やりすぎつてことはない。プロのヒーローは常に危険と隣り合わせだからな。ヌルい授業が何の身になる？」

そう、プロならばあり得る状況だ。だからこそ、訓練する意味があるのだ。

「それは……」 「そうですがつ……！」

相澤先生はじつくりとクラスを見渡し、ゆつくりと口を開く。

「怖かったか？ 家族に何かがあつたらと思うと」

全員が、頷く。

「身近な家族の大切さは、口で言つてもわからない。失くしそうになって初めて気づくことが出来るんだ。今回はそれを実感してほしかった。」

自分の教え子達を見渡す。誰も深く考え込んでいる顔をしていた。

「いいか。人を助けるには知識・技術・判断力が不可欠だ。だが、それらは感情によつて左右される。焦りや恐れ、迷いは容易にそれらを曇らせる。お前達が将来プロヒーロー

になったとして、家族の危機に冷静に対処できるかという試験だったんだ。授業参観にかこつけた、な。手紙を書かせたのも、試験前に保護者の方への気持ちをちゃんと自覚させるためだったんだ」

「なるほど……」「合理的……」

「しかしお前ら、もうちよつとやりようは有つたろう。策は葉隠頼りの一つだけ、橋ができたらゾロゾロと突つ込む……全く。誘導や救ける役はそれに見合つたやつが行け。そもそもだな……」

と、問題点を指摘され、落ち込むみんな。明日には反省文提出のおまけ付きだ。だが、保護者の前だからか、直ぐに切り上げると、それぞれに自由時間を渡す。皆、自分の家族と対面だ。そして、冬美には、後で雄英の授業記録のコピーが渡されることとなった。轟の活躍も、たくさん入っていることだろう。

皆が保護者と対面している一角、

「出久、超かっこよかったよ！」

「母さん……」

体育祭とは違う、訓練とは言え初めて息子がヒーローとして動くところを見た。必死で、友達と協力して、とつてもかっこよかった。息子が憧れたヒーローの様に。

「うん。僕、これからも頑張るから。何時も心配かけちゃってるけど……見守っていてくれて、ありがとう！」

「良いのよ、出久。夢を、頑張つて叶えてね。ずっと応援しているから」

立派な姿に、涙すら出てくる。ずっと、”無個性”として生んで苦労をかけてきたけど、オールマイイトにすら認められて、全てが報われた気がしたのだった。

閑話

体験学習：東京編

「そ、それじゃあ、残りの4日間、是非お願いします!」

「ああ、よろしく!」

「よろしくね、”ゴージャスグリーン”」

「歓迎しよう、緑谷君——、いや、”ゴージャスグリーン”」

飯田のお見舞いが終わった後、サー・ナイトアイの事務所呼び出されて緑谷は事務所のメンバーに紹介される。メンバーはインターン中のルミオンこと通形に、サイドキックのバブルガール・センチピーダー。それに、サー・ナイトアイの4人による少数精鋭の事務所だ。センチピーダーは今、遠くで調査をしているらしくて、今はここに居ない。

「さて、本来ならば職場体験の場合、お客様扱いするのが常で有るが……グラントリノからは、繁華街などで様々な実践を学ばせてくれとの事だし、君もそれを望んでいるだろう。よって、まずはミリオとパトロールをしてもらう事にする。君もかなりやるが、ミリオも雄英BIG3の一角。存分に学んでくると良い」

「はい、よろしくお願いします！」

深々と頭を下げたお辞儀する緑谷。ワクワクも有るが、緊張感でも一杯だ。何せ、東京の繁華街でヒーローの格好をして歩くのだ。緊張もひとしおだろう。早速、更衣室で着替え始める。多少傷ついたりはしているが、それもヒーローの勲章。ヒーローコスチュームを着こなすと、ルミリオンの元へ。二人揃って立つと、中々に様になる。

「さて、ゴージャスグリーン。これを渡しておこう」

差し出されるのは、一枚のカード。グラントリノの所で貰った許可証と一緒だが、写真や名前は当然サー・ナイトアイだ。「これで、君の責任は私が受け持つこととなった。それにふさわしい活躍を期待する。」

「勿論です！」

胸を張って、笑う。オールマイトのようになるなら、こういう不安になるときこそ笑顔で。その顔に、サー・ナイトアイはかすかに笑い、バブルガールやルミリオンも笑顔になる。

「じゃあ、行こうかゴージャスグリーン！ サー、行つてきます！」

「同じく、行つてきます！」

「ああ。事件が起きたら逐次こちらからも知らせる。存分に活躍してくると良い」

「何かあったら応援に行くからね！」

信頼して見送るサー・ナイトアイとバブルガール。ルミリオンもゴージャスグリーンも、どちらも強い。あの二人ならば早々に、遅れは取らないだろうからだ。二人を見送った後は、バブルガールに事務仕事の教育を施すのだった。

一口に”個性” 犯罪と言っても色々である。強盗や恐喝など暴力的なものから、突発的な食い逃げ、露出などの性犯罪に至るまで、実に多種多様である。そして、日本でも有数の様々な問題が起きる場所が、ここ東京であった。だからこそ、多数のヒーローも巡回している。

SNS上では、#今日街中で見たヒーローなんてタグも作られ、ひっきりなしに投稿されるほどである。そんな訳で、東京の人たちはある意味ヒーローを見慣れているとも言える。だが、それは決して注目されないといいことではない。

「おっ、ヒーローじゃん、超若いやつ。誰だ?」「あ、あれ体育祭や新聞で見たぞ! ゴージャスグリーンじゃん! ヒーロー殺し捕まえた!」「おっ、マジじゃん! スーツ、メカメカしくてかっけえ! 写真撮っておこう!」

こうして見かけられたヒーローは、写真をどんどん撮られてSNSにアップされたり、話しかけられたりもする。

「す、すいません、一緒に写真撮ってもらっていいですか!」

高校生の女の子が話しかけてきた。わくわくしつつ、スマホと自撮り棒を持っていく。

「え、ええ？ ぼ、僕がつ!？」

「うわー、俺より目立ってんじゃん！ 羨ましい!」

慌てる緑谷に、羨ましがるミリオ。緑谷は初めての経験からか、中々に戸惑っているようだ。

「ほら、こういうファンサービスもヒーロー活動の一つだけ。笑って笑って」

「あ、は、はい。じゃ、僕で良ければどうぞ!」

「やった!」

自撮り棒を使うので、必然くつついて撮ることになる。

「はい、チーズ!」

「(ち、近い……!!)」

ヒーローなのに初々しい反応に、回りの女子高生たちもくすくすと笑う。夕刊の一面に乗り、またテレビでも流れた、ヒーロー殺しを捕まえたヒーローがこんな初心な面を持つているギャップが、笑いを誘う。

「じゃあ、私も!」 「あ、私も!」

友達に取ってもらえばいいのに、反応が楽しくてついつい皆自撮り棒を回して使う。

次々に変わる女の子たちに、緑谷はタジタジで、ついでにミリオも、何人かと撮っている。

「はははっ！ ヒーローになるとモテモテになれるよね！」

「そ、そうなんですねぇ!？」

と、色々と弄られているがその時――

「く、食い逃げだあああああああつ！」

「ふはははは！ 俺の個性は滑走！ 俺に追いつけるヒーローなど、この辺りに――」
「僕が来たっ！」ぐえっ!？」

足自慢が起こした食い逃げを、一瞬で鎮圧する緑谷。手際よく縛っていく様に、今度は素直な称賛の拍手が回りから巻き起こる。

『すげーいいー!』

一緒に撮っていた女子高生たちもご満悦の様だ。

「あれ、可愛いと思ってたけどかっこよくない？」 「可愛くてカッコいいとか最強じゃん？」 「マジでファンになっちゃうかも」

なんて話されているが、ヴィランに出会った途端緑谷は真面目モードだ。先程まで顔を赤くしてわたわたしたたしたのは何処へやら、キリツと凛々しい。早速サー・ナイトアイに連絡を入れる。

「こちらゴージャスグリーン、食い逃げ犯を捕まえました。これから警察へ引き渡しします」

「うむ、ご苦労だった。では、場所やヴィランの名前、顔写真等を送つてくれ。書類制作がスムーズになる」

「はい、了解です！」

グラントリノの所では、こういう事後処理は全て自分でやらされたが、サー・ナイトアイ事務所では携帯できるツールを使い、情報を送ることで、役割が分担され手際よく次へ移ることが出来る。元々、サー・ナイトアイはオールマイトのもとで膨大な量の書類仕事を担当していたので、この程度はお手の物だ。食い逃げ程度の簡単な犯罪だし、バブルガールの教育に使う様だ。

「この調子で、どんどんヴィランを見つけたら捕まえるように。ああ、しかしちゃんとルミリオンにも活躍の場を残しておいてくれたまえ」

苦笑しつつ、緑谷に伝えるサー・ナイトアイ。甲府で見せたあの仕事ぶりでは、ガンガンヴィランを捕まえてしまうだろう。

「え、ええと、がんばります！」

「ははっ、大丈夫、俺は俺で本気で捕まえるからさ。大事なのは不幸な人が出ない事さ」

「は、はい！」

そう、ヒーローとして大事なものは、何より不幸な人が出ないことである。という訳で、更に二人はパトロール精を出すのだった。

サー・ナイトアイは緑谷にああ言ったが、障害物の多い都市部でこそミリオの能力は輝く。群衆・駐車されている車・沢山の壁や塀、狭い道——その全てが、ルミリオンには障害足りえない。開けた場所でのスピードでは緑谷に敵わないが、しかし入り組んだ地形では、被害を最小限にしつつヴィランを鎮圧できる。そのルミリオンの強さを支えているのは、予測。本来なら不遇なはずの”個性”を、そのとてつもない技量と圧倒的な先読み力で活かしヴィランの抵抗を許さない。その”個性”の使い方は、緑谷にとっても大きな刺激を与えていた。

「すごいや。本来なら全てを透過してしまいうけど、それを一部だけにすることによってワープみたいに地中を潜っていける。弾かれてるところがミソで自分で手足を動かさなくても移動できるし、体勢さえ把握しちやえば自由自在に移動できる。習得するまで、膨大な苦勞がかかるけど、一度習得するところまで自由自在に移動できるのか……単独でもすごいけど、協力すればもつと色々できそうだ……例えば僕が思い切り投げつけるとか……ああでも、何時もと違うスピードだと制御が難しくて要練習……気軽に身につけられる技じゃない……」

「おーい、ゴージャスグリーン？ 何してるんだい？」

「はっ!? すいません、すごい”個性”を見るとつい癖で！」

緑谷が付けている”個性”ノートの最新のページは、ヒーローミリオンの考察やら、思いついた使い方などで一杯だ。それほど刺激を受けたのだろう。

「ははっ、なんだか照れくさいな」

そんな様子にミリオはまんざらではない様子である。実に和やかな空気で、繁華街のパトロールを続ける。と、そこに事務所から連絡が入る。

「ルミリオン、近所の銀行で銀行強盗事件が発生、しかし発覚が速くそのまま人質を取り立てこもってしまった。我々にも応援要請だ。位置を送るので至急向かってくれ」

「了解です、サーー！」

すると早速二人の携帯に位置座標が送られてきているので、二人共急いで向かう。

「HAL、データリンク開始。情報を集めて！」

「Yes, マスター。情報収集を開始。無線傍受……SNSから情報収集——データ、表示します」

緑谷の活動に合わせ、少しずつ進化しているAIが情報収集をする。だが、今回の場合警察が包囲しているし、情報が手に入りやすいので有用な情報が集まる確率は低い。が、やらないよりはやはり良いだろう。

現場へ到達して少しすると、サー・ナイトアイとバブルガールもやってくる。犯人は4名、人質は銀行員に現場に居合わせた客、武器は銃器の様だ。このご時勢に銃とは、弱個性だろうか？

「人質を解放してほしけりや、車を用意しろ！ それと絶対に追いかけてくるんじゃないぞ！ ヒーローも呼ぶな！」

実にヴィランらしいテンプレな要求である。だが、人質に取られている方として、ただただ恐怖しか無い。何をされるかわからないし、見るからに凶暴そうだ。どうすればいいかと怯えている。その様子は、テレビニュースで確認だ。姿を見せる訳にはいかない。

「では、揃ったな。まず君たちに銀行の詳細な凶面を渡しておく」

他3人に、凶面を配るサー・ナイトアイ。そこには、分かっている限りの犯人や人質の場所が書き込まれていた。入り口のロビー辺りに固まっている。また、動きを見る限り素人の様だ。

「……ヴィラン達は何故こんな所で犯罪を？」

普段からヒーローがよくパトロールしている地域で、勝算は低いだろう。なのに、何故ここを狙ったのだろうか？

「雄英にヴィラン連合とやらが襲いかかつて以来、度胸試しのようにこの様な犯罪を起

こす輩が増えていようだ……全く、厄介な」

緑谷の疑問に、サー・ナイトアイが忌々しそうに吐き捨てる。お陰で、ヒーローの仕事が増えていなのだ。良い兆候ではない。

「まあ、その事は今はいい。それより配置を決めるぞ。ルミリオン、2階に行つてくれ」
「了解、サー！」

ルミリオンの個性であれば、2階から敵の真上へいきなり落ちることも可能だ。

「バブルガールは死角から東側の窓へ。私は西側だ。そしてゴージャスグリーンだが……」

何処でも配置できるが故に少し悩んだが、ここはミリオと同じく2階へ配置することにした。あのパワーならば、問題なく天井を突き破れる。

「突入の合図は、このスタングレネードの爆発が終わつたらだ。爆発終了から5秒以内
に片付けるぞ」

と、サー・ナイトアイは緑谷から借り受けたクラスタースタングレネードを見せる。ソフトボール大の弾の中には、多数の小型スタングレネードが入っており、投げ入れると跳ね回って広範囲のヴィランの感覚を麻痺させる。

「投げ入れるタイミングは、ルミリオン、お前が指示しろ。2階から頭だけ出して、下を
観察するんだ」

「サー！ イエツサー！」

作戦が決まると、警察にそれを伝え静かに素早く移動する。そして警察は、ヴィランを引きつける役として、要求を飲んだふりをする。

「わ、分かった、君たちの要求を呑もう！」

と、包囲している警官の一人が包囲をゆっくり下がらせ、バンを持ってこさせる。

「ヒヤツハー！」 「これで俺たちも大金持ちだぜ！」

その事に、上手く行つたと気が緩むヴィラン一同。だが、それがいけなかった。

「サー、今だ！」

こつそり天井から見張っていたルミリオンは、顔を上げて無線機に叫ぶと、サー・ナイトアイがボタンを押してきつかり4秒待つてから、クラスタースタングレネードを投げ入れる。始動時に1回、その後のスタングレネードがスーパーボールの様にあちこちに跳ね回り、爆竹のように連続で爆発していく。

その閃光と轟音にヴィラン達は声も出せずに、体を丸める。

「今だ！」

奥の一人を、透過して降りてきたルミリオンが仕留める。やや離れた位置にいるヴィランは、天井を突き破ってきた緑谷にそのまま拘束される。バブルガールは窓から入り、刺激臭で五感の一つを更に奪って拘束し、サー・ナイトアイはヴィランの手に印鑑

をぶち当て、銃を取り落とさせそのまま床にヴィランを叩きつける。

5秒どころか、僅か2秒ほどで制圧完了である。拘束してヴィラン全員を纏め、ヒーロー活動完了である。4人揃って出ていくと、ショックから回復した人質達と、野次馬達から歓声が上がリ、一斉にフラッシュが焚かれる。

「う、うわわわっ!?!」

「流石にこの数のフラッシュ相手は怯むか。だが、慣れておくと良い。一流のヒーローたちは皆、慣れるものだ」

そう言うのと、サー・ナイトアイは堂々とヴィランたちを警察に引き渡す。皆の視線を一身に受けながら、笑顔で受け答えをし、警察の対応を称える。まさに、ヒーローの鑑というべき堂々とした姿であった。

「かっこいい……」

自分も当事者のはずなのに、今までより更に更に間近で見れるヒーローの輝きに、魅了される緑谷。そして、インターン生であるルミリオンや、職業体験の途中である緑谷にも、沢山のマイクが向けられる。

「流石は雄英生ですね!」「卒業後は引き続きこの事務所で!?!」「なにか一言!」「雄英襲撃時、どう思われましたか!」

「え、ええっと、そのっ!?!」

一斉に向けられるマイクに、たじたじになる緑谷。ルミリオンの方も、まだ慣れていないようで心なしか笑顔が歪んでいる。そして、そんな場面のにこやかに助け舟を出すサー・ナイトアイ。

「彼らはまだ学生でして慣れていないのです。まだまだパトロールも有りますし、ここは私がお相手をするということでご容赦を」

と、一礼すると、紳士的なサー・ナイトアイの空気に逆らえずに、マスコミはサー・ナイトアイの方を向く。

「あ、ありがとうございますー!」「じゃあ、またパトロール行つてきますね!」

と、二人が離脱しようとした時、やつてきたのは人質だった少女だ。とてとてと走り寄つてきて、「お兄ちゃんたち、ありがとうございます!」とあどけない笑顔でお礼を言ってくれる。それに釣られて、少女の母親も、他の人質の皆様も、口々にお礼を言う。

「ありがとう!」「凄かったぜ兄ちゃんたち!」「老い先短い命だけど、本当にたすけてくれてありがとうねえ」

囲まれて、口々にお礼を言われる。その顔は、みんな笑顔だ。そう、それこそがヒーローの報酬。

「どういたしました!」

だからこそ、二人は満面の笑顔になるのだ。

時は夕刻。東京は人が多い。つまり、変なやつがいる確率も多い。そう、例えば……
「フハハハハ！」「長年のご愛顧に感謝いたしました！」「今復活の！」
「『疾風怒濤三兄弟ッ!!』」

覆面サングラスで黒ずくめの3人組が、街を爆走している。

「刮目せよ！ 長きに渡った修行の果て、辿り着いた我らが境地！」

『アルティメットトルネード脱衣！』

今日是最悪の日だと、印照才子は確信した。自分を慕ってくれる子達も珍しく居なく、制服で一人歩いているところを、変な集団に遭遇した。その明晰な頭脳は、間違いなく奴らがろくでもないヴィランだと確信させる。

「第1ターゲット発見！ しかもあの制服は聖愛学院の物だ！」「うっひょう！」「腕が鳴るぞー！」

ターゲットはどうやら自分の様だ、と天を呪うと、構える。「個性」は頭脳系だが、伊達にヒーロー科に2年も通っていない。

「(速いっ！ 個性は移動系……！) しかし、動きは直線的ですわ！」

スケートのように滑走してくる変態共の、動きを見切り、足を入れ替えるその刹那に

合わせ、逆に踏み込み、回避する。1度目は上手く行った。だが……
「ぬうつ!」「何うつ!」「躲されたっ!」

避けられたことに驚愕する3人だが、逆に情熱が燃え上がる。

「ふはははは! さてはヒーロー科だな!」「ますます燃えるぜ!」「負けて涙目になるヒーローハアハア……」

「い、いやあああああああああつ!」

気持ち悪さに、流石に後ずさる才子。だが、それを好機と見たのか突撃してくる変態三人。

「ふはははは!今度こそ!」

その長い間研鑽を積み、磨きつけてきた技術は、2度めの突撃でもう才子の動きを予測し修正する。

「くっ、このっ……!」

「俺がめくり!」「俺が抜き取り!」「俺が……」「デラウエアスマアアアアアアッシュ!」

「「ぎやあああああああつ!」」

突如、叫び声とともに変態三人が弾き飛ばされた。

「だ、だだだ大丈夫ですか、助けに来ましたっ!」

突如、上から降ってくるように着地したのは、新聞やテレビで見た顔。ゴージャスグリーン、緑谷出久。雄英体育祭でも1位を取った、自分より一つ下の俊英だ。

「ありがとうございます。お陰で助かりましたわ」

思いがけぬ出会いに、にっこり笑顔を見せる才子。それに、緑谷はちよつと照れる。——と、そこで突風が吹いて、スカートの中身が顔になろうとして——

「うわわわわっ!？」

緑谷が慌ててスカートを押さえて止めた。そして、更に真つ赤になって後ずさる。

「ご、ごごごごご、ごめんなさい、わ、悪気は無かつたんです」

顔を真赤にして、ペコペコ謝る緑谷に、更に笑みを深める才子。彼には、一片も汚れた欲求が見えない。ただ本気で自分の身を案じてスカートを抑えてくれたのだろう。いつの間にか下着が抜き取られていたので、もし頭になっていたら大恥をかいていたところだ。

そう——自分の”個性”だけでは、ヒーロー活動には限界がある。でも……もし、とびきり優秀なサイドキックが居たら？ それが、自分の頭脳と合わされば？ 自分を慕う子達も優秀な子が揃っているが、やはりフィジカルが強いメンバーも欲しい。それに何より、目の前の相手は、雄英を襲った化物の同類を保須市で撃破し、ヒーロー殺しを

捕らえた、スーパーホープだ。

きつと、この出会いはチャンス——そう思うと、本気9割と、打算1割で顔を赤くして、目の前のヒーローに囁く。

「あ、ありがとうございます。ところで……し、下着が無いんですの……。ちよ、ちよつとお洋服店まで護衛してもらえませんか……。？」

「……へあつ?!」

裏で、追いついてきたルミリオンが変態共を拘束しているのを尻目に、緑谷は、頭で目玉焼きが焼けそうなほどに沸騰するのだった。

「私は聖愛学園の2年、印照才子と申しますわ」

まずはあなたを知っていますアピールから。顔を赤くしつつも緑谷は嬉しそうだ。

「(うふふ、女性慣れしてないようですのね。少し楽しいかも知れせんわ)」

なんだか自分が悪女になった気がしつつ、まずは清楚に見せて好感度を稼ぐことから。

「HAL、その、えーと……じよ、女性向けの下着を売っているとところを検索して……それなり以上のところ……」

「YES、マスター」

そんな才子を尻目に、緑谷はHALを使い、無駄に高度に検索する。きつと、目の前の少女の格好からして、それなりにオシャレなお店でないとダメだろう。自分の持つてる携帯に情報を転送すると、才子に渡す。

「あ、あの……ち、近くのお店はこんな感じみたいなんですけど……、ど、何処が良いですか!？」

「そうですね……」

と、緑谷の差し出した携帯を見れば、ピックアップされているのは何処もそれなりなお店。良い気配りに、また一つポイントアップだ。自分の好きなブランドが売っているお店を見つけると、そこをタップして拡大し、緑谷に差し出す。

「では、ここでお願いますね」

「は、はい！　じゃあ行きましょう！」

顔を赤くしながら緑谷が先導しようとするが、才子は立ち止まったままだ。疑問に思つて振り返ると、才子はスカートを抑えたまま立ち尽くしている。

「あ、あの……下がスースーして、歩き難いんですの……。は、運んでくれませんか？」

「は、運ぶつて!？」

まさか、この格好で背負うわけにもいかないし、ひよつとして……

「ま、前の方で……?？」

「え、ええ。俗に言う、”お姫様抱っこ”と言う物で一つ……」

目の前のヒーローが不埒な事をする筈も無し。身を任せようとすると、またトマトのように真つ赤になる。それがかわいくて、ついついからかつてしまいたくなる。それに、ヒーローに救けられて運ばれるという経験も悪く無さそうだ。

「い、いいいいつ、いいいんですかっ!？」

「ええ、お願いますの」

真つ赤になつてあたふたしている緑谷に近づいて、スカートを押さえながら身を預ける。もの凄く震えながら、恐る恐ると言つた様子で、手を伸ばす緑谷だが、心なしか才子の方も赤い。背中と膝裏に手を回すと、才子はスカートの中を見えないように抑え

た。

「え、えっと、じゃ、その、急ぎますね!」

「ええ、お願いします——つて!」

緑谷は、才子をしつかりと抱きかかえると、フルカウルまで使い、一気に跳躍した。背の低い建物を飛び越え、衝撃を与えないようにしつかり抱えながらも凄まじいスピードで街の上を疾走する緑谷。才子も、はじめは驚いたものの自分に負担をかけないような跳び方に、周囲を見る余裕も出てきた。夕日に染まる街が、上から見れて実に綺麗だ。

それに、一人を抱えて全く息も切らさないし、このスピードに跳躍力。更に、次々と着地点を判別していくその判断。どれもが、素晴らしい能力だ。

「(これは……本当に大当たりですわね……)」

くすつと笑みを浮かべると、スカートを押さえたまましばし身を任せる。そして、シヨツピングモールの少し手前に着地する。

「あ、ゴージャスグリーンじゃん」「うわ、聖愛の子を抱えてる。……爆発しろ」「レアっぽいし写真を撮っておこう!」

いきなり登場したので、注目される緑谷。はわわわわと顔を赤くしながら、急いで下ろす。

「じゃ、じゃあ僕はその、これで……」

「あら？　まだ私は下着を買ってませんことよ？　一人で置いていかれてしまうのですか？」

「う、ううっ!!？」

た、確かにそれもそうだ……と、顔を赤くしながら、才子の隣に立つ。護衛の意味も兼ねているのだろう。でも、自分よりちよつと身長の高そうな女の人の隣に立つのはちよつと決まりが悪い気もする。そんな風に悩んでいるのを見ると才子は、話題を変えらるためと、自分が気になっていたことも有って、緑谷のガジェットに興味を示す。

「しかし……緑谷さんは沢山のガジェットを付けているのですね……機能を紹介してもらってもよろしいかしら？」

「は、はいっ!」

緑谷のスーツは、太ももや二の腕など、様々な所にベルトが巻かれ、小型ガジェットが取り付けられている。腰のベルトポーチには小型の超重量コンピュータとバッテリーが入っていたり、I・アイランドの超圧縮技術で作られたガジェットが様々取り付けられ、首筋にもメカメカしい輪が取り付けられ、全体的にメカメカしいアクセントがスーツを彩っている。

「まず、これがネットボム……投げて5秒後に、爆発して、ネットを展開します。こっちはクラスタースタングレネードで、投げて5秒後に爆発して、小型のスタングレネード

が……」

その数々のガジェットに、戦慄する才子。どれもこれも、ヴィランを無力化し確保するのに、凄まじく便利だ。だが、疑問に思う。

「……この小型の弾の数々は？ 発射する銃などは見当たりませんが……」

見れば、ビー玉ほどのサイズと形をした様々な色の弾が有る。だが、発射装置は見当たらない。

「あ、僕が指弾で弾くか、投げるんです。指弾で30m、手首のスナップで50m、投擲なら100mは先の相手に当てられます」

「な、なんですって……!？」

更に驚いた。銃やクロスボウも使わず、この効果の弾を撃てるとは……。発射に火薬も使わないので、純粹にギミックだけを仕込んだ弾を持って、携行弾数も上がる。それに、銃と違って発射の衝撃が弱いので、弾の中身自体をもろくしても大丈夫だ。

「そ、そこまですの……そんなに強“個性”なのに、そんな技術が有るなんて……」

「あ、そ、その、僕の個性特殊で、すごい増強されるから、脳がリミッターでもかけてたらしくて、個性が発現したのが去年なんです。……でも、ヒーローになるのを諦めきれなくて、ずつとこういう物を遠くへ飛ばす技術を磨いてたんです」

「それで、こちらが小型ドローン。あちこち偵察してくれて、こちらが協力者に渡すGP

S付き小型無線機です。常に位置が発信されて、僕のヘルメットのディスプレイに位置を移してくれるんです」

「……そうでしたの……そ、その、ガジェットは何処で手に入るのかしら？」

「ここまで便利な物の数々だと、是非欲しい。ガジェットが増えるたびに、自分の頭脳と合わせれば使える手段が加速度的に増えていくだろう。」

「1年のサポート科に発目さんって方がいて、その方がサポートを……その人が、I・アイランドに居る学生さんのメリッサさんと、協力して色々と作ってもらったんです」

「雄英のサポート科と、I・アイランドの技術の合作ですって!」

「本当は、I・アイランド屈指の天才の技術も入っているが、そこは流石に内緒だ。」

「(こ、これはなんとしても確保しなくては……)」

身体能力、ガジェットの山、それを十全に扱う技術に心構えにコネクション。もはや大当たりと呼ぶのすら生温く、この出会いは一生に一度有るか無いかレベルの幸運だろう。

と、色々と話していると、とうとう下着売り場についた。自分とは完全に縁のない世界に、ドギマギする緑谷。

「そ、それじゃあ、改めて僕はこれで……」

「……変質者に襲われて、今日は一人で帰れそうにありませんの……送ってくださいさらな

「い？」

「う、うええっ!？」

不安そうな顔をした才子に言われ、飛び上がる緑谷。中学までは中々女の子の知り合いが居なく、女性に慣れていない緑谷にとっては色々と、心臓に悪過ぎである。

「さ、流石にそこまでになるとサー・ナイトアイに連絡を取らないと……!？」

「では、是非お願いしますわね」

職場体験を途中で切る形になることに、チクリと申し訳ない気持ちに胸に刺さりつつ、それでも連絡をお願いする。自分は、彼のようなフィジカルは無いし、自分を慕う子達のように戦闘向けの”個性”は無い。この頭脳を生かすには、あらゆる手を使わなければならぬ。……でなければ、自分は憧れるものにはなれないのだから。

そうして、言われるままサー・ナイトアイに連絡を入れる緑谷。電話を入れると「コールでサー・ナイトアイが出る。」

「どうした?？」

「あ、あの、さつき救けた女の人をショッピングモールまで送ったんですけど、変質者に襲われたのがトラウマになってるらしくて、家まで送って欲しいって言われたんですけど送ってもいいですか?？」

「ふむ……ゴージャスグリーン、その救けた少女は、聖愛学園の生徒なのだな?？」

「は、はい。そうです！」

「ではその少女に替わってもらおうか。彼女に電話を」

「は、はい！ あ、あの、サー・ナイトアイから替わってほしいって言われたんですけど大丈夫ですか？」

「はい」

微笑んで受け取ると、緑谷から表情が見えないように振り返る。

「もしもし。ゴージャスグリーンにはお世話になりましたわ」

「ええ、それは何より——で、どの程度の覚悟を？」

「……どんな手を使っても、引き込みたいと思わせて頂く程に、優秀なお方でしょう？」

「否定はしません。故に、彼は独立独歩の道を歩みます。——引き込むのは無駄ですよ」

「っ——！」

流星は上位のプロヒーロー。思惑は見透かされていたようだ。

「彼は、オールマイトを超えようとしている。……故に誰かの下のサイドキックで収まる器では無い。——だが、一人では限界があるのもまた事実。私がオールマイトの手助けをしていたように」

「……何がおっしゃりたいのです？」

「いえ、貴女の”個性”は、人を救けるのに向いているなど。——では、ゴージャスグ

リンにはこのまま仕事を終らせる許可を出しましょう。今日もよく働いてくれました。では、戻して下さい」

「……はい、分かりましたわ」くるりと振り向いて「あの、緑谷さん——」

しかし、振り向いた時にはそこに居なかった。だが、変わりに緑谷の携帯からサー・ナイトアイの音がする。

「ああ、彼ならば今、迷子を迷子センターに連れて行ったようですよ。無線でこちらに連絡がありました」

「あら、それは——」

実にヒーローらしいと、くすりと笑ってしまった。では、自分はそのまま下着を買うほうが良いだろう。そう言えば、ずっとノーパンだったのだ。今更ながら恥ずかしさが見上げると、そそくさと下着売り場の中へ向かった。

買い終わって、店の前へ行ってもまだ居ない。だが、携帯は置いていつてるし、まさかこのまま居なくなったりはしないだろう。そう思うと、店の前で立ってじつと待つ。ふと自分の端末で情報を検索してみると、このショッピングモールで困っている人を救っていたようだ。女性を待たせるのは男性としていかなることかとデート中なら言うところだが、彼はヒーローだ。これで良い。

「す、すみません、ちよつと、色々トラブルがあつて……!」

「ええ、構いませんわ。だって、それがヒーローですもの」

息を切らしてこちらへ戻つてくる緑谷にニツコリ笑いつつ、またお願いする。

「——ヒーローですものね。困った人が居たら体が動くのが当たり前……。あの、緑谷さん」

「は、はい!」

「連絡先、交換していただけないかしら。そうしたら、一人で帰れますので。でも、後から連絡させていただきますいね?」

彼のヒーロー活動を見てると、自分の我儘で、邪魔をするのも悪い気がした。だが――

「え、えつと、僕の時間が気になるなら、また急いで運んでいきますから! え、遠慮しないでどうぞ!」

こちらの身を心から案じてくれるのだ。それに、また笑顔になつてしまう。

「そうですわね……では、また運んで頂こうかしら」

「は、はい! 携帯で家の場所、指定して下さい!」

そう言われて緑谷の携帯に場所を示すと、フルフェイスヘルメットが首元からせり上

がつてきて地図がディスプレイに表示される。

「じゃあ、行きますー！」

ショッピングモールの外へ出ると、また抱えられて、今度は夜の街を跳躍して、ほぼ最短距離で自分の家へ。向かうのは何時もと同じ家。しかし、道は全く違う。目まぐるしく変わる夜景を見ながら、才子は楽しそうに微笑みつつ、運ばれるのだった。

「ありがとうございます。今日は本当にお世話になりましたわ」

無事に、見るからに金持ちそうな敷居の広い家に着くと、才子は深々と頭を下げてお礼をする。

「いえ、どういたしまして！　これが、ヒーローの仕事ですからー！」

お礼を言われ、顔を赤くしつつも笑顔の緑谷。そして、才子は自分の携帯を取り出す。「では、携帯の連絡先、交換してくださいませんか？　私——あなたにとっても興味が出てきましたの。これからも、お話したいですわ」

「へあっ!？」

今日出会ったばかりの女性に連絡先をねだられ、真っ赤になりつつもぎくしゃくしながら交換してしまう。

「じゃ、じゃあこれでー！」

こうして、逃げるように去っていく緑谷。それを見送る才子は、実に楽しそうだった。

なお、緑谷がサー・ナイトアイの事務所に戻り、色々と事務手続きを終えて携帯を覗くと。

”緑谷あああああああああ！てめえええええええええええええええええええええええ！ふざけやがってえええええええええええええええええええええええ！！”

”職場体験ナメてんのかゴルアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！”

と、血涙が見えそうな内容のメールがA組B組から問わず、幾つか入っていた。どうやら、女子高生たちと写真撮ったり、お姫様抱っこしたりした写真が流出したようだ。

「こ、これは違うんだよおおおおおおおおっ!?!」

こうして、色々と言い訳するのにとてつもなく疲労感を覚えた緑谷であった。

「……………正直どうしたら良いか分かんねえ」

「右に同じツス！」

「ひ、左に同じかな……………」

だが、モテてるのはよりによって女性との付き合い方がよく分らない3人である。女の子に興味津々な上鳴や峰田には中々相手が来ないのはなんたる皮肉であろうか。

「がつつかないから逆に好感度高くなってるんじゃない？」

「そーそー、峰田とか怖いよ？」

「がはっ!？」

女子からの心に痛すぎる一言に、二人が撃沈し机に突つ伏し、その様子を苦笑してみる回り。実にA組らしい光景である。

「でも、外回りで活躍した結果で人が集まったのでしょうか？ 羨ましいですわ……………」

「そーそー。私達なんて、ほとんど芸能活動ばかりだったしね……………」

二人して遠い目をしているのは、八百万と拳藤の二人だ。B組の生徒がA組に来たり、その逆もそれなりにある。

「俺達は色々と参考になつたぜ！なあー！」

「おう！ フォーススカインドさん、バリバリ戦闘もこなすのに、地道な活動も欠かさなくてヒーローの心構え色々教えてくれたんだ！」

任侠ヒーローフオースカインドの所に行っていた切島と鉄哲のガチゴチコンビも中々に有意義だったようだ。

他に、空気が変わっている者は……

「私も……すっごくい勉強になったよ……!」

一週間ですっかり武闘派に目覚めてしまった麗日だ。コオーなんて独特な呼吸をしながら、格闘の構えの形を次々変えている。麗日の個性は格闘や拘束にもとても有用で、一度浮かせてしまえば踏ん張れなくなり、対応できる個性で無いと、そのまま無力化出来てしまうからだ。

「……我は……ホークスの後始末ばかりだった……!」

一方常闇は、わざわざ九州まで飛んだのにやらされたことは後始末ばかり。——だが、自在に翔ぶホークスが羨ましく、新技を考えているようだ。

と、皆がそれぞれ教室に残って雑談している理由は一つ。体育館Yが使用できる時間まで待つことだ。ただいま3時50分。4時には使えるようになるので、そろそろだとA組とB組の時間が有る有志一同がバスへ揺られて移動する。そこには既にセメントスが待機していた。

「やあ、よく来たね。今日も頑張っているよう」

『よろしくお願ひします、セメントス先生!』

自らを鍛えてPLUS ULTRAしようとする生徒を嫌う教師は英雄には一人も居ない。セメントスだけでなく、手の空いている教師が見に来る事も多々有る。特にミッドナイトがそうだ。

セメントが敷き詰められた体育館は、セメントスの意のままに形を変える。そしていくら壊しても無限に再生し作り変えられる。派手に暴れて壊すヒーロー科の教師として、セメントスはとても貴重な存在だ。

そして今日は、職場体験をしてきたことも踏まえて、更にステージが変わる。

「うおおおおおおおおおっ！」

例えば夜嵐は、重さも形も様々なセメントのブロックを大量に作ってもらい、それを同じ速度で同じ方向に飛ばすようコントロールしたり。

「あいのででっ!! ま、また失敗か……」

工場のように入り組んだ地形を作ってもらい、そこにもぎもぎを沢山くつつけてトンポリンとして利用して跳ね回る峰田。

「でりやああああああ!」「どりやああああああああ!」

分厚い分厚いセメントを、ひたすら殴り倒している切島と鉄哲。

「よっ……ほっ……はっ……!」

高いアスレチックを、無重力を利用しながら上りながら、途中途中の人形を無重力状

態にして投げ飛ばしていく麗日など、利用方法は千差万別である。さて、そんな中緑谷はと言うと……

「それじゃあお願いしマース！」「お願いするわね」

「うん、こつちこそ！」

B組の角取ポニーと柳レイ子と対峙していた。現在の緑谷の骨を折らない上限は50%。やや余裕を持って40%に落とすとしても、そんなパワーで暴れたら体育館γに迷惑がかかる。よって、緑谷は主にそれぞれ個性の、実戦訓練形式で、代わる代わる同級生たちの相手をしていた。今度の相手は、角取ポニーと柳レイ子。4本の角を自由自在に操る角取と、物を自在に浮かせる柳。その相手をするのは骨だが、二人にも接近戦という弱点が有る。

緑谷はヘルメットを被り手足にガントレットを実体化させると、ファイティングポーズを取る。合図は、側に居たセメントスだ。

「じゃあ……スタート！」

開始と共に、緑谷は一気に距離を詰める。それを8割ほど予測していた二人は、角取の角2本で距離を離し、残りの角2本と、回りに有る沢山のセメントボールで対応する。四方八方から押し寄せる角とセメント玉を、緑谷は躲し、空かし、いなし、時には殴り砕く。

「オーノー!? 彼の目は後ろにもついでるですかー!?!」

「どうなつてんの……!?!」

「死角を狙いすぎて逆にわかりやすいよ二人共!」

視線の動きや身体の動きで、二人の思考を誘導し、わざと弱いと思わせるところを見つ、そこを迎撃する。そして、暫く角や玉を砕いた後、逆に指弾で二人を狙う。

「うわっ!?!」

その速さに柳が慌てて指弾を止めるが、変わりにセメント玉の動きが疎かになる。

「ほら、そこ甘いよー!」

操れる飛翔物は、数は柳に長があり、自在さは角取に長が有る。緑谷は指弾で柳の玉を減らした後、角取の角を一本掴んで逃さないようにし、そのまま突撃する。

「うわわわわっ!?!」「わ、私の角が取られたデース!?!」

接近戦してくる緑谷に、慌てて玉を殺到させようとするもあつという間に懐に入られ、慌てた二人の玉と角は時には同士討ちさえする。その混乱のまま二人共、あつという間に緑谷に距離を詰められ拘束され、アウトとなった。

「課題は明白だね。接近戦に弱い。緑谷君に有利を押し付けられっぱなしだよ、二人共。それに、そばで見ていた僕にも動きが読みやすかった!」

「ううう……」「次は、頑張るデース!」

セメントスに反省点を指摘されて、落ち込む柳に更に気合を入れる角取。個性を伸ばすだけでなく、実戦形式の中で見えてくるものも有る。その練習台として、近・中・遠とどの距離でも対応できる緑谷はうってつけだった。それに、緑谷としても様々な“個性”を相手に戦えるとあって、この実戦訓練がとても好きだった。

「えつと、二人共、ありがとうございました!」「ありがとう」「サンキューデー!」

深々とお辞儀する緑谷に、同じくお辞儀するB組二人。彼女らはまた独自訓練に戻っていくが、緑谷はまた他の同級生の訓練に付き合う。次は、常闇だ。闇を克服するため、セメントスにドームを作ってもらい、その中で必死にダークシャドウを抑えている。

そのドームに穴を開けてもらい、ヘルメットの暗視機能をONにして中に入る。一切の光が届かない闇の空間、そこで常闇はダークシャドウを操るのに苦戦していた。

「み、緑谷……今日も宜しく頼む……!」

「うん、任せて!」

暗闇の中で、ダークシャドウは常闇の意に反し暴走する。もし、この弱点をヴィランに突かれて一般人に被害が出たら大変だ。故に、闇の中で他の人と居ること、また戦うことで少しずつ手綱を握っていく。

「ヒヤッハー! ブッコロシテヤルゼー!」

「そんな事しちゃダメだ! 常闇君!」

「言うことを、聞けっ……!」

棒立ちする緑谷に力を奮おうとするダークシャドウを、必死に抑え込む常闇。

「ムダムダムダァー! オトナシクオレニカラダワタシヤガ「スマアアアアアアッシュ
!」グアアアアアッ!」

手に負えなくなりそうだったら、無理やり殴りつけてコントロールを常闇に戻す。暗闇の中、とても危険な訓練であり、付き合える人間がほとんど居ない。だからこそ、緑谷は献身的に常闇に付き合っていた。「個性」の暴走のせいで友達がヒーローでなくなるかも知れないなんて、絶対に嫌だからだ。そして20分後。

「はい、そろそろ終わりだよ。今日もよく頑張ったね」

「あ、はい、ありがとうございます」「感謝します、先生……」

内側がぼろぼろになったドームを、セメントスが解体してダークシャドウに光が当たる。途端に、小さくおとなしくなった。この特訓は二人の疲労がとても大きく、隅っこに行くくと二人共勢いよく水分を取り込んだ。汗だくの身体に、染み込むような心地よい感覚感覚で、一息をつく。

「緑谷……今日も助かった……」

「どういたしまして!」

疲れるけど、暴走する相手を抑える訓練にもなるし、緑谷としても有意義だ。体験全

てを力に変えていく緑谷にとって、どんな経験も無駄にはならない。

「——友とは良いものだな」

かつて、中学までは誰も自分に敵うものは居なく、故に一緒に訓練なども出来なかったこの悩み。だが、自分を指導してくれる教師が居て、自分と苦楽を共にしてくれる友がいる。それが、とても心地よかった。

「緑谷、もしもの時は我を呼べ。すぐにでも駆けつけよう」

「ありがとう。君ももし、ダークシャドウが暴走しても、僕が止めに行くから！」

微笑ましい、二人の友情。

「(ああああああああくん♡良いわあ……♡)」

そして、そんな様子を見たいからこそ峰田にムチを打ちながら、ミッドナイトはここに居るのだ。

そして、ここに来るのはヒーロー科だけではない。

「緑谷さーん！ 今日私のドツ可愛いベイビーをお願いしますー！」

「あはは………了解」

やってくるのはサポート科の発目明。最近、I・アイランドのメリツサとよく交流をして、アイディアがわきまわって絶好調の彼女である。そこで実験体に、一般的な人の

形をしており、身体も頑丈で力持ちな緑谷が選ばれるのだ。

「今日のベイビー達はこれです！」

背負式のブースターに、足裏のブースター、各爆弾系アイテムに、ガッチガチの装甲服まで色々だ。しかし、最初の頃の発目のアイテムたちよりは、安全性が上がっている。これはメリツサの

「私達の発明品は、ヴィランとの対峙中に使うの。だから、求められる時に求められるだけの働きをする、頑丈な作りにしなきゃダメなんだよ」

というお説教のお陰だろうか。先輩に当たる天才技術者の意見だからか、その後の発目のアイテムに影響を与え、少なくともいきなり爆発することはなくなった——が。

「えーと、これは……臭い爆弾？」

「はい！ 動物型の個性に特に効きます！」

「……えーと、効果範囲は？」

「とつても広いです！」

「ボツですよ!! バブルガールみたいにせめて狭い範囲にできるように！」

「ええっ!!」

とまあ、時々暴走を抑えなければならぬのもご愛嬌だろうか。ただし、真面目な衣装改良にも取り組んでおり、今も早速飯田のコスチュームの相談を受けていた。ステイ

ン戦を経て、色々と改良点が見つかったようだ。生徒たち直々の意見を聞けるとも有り、実に上機嫌だ。

しばらく発目に付き合った後は、次は連携の訓練。”個性”は、他の人の個性と組み合わせれば相乗効果で何倍にも強くなる。

「本日もよろしくお願ひしますわ、緑谷さん」「よろしく〜」
「うん、(´)ち(´)ら(´)そ!」

続いては、八百万、そしてB組の小大唯との連携だ。緑谷と合わせこの3人、相性がとても良い。

小大の”個性”サイズは、八百万が創造で作り出す物を大きくできるので、結果的に八百万の脂質の消耗を抑えられる。また緑谷は作り出した物を正確無比に標的に当てるので、八百万がヴィランに合わせた物を創造で作り、それを緑谷が投げ、それから小大の個性で大きくする。このコンボが、兎に角強力だった。ネットだろうとトリモチだろうと、少量作ればそれが大型のヴィランでさえ抑えるガジェットに早変わりするからだ。

この訓練はセメントスがつきつきりになり、様々な大きさの的をあちこちに出すので、緑谷はその的に狙って投げ、小大は相手の大きさに合わせて、即座に物の大きさを

変える。八百万は、ヴィランの形に合わせて玉やら槍やらをひたすら創造——と、実に効率が良い訓練だ。

「中！大！えつと……大！小！」

「シユート！シユート！シユート！あ、ずれたつ、シユート！」

「う、うわわつ、あ、間違えたつ!?!」

だが、この訓練は3人の息が合つてなくてはならない。八百万が即形を判断し、その作られた物に合わせて緑谷が投げ、大きさを小大が即座に変える。ゆっくりならば問題ないが、速度を上げると中々に難しい。これは、八百万の脂質がなくなるまで続けられる。

「す、すみません、もう……」

「わかった。向こうにチョコが有るからちやんと食べるんだよ。お疲れ様」

『ありがとうございました』

終わると疲れからぐったりとした八百万は、小大に支えられて隅にチョコを食べに行く。

緑谷も皆を手伝つてクタクタで、横に座つて休憩だ。甘いものが、とても身に染みる。

「疲れるけどすつごい為になるなこの訓練。とつさの判断が磨かれるつていうか」

「はい。そこは私の課題でも有るので、とても有意義です」

「僕も、形によって投げ方変えないといけないし……。弾がなくなった時の訓練にとつてもいいよ」

男の子一人に女の子二人。だけどする会話は色気がない。とてもヒーロー候補生らしい会話。

「そう言えば、入試の時にも緑谷さんに助けられましたわね」

「……………あ、そんな事もあったね!」

「忘れていらつしやったのですね。まあ、緑谷さんのことだからきつとたくさんの人を救っていたのでしょう。何せ、一般入試トップですからね」

「お、流石入試一位。すごいよね、あの試験で一位取るなんて」

「うん、No. 1ヒーローを目指しているからね。」

ぐつと拳を握り、見据えるのは遥か遠く。あのオールマイトさえ超えると言う緑谷は、普段の地味な感じとはまるで違う決意を感じさせる。そして、その決意に見合うだけの実績も見せつけ続けてきた。

「……………羨ましいですわ」

「……………へ?」

暗い顔でポツリと漏らす八百万に、首をかしげる緑谷。それと小大。

「え、でも八百万さん、個性凄いいし、体育祭でもトーナメント出れていい成績残せてた

じゃん?」

「う、うん。八百万さん、すごい個性だと思うよ!」

「あ、いえ、そうでなくて……緑谷さんのその、判断力の事ですわ。とつさの判断でも直ぐに頭が回って、他の人の個性も把握して戦えて……私も、そんな風に来たら……」
実に切実な悩みのような。八百万は、個性で出来ることを選択肢が多すぎる故、とつさの判断にどうしても遅れが出る。

「……えーと、それじゃあとりあえず、”必殺技!” みたいなのを作ってみると良いかも」

「必殺技、ですの?」

「うん、ヒーローは大抵必殺技を持つてるし、とりあえず困った時にはこれをとつさに出せる! みたいな技を作っておくと、その技の優先順位が高くなって、判断も早くなるんじゃないかなって……」

「必殺技——」「あ、私も作りたいな」

緑谷の言葉に、考え込む二人。確かに、それも一つの手かもしれない。

「……なるほど、後で早速試してみますわ!」「私も! ……でも何にしよう?」

必殺技は一朝一夕では出来ない。しかし、きつと役に立つだろう。そう思うと、緑谷も自分の技を更に磨こうと思うのだった。

P i P i P i ! ! P i P i P i ! ! P i P i P i ! !

「あら、緑谷さん鳴っていますわよ?」

「あ、ホントだ。ちよつとごめん!」

電話が入ったので、そそくさと隅に行く。相手は——印照才子だ。いきなりの女性の電話におっかなびつくり取ると、耳の近くに優しい声が。

「どうもこんばんは。お時間、大丈夫かしら?」

「あ、はい! 今休憩中だったんで、大丈夫です!」

「あら、まだ授業中でしたか?」

「いえ、放課後に残って特訓を。先生方も付き合ってくれてるんです!」

「特訓……流石、頑張っていますのね」

ふふつと優しく笑う声に、ちよつとドギマギする。同じお嬢様でも、八百万とはまた違うタイプだ。

「そ、それで御用は……?」

「実は、あなたのガジェットの数々に興味がありまして……その製作者の方を紹介して欲しいんですの」

「せ、製作者をですか……!?!」

発目の顔が思い浮かび、大丈夫かなと冷や汗が浮かぶ。

「ひよつとして何か不都合がおりですか？」

「い、いえ、その、かなり個性的な人なんで……」

「あら、技術者さんとはそういう人も多いでしょう？ 大丈夫ですわ」

「そ、そうですか……じゃ、じゃあ、紹介してみますね！」

「はい。是非お願いします」

一つの出逢いから、他の出逢いへ人の輪は繋がっていく。この輪が果たして何処まで繋がりが広がっていくかは、まだ誰にも分からなかった。

女子三人集まれば……？

職場体験が終わって数日後、今日も皆との訓練を終えてまったりしていると、印照さんから電話がかかってきた。丁度、終わったタイミングを見計らってくれたらしい。皆に頭を下げながら、着信に出る。

「もしもし、緑谷です。どうしました？」

「どうもこんばんは、緑谷さん。この間は発目さんを紹介してくれて、本当に感謝していますわ」

「い、いえいえ……そんな、大したことじゃないですし！」

印照さんの“個性”はIQ。そんな天才的な頭脳を持っている人との会話は発目さんにも凄く良い刺激になったみたいで、次の日の訓練の時間には、いつもの5割増しで発明品が持ち込まれた。——その分大変だったけど……。

「それで、是非直接会ってお話してみようという事になりました……大変心苦しいのですが、土曜日の午後から、雄英の授業が終わりましたら案内して頂いてもいいでしょうか？ 発目さんも、一緒にあなたのガジェットを考えたいようです……」

「そ、そんなことでもいいなら是非喜んで！」

発目さんとメリツサさん、そこに印照さんという3人目の天才少女が開発に加わって
くれるなんて、嬉しすぎる！

「ほ、本当にありがとうございます！」

「いえいえ。私も本命は、私の装備の相談ですので——緑谷さんもあまりお気になさらないんで下さい」

「そ、それでもです！」

電話越しなのは分かつてるけど、思わずペコペコと何度もお辞儀をしちゃう。色々な
人達に支えられて、僕は本当に幸せ者だと思う。

「では、土曜日を楽しみにお待ちしております」

「こちらこそ！」

その後ちよつと雑談をしてから電話を切る。土曜日が楽しみだ——って、不穏な空気が……。恐る恐る振り返ると、そこには怖い顔をした峰田君と瀬呂君と上鳴君が。

「みくくくどくくくりくくくやくくく……その電話の相手の女は誰だあああああああ
あああああ

……………」

恐ろしく恨み辛み妬みの籠もった声でこちらを見てくる峰田君。あ、あの、血涙流さ
なくても……漏れた声が聞こえちゃったか……こ、怖い……。

「え、えつと、この間救けた人で……は、発目さんと話がしたいから、是非案内して欲しいって言われて……」

「この間救けたつて、写真で一緒に写つてた聖愛のお姉さまか!? そうなんだな緑谷!?」
 「女にかまげやがつてええええええええつ! お前なんて爆破の個性を持つヴィランにでも爆破されちまえええええええええええ!」

待つて、最後待つて! 何かそれ凄く洒落にならなそう!? 主に脳裏にかつての幼馴染がよぎつちやつたんだけど!?

「ほ、本命は発目さんだから! た、たまたま僕が知り合いだっただけだから!」

「じゃあ何であんなに楽しそうに話してたんだよお! 後ろからでもうきうきが分かるぞてめえ!」

「い、いやそれは、僕つて女の人と話すのあんまり慣れてないからで!」

迫つてくる3人の迫力が怖い……助けを求めてあちこち見るけど、女性陣もちよつと冷やかな目で見てくるし……!?! ど、どうしてこんな事に!?! そ、そうだ、夜嵐君なら救けてくれるはず! 救いを求める目で見ると……

「流石緑谷だなあ! 頑張れよ!」

と、轟君!

「……すげえ奴だなお前」

常闇君!!

「……己が生み出した災厄の芽……己で摘むが良い……」

い、意外にも常闇君まで冷たい目でっ!?

「許せねえ……許しちゃおけねえが、条件次第じゃ渋々許してやっても良い……」

「じよ、条件つて?」

「そのお姉様を通じて、俺らにも聖愛の子達を紹介しろお!」

「お嬢様学園のヒーロー科つてなんか良いよな! ロマン有るよな!」

「……お、俺もいって人が居たら……」

必死の形相で要求してくる峰田君と上鳴君、瀬呂君はおこぼれが有ったらつて感じで

……。で、でも……

「ぼ、僕も知り合つたばかりだから、そういうお願いは流石に……」

そう言うと、血涙を流す峰田君と上鳴君。

「……そ、相談してみます!」

『いよつしやあ!』

ヒ、ヒーローは人を救けるものだし……切実に悩んでいる二人をほっとけなかつたん

だ……

「ま、ちよこつとだけ期待して待つてるぜ」

瀬呂君はちゃっかりしてるよ、ホント。

そうして次の土曜日。雄英の土曜は午前で終わりだけど、基本的にヒーロー科の科目が入っているのだからみなクタクタだ。でも、僕は案内する予定があるし……そそくさと制服に着替えて、早く校門に行かないと。

待たせないように急いで校門に行くと……ちよつと人が足を止めてがやがや騒いでいる場所がある。

「おい、見ろよあの制服。何処のだ？」「聖愛の？ 何しに来たんだろう……？」「すげえ美人……」

ひよ、ひよつとして……

「緑谷さん、こんにちは。今日はよろしくお願ひしますわね」

注目を集めていたのは、やっぱり印照さんだった。そして、視線も一斉に集まる。

「い、いえいえ、こちらこそ、お待たせしちやつて！」

「全然待っていませんわ。こちらこそ、急いで駆けつけて頂いたようでありがとうございます」

優しく微笑んでフォローしてくれるんだけど、その分周りの反応が……！

「緑谷が聖愛の人連れ込んで……」「くそつ、何でアイツばかり……！」「やっぱりモ

テるのか、1位はモテるのか……!」

い、急いでここを離れよう……。印照さんの首に許可証が下げられているのを確認して、と。

「そ、それじゃあこっちはです!」

他の人の視線を気にしないようにして……。サポート科まで真っ直ぐ! で、でも放課後だから人が多い……。ちらりと印照さんを見ると、ヒソヒソ話している男子に微笑んで照れさせたりしてるし、凄い余裕だ……!」

あんまり周りを気にしないように校舎の中を進んでいくと、そこに居たのは心操君と……相澤先生? 意外な組み合わせだ。

「あ、心操君こんにちは。相澤先生と……。どうしたの?」

「ああ、捕縛布の使い方、習ってんだ」

「へえ! 相澤先生の捕縛布は凄いし、習得すればきつと凄い武器になるよね!」

「ああ、俺もそう思ってた所。えっと、そっちの人は……?」

「えっと、聖愛学園の……」「印照才子と申しますわ!」

ペコリと優雅にお辞儀をして、二人に挨拶する印照さん。あ、相澤先生も軽く頭を下げてる。

「捕縛布……イレイザーヘッドの武器……。これも汎用性が高そうですね……!」

「興味が?」

「はい。私の”個性”も心操さんと同じで、直接戦闘には向きませんので……。なので、自分の戦い方を模索している最中なのですわ」

相澤先生の問いに答える印照さんの表情は、やや曇っている。確かに、何か確固たる武器が無いとヒーロー活動はなかなか辛いだろう。

「サー・ナイトアイは5キロ有る印鑑を武器にしましたね……。と、そういう、何か手段を求めるためにサポート科の発目さんに会いに来たんですよ」

「なるほど」

僕の説明に、頷く心操君。彼もまた、様々なガジェットも試している最中なのだろう。

「……ふむ、良かったら後で心操の訓練を見学されていきますか?」

「よろしいのでして?」

「はい。強くなろうと努力する見習いを、ほっとくのは教師じゃありませんので。7時位までは居ますので、場所は緑谷に聞いて下さい。じゃ、行くぞ心操」

「はい!」

「頑張つてね、心操君!」

「おう」

お互い笑って、別れる。印照さんは可愛らしく手を振って見送る。さあ、いよいよ発

目さんの所に到着だ。サポート科のエリアに行き、開発工房へ。扉をゴンゴンつとノックしてから学生証をかざして入ると、発目さんが夢中になってまたガジェットを弄っていた。

「こんにちは、発目さん。印照さんを連れてきたよ」

「お邪魔します」

印照さんも入ってくるけど、聖愛の制服と、このメカメカしい部屋が凄くちぐはぐだ。男の子の僕としては、ワクワクする部屋だけど、お嬢様学園の印照さんにはとても珍しいようで、部屋をキョロキョロと見渡してる。

「おや、緑谷さんも、印照さんもよく来てくれました！ ささ、私は印照さんと、メリッサさんとお話するので、あなたはこのベイビーたちのテストをお願いします！」

「うん、了解……って、メリッサさんも!？」

「はい。印照さんも来るというので、テレビ電話の予約を取り付けておきました！ さ、早く早く！」

「わ、わかったから慌てないで!？」

まずは手につける補助ブラスターを装着しつつ、二人の方を見ると、大きいモニターのスイッチが入ってメリッサさんの姿が映る。

「メイさん、どうもこんばんは……じゃなかった、こんにちは！ イズク君も！ それ

で、えっと、そちらの方が……」

「印照才子ですわ。本日はよろしくお願ひします、メリツサさん」

「はい、サイコさんもよろしくお願ひします!」

「どうもこんにちは! えっと……三人でお話を?」

「はい! この間話し込んだ所、沢山のアイディアを出していただきました! それをメリツサさんにも伝えた所、是非話したいと言いました! それで3人で話せるように呼んだのですよ!」

発目さんがハイテンションだ。それにしても、天才3人の集まりはこうして見ると、オーラみたいな物が凄いな……。早速、3人で色々話し始めている。印照さんは、自前で持ち込んだティーポットで早速紅茶を入れている。IQが2倍になるなんて本当にすごい個性だ……

そんな三人を眺めつつ、とりあえず1つ目のガジェットを試す。ブースターを作動させると、急加速!? 天井まで昇って叩きつけられたっ!?

「あいたたたたたたっ!」

「うーん、ちよつと出力が強すぎましたか。要調整ですね」

「だ、大丈夫ですよ!」

「だ、大丈夫イズク君!? ちよつと、メイさん、マイルドさは何処に行ったの!」

二人に心配されるけど、発目さんはあくまでマイペースだ。

「いやー、お二人と話す刺激でちよつとテンションが上りすぎちゃったようです」

あはは〜って笑うけど僕以外だと洒落にならない……いや、だからこそ僕が実験台をやってるんだけど。

「後、重いしかさばるしパワーが有る人向けだね、これ。ジェットの場所を変えられれば、格闘戦にも使えると思うんだけど……」

でも、評価はちやんとする。ガジェットを幾つか作ってもらってるしね。

「なら、腕を軸に回転させられるようにすれば……でもそうすると強度が……」

「偏向ノズルは、あまり役に立ちそうにありませんわね」

「むしろ、炎を調節して攻撃する武器に使えるかもしれません!」

女の人3人が揃って、するのはガジェットの話題。色気はないけど、みんな真剣そのものだ。だからこそ僕も、全力で実験台になるのだ。

一つ一つ、それぞれのガジェットを4人で論評しながらテストしていく。その後は、印照さんの番だ。僕が実験台になり、危険と判断され改良された数々のガジェットを、試していく。体育祭で見せたブースターや、小型テザーガンにスタングレネード、涙弾なんかは凄く高評価だ。これは、個性が有ってもなくても有効な場合が多い。また、目と耳と鼻で知覚するほとんどのタイプにも効く。ただ、コストがちよつと掛かる

のが難点だけだ。

「ふむ、しかしこれらはあくまで手段の一つ……やはり、私自身にも戦闘能力が欲しいですわね……」

ここに来る途中で心操君を見て、思う所があったみたいだ。警棒、杖、トンファー、模擬刀など様々なガジェットを見てるけど、今ひとつしっくり来ない様だ。

「そう言えば、ミッドナイトは鞭を使ってみましたね。あれ、痛いし拘束出来るし射程長しし武器だけ奪えるし、熟練すればかなり強い武器なんですよね」

「鞭……なるほど……」

そう言うのと、様々なガジェットの中から鞭を選び出し、ピシッと地面を打つ。……あれ、なんだか凄く様になっているような……。

「なかなか良いですわね……なんと言うか、凄いしつくりきますの」

本人も気に入ったようだ……。ちよ、ちよつと怖いかも……。

「鞭……となると、強化素材で切れない千切れない素材を使うね！」

「柄の部分や先端に色々仕込んでみましょう！電気ショックとか定番ですよね！」

メリツサさんと発目さんが早速食いついた……。こ、これから先、どうなっちゃうのかな？と一抹の不安を抱いたけど、それでも戦闘力が付くなら何よりだよね！

暫く、4人であれこれ相談してたけど、そろそろ6時30分……相澤先生の特訓も見に行きたいな。

「それじゃ、そろそろ、相澤先生の所に行きます?」

「はい! 今日はとても有意義でしたわ! 是非、またお会いしたいのですが……」

「勿論です!」「はい、こちらこそ!」

発目さんもメリッサさんもノリノリだ。3人の会話がとても楽しかったみたいだ。メリッサさんと印照さんの連絡先の交換も終わり、さあ行こうと行つた所で……

「あ、そうだ、イズク君、確かI・アイランドに来るんだよね?」

「はい。雄英体育祭で1位だったので招待されたんです」

「それじゃ、それに合わせて二人も来ない? 招待するわ! お父様にも紹介したいし

!」

「はいはいはい! 是非行きたいです!」「デヴィッド博士にも!?! ぜ、是非お願いしますわ!」

メリッサさんの誘いに、二人共食いついた。そりゃあ、こんなチャンス逃せないだろうし……。

「それじゃ、招待状送っておくから後で住所教えてね! それじゃ、引き止めちゃつてごめんなさい!」

「いえ、本当にありがとうございます」

「ふっふっふ、どのベイビーを見てもらいましょうか……」

お礼を言う印照さんに、野望を燃やす兎目さん。I・アイランドでどんな事が話されて、どんなガジェットが生まれるのか……今から楽しみだ。

そうして、次は相澤先生と心操君の特訓へ。捕縛する布の動きは、捕縛する鞭の動きと通じるようで、印照さんが何一つ見逃さないようにと、見入っている。見学するだけじゃもつたいないし……折角来たことだし、僕も手伝おう。

「心操君、手伝うよ！ 適当な武器でも持って、襲えばいいかな？」

「えっと、相澤先生、是非やってみたいです！」

「良いだろう。だが緑谷、加減しろよ！」

「はいー！」

そこら辺に落ちていた長い棒きれを拾って、個性を使わずに大振りで隙を見せながら心操君に襲いかかる。すると、棒きれに布が巻き付いて手から強制的に引き剥がされて、更に身体に巻き付いてくる。両腕は塞がれたけど、手と足が残ってるから——突進して頭突き！を寸止め。心操君を見ると、悔しそうにしている。

「くそっ、止められねえ……！」

「いや、習い始めてこの期間で武器を取れりゃ合格点だ。緑谷、良かったらこれからも付

き合つて欲しい」

「勿論です。心操君、人相手に試したくなつたら、何時でも体育館＼に来てね！」

「……ああ、ありがとう」

「成る程……すごく参考になりますわね……」

と、発目さんに手渡された鞭をピシッと振るう印照さん。この二人にも、直接戦闘向けの”個性”は無い。でも、イレイザーヘッドの様に、サー・ナイトアイの様に、戦闘向けでなくても鍛えれば、凄く強くなれるし、そこに個性でプラスアルファを載せられる。だから——頑張れ！

そう、辺りが真つ暗になつてもまだ訓練を続けたそうな二人を見てそう思つちやうんだ。

【息抜きおまけ】

緑谷がふと目覚めると、違和感を感じた。身体に、”個性”が、ワン・フォー・オールが無い。その事に跳ね起きると、自分の体が貧弱になつて居るようだった。慌てて周りを見渡す。自分の家……だけど、雄英の制服がない。それどころか、中学の制服がかつて居る。慌てて携帯を見れば、機種変して変える前の物。慌てて日にちを確認する

と……

「雄英、入試日……!?!」

冗談じゃない、ワン・フォー・オールが無ければ、合格なんて夢のまた夢だ。——そう思った時、頭に流れ込んできたのは、もう一つの記憶。あの日、攫われなかった——あの人に出会わなかった人生を歩んだ、もうひとりの自分の記憶。だから——諦めていて、身体も鍛えてなかったのだ。

その気持ちは痛いほどよく分かる。結果、爆豪を筆頭にクラスメイトにも10年以上虐められ続け、気力すら無くなってしまったのだろう。そして、記憶を思い出している
と——

「出久、今日は入試だけど、その前にまた海へ行くんでしょ！早くしなさい！」

「あ、う、うん、そうだよ！今行く！」

とりあえず、何故こうなったかもわからない。だけど、今動かないと、この体の僕自身誰よりも傷ついてしまう。だから、動き出す。海へ向かい、砂浜へ走り出し最後のゴミを、トラックに乗せる。

「H A H A H A！おめでどう、少年！……？少年、何か変わったかい？」

怪訝そうに尋ねるオールマイト。魂は同じだけど、一つの出逢いだけで別人並みに変わってしまった自分に違和感を感じるのだろう。

「……ええ、夢を見てました。とても、素敵で、輝いている夢を」

「そうか、何か有ったのだな。そしておめでどう。いよいよ継承だ。じゃあ、食え」

「はい！」「ええ……」

迷わず髪を食べたらちよつと引かれた。解せぬ顔をした緑谷。

「よし、使い方を教えよう。細かな説明をする暇は無いから、これだけ……ワン・フォー・オールを使う時は、ケツの穴グツと引き締めて心の中でこう叫べ!!!」スマツシュ!!」

それを聞いて、止まる緑谷。

「……あの、オールマイト。今の僕がそれやったら、腕バツキバキになると思うんですけど——」

「——あ」

どうやらやつぱり、教育者としてのオールマイトはまだまだのようであった。

付いたのは雄英高校の入り口。

「(もう一度、来たんだ……また、上手くやろう)」

「どけデク!!」

どうしてこうなったかはわからないが感慨に耽っていると、後ろから響く懐かしい怒声。振り返ると、爆豪が睨んでいた。そう、こっちの自分はまだ「デク」のままなのだ。だから——

「監視カメラがあちこちに有るんだ。お行儀よくしたら？」

そう言うのと、もう興味もないとばかりに先に行く緑谷。脳裏によぎるのは、もう一人の自分の記憶。悲しくて、痛くて、無力で、何も出来なくて、ただ虐められるだけで――。許すつもりは、毛頭無かった。自分のクラスも全員ヒーロー科志望だったようだが、彼らこそ、あんな態度で緑谷を噛み見下して、ヒーローになれると思っっているのだろうか。

そう、怒りが充満すると両手から黒いモヤが出る。……何だこの力は、こんな物は無かった。と、混乱する脳裏によぎるのは、別の声。

「ちよつと！ お前、憎しみに囚われてるよ！」

慌ててキョロキョロと見渡すと、回りには見たことがない風景で、何処かオールマイトに似た人が立っていた。何かを話そうとしたら、口がなかった。

「ああん？　しゃべれないのか！　よし、単刀直入に言うぞ！　坊主！　その黒いもやもやは、俺の”個性”さ！　名を、黒鞭つて言う。そりやくもう便利な個性さ。だが、怒りのままに奮ったんじゃダメだ！　お前のその力は代を重ねるごとに熟成され、俺の”黒鞭”も、超強化された！　だから、怒りのままに振るうな！　大事なのは……心を制することだ。怒りに飲み込まれるなよ！」

「……」

口がないので、コクリと力強く頷く。そうだ、自分が憧れたのは、ドロドロしたものじゃない、誰よりも輝く、二人のヒーローだ。だから、怒りに飲み込まれちゃいけない！ そう決意すると、先代の一人はサムズアップしながら、また消えていった。

「……ですか？ 大丈夫ですか？」

「つ、あ、ああ、大丈夫！ 心配かけてごめんね！」

振り返ると、心配してこちらを覗き込んでいたのは麗日さんだった。優しい笑顔に癒やされつつ、もう大丈夫と笑顔になる。

「お互い、頑張ろうね！」「うん！ うちも、絶対合格するんや！」

「（大丈夫だよ、麗日さん、きみは合格するから——）」

そう心の中で微笑んで、いよいよ試験場へ。筆記は楽勝、問題は実技試験の方だ。今の自分は、出せてたった5%のフルカウルしか纏えない感じた。——だが、今の自分には、目覚めたもう一つの“個性”がある。

『HEY HEY！ それじゃあスタート！』

合図と共に、誰よりも早く駆け出す。出力は5%で真っ先にヴィランと相対すると、左手から顕現させる。名を——

「黒鞭！」

鞭のようにしなやかな黒い線がヴィランロボへと伸び、拘束。そのまま引き寄せると、右で思い切りぶん殴る。ポイントの差なんて関係なく、鞭を伸ばし、見つけた端から次々と、引き寄せ殴り、引き寄せ殴る。そして集まったガラクタを、黒鞭で包み、ハンマー投げのハンマーの様に集め、ヴィランのど真ん中で思い切り回転する。

「うおおおおおおつ!!」「なんだありやあああああ!!」「どんなパワーしてんだよ!!」
ヴィランの残骸を集めたハンマーに、次々と撃破されまくっていくヴィランに、皆は早々に緑谷のそばから離れ、こちらに来ないようにと祈りつつ、ヴィランを相手にしていく。しかし、ある程度撃破した緑谷は、救助ポイントを稼ぐために他の人を救って回りつつ撃破していく。ネタが割れている試験、他のみんなには悪いが、ポイントを稼がせてもらう。

そうして、荒稼ぎというのも生ぬるいほどポイントを稼ぎまくった後、現れたのは0ポイントヴィラン。そして、下にいるのは麗日お茶子。5%では、あれを殴り飛ばせないだろう。ならば――

「大丈夫!!? 今救けるよ!」

黒鞭を伸ばし、麗日を引き寄せ、すっぽり腕の中へ、ちよつとだけお姫様抱つこの格好になつて顔を赤くする麗日だが、すぐ下ろすと緑谷は0ポイントヴィランへ向かつていく。冷静になつてみれば、楽勝と体育祭で言われた0ポイントヴィラン。数々の強敵

と戦ってきた今の緑谷には、隙だらけに見える。足を曲げた所を黒鞭で縛り、転ばせ無力化し、トドメとばかりに先程の要領でヴィランハンマーを作ると、思い切りぶち当たった。

「す、すげえ……」「何だアイツ……」「バケモンだ……」

呆然とする回りの受験生を尻目に、試験は終了だ。

「大丈夫？ 立てる？」

「う、うん、ありがと……」

麗日に手を伸ばして、立たせて、周りを見渡す。畏れられてるけど、それがNo.1の宿命だし……。となりの麗日の様に、それでも笑ってこちらを見てくれる人もいるのだ。

そして、モニタールーム。盛り上がる教師陣の中、オールマイトは混乱していた。見たこともない”個性”。だが、少年は確かに無個性だったはず。——なら、あれは、ワン・フォー・オールの中に眠っていたもの……!? 自分の弟子が合格間違いなしなのは一安心だが、さらなる謎が出てきて混乱するオールマイトであった。

試験から一週間、自分のときとは違い、こちらの母はずっと不安そうだった。自分の

所の母よりずっと太っているし、随分と心配をかけたようだ。だから、リビングで手紙を開き、一緒に見る。

「お、オールマイトっ!?!」

オールマイト自らの説明に、びっくりする母。そして、語られる内容は衝撃の事実。

「撃破ポイント1000! 救助ポイント81! 2位に100ポイント以上の差を付けて、ぶつちぎり合格だ! おめでとう、緑谷少年! ここが、君のヒーローアカデミアだ!」

そして、母は泣き崩れた。嬉しさのあまり。だから、こういうのだ。

「今まで心配かけちゃってごめんね。でも、ありがとう。もう大丈夫だから——僕は、オールマイトを超えるNo.1ヒーローになるから……!」

それは、別の世界で繰り広げられる、もう一つのヒーローアカデミア。

林間合宿

合宿初日

試験が終わり夏休み前、オールマイトと一緒に雄英代表としてI・アイランドに行くことになった。ここに来るのは二度目だけど、相変わらずの凄さに圧倒されちゃう。それに、賓客として呼ばれてるから扱いが丁重で、尚更に。

エキスポ中だから、A組やB組のメンバーの何人かともI・アイランドの中で出会って、更に発目さんや印照さんとも合流して、メリツサさんに案内された。

一通りエキスポの施設を楽しんだ後、雄英代表としてパーティーに参加しようと思ったら、I・アイランド初のテロに巻き込まれて、みんなと一緒に解決することになった。僕ら学生メンバーだけでなく、轟君と一緒に来ていたエンデヴァーも凄い強かったし、ヴィランのボスは、デヴィットさんの発明で凄い強化されていたけど、僕とオールマイトの協力技で、何とか撃破。皆もそれぞれの個性でヴィランに立ち向かい、活躍したことで僕らのことは全世界のニュースになったみたいだ。

印照さんやメリツサさんが、世界中の言語で書かれた記事を見せてくれた。オールマイトやエンデヴァーだけでなく、僕やメリツサさん、それに戦いに参加した1年のメン

バーに、発目さんと印照さんが、世界中に紹介された。知名度大アップで、峰田君なんか女の人に話しかけられるようになってテンション上がりっぱなしだ。

事件を解決した後は、I・アイランドを救ってくれたヒーローとの事で、戦った全員が、それぞれI・アイランドで製作及び設計したガジェットを一生無料で提供してもらえることになった。I・アイランドに来るための旅費も全額負担してくれるし、凄い特典だ。デヴィットさんも張り切って、僕を筆頭に皆のガジェットを開発してくれるようだ。それに、発目さんや印照さんの発想もかなり刺激になったみたいだし……これからどんなアイテムが来るのか、楽しみだ。エンデヴァーも、コスチュームを新調するよう……No. 2ヒーローも、また強くなりそう。僕も、負けてられないや。

そんなイベントが目白押しだった6月も終わり、期末試験も終わってとうとう林間合宿初日が始まった。

「え？ A組補習いるの？ つまり赤点取った人がいるってこと?! ええ!! おかしくない!? おかしくない!? A組はB組よりずっと優秀なハズなのにい!! あれれれえ!!」

「黙れ」 手刀一閃、物間が倒れる。

「ごめんな」

「いや、いいって」「相変わらずだなく物間」

黙らせたのはB組の姉御、拳藤一佳。A組とB組が集まると、大抵挑発する物間だが、毎度毎度拳藤に黙らせられていた。A組のメンバーもすっかり慣れたものだ。何せ、体育館γでも、一緒に訓練しつつ煽っては拳藤に殴られてるのだ。もはや風物詩と化している。

A組B組がそれぞれ分かれてバスに乗ると、学生らしく早速ワイワイガヤガヤ賑やかとなる。

「一時間後に一回止まる。その後はしばらく……」

「音楽流そうぜ！ 夏っぽいの！ チューブだチューブ！」「バツカ夏といや、キャロルの夏の終わりだぜ！」「ポツキー頂戴」「席は立つべからず！ べからずなんだ皆!!」「しりとりりり！」「りそな銀行！うー！」「ウン十万円」「終わるのかよー！」

ヒーロー科とは思えない、実に賑やかな光景だ。その光景に相澤先生は呆れるが、騒げるのは今のうちだけだと見逃す。どうせ、この林間合宿の間は休まる間も無いのだ。一時間後、到着したのは山中のとある広場。パーキングと言うよりも単なる空き地である。

「休憩だ——……」

「おしっこおしっこ……」

それぞれ体をほぐす中、峰田だけがトイレを探し回るが、何処にもない。

「つか何（ここ）。パーキングじゃなくね？」「ねえアレ？ B組は？」「お……おしっこ……トトトイレは……」

戸惑う皆に、マイペースな相澤先生。

「よ～～～う、イレイザー!!」

「ご無沙汰してます」

そこへ現れたのは、二人のヒーローと、一人の少年。

「煌めく眼でロックオン!」「キュートにキュートにステインガー!」

『ワイルド・ワイルド・プッシーキャッツ!』

決めポーズを取るのは、プッシーキャッツ四人の内の二人である。

「今回お世話になるプロヒーロー『プッシーキャッツ』の皆さんだ」

それに、緑谷が興奮したように反応する。

「連名事務所を構える四名一チームのヒーロー集団! 山岳救助を得意とするベテラン

チームだよ! キャリアは12年にもなる……「心は18!!」へぶ」

「心は?」「じゅ、18!」

緑谷が反応できないほどの速度で緑谷の頭をがっしり掴むピクシーボブ。乙女に年

齡の話題は厳禁なのだ。そんな二人を余所に、話を進めるマンダレイ。

「ここら一体は私たちの所有地なんだけどね。あんたらの宿泊施設はあの山の麓ね」
『遠ッ!!』

と、クソ遠い山を示すマンダレイ。

「え……? じゃあ何でこんな半端な所に……」「いやいや……」「バス……戻ろうか……
な? 早く……」

嫌な予感がするクラスメイト達。だが、もう遅い

「今は9時30分。早ければあ……12時前後かしらん」

「ダメだ……おい……」「戻ろう!」「バスにもどれ!! 早く!!」

「12時30分までにたどり着けなかったキティはお昼抜きね」

「わるいね諸君。合宿はもう、始まっている」

と、ピクシーボブが個性を使う。大量の土砂に、クラスメイト全員が吹き飛ばされた。

「うおおおおおおつ! 谷風え!」

「ナイス夜嵐!」「助かった!」

吹き飛ばされるクラスメイト全員を、吹き上げる風で減速させ安全に地面に下ろす夜嵐。全員無事に、下に降りれたがまかりまちがってれば骨の一つでも折れても不思議でなかった。

「全く、いきなり熱いツスね！」

「私有地につき、”個性”の使用は自由だよ！ 今から3時間、自分の足で施設までおい
でませ！ この……”魔獣の森”を抜けて!!」

「”魔獣の森”……!?!」「なんだそのドラクエめいた名称は……」「雄英こういうの多すぎ
だろ……」「文句言つてもしやあねえよ、行くつきやねえ」「熱くてイイっす！」

各々が反応している中、一人離れる峰田。もう漏れそうなのだろう。

「あ、待った峰田君！」

それに走って追いつき、峰田の前に立つ緑谷。その前には、魔獣が居た。だが、緑谷
が視線を遮ったことで、何とか漏れるのが防げた峰田。

「ちよつと、誰か峰田君の護衛してて！」

「分かった！ ちよつとこつち来い峰田！ 出すまで守ってやるから！」

「うおおおおお！ すまねえ、緑谷あ！ 切島あ！」

守られるのを幸いに、物陰に隠れる峰田。そして他の皆は臨戦態勢だ。

「静まりなさい獣よ。下がるのです」「口田!!」

だが、口田の”個性”に反応しない。

「! ピクシーボブの個性は……!」「いよっしゃあああああああ!」「っ!」「レ
シプロ……!」

それを見て、即座に反応するものが4人。

「スマアアアアアアッシュ〜！」「雄風え!!!」「凍れっ……!!!」「バーストオオオオオオオ！」
4人が、それぞれ一斉に土塊の魔獣を砕いた。

「うおおおおお！ すげえぞお前ら！」「躊躇無いね〜！」「私達も負けていられませんか！」

”個性”は、授業開始日から散々皆で伸ばしてきた。4人の攻撃を皮切りに、一斉に土塊の魔獣に立ち向かっていくーAのメンバーたち。

「行くぜええええええええつ！」「危うく漏らすところだったじゃねえかあああああああ
あ！」

切島と峰田も遅れて参戦だ。

「うおおおおつ!! どうしたどうした!? イレイザー、あんたの所のクラス、みんな活きが
良いじゃん！」

「ええ、今年はとびつきりですよ——」

普段、あまり感情を見せない相澤先生だが、その口調には何処か誇らしさが混ざって
いた。

「では、引き続き頼みます。」ピクシーボブ」

「くう〜！おまかせ！ 逆だつてきたあ！」

ノリノリのピクシーボブだが、それに反比例するようにテンションの低い少年が眩く。

「下らん」

それはただ、嫌悪する目だった。

午後2時30分。くたくたになった1―A一同は、ようやく山の麓の合宿施設についてた。

「うーん、お昼抜きは残念だったわね〜」

ニヤハハと笑っているピクシーボブにマンダレイ。しかし、想像以上の速さに驚いていた。

「何が」3時間」ですか……」「腹減った……死ぬ」

ぐったり恨めしそうな瀬呂に、スタミナを消費しまくった切島がクラスを代表して感情を表現するが、プツシーキャッツの二人は悪びれない。

「悪いね。私達ならって意味。アレ」

「実力差自慢の為か……」「やらしいな!」

「ねこねこねこ……でも正直、日が沈む頃になると思ってた。あなた達、本当に凄い」

本当に驚いて、称賛するピクシーボブにマンダレイ。プロヒーローでも手こずる道だ

と言うのに、20人いるとは言えよくこの速さでたどり着けたものだ。

「私の土魔獣が思ったより簡単に攻略されちゃった。いいよ君ら……特に、その4人。新聞も賑わせてたし、躊躇の無さはその経験によるものよね」

と、緑谷・夜嵐・轟・飯田を見るピクシーボブ。

「三年後が楽しみ！ ツバつけとこ——！！！！」

「うわわわわ!!」「どわわわわつ!!」「っ!!」「みよ、妙齢の女性としていかなものか?!」

「マンドレイ……あの人あんなでしたっけ?」

「彼女焦ってるの。適齡的なアレで」

「適齡期と言えば——」「と言えばて!!」

再び緑谷の顔に肉球を当てるピクシーボブ。だが、見ているのはピクシーボブでなくて……。

「その子はどなたかのお子さんですか?」

目付きの悪い少年を見る緑谷。

「ああ違う。この子は私の従甥だよ。洗汰！ ホラ挨拶しな。一週間一緒に過ごすんだから……」

緑谷も挨拶しようと、洗汰にτετεてく近づいていく。

「あ、えと僕、雄英高校ヒーロー科の緑谷。よろしくね」

手を伸ばすと、変わりに洗汰はカウンター気味に緑谷の股間をめがけて殴りかかるが、その手をがっしり掴む。途端に、緑谷の顔が険しくなる。

「何をするんだよ」

「ひっ」

ギロリと睨みつけると、その迫力に洗汰が後ずさろうとするが、手を掴まれているのでそれも出来ない。

「は、離せよー」

「何で殴りかかったかを教えてくれたらね」

ヒーローに憧れていることも勿論では有るが、昔虐められてた事により、理不尽な暴力には緑谷は敏感だ。相手が小さくても——と言うより、5歳の時から虐められていたので尚更に許せないというのも有る。

「ヒーローになりたい連中とつるむ気はねえよ！」

「……仲良くする気が無いならそれで良いけど。理不尽な暴力はダメだよ。——それじゃ、ヴィランと変わらない」

「~~~~~!」

途端、涙目になって、逃げ出す洗汰。

「あつ、沈汰！ こらー！」

「み、緑谷……小さい子にちよつと強く言い過ぎなんじゃ……」

尾白が嗜めるが、それでも緑谷は厳しい顔だ。

「相手が5歳でも10歳でも……理不尽な暴力つてのは人を傷つけちゃうんだ……。だから、そうする前に止めなきゃ」

何時もと違う表情を見せる緑谷に、沈黙するクラスメイト達。微妙な空気になったのを、相澤先生が意図的にぶち壊す。

「お前ら、まあ……バスから荷物降ろせ。握り飯とインスタントな味噌汁だが、遅い昼飯は用意しておいた」

「え〜！ それだけですか〜！」

「ぶつちやけ、夕飯になると思ってたんだよ。とりあえず食って食後たっぷり休んだら、今日はひたすら土塊の魔獣との戦いだ。ランダムでグループを組ませて、ガンガン戦わせるからな。とりあえず、いくら暴れても良い土塊相手だから全力を出して自分の課題を探れ」

『はい！』

元氣よく返事をした後、腹を空かせた皆が、次々とおにぎりを腹に入れていく。

「米、ウメエー！」「幾らでも入るぞコレ！」

「諸君！ あんまり胃を一杯にすると午後に響くぞ！」

「と言いつつ委員長もがつついてんじやねえか！」

「ぼ、俺は身体が大きいから仕方ないのだ！」

「なら俺はもつと行くぞお！」

「さ、砂藤君食べ過ぎー?!」

普段と違う環境、みんなとの合宿に、ハイテンションになる者多数。このテンションのまま、午後の土塊との戦いへ。山の中の切り開かれた土地、可燃物も無くまっ平らだ。「さて、今日は普段諸君らが使っている体育館？とは違い、ただっ広いので普段個性を抑えて訓練している奴もそれなりに本気を出していいぞ。特に緑谷・夜嵐・轟。体育館や森の中は窮屈だっただろう。まずは、思い切り威力を出して限界を確認すること。良いな？」

「はいっ！」「ウツス！」「了解」

そうして出現するのは、破壊の暴風に大嵐に、大火炎と大氷結。緑谷は踏み込むたびに地面が砕け、夜嵐の巻き起こす大嵐は、中型までの魔獣を簡単に吹き飛ばし、轟の氷と炎は広範囲を薙ぎ払う。相手は命のない魔獣なので、三人共好き放題に技を試せていた。

「あ、あの三人やべえ……」「つか、夜嵐と轟の広範囲に超パワーで追いついてる緑谷も

超やべえ」「轟は加減しないと火事になるんじゃないか!?」

クラスメイト達もびっくりだ。こうして、ひたすら戦闘戦闘また戦闘で、1日が過ぎていった。夕飯はプツシーキャッツの二人が用意してくれた晩御飯で、これまた腹を空かせた欠食児童共は食い漁る。

そして……一部の人間にとつて待ちに待った露天風呂の時間である。

「求められてるのはこの壁の向こうなんスよ……」

「一人で何言ってるの峰田くん……」

皆が思い思いに風呂を楽しんでいる中、一人木の壁に耳をくつつける峰田。

「ホラ……いるんスよ……今日日、男女の入浴時間ズラさないなんて事故……そう、もう

これは事故なんスよ……」

流石の峰田である。飯田の注意にも全く耳を貸さず、Plus Ultraの精神で壁を駆け上る。

「速っ!!」「校訓を穢すんじゃないよ!!」

と、その時壁の間に入っていた洗汰が、峰田を突き落とす。

「ヒーロー以前にヒトのあれこれから学び直せ」

あまりに正論すぎる言葉であった。突き落とされる峰田。

「くそガキイイイイ!!」

哀れ峰田。

「やっぱり峰田ちゃんサイテーね」「ありがと洗汰くーん！」

そして、お礼を言われてつい女子を見て興奮のあまりぐらついて落ちてくる洗汰。それを、緑谷がキャッチする。マンダレイの所まで運んだが、ちよつと落ちた恐怖で気絶しただけとのこと。そして、聞かされたのはヒーローであった両親が殉職して、それを素晴らしいことだと言われ続けてきたとの事。

「……あ、それで……ヴィランみたいって言った時に泣いちゃったんですね……」

「……うん。親を殺した奴らと自分は一緒だって言われたと思っちゃったんだろうね。……でも、いきなり殴りかかるのは良くなかったから……」

たどたどしく、言葉を紡ぐマンダレイ。身寄りが居ない洗汰を引き取ったが、やはりどう接していいかわからないのだろう。キツく叱ってくれた事は良いことなのかも知れないし、悪いことかも知れない。だから、緑谷に何も言えなかった。

特訓! 特訓! そして女子会!

合宿二日目、午前5時30分。宿舍の前にA組が集められた。疲れが溜まっている上
にこの時間だ。なんだかクラスの半分くらいが眠そうである。

「おはよう諸君。本日から本格的に強化合宿を始める。今合宿の目的は全員の強化及び
それによる“仮免”の取得。具体的になりつつある敵意に立ち向かうための準備だ。
心して望むように。という訳で砂藤、こいつを飛ばしてみろ」

「これは、……体力テストの……」

砂藤が受け取ったのは、体力テスト時の測定用ソフトボール。前回の飛距離を改めて
全員に聞かせ、どれほど伸びているかを確認するためだ。

「おお! 成長具合か!」

「この三ヶ月色々濃かったからな! かなり伸びてんじゃねーの!」

「がんばれ砂藤ー!」

「おうよ! シュガードウープ!」

砂糖を10gほど流し込み、筋肉を膨らませてボールを思い切り投げ飛ばす。全力を
込め、力いっぱい吹き飛ばしたその結果は——たった、5%しか距離が伸びていなかった

た。

「あ、あれ？」「お、思ったより……」

困惑するクラスメイトに、淡々と説明する相澤先生。

「約三ヶ月間、様々な経験を経て確かに君らは著しく成長している。だがそれはあくまでも精神面や技術面、あとは多少の体力的な成長がメインで”個性”そのものは今見た通りでそこまで成長していない。体育館γは技術を伸ばすことに特化した場所だからな。だから——今日から君らの”個性”そのものを伸ばす。死ぬほどキツイがくれぐれも死なないように」

「はいっー」「うおおおおおっ！ 燃えるツス！」「うむ！ みんな張り切っていこうー！」
それぞれが同意すると、早速ピクシーボブが現れる。

「さーて、皆の個性を教えてもらったし、イレイザーと相談した結果導き出した、それぞれに合ったフィールドにカスタマイズするよ！」

そう言うのと、土流の個性で、みるみる広大な空き地の形が変わっていく。山や円柱、洞窟に崖など、様々な形に土塊が変わっていく。その様はセメントスを彷彿とさせる。

「うおー！ セメントスみたいだ！」

「あつちは街の中で無敵に近い個性だと思うけど、こっちは自然の中だと本当に便利な個性だね……！」

と、緑谷はノートにメモしようとして……今は持っていないのを思い出した。癖は中々治らないものだ。

「さてさて体育祭N.O. 1のあんたには、特別なステージをプレゼント!」
「へ?」

と、ピクシーボブが言うと、みんなのフィールドとは少し離れた所に巨大なアスレチックが組み上がっていく。山あり谷あり崖あり坂有り細道有り。多種多様な地形が網羅されている。

「緑谷はあの地形で、限界ギリギリの強度でコースを回り続けろ。時計回りと反時計回り、5周ずつ切り替えだ。それと夜嵐」

「ウツス!」

「時々、あの地形に向かって風を送れ。気が向いた時にランダムでいい。それも良い鍛錬になる」

「了解ツス!」

「あはは……強風の中パルクールか……難易度高そうだ」

と言いつつ、緑谷は笑いながら拳を合わせて気合を入れる。街中とはまた違う地形だが、判断力を鍛えるのには良さそうだ。

「よし、フィールドを使わない他のものはそれぞれの訓練具を用意した。全員、全力をつ

くすように」

『はいっ!』

こうして、合宿での特訓が始まった。

「な、何だこりゃあ……」「凄いわね、これ」

少し遅れてB組がやってきた頃、既にA組は地獄絵図を作り上げていた。限界を伸ばすために皆がそれぞれ”個性”を酷使しまくっている。青山や上鳴、麗日や瀬呂に峰田など、痛みを伴う特訓は一際キツそうだ。

「お、やってきたなB組! それじゃあ、あんたらにもフィールド用意するよ〜!」
『お願いします〜!』

と、A組の側で、B組のフィールドも作られていく。

その横で緑谷は今、フルカウル48%でコースを周回していた。50%を長く続けていくと骨にヒビが入りそうなので、ずっと動き続けることを考えると48%が限度だろう。しかし、地形が複雑なのでちよつとしたミスで即骨折も有りうるのが辛いところだ。おまけに――

「行くぜ緑谷ああああああああああ!」

「うわわわわわわっ!?!」

今度は崖を降り下っている最中に突風が飛んできた。慌てて崖を殴り、腕を土の中に突っ込み身体を固定する。

「おっす! 今回も流石だな! んじゃ、また飛ばしに来るぜ!」

「う、うん……よ、よろしく……」

この突然の突風がまた難易度を高くする。お陰で両手足を使うパルクールの様に動かなければならないので、確かに全身は鍛えられたし、個性のコントロールも向上するが、肉体と精神に疲労がガンガン溜まっていく。

「緑谷、動きが超速え……」 「でも、突風来まくりだろ。生きた心地しないんじゃねえか?」

ふと、特訓中に緑谷の方を見たメンバーも半ば呆れ顔だ。それほどまでに、素早く険しい地形を渡っていた。身体から緑の光が放たれ、その軌跡が映るので、まるで緑の彗星のようだ。

「ねこねこねこ! 本当にあの子すつこいね〜! んじゃ、コースチェンジ!」

「う、うわわわわわわっ!?!」

突如、コースの地形が変化する。飽きないように、慣れないように。山の険しさ谷の深さ、飛び地の高さなど——また変わる。都市部では似たような地形には出会っても同

じ地形には出会わないだろうし、こういう咄嗟の様々な対応への経験が、更に判断を早くするのだ。

そして、昼食を食べてからは、メニューが変わる。緑谷の前に現れたのは、ドでかい土塊の山だ。

「よし、緑谷、次だ。左右10周ずつしたら、この土の山を全部なくなるまで殴り飛ばすなり蹴り飛ばすなりしろ。そうしたら、またコースに戻って——の繰り返しだ。ひたすら伸ばしていくぞ！」

「は、はいっ！ 50%………ラアアアアアアアアッシュー！」

軽くジャンプをして、上の方から両手で殴り飛ばし削っていく。着地をしたら、今度は力を込めて左右の2連蹴り。着地をしたら、また手——と、両手両足を交互に使い土塊の山を削っていく。動かない土塊を攻撃するだけなら、変なイレギュラーも起きないだろうということで、ここで限界ギリギリの50%を使う。しかし、流石に動き続けて緑谷もそろそろ限界だ。

昼の特訓から1時間程した所で、土の山を吹き飛ばした後、地面に倒れた。

「……ぜひゅーっ………ぜひゅーっ………」

「んおっ？ 流石にお疲れか。レスキューキヤーツツ！」

と、倒れた緑谷をラグドールが担いで仮設のベッドへ連れて行く。

「あ、あり……こひゅーっ……」

どうやら、お礼を言う体力も残っていないようだ。

「にやははははん。気にするな少年! でも、その”個性”を持つてる重さはあちきには計り知れないけど、ちゃんと休憩もしないと伸びないぞ」

その言葉にびつくりする緑谷だが、そう言えばラグドールの”個性”はサーチだったと思ひ出す。

「安心しろ少年。そこら辺の事情は分かっているし他の人にも言わないにや。……だから——今はゆっくり休むにや」

声が出せないの、頷いて返事をする緑谷。それを見てラグドールはにやははつと笑うと、また別の生徒をサーチで探り始めるのだった。

「さア昨日言ったね”世話を焼くのは今日だけ”って!!」

「己で食う飯くらい己でつくれ!!カレー!!」

『イエツサ……』

さすがの飯田や夜嵐も疲れて、元氣よく返事をする余裕が無いようだ。

「アハハハハ、全員全身ブッチブチ!! だからって雑なねこまんまは作っちゃダメね!」

「確かに……災害時など避難先で消耗した人々の腹と心を満たすのも救助の一貫……流石英雄英、無駄がない!! 世界一うまいカレーを作ろうみんな!!」

「オ……オオ……」

「(飯田便利)」

しかし、こんなときにも皆を導こうとするのは流石といったところだろうか。

調理場にガスはなく、全部薪だ。ご飯は飯盒で炊き、鍋はかまどで温める。少しずつ疲労が回復してきた皆は、段々とテンションが上がってきた様だ。

薪に火をつけるのは少々手間がかかるので、轟が火を着けて回る。

「轟……こつちも火いちよーだい!」「ああ」

呼ばれるがままに、左から火を出す轟。だが、その表情はとても穏やかで優しい。

「わー! ありがとー!」「燃えろー!燃えろー!」

キャンプ場では、薪に火をつけるだけでも何故かテンションが上がるもの。麗日が飛び跳ね、芦戸も空気を団扇で送ったり、火力を上げて楽しんでいた。

「轟くん、こつちもお願いできますか〜!」

と、B組の方からも呼ばれる。

「こつち」

軽く承知してB組の方へも行こうとするが……

「あんまりA組に頼るんじゃない! 僕らだって自分で出来るだろう!」

と、物間が轟の左半身に触れてから、B組の竈に火を付けて回っていく。

『結局轟の個性に頼ってるんじゃないか!』

A組B組の多数からツツコミを受ける物間。だがこの程度で自重するほど彼の精神は脆くなかった。気にしないだけでも言う。

そして火を起したら、どンドン手順に従い分量をきちつと計り作っていく。

「うおおおおおおっ!」

「うわっ、意外と切るのが速えぞ夜嵐!」 「そう言えばコイツも見かけによらずコント

ロールが繊細だった!」

「とりあえず玉ねぎを炒める所からですわね」

切られた玉ねぎを鍋で炒めるところから本格的に。皆でする料理が楽しくて、ついついこだわりたいしてしまう。

「隠し味入れようぜ! りんごとかはちみつとか!」

「ちよこつとチョコ入れると結構良いぞ!」

「ソース! ……は、盛り付けた後それぞれがぶっかけるで良いか」

「ヨーグルトも案外……」

流石は国民食、みんなカレーの食べ方には一家言有るようだ。人数が人数なので、鍋ごとに微妙に隠し味を変えて作っていく。

そして、飯盒のご飯もふわっと炊きあがり……たつぷり！時間半はかけてようやく完成だ。

『いただきまーす！』

「うおおおおおっ！ うめええええええっ！ 状況も相まって更にうめえええええええっ！」

ワイワイガヤガヤ、作ったカレーをがつつく一同。ちゃっかりレーザーヘッドとブラドキングも混じってガッツリ食べている。——と、そんな中、離れていく冼汰に気がつく緑谷。皆の輪に混じらずに、一人分と半人分のカレーの皿を持って、足跡を追う。

ぐうーと、風に乗って腹の音が鳴るが、冼汰はそれを無理やり我慢する。

「おなか空いたよね？ これ食べなよ、カレー。上手く出来たよ」

急に現れた緑谷に、ビックリと身体が反応する冼汰。

「てめエ！ 何故ここが……！」

「小さい足跡は目立つからね。御飯食べないと大きくなれないよ？」

「いいよ。いらねえよ。言つたろ。つるむ気などねえ。俺のひみつきちから出てけ！」

「ひみつきちか……!」

「個性”をのぼすとか張り切っちゃってさ……気味悪い……そんなにひけらかしたいかよ、”力”を」

「違う」

低く、通る声。だが、その声は、昨日怒られた時よりも遥かに迫力があるように洗汰には感じられた。そして、緑谷の目を見て更に圧倒される――

「僕は、君と同じ年齢の頃――ヴィランに攫われた。……その時は、まだ”無個性”でさ。……悪の組織の実験台みたいになれちゃうところだったんだ。……まるでアニメだよね」

「……………それで、テレビにうつってるようなヒーローにたすけられたんだろ」

「違う。……あの人は、そんな人じゃなかった。――ヴィジランテでも無かった。……ただ、輝いて、人を救って、見返りも求めず去っていく……そんなおとぎ話のようなヒーローだった。だから、そんな人に憧れた……! 笑顔にしてくれる、ヒーローたちに憧れた――!」

「!?!」

緑谷の熱い思いに、気圧される洗汰。年少で凝り固まった価値観に、ズケズケと入り込んでいく熱い思い。それに、戸惑う。

「……ヒーローは、困っている人がいるから生まれたんだ。理不尽に、奪われる人がいるから。……だから、本当はヒーローなんて居ないほうが良いのかも知れない。……だけど、必要だから、居るんだ」

その時、洗汰の脳裏によぎるのは自分を引き取ってくれたマンダレイの言葉。

”洗汰。あんたのパパとママ……ウオーターホースはね、確かにあんたを遺して逝ってしまったんだ。でもね、そのおかげで守られた命が確かにあるんだ”

「っ……何も……知らないくせに……!」

「うん、何も知らない。……でも、それは人を救けない理由にはならないんだ」

そう言うと、一転優しく微笑んで、カレーのお皿を置いていく。

「頑張って作ったから。冷めないうちに食べて。」個性^①を使った後はお腹も空くでしよっ^②。」

「!」

そう言うと、一人降りていく緑谷。辺りには、カレーのいい匂いが漂っていた。

「んお? どうした? 緑谷? ちょっと居なくなってたけど」

「えーと……ちよつと、お節介」

「そっか」

戻つてくると、少し疑問に思つていたクラスメイトに質問されるが、お節介の一言でみんなだいたい察してくれたようだ。常に、皆のお節介を焼く男——それが、緑谷だったからだ。今回もきつと……誰かのためにお節介をしているのだろうか。

「ぎゃあああああああああ!?!」

峰田が虎に覗きがバレてしばかれています。悲鳴をバツクに、A組とB組の女子達が集まつて女子会を開いていた。皆寝る前のラフな格好であり、どこか可愛らしい。

「実は私、女子会なるものをするのは初めてなんですけど……どういふ事をするのが女子会らしいのでしょうか?」

お嬢様育ちで、こういう事とは無縁だった八百万がとてもワクワクしている。

「女子が集まつて、お話するのが女子会なんじゃないの?」

首をかしげる芦戸に、チツチツチと葉隠が否定する。

「女子会と言つたらやっぱり恋バナでしょ!」

その言葉に、一部女子のテンションが激しく上がる。

「恋バナ、良いね!」

「そうだ、恋バナだ!」

「恋か……」

盛り上がる女子たちに、ちよつと顔を赤くしたりする麗日。

「ここ、恋っ!?」　そ、そんな、結婚前ですのに……」

と、お硬い八百万。他にも、慈愛の笑みを浮かべる塩崎やら、マイペースだけど興味深げな柳やら、ともかく恋バナに決定のようだ。

「それじゃ、彼氏彼女が居る人……」

誰が名乗り出ると皆がワクワクしているが、誰も居ないことに愕然とする。

「あ、あれ……だ、誰も……」「いない……?」

この事に危機感を覚える女子達。中学の同級生は、高校に上がって彼氏が出来ただの、いい雰囲気になっただの、恋や青春を謳歌していたからだ。

「まあ、雄英に入って特訓特訓また特訓!の嵐だったからね」

と苦笑するのは拳藤だ。その言葉に、みんながウンウンと頷く。部活なんて入る暇もないし、放課後はみんなで集まって特訓をするので、中々に青春を謳歌する暇がない。

「え、えーと……じゃあ、片思いでも良いから好きな人が居る人は……!」

と言つても、また誰も手を挙げない。どうやら想像以上に自分たちは恋をしていないのではと衝撃を受ける女子達。

そこで、次は男子の論評へと入っていく。ずばり、彼氏にするには誰が良いか、だ。

「とりあえず峰田はダメとして……」

『うんうん』

満場一致、哀れ峰田。

「後、物間君も……」

「黙ってれば顔はイケメンなのに……」「中身が……」

『うんうん』

哀れ物間。

「そもそも、同級生でヒーローを目指すライバルだしね」

「中々そういう対象で見たことなかったわ。きのこちゃん反省」

何せ、普段は恋バナより戦闘訓練で戦うほうが多い仲だ。どうしても忘れてしまう。

「そう言えば、耳郎ちゃんは上鳴ちゃんと結構一緒にいるわね、ケロケロ」

「なっ!? 違うし! 顔はそこそこイケメンだけど私はああいうチャライのダメダメ!

絶対浮気するじゃん!」

上鳴の信頼無い……哀れ、上鳴。

「あ、イケメンと言えば轟君は?」

イケメン強個性に、体育祭で緑谷と戦ってからは天然でちよつと抜けてて可愛い。少なくともマイナス点は見当たらない。

「……エンデヴァアの息子の?」

『あ』

だが、拳藤の一言に、場が凍りつく。よりによつて、父親がああのエンデヴァーである。「……怖そうだね」「上手くエンデヴァーと付き合う自信、無いかも……」「最近結構変わったらしいけど……」「ええ、I・アイランドでは柔らかくなつていたようにお見受けしましたわ」「そうなのかく……でもちよつとまだ怖いかなあ?」

親のせいで女子に躊躇されてしまう轟であつた。これを聞いたら果たしてどう思うやら……

「他のイケメンと言えば、飯田委員長はどうでしょう?」

と、塩崎が首を傾げる。ヒーロー一家の出でエリート、真面目でイケメン。こちらも文句のつけようがないかと思われたが……。

「飯田つて手を繋ぐまで何年も掛かりそう」

「と言うより、結婚してからじゃないと握れないんじゃない?」

「ハハツ、流石にそこまでじゃ……無いよね?」

「飯田ちゃんならあり得るわ」

蛙吹の言葉に、沈黙する一同。確かに人として付き合うには素晴らしいが、恋愛対象となると尻込みする……と。

辛口評価の数々は、もう決して男子には聞かせられないだろう。障子辺りが聞き耳を

立てて無くて本当に良かった。

「えーと、それじゃあ夜嵐——」

「熱い」「熱いわ」「熱いね」「暑苦しい」

あのテンションが振り切っているノリは、よっぽどで無いとついていけないだろう。そして、残念ながらそのよっぽどについていけない人は、まだA組B組には居ないようだ。「んじやんじや、入試と体育祭1位の男緑谷! 割といい物件だよ、顔は地味だけど」

女子の目は厳しい。

「そうねえ……緑谷ちゃんは凄く努力家だと思うわ……それにみんなのことを考えてくれている。体育館を借りての特訓も、緑谷ちゃんが始めたことよね」

「うんうん。私も、USJの襲撃が終わった後覗いたら誘われたし。特訓の最中でも緑谷、皆の特訓に付き合ってるし。あいつもかなり熱いよね」

その言葉に、うんうんと頷く一同。特に、個性をほとんど手加減無しで向けられたり、実戦に近い形で鍛錬できるのは大きい。A組B組の特訓メンバーは、何らかの形で緑谷にお世話になっているのだが……

「それで、オールマイトオタクなんだよね。なんと言うか、デートでもオールマイトグッズのお店に連れて行かれちゃいそうな程」

「それと、付き合うの大変そうだよね……No. 1目指してひた走ってるから、何か邪魔

するのが悪く思えちゃいそうで……」

ひたすらに皆のために思う努力家で、ヒーローになるのにすべてを捧げているような緑谷。すると、気軽に手を出せる相手ではなく……それなり以上の覚悟が必要になるだろう。

「……緑谷ちゃん、何時も頑張っているからね」

「……うん。USJでも、I・アイランドでも真つ先に危ない所に突っ込んで、みんなを助けようとして」

「……緑谷さんだけでなく、戦う皆様は、かつこよかったですね……」

「うん、あれは何というかこう、胸が熱くなっちゃったよ私も」

だが、命をかけてヴィランと戦う姿——それをカッコイイと思ってしまうのも、ヒーローを目指す女の子ならではの思いだった。特に、人を救うために積極的に戦いに身を投じていったメンバーへの好感度は、知らず知らずのうちに高くなっていった。あの峰田も、いざという時は誰かのために命を懸けるだろう。

こうして、ああでもないこうでもない、A組B組全員の論評が終わるまで、女子会は続いたのだった。

僕のヒーロー

女子会で盛り上がった2日目も終わり、3日目。訓練内容は相変わらずだ。技量を伸ばす特訓は雄英で存分に出来るので、今は「個性」そのものを伸ばす特訓を優先させる。

だが、その中でも補習組は特にキツそうだな。通常就寝時間は22時なのに、補習組は26時まで補修を受けているので当然だろうか。

いろいろと出し尽くして休憩中、緑谷はフラッと相澤先生に他の先生方の事を探ねる。だが、今回は隠密性を重視するために担任二人と外部協力者4人の、必要最低限の同行で済ませているようだ。

「特にオールマイトは、敵側の目的の一つとして推測されている以上、来てもらうわけにはいかん。良くも悪くも目立つからこうなるんだあの人は……」

と、機嫌が悪くなる相澤先生。

「(“悪くも”の割合でかそう……)」

微妙に気ままずくなる緑谷。トゥルーフォームなら目立たないが、それだとただの骸骨

ぼい人に過ぎなくなる。それに、この合宿場にはトゥルーフォームで隠れられる場所が殆ど無いだろう。

そんな空気を要えるように、ピクシーボブが今日の夕方の話題を切り出す。

「ねこねこねこ……それよりみんな！ 今日の晩はねえ……クラス対抗肝試しを決行するよ！ しつかり訓練した後はしつかり楽しいことが有る！ ザー！ アメとムチ！」

「ああ……忘れてた！」「怖いマジやだあ……」「闇の狂宴……」「イベントらしい事もやってくれるんだ」「対抗して所が気に入った」

反応はそれぞれ。だが、訓練ばかりでは疲れるしい刺激になるだろう。

「というわけで、今は全力で励むのだあ!!!」

『イエッサア!!!』

そんなこんなで3日目の鍛錬も終わり、今日は肉じやが。緑谷は竈の用意をしている最中だ。そんな時、鍋を持った轟がやってくる。

「……そういや、昨日の”お節介”はどうなった？」

「あはは……まだまだかな。……その子はヒーロー……いや、”個性”ありきの超人社会そのものを嫌っていてさ……。中々上手く……ね」

見渡すと、今日も洗汰は居ない。恐らくまたひみつちちに行っているのだろう。

「…………ふと、オールマイトならなんて言うのかなって考えちゃってさ…………」

「…………素性も分かんねえ通りすがりに正論吐かれても煩わしいだけだろ。言葉単体だけで動くようならそれだけの重さだったってだけで…………大事なものは」何をした・なにをしてる人間に」言われるか…………だ。言葉には常に行動が伴う…………と思う」

「…………そうだね。確かに…………通りすがりが何いってんだって感じだ」

「お前がそいつをどうしてえのか知らねえけど、デリケートな話題にあんまズケズケ首突っ込むのもアレだぞ。そういうの気にせずぶっ壊してくるからな、お前意外と。後、夜嵐の奴もか」

「あはは…………」

「…………ただまあ、そのお節介も、悪くねえって思うことも有るけどな…………」

「轟君…………」

お節介に、救われた——されなければ、ずっと囚われていたままだったかもしれない。——なら、少しでも可能性があるのであれば悪くないのかもしれない。そう、轟は思った。

そして皆が夕食を食べ終わった頃。

「腹もふくれた。皿も洗った！ お次は…………「肝を試す時間だー!!」

と、食い気味に芦戸が叫ぶが、そこに響く無慈悲な声。

「その前に大変心苦しいが、補習連中は……これから俺と補習授業だ」

「ウソだろ」

見せられない顔になった芦戸共々、7人の赤点組が縛られて連れて行かれる。

「すまん。日中の訓練が思ったより疎かになっていたのでこつちを削る」

「うわあああああ!! 堪忍してくれえええええ!! 試させてくれええええええ!」

泣きながら引きずられていく七人を、緑谷は黙って見送ることしか出来なかった。

さて、そんな訳でくじ引きだが——A組は7人が補習に行っているので残り13人。

必然的に一人余ることになるが……

「……………僕が余った」

「クジ引きだから……必ず誰かこうなる運命だから……」

尾白が慰めてくれるも、中学までのぼっち気味の自分を思い出してちよつと泣ける緑

谷だった。

だが、そんなのどかだった空気が、かき消される。最後尾、一人寂しく順番を待つ緑

谷が感じたのは——幾度となく感じた、ヴィラン独特の——敵意。

「っ!」

見れば、ピクシーボブに、巨大な棒状のものが振り上げられていた。
「危ないっ!」

瞬間、咄嗟のデラウエアスマツシユで弾き飛ばす。

「にやにやつ!」「ど、どうした緑谷っ!」

激しい衝撃波に、皆が一樣にそちらを向くと——やってきていたのは怪しい二人組と、人影。一人は巨大な武器を背負い、身体にスパイク状のものを纏い、ステインの模倣者のようにも見える。もう一人は巨大な棒を持っていることを除けば、そのへんにいそうな人間だ。——だが、もう一つの人影——見間違い様の無いその姿は——

『脳無!』

残ったA組のメンバーが、声を上げる。

「あらん、中々勘がいいのね」「緑谷出久——ステインが認めし者——」

「ステイン……奴のフォロワーか!」

「ああそうだとも! ステインを終わらせた者、飯田天哉!」

こちらを油断なく見据えてくるヴィラン二人。そして、今にも暴れだしそうな脳無。

「ご機嫌よろしゅう雄英高校! 我らヴィラン連合開闢行動隊!!」

「ヴィラン連合……何でここに……!!」

そして、緑谷はピクシーボブを庇う位置に移動しながら、瞬時に今の状況をはじき出

す。残っているのは生徒数人とプッシーキャッツ。だが、脳無を相手にするにはパワーが足りない。

「プッシーキャッツ！ あの脳無は、僕がやります!! あなた方は、他二人を……!」
「なっ!?」「何言ってるのよ!?」「お前は逃げる!」

三者三様、緑谷に撤退を促すが、それを切つて捨てる。

「あなた方では、”パワー不足”です! それに、洗汰君は多分一人で別の場所にいます」

『!』

そう言うと、身に纏うはフルカウル50%。加減する余裕は、無い!

「あの子が最優先抹殺対象の緑谷出久ねん。ああら、可愛いわあ♡」

「奴の相手は脳無がする。では、俺達は他を——」

そう言うと、ヴィラン二人毎衝撃波を飛ばして攻撃しようとするが、一瞬で移動した脳無に受け止められた。

「その子はミドルレンジに、色々とマシマシしたかなりのハイスペックらしいわん♪」

女言葉を使う男のヴィランが、煽るように言う。だが、それに揺らがない緑谷。そして、今の行動を見て脳無の相手を諦めるプッシーキャッツ組。

「ごめん……!」「すまぬ、緑谷……!」「魔獣、森中に放つよ! 素敵!」

だが、ヴィラン側もまずピクシーボブを仕留めきれなかったのが痛かった。無限に生成される魔獣が、あちこちでヴィランを襲う。だが、脳無に対しては足止めにするらない。

「50%！ セントルイススマッシュユ！」

速攻を仕掛け、拳より威力の高い足の、限界ギリギリの威力を叩き込む——が。

「——！」

それなりのダメージを受けたようだが、直ぐに回復され——通じない。そして、回復上限も不明。更には、このまま手をこまねいていけば——洗汰が殺される可能性もある。フルガントレットを取りに戻る時間も無い。だから、緑谷はまず、利き手と反対側、左手を捨てた。

「100%！ デトロイト……スマアアアアアアッシュユ！」

途端、巻き起こる暴風。耐久力に振ったミドルレンジの脳無では捉えきれないその速さで、思い切り顔面を、殴りつけた。

轟音、暴風——木々をなぎ倒し、脳無は遙か遠くまで吹き飛び、山肌へ激突する。そして、緑谷の叫び。

「つあああああああああああああああああああああ！」

100%で殴りつけた左腕が、耐えきれずに折れた。その激痛に、たまらず叫ぶ。――

—だが、その決死の特攻は脳無を撃破する事に成功する。

「み、緑谷君!」「緑谷あ!」

「う、ウソでしょ!?! 脳無が一発で!?!」「流石は、ステインの認めし者……!?!これしきでやられるはずが無いと思っていた……!?!」

呆然とするヴィラン二人を横に、飯田がレシプロバーストで緑谷の元へと走っていく。

「よくやってくれた! さ、僕が運ぼう!」

「ま、まだ……まだ冴汰君が残ってる……探しに行かなきゃ……!?! 委員長は、みんなの引率を……!?!」

「み、緑谷君……わ、分かった。だが、絶対に戻ってくるんだぞ!」

「うん!」

鬼気迫る緑谷の表情に、飯田は頷くしか出来ない。——だが、何処か確信もしていた。彼なら、たとえどんなに傷ついても、助け出すのだろうと。

そして、二人のヴィランをピクシーボブと虎が抑えている内に、マンダレイが辺り一帯にテレパスを送る。

『皆!!! ヴィラン二名に脳無一体が襲来!!! ほかにも複数いる可能性アリ! 動けるものは直ちに施設へ!! 会敵しても決して交戦せず撤退を!! なお、脳無一体は緑谷が撃

退!!』

そのテレパスは、合宿場に居る雄英側全員に届いた。そして——
「ラ、ラグドールも襲われてるっ?! い、今ありったけ魔獣送るからっ!」
遠くで、ラグドールも襲われていた。

一方その頃、ひみつきちに居た冴汰は、一人のヴィランと対峙していた。どんな運命の悪戯か——それは、ウォーターホースを殺したヴィラン。マスキュラー。

「あ、おい。景気づけに一杯やらせろよ」

ほんの、遊びのような感覚で、冴汰の命を奪いに来るヴィラン。その逃れ得ぬ死の予感に、走馬灯が冴汰の脳裏をよぎる。

「パ。パ……… ママッ………」

だが、そこに一人、訪れるヒーローが来た!

「冴汰君っ………」

殴り殺そうとするマスキュラーから、冴汰を救けると、対峙する。ぶらりと頼りなくぶら下がる左腕が、痛々しい。だが、涙と鼻水で濡れ、恐怖のどん底に居た冴汰にだからこそ、この状態でも緑谷は言うのだ。

「大丈夫だよ、冴汰君………僕が、助けに来た………」

そう言うのと、身体に50%のフルカウルを纏わせ続ける。

「必ず、救けるって？ はあはははは……さすがヒーロー志望者って感じだな。どこにでも現れて正義面しやがる。緑谷ってやつだろお前？ ちようどいいよ。お前は率先して殺しとけっってお達しだ」

そう言うのと、マントを脱ぎ捨て、筋肉の筋を膨らませて纏い、緑谷に殴りかかる。――が、そこに蹴りを入れる緑谷。遊びで放った腕を、蹴り飛ばし、更に空中に飛びかかり追撃するが、ガードされる。

「はははあー！ 良いぜ緑谷あー！ 随分なパワーとスピードじゃねえか！ そんなちっこい身体のくせによおー！」

笑いながら、また筋繊維を増加させる。更に上がるスピードとパワー。万全の身体ならば避けられたであろう攻撃も、今は必死にガードするしか無い。

「それにしてもどうしたその腕はよう！ 他の奴にやられて逃げてきたか！」
「ちよつと脳無を倒した時にね！」

威力の高い蹴り技を更に叩き込むが、それを筋繊維で柔軟にガードする。脳無並みにシヨックを吸収しているようにすら感じてしまう。

「ははあー！ あの出来損ないを倒しやがったか！ まあまあやるようだが、俺はそれ以上だぜえー！」

緑谷が、躲し、いなし、弾き、抵抗するたびに、少しずつスピードとパワーを上げていくマスキュラー。緑谷はただでさえ左腕のハンデが有るのに、近くに洗汰が居るせいで躲すのにも限界がある。

「哀れなもんだなヒーローつてのはよう！ そんな役にも立たねえガキをかばわなきやいけねえんだからよ！」

少しずつ、ダメージが蓄積していく緑谷の姿に、涙が止まらない洗汰。あんなに、自分分は酷いことをしようとして、拒絶したのに。——なのに、あんなにぼろぼろになつて

「ウオーターホース……パパ……ママ……も……そんな風にいたぶつて……殺したのか……！」

「ああ……？ マジかよ、ヒーローの子供かよ？ 運命的じゃねえのー！」

辺りを跳ね回り、両腕で殴りつけながら、楽しそうに笑う。

「おまえのせい……おまえみたいなの奴のせいで、いつもいつもこうなるんだ！」

だが、その叫びを鼻で笑うマスキュラー。何の良心の呵責も感じていない、生粋のシリアルキラーの語り様は、おぞましい。

「……ガキはそうやってすぐ責任転嫁する。よくないぜ。俺だつて別にこの眼のこと恨んでねえぞ？ 俺は、殺す”ことをやって、あの二人はそれを止めたがった。お互いや

りてえことやった結果さ。悪いのは出来もしねえことをやりたがってた……てめえの
パパとママさ！」

ただ、理不尽で、圧倒的な暴力。それに蹂躪されるのが悔しくて、涙が出てくる。――
だが、それに、我慢できない者も居るのだ。

「悪いのは、お前だろ！」

特攻しながら、思い切り右を振りかぶる緑谷。だが――

「左が、がら空きだぜ緑谷あ！」

その隙めがけて、渾身の一撃を叩き込むマスクュラー。ボキボキと、気持ちのいい音
と感触に酔いしれる――が。

「そこを、狙ってくると思ってたあ！」

左を囿にし、痛みも何もかもを無視して、右に思い切り、力を込めた。

「ワン・フォー・オール120%！デトロイトスマアアアアアアアアアアアッッシュュ！」
「何っ!?が、あああああつ!？」

筋繊維の防御が破壊される。咄嗟のガードが、根こそぎ引きちぎられ、腕が迫る。お互いの骨を砕きながら、突き刺さる右腕は、マスクュラーを山肌へと叩きつけ、ひみつきちが粉々に砕け散る。岩肌に突き刺さったマスクュラーの、義眼はもう無い。

「……何も、知らないくせに……！」

脳裏によぎるのは、かつてマンダレイに言われた言葉。

” あんたのパパとママ……ウオーターホースはね、たしかにあんたを遺して逝ってしまった。でもね、そのおかげで守られた命が確かにあるんだ”

「何で!! 何も……! 知らないくせに……!」

” あんたもいつかきつと出会う時が来る。そしたら分かる。命を賭して、あんたを救う。あんたにとつての——……”

「何でっ……そこまで……!」

” 僕の——”

服も、何より両腕もボロボロになり、なお洗汰の前に立つ。とても、とても大きな背中。闇夜の中、それでも今まで見たどんなものより輝いて見える——

” 僕のヒーロー”

月夜に、緑谷は勝利の雄叫びを上げたのだった。

混沌の森

「はあっ……はあっ……はあっ……!!」

疲労と激痛で、崩れ落ちそうになった身体を緑谷は気力だけで支えていた。今、倒れる訳にはいかないからだ。

「あつ、おい!」

心配して駆け寄ってくる冼汰の声で、少し意識を戻す。

「大丈夫……! まだ、やらなきゃいけない事がある……」

「そんなボロボロで何をしなきゃいけないんだよ……!」

冼汰に説明する間に呼吸を整える。過剰なエンドルフィンとアドレナリン分泌が、痛みを無理やり忘れさせる。

「君を救ける前に戦ったヴィランも、こいつも、相当強い……! ラグドールも襲われてたし、1年の皆も! 皆だけで太刀打ちできるか分からない!」

皆を救いたいと思う衝動が、緑谷を突き動かす。自惚れるつもりはない——が、冷静に考えて、脳無クラスの敵に太刀打ちできる味方があまりにも少ない。イレイザーヘッドの“個性”も、脳無には無力だ。だから、自分が動かなければならない。

「僕が動いて救けられるなら、動かなきゃいけないだろ。だからこそ、足を残した」

自分を庇い、凄まじい戦いを繰り広げたのに、なおも動こうとする覚悟に、洗汰は圧倒される。これが——この覚悟が、ヒーロー。両親が、命を賭したものの。

「とりあえず、コイツは暫く動けないと思う——本気の本気を出したしね……。だから、まずは君を守らなきゃならない」

「え？」

「君にしか出来ないことが有る。森に火をつけられてる。あれじゃどの道閉じ込められちゃう。分かるかい？ 君のその”個性”が必要だ。僕らを救けて——」

ぼろぼろになりながらも、自分に笑顔を向けてくる緑谷に、頷く。

「さあおぶさつて！ まず君を施設に預けなきゃ」

両足は、無事だ。だから洗汰は頷くと、思い切りしがみついた。

「飛ばすよー！」

速さに加減は出来ない。50%フルカウルで、緑谷は施設へと急いだ。

イレイザーヘッドは、肝試しの場合へと急いでいた。ヴィランの襲撃——兎に角、一人でも戦力に回らねば。だが、横から気配が。

「先生!!」

「緑……」

そこで、緑谷の全身——特に両腕を見て、イレイザーヘッドは事態の深刻さを知る。あの超パワーの緑谷が両腕を壊すほどのヴィランに脳無。生半可なヒーローでは太刀打ちできない相手である可能性が高い。この山では轟も炎は出せないし、相性次第では夜嵐も危ない可能性がある。

「大変なんです……！ 脳無と、それ以上のヴィランが居て……！ とりあえず、皆を助けに行かないと……！」

「脳無は知っていたが、それ以上のヴィランだと……！」

戦慄するイレイザーヘッドに、緑谷は更にまくしたてる。脳内物質がドバドバで、それを切らすわけにも行かない。テンションのままに叫ぶ。

「洗汰くんをお願いします。水の”個性”です。絶対に守って下さい！」

「分かった。だが、無理を——」

するなど言おうとして、言えなかった。教師失格だが、あそこまでしなければならぬヴィランが迫っているのだろう。

「……絶対に、生きて戻れ」

「はいっ！」

相澤に出来ることは、今まで人を救ってきたヒーロー、ゴージャスグリーンを信じて

送り出すことだけであった。

一方、ピクシーボブは森中に魔獣を張り巡らせていた。だが、襲撃してきたヴィランは少数精鋭らしく、あちこちで戦闘が起こっているが、どれも手強い。生徒の力を借りつつ時間を粘っているが特に脳無とかいうやつは、様々な個性持ちに超パワーで、たやすく魔獣を撃破している。更には、ラグドールが見えないことにも焦りに拍車をかけていた。

だが、この場の要の一人はピクシーボブであると理解しているヴィラン連合は、更に脳無を投入する。

「なっ、も、もうー体?!」

「あら〜ん♡ ミドルレンジねん、さあ、あなた方は勝てるかしらん?」「ヒヤハハッ! てめえらもう終わりだぜえ!」

マンダレイと虎は、ヴィランと互角にやりあっている。そこにこれ以上来たら、戦闘の流れが完全に向こうに行く。

「くっ、援軍は……!」

少数での隠密が仇となった。この場に駆けつけて来られそうなヒーローは、イレイザーヘッドとブラドキングのみ。このままでは、ジリ貧だ。——だが、そこに駆けつけ

てくるものが居た。

「50%！ジョージアスマアアアアアアアッシュー！」

駆けつけてきた緑谷が、衝撃波でヴィラン二人を吹き飛ばすと、そのまま着地。地面を砕きつつ、脳無に迫る。

「セントルイス、スマアアアアアアアッシュー！」

大声を上げてテンションを無理やり維持し、脳無を蹴りで地面に叩きつける。瞬間、割れる大地。大穴が空き、脳無が地面へ沈み込んだ。

「緑谷っ！」「緑谷君！」「ちよっ、その腕!？」

救けられた3人だが、緑谷の腕を見て驚く。もう、動けるような身体ではないのに――

「皆さん、洗汰君は無事です！ それと、脳無以上のヴィランを一人撃破しました！ それとこいつは……!？」

起きてこない所を見ると、ミドルレンジなのだろう。もし、それ以上だったら今度は足を犠牲にしなければならないところだ。

「大丈夫か……。そうだ、マンダレイ！ 施設の皆にテレパスをお願いします！」

「えっ、わ、分かったわ！」

そう言うと、緑谷の言うままにマンダレイはテレパスを送った。

施設では、状況の分からぬまま、8人の生徒がブラドキングに護衛をされていた。万が一突入されるかもしれないし、慌てて自分たちの持ってきたヒーロースーツを着込む。

「一体状況はどうなってるんだ……」「そ、外の連中は大丈夫なのか……?」「分からん!」だが、お前らは俺が必ず守る!」

不安そうな生徒たちに、ブラドキングはそう宣言して励ます。だが、それでも内心は不安であった。

そこへ再びマンダレイのテレパスが流れる。全員が喋るのを止め、身じろぎもせず、一言一句を聞き逃さないようにする。

『施設のみんな、聞こえてる!?』 緑谷からの伝言よ! 緑谷のヒーロースーツのスーツケースの中に、ガジェットが有るわ! ドローンや小型無線機とか、便利なものが色々! 説明書も入っているから、見ながらドローンを飛ばして! 緊急用パスワードは、”ゴージャスブルー”よ!』

「聞こえたな!」

『はいっ!』

ブラドキングは周辺警戒だ。だから、生徒達が、緑谷のスーツケースを開ける。

「うわ、重っ!?」「あいつ本当に色々を持ち込んでるからな……!」「せ、説明書は何処だ!?」って、コレ英語じゃん!」「日本語の、有った!」「今回ばかりは協力するよA組!」緑谷のスーツケースを総ざらいするかのようひっくり返し、説明書を大きく広げ、ああでも無いこうでも無いと、目当てのものを探し当てる。

「小型無線機、有った!」

「ドローンはこれか……どうやって使うんだ?」

と、説明書を読み進めていく。

「えーと、これだ! サポートAI! この超重量コンピューターってのを起動して……後、こっちのヘルメットについてるマイクも!」

『声紋認証を行って下さい』

コンピューターのスイッチを探り起動すると、AIの音が響く。

「えっと、何を言やあ良いんだ!?!」

あたふた慌てる面子に、物間が突っ込む。

「緊急用パスワードって奴だろう! パスワード、ゴージャスブルー! これで良いのか!?!」

継るように、パスワードを言うとHALが起動する。

『緊急用パスワードを認証。マスターの声紋確認できず。緊急事態と認定』

すると、ドローンが勝手に起動し、幾つか小型無線機を取ると、仕込まれたカメラが周辺を確認する。

『状況確認、屋内と判断。状況を説明して下さい』

超高度なAIであるHALが、説明を求める。そこに、ブラドキングが間髪入れずに説明する。

「ヴィランの襲撃中で、要救助者が散り散りになっている！ 北の方角、火事の現場付近だー！」

『了解しました。ドローンを射出します。窓を開けて下さい』

「は、はいっ！」

言われるがままに窓を開けると、複数のドローンが一斉に飛び立っていく。そのまま航空から、多数のセンサーを使い分け、居場所を確認していく。

「状況はどうなっているか……」

『立体映像投射装置の使用を提案します』

「えっ、どれだ……!?!」「あ、有った！」

起動すると、GPSから判断した位置情報により周辺地域の地図が表示され、飛んでいるドローンの場所などがリアルタイムで更新される。

「うおおおおおっ!?!」「すっげええええええええええ!?!」

I・アイランド製未来感溢れるガジェットがもたらす情報に、テンションが上がる。これなら、色々とサポートできるかもしれない。

『ヒーロー：イレイザーヘッド及び民間人と思わしき少年発見』

地図を見れば、施設の直ぐ側のドローンがイレイザーヘッドと洗汰を捉えていた。そのままドローンが降り立ち、マイクに音声が届く位置に近づく。

”イレイザー！ 無事か！”

「ブラド!? それは、緑谷のガジェットか……! ああ、少なくともこの子は保護した！ 預けたら、すぐにまた向かう！」

手短に状況を説明するイレイザーヘッド。今は一刻を争うので、合流してから状況を説明する手間が減るのさえありがたい。

”そっちは任せた！ こちらからもできるだけサポートはする！”

I・アイランドから持ってきた多数のガジェット……その技術は今、確かに沢山の人を救おうとしていた。

同時刻、夜嵐・拳藤・庄田・鉄哲は脳無と対峙していた。ガスをばら撒く個性のヴィランは、夜嵐が来ることでガスが吹き飛ばされ瞬殺されたが、狙いはその夜嵐だった。ガスをばら撒けばかならず来るだろうという読みの元に、飛行型脳無が投入されていた

のだ。

「くっそ！ 速えー！」

空を飛ぶ脳無が相手のため、対抗できているのは夜嵐一人。だが、複数個性を使い分けるので遠距離戦も出来る上、風では脳無に対しては破壊力が足りない。だが、他にやれば空を飛べるこの脳無の独壇場になりかねない。だから、夜嵐は幾度も攻撃を受け、ポロポロになりながらも必死で足止めをしていた。——最も、脳無の狙いも夜嵐だったのだが。

そして、それがどうにも我慢ならない男が居た。鉄哲である。

「畜生！ 夜嵐が戦ってるつてのによお！」

夜嵐の風は、自分をコントロールしヴィランを相手取るのに精一杯のようだ。何か、出来ることは——と周りを見渡して。

「あつた！ 庄田！ 俺を思い切りぶん殴れ！ 拳藤！ その後アイツに向かって俺をぶん殴れ！」

方法は単純明快。拳藤に殴られて空中へ飛び出し、庄田のツインインパクトで空中で更に加速する。単純明快だが、やるしか無い。

「鉄哲っ！ 痛いぞー！」 「2発目の衝撃は数倍だ！ 絶対に硬化を解くんじやないぞー！」

「あつたりめえよ……ダチが一人頑張ってるのに何も出来ねえ方が痛え！ さあ、や

れえ！」

「応っ!」「行くよっ!」

まず、庄田が渾身の力を込めて、鉄哲の背中をぶん殴る。その後、拳藤が拳をありつたけ大きくして、下から思い切りアッパーカットで吹き飛ばす。

「アガガガッ!」

クラスメイトの二発の衝撃を受け、空に打ち出される。ヴィランの方向に、身体を向けて――

「今だ、庄田あー!」

「開放!!」
ファイア

「いいいいいいくうううううううぜえええええええええええええええええ!!」

途端、鉄哲の背中に来る本日最大の衝撃。そのまま加速して――脳無に避けられた。夜嵐と争っている最中だが、まるで隙が無い。

「うお、あぶねえ!?!」

そして、地面に激突しそうになった鉄哲を、慌てて風で減速させた。

「つってええええええええええ!」

「だ、大丈夫かつ!?!」「大丈夫!?!」

「平気だ! 今ので大分コッ、掴んだと思う! んじゃもう一発頼むぜえ!!」

痛みなど物ともしないとしても言うように、次を要求する鉄哲。そんな様子に、二人共うなずいて応える。

「もう一発行くぞー！」 「でりやあああああああああああああつー！」

殴られ、殴られ射出される。また、体の正面で脳無を捉えて「今だあー！」

「開放!!」

方位が修正され、先程よりも更に近づくが、また当たらない。

「ぐつ、があ……!」「くつ……!」「効く……!」

殴られる鉄哲もダメージを受けるが、殴る二人もまた、手にダメージを受けている。ガチガチのものを、全力で殴っているからだ。

「ははっ! 熱いなあお前ら! そうだよな、もつと熱くならなきゃなあ……!」

そう言うと、夜嵐は遠距離戦を諦め、脳無の放つ弾幕の中へと突っ込み殴りかかる。風にはかり目が行くが、夜嵐はその体もまた鍛え抜かれている。

「鉄哲う! コイツの動きは俺が止めるっ! もう一度、来いやあ!」

「応!! 二人共!!」

「ああ……!」「もちろんっ!!」

痛みがどうした。限界がどうした。ヒーローならピンチは当たり前。だからこそ――

「行つけええええええええええええええええええええええ!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

尋常じゃない気迫に何かを感じたのか、一時身を引こうとする脳無。だが、遅い。

「逃げんじやねええええええええええ!!」

翼の根本に突っ込み、その剛力で無理やり締め付け、動きを阻害する。

「今だ庄田あ!!!」

「開放!!」
ファイア

三度目の、正直。そう言わんばかりに、本日最大の衝撃を背中に受け、鉄哲が突っ込む。渾身の一撃が脳無の顔面に突き刺さり、地面に叩き落とされた。

夜嵐と同じくらいボロボロな身体が地面に激突する寸前、また夜嵐の風で、受け止められる。

「——勝った!」「勝ったな!」

うおっしやあああああああ!と雄叫びを上げる二人。ボロボロになりながら笑いつつ、二人は拳を合わせた。

長い夜の終わり

勝利の余韻にほっと一息つく夜嵐たち。すると、そこへやつと暴風がやんだことで近寄れるようになったガジェットが彼らの側にやつてくる。

”君たち、大丈夫かい?”

「この声……物間!? それは——緑谷君のガジェット!?”

「するつてえと、アイツもそこに居るのか!?”

”いや、ガジェットだけ借りている状況さ。とりあえず辺り一帯偵察してるけど、もっと奥の方で常闇君がヤバイ事になってるよ。それに、ちよつとガスでやられた奴らもちらほら見えるし。回収して戻ってきてくれ”

ブラドキングは、施設の護衛。となると、状況を判断できるのは自分たちしか居ない。そして、補習組の中で一番頭が回るのは物間だ。だからこそ、A組とも協力して戦局を全体から見ていた。

「倒れてる人たちの所、案内するよ〜!」

「とりあえず、ドローンに付いていつてくれ!」

複数のドローンが広域に展開し、様々な場面で発見の報告が入る。それを伝えるた

め、補習組8人がそれぞれ把握する地区を担当し、まだ健在なクラスメイト達に状況を伝えていた。そして、ピクシーボブの所にもドローンは飛んでいつていて、魔獣が倒れているクラスメイト達を急いで運んでいた。空から見下ろしているので、戦闘地域を避けることも可能だ。赤外線センサー及び暗視にも対応したドローンによる広域に渡る戦闘支援——大規模な戦闘で、それがどれだけ有用かを、特に補習組は身を持って体感していた。

「とりあえず、倒れてる奴の所に案内してくれ！ 全部俺が運ぶ！」

「私達は、夜嵐とは別の方を探すわ！ 案内して！」

”了解、しっかりついていってくれよ！”

無線の向こうでも、気合を入れる声が聞こえてくる。戦場でも、また後方でも、どちらでも戦いは起こっているのだ。

派手な音がしている方に走る緑谷。脳無の様な、強い力を持つヴィランの出す音は闇夜によく響く。音を頼りに暗闇の森を疾走すると、突然黒腕が飛んできた。

「っ！！」

慌てて避けるも、両腕が使えないのでバランスを崩し倒れる。だが、そこに伸ばされる触腕があった。障子の複製腕である。

「障子君……!?!」

「その重症……もはや動いていい身体じゃないな。友を救いたい一心か……今度の敵は、そこまでの相手か」

緑谷を背負いつつ、極々小さな声で会話を始める。距離をとっているが、まだまだ近い。

「うん……今の腕、ダークシャドウの……」

「ああ。ヴィランに奇襲をかけられ、俺が庇った。——だが複製腕が飛んでしまって、それが奴が必死で抑えていた”個性”のトリガーになってしまった」

「暗闇での、暴走……!?!」

緑谷も散々付き合ってきた特訓だが、その特訓の結果ダークシャドウまでも強化されてしまっていた。ただ、障子が殴られただけであつたなら何とか抑えられただろうが、腕が飛ばされるという事態に、完全に制御を失ってしまったようだ。

「みつ、緑谷も……!?! 俺から……っ離れる!?! 死ぬぞ!!」

「常闇君!!」

必死に抑えようとしているが、ダークシャドウが無差別に暴れている。動くものや、音にただひたすら反応して破壊していく。

「~~~~!! 俺のことは……いい!?! ぐっ……!?! 他と合流し……!?! 他を助け出せ!!」

静まれっ…… ダーク……シャドウ……!!」

苦しみながら、必死で抑えようとする常闇。だが、夜空の明かりしか無い森のなかでは、絶望的に明かりが足りない。

「(光に弱い……: 火事か施設へ誘導すれば鎮められる。緑谷、俺はどんな状況下であろうと苦しむ友を捨て置く人間になりたくない。緑谷、まだ他に強敵が居ると踏んでここにきたのだろうか? ここは、俺が引きつける!)」

「(どつちもまだ距離が遠い——障子君一人じゃ危ないよ——!)」

「(わかつている。だが、お前が友を救けた様に、俺も友を救きたい。危険など承知の上だ。緑谷——このまま俺と共に常闇を救けるか、それとも残る皆を救けるか。……どちらを選ぶ?)」

「(……ごめん、障子くん……: 僕は、どつちも救きたい……! この先には轟君がいる! 炎なら、ダークシャドウを照らせる! 君の複製腕で、姿を見せず音を出す場所で誘導しながらなら、きつと行ける!)」

「(緑谷……! よし、分かった! お前の案に乗ろう……!)」

「常闇君!! 抗わないでダークシャドウに身を委ねてっ!!」

「み……どりやあ……!?! わ、分かった……!」

何をするつもりかは分からない。だが、緑谷にはきつと考えがあるのだろう。そう思える程の信頼が有った。だから、今は一時ダークシャドウに身を委ねる。視界では二人を捉えきれないが、誘導するように、声が聞こえる。

「(信じてるぞ——！ 緑谷！ 障子！)」

そして、しばし抵抗を辞める常闇。今できることは、友達を信じることだけであつた。

「あはははは。肉、見たいなあ……！」

体中を拘束された異形の男が、齒を伸ばし轟たちを狙う。

「チッ！」

それをさつきから轟が氷壁で防いでいるが、連発しすぎて体の動きが鈍くなつてきている。だが、炎を左から出して回復する暇を相手は与えてくれなかつた。更に、横から脳無が突進してくる。それを防ぐのはB組の穴戸。ビースト化をして、力押しで何とか抑えているがミドルレンジの脳無も、相当に手強い。

「ぐっ……！ 中々、決定打が与えられませんが……！」

押され気味な二人を、要所要所で援護するのは角取だ。二人が競り合っている間、押し切られそうになると角取が4本の角を飛ばし、攪乱する。が、既に何本もヴィランに叩き落とされていた。その度に新たな角を再生しているが、こちらも消耗が激しい。更

に尾白も、尻尾で弾き飛ばしたり、轟を移動させたりと要所で地味に活躍をしていた。

「さ、三人共頑張るデース！ その内、きつと救いが来ます！」

「つ、ああ……！」「う、うむ！ こうなれば根比べですぞ！」「やるしか無いかつ……！」

そして、派手に戦闘を行えば、当然ドローンも状況を見つけてやすくなる。

”みんな、大丈夫かつ!? まずいぞ！ そつちに暴走した常闇も近づいてくる!”

「なっ!?」「ワツツ!?」「なんですと!?」「なんだつて!？」

突然の言葉に、驚く4人。

”今すぐ逃げ——”

「に、にに、肉じゃない……」

それ以上何か言う前に、異形のヴィランにドローンが落とされた。そして、聞こえてくるのは、木々をなぎ倒す音。

「き、きましたっ!? 早くエスケープをっ！」

だが、慌てる4人が見たのは、暴走するダークシャドウの前を走る障子と、背負われている緑谷。

「轟！ 炎で光を頼む!! 常闇が暴走した!!」

迫りくる、ダークシャドウ。脳無が向かっていったが、一撃で跳ね飛ばされ動かなくなる。

「なっ!? あんなに苦勞した奴が……!」「一撃っ!」

「肉くくく駄目だあああ……肉くくくくにくめんおん……駄目だ駄目だ許さない……その子達の断面を見るのは僕だああ!!」横取りするなあああああ!!」

怒り、ダークシャドウに羽を伸ばすヴィラン。だが、貫通はしたが何のダメージにもならない。

「強請ルナ三下!!!」

それどころか、怒るダークシャドウに、歯を根こそぎ砕かれ、木に叩きつけられた。ヴィランと脳無が、一撃で戦闘不能になる威力に、その場の皆が戦慄する。

「アアアアアアア! 暴レ足リン!!」

「落ち着けえ!!」

だが、轟はようやく身体が待ちに待った炎を左手に纏うと、ダークシャドウを光で無理やりおとなしくさせた。肉体と精神の疲労から、疲れて膝を突く一同。

「う、あああああああああつ!」

そして、一通り落ち着いたからか、脳内物質の放出が止まり緑谷が激痛で悶える。

『緑谷(さん)(氏)っ!』

「よく見りや腕ぐちやぐちやじゃねえか!」「何が有った!」「は、早くキュアするデース!」「そ、添え木作りますぞ!」

穴戸が適当な枝で添え木を作り、尾白や轟がシャツを脱いで、緑谷の腕に応急処置を施す。

「つ~~~~~~~~!!」「耐えろ、緑谷!」

痛みで悶つつ、何とか応急処置を施される。

「……そうなつちまつたつて事は、やべえ奴が居たんだな?」

「……うん。脳無と、それ以上のヴィランが。……だから、僕が倒さないといけなくて……!」

緑谷がそう言うならば、余程の相手だったのだろうと確信させられる。現に、自分たちの相手も凄まじかった。

「USJの時みたいなチンピラの集まりじゃねえな……どいつもこいつもやべえ奴ばかりか」

「ここにとどまるのは危険、直ぐに戻りましょう!」

「急がばストリートに戻るのデース!」

と、そこへ2機目のドローンがやってくる。

”全員、無事のようなだね。大体のヴィランは倒せたみたいだ。ただ、帰り道で蛙吹と耳郎がまだ戦ってる。急いでくれ!” ”西側居ないよ!” ”東側、見つからない!”

その報告に、7人全員が頷く。先頭は障子で索敵を受け持ち、最後尾は視野の広い常

闇が受け持つ。皆それぞれが優秀で隙が無いパーティーになった。ドローンも、索敵をするため先に進む。少なくとも、今できる最善は尽くした。

「よし、行くぞー！」

「ああ」「おう！」「YES！」

障子の声に合わせて、緑谷を除く全員が走り出す。月と星に照らされた闇の中を、木々をかき分け出来る限り早く。ヴィランの気配はまだ無し、そろそろかと皆が思い始めた頃、途中、ヴィランと交戦していた蛙吹・耳郎と合流する。人数差から、撤退する女子高生のようなヴィラン。——だが、背負われている緑谷を見ると頬を染めてから、逃げた。

「とりあえず無事で良かった……そうだ、一緒に来て！ これで9人、ここまで揃えばきつと大丈夫！」

「……………ん？ 9人？」

「ケロケロ、全員で8人よ、緑谷ちゃん？」

『え？』

逃げてきた組が、一斉に振り向く。油断する人間なんて居るはずがなかった。だが——何の音も気配もなく、消えていた。

「常闇か……彼、良いね。俺のマジックで貰ったやつだよ。随分と、素敵な”個性”を

持つてる。君たちの仲間じゃ勿体無い」

手に弄んでいる一つの玉。あれが、ヴィランの“個性”なのか。

「返せええええええええっ！」

「返せ？ 妙な話だぜ。常闇くんは誰のモノでもねえ。彼は彼自身のモノだぞ!! エ

ゴイストめ!!」

「返せよ!!」

角取が4本の角を飛ばし、轟が木を伝い凍らせようとするが、軽く避けられる。

「本当は、誰か殺せばよかったんだけどさ……ムーンフィッシュ……」歯刃の男な。

アレでも死刑判決控訴棄却されるような生粋の殺人鬼だ。それをあかも一方的に蹂躪

する暴力性。ああ、実に良い！」

「待ちやがれ!」「逃げるんじゃねえ!」

轟が、本気で氷結を放って尚、ヴィランはそれを避け逃げる。

「悪いね俺ア逃げ足と欺くことだけが取り柄だよ! ヒーロー候補生何かと戦ってたま

るか。開闢行動隊! そろそろ引き上げだ!」

通信が入ると、ひっそり隠れ残ったヴィラン達は一齐に移動を開始する。そして、常闇を攫ったヴィランだが——速い! 残ったメンバーが必死になって走るも追いつけない。宍戸一人突っ込ませようにも、そうすれば謎の個性を使われる可能性もある。

「……一本で一人、私が飛ばしマース！」

「俺が行く！」「私もですぞ！」「俺もだ！」「……僕も行く！」

轟・宍戸・障子、そして緑谷が名乗りを上げるが、最後だけ反対意見が上がる。

「緑谷、その両手じゃ無理だ！」

「両手がなくても、足が有る！　もし、ミドルレンジ以上の脳無が出たら、僕が居ないと……！」

否定したいが、出来る材料がない。ここまでボロボロになっても尚戦わせなければならぬ現実には、緑谷以外の皆が歯噛みする。

「……分かりました。飛ばしますよ、良いですね！」

『応っ！』

4人が応えると、角取は全力で、4人を送り出した。

ヴィランが射程距離に入ると同時に、緑谷は無理やり角から降りた。

「50%！　ジョージアスマアアアアアアアアアアッシュー！」

集まったヴィランの真ん中に、速攻でぶっ放す緑谷。ワープ持ちの個性が居るなら、時間がない。なら、まずヴィランを散らせれば回収に時間がかかる——が。

「！！」

脳無に、止められた。動きも相当に素早い。これは――

「50%が止まる……ミドルレンジ以上……!」

だが、これ以上脳無は居ない。なら、と覚悟を決める緑谷。

「100%! セントルイススマアアアアアアアアアアアアッシュー!」

腕以上の、強烈な一撃。轟音とともに地面がひび割れ、脳無が土の奥まで埋まる。

「っ、うああああああああああああああ!!」

「っ、あああああ、出久くん、凄い素敵です……♡ そんなに、ぼろぼろになって……♡」

緑谷の悲鳴に心が乱れそうになるが、今大事なのは目の前のヴィランだ。逃さないように氷結で全員を包もうとするが、炎で氷がかき消された。熱量が、とてつもなく高い。

「ちつくしよ……!」

「ははっ、その程度か? 轟焦凍――」

どうやら、ヴィランは自分を知っているらしいと歯噛みして、兎に角氷を出しまくる。

幸い、冷えた身体は目の前の炎が温めてくれた。そして、炎と氷が相殺しあっている最中に、突撃する宍戸と障子。

「ガオンレイジ!」

宍戸と障子は、初っ端から常闇を狙ったヴィランに狙いを定める。障子が回りを牽制しているあいだに、圧倒的な速度とパワーで、宍戸が迫る。呆気無く、弾き飛ばされる

ヴィラン。

「今だ!」

障子の複製腕がヴィランのポケットから、見せびらかしていた玉を奪還する。

「奪還した! 逃げるぞ!」

「了解しました!」

「つ、ああ!」

障子が緑谷を回収し、逃げようとしたその時。闇夜よりなお暗い漆黒の闇が現れた。

出現したのは、かつてUSJで見た黒霧。

「ワープの……」

「合図から5分経ちました。行きますよ茶毘」

「ごめんね出久くん、またね」

黒い霧に、次々飛び込んでいくヴィラン達。埋まった脳無も、回収された。

「さて、取られたぞ?」

「ああ、アレはどうやら走り出す程嬉しかったみたいなんでプレゼントしよう。悪い癖だよ。マジックの基本だね。モノを見せびらかす時つてのは……見せたくないモノがある時だぜ?」

「くそっ……!!」

だが、もう遠く、何も出来ない4人。

「それでは、またのご愛顧を」

そう言い、ヴィラン達は全て消えた。

「っ、そ、そんな……」

そして、両手と片足の激痛に、緑谷は意識を手放した。ただ、後悔と無力感を胸に残して――。

病室にて

ふと目が覚めると、様々な薬品の匂いがした。見渡せば、病院で、身じろぎをしようとしたら、両手と足はギプスで固められていた。右腕には点滴されていて、色々と薬品を投与されていた様だ。

「つつ………」

適切に治療をされていたようだが、やはり疼く。だが、この有様では痒くなつてもろくに掻くことすら出来ないし、ナースコールも出来ない。ただ、退屈なだけの時間は考える時間を与える。そしてその胸に去来するのは、救げきれなかったことへの後悔。目の前まで迫れて、尚友達を救げられなかった事への無力感。自然と、涙が溢れてくる。

「くうっ………」

何も出来ない、話せる人もいない孤独は、ただ自責の念を膨らませていく。終わりのない思考の負の連鎖を重ねていると、ふと扉をノックする音が響いた。思考が一時、中断される。

「あつ、はい………」

「起きていたのだね、少年」

「オール……マイト……」

折角来てくれたオールマイトの姿。だが、それが今の緑谷には辛い。オールマイトから認められ、継承された“個性”。だが、憧れの彼の様に、全てを救うことは出来なかったのだ。その力を継承されても尚。

「すみません、オールマイト……僕、僕……目の前まで、常闇くんの側に居たのに……救われなくて……!」

悔しくて悲しくて、そしてオールマイトの期待に応えることが出来なくて、何より目の前で友達が攫われて。次から次へと涙が止まらない。

だが、止め処無く涙を流す緑谷をオールマイトは優しく抱きしめた。

「頑張ったね、緑谷少年」

「オール……マイト……」

「君は、意味なく無茶をする人間では無い。必要と思ったから——そうやって、手足を犠牲にしてまで戦ったのだろうか？」

「で、でも、僕——」

後悔の念に、ネガティブなニュアンスな言葉を言おうとする緑谷の言葉を遮り、尚もオールマイトは言葉を紡ぐ。

「洗汰君だったね？　ちゃんと無事だよ。——それに、他のクラスメイトで死んだ者は

誰も居ない。脳無は君でなくては対処しきれなかっただろうし、マスクュラーだって相手が出来る者は相澤くん位なものだったろう……。だから、少年。君は、常闇少年を取り逃したのかもしれない。——だが、君が救った命も、確かに有るのだ」

「オール……マイトオ……っ！」

守れなかった自分、それでも認めてくれた、最も偉大なヒーローの言葉に、涙が止まらない。

「まったく、泣き虫だね、君は——」

そう言いつつも、優しく抱きしめ続ける。この、まだ未熟な少年に、一体どれだけの負担がかかったのだろう——どれだけ不安だったのだろう——それを思うと、オールマイトの闘志が無限に湧いてくる。

「(ヴィラン達よ、絶対に許すわけにはいかん——！ 返してもらおうぞ、何もかもを!)」
と、決意を抱きつつ、緑谷が落ち着くまで抱きしめるオールマイト。

「安心したまえ、緑谷少年。奴らの居場所は割れた。それに、八百万君が敵の脳無に発信器を取り付けてくれた。——だから、次は“私が反撃に行く”」

強い強い決意を抱く、偉大なヒーローの気迫。それを近距離で受けた緑谷は、それに凄く頼もしさと安心感を感じるのだった。

——と、そこへ入ってくるのは——

「い、出久っ！ お、起きたのねっ!?」
「か、母さんっ!」

暗い暗い顔をしていた緑谷の母が、慌てて駆け寄ってきた。髪を振り乱し涙を浮かべ、縋るように抱きしめる。

「出久……良かった……お母さん、本当に心配したんだよ……」

オールマイトから変わるように、ぎゅうと強く強く抱きしめる。オールマイトともまた違う、母の暖かさに、また涙腺が緩む。

「うん、ごめん、ごめんね、母さん……!」

ひとしきり泣いた後、引子はオールマイトに向き直る。その表情は真剣そのものであり、また怒っていた。

「オールマイトさん……雄英は、一体何をしていたんですか……! この子は、この子はまだ子供なんですよ……!」

まだ、入学したての頃に恐ろしいヴィランに襲われた。職場体験では、何故か恐ろしいヒーロー殺しとも戦った。I・アイランドでも恐ろしいテロに巻き込まれた。そして、昨日——林間合宿が襲撃され、自分の息子は両腕と足に大怪我を負い、見たこともないような顔色の悪さでベッドでうなされ痙攣していた。

「何故、出久がこんなになっているのに、あなたは無事なんですか！ 何故、何もしてい

なかつたんですか！ あなたは……あなたは、出久の師匠なのに……」

ぼつぼつと、ではなく大粒の涙が溢れて止まらない。悲しくて恐ろしくて、本当はぶつけてはいけない、言いがかりだと理性で分かっているにも、感情で止められない。

「現場にはプロヒーローも居たんでしょう!? 先生も！なのに、どうして、どうして出久がこんな怪我を……」

医者にカルテを見せられ、卒倒した。両手と左足がボロボロで、高熱を出してうなされて、しかも激痛が続いていて。

「……出久は”個性”が出なくて、それでもヒーローに……あなたに、ずっと憧れてきました。でも、奇跡的に”個性”が発現してからは、ずっと嬉しそうです。毎日が楽しそうだったんですけど、それでも——こんなこんな目に合うなら……あなたに憧れての行動が、こんなボロボロの姿になるならば——”無個性”のまま、ただヒーローの活躍を嬉しそうに眺めるだけの方が、この子は幸せだったんじゃないかって……思ってしまうんです」

「お母さん！」

ヒーローとして活躍するということ。それは常に危険な場所へ向かい、命をかけるということ。ヒーローとして輝けば輝くほどに、またその闇は深く大きく寄り添う。

「入学してすぐの時も、今回も、こんなに何度も襲われるなんて——出久を雄英に通わせ

るのが——あなたの弟子でいさせるのが……怖いです……!!」

涙ながらの母親の叫び。それを否定する事は、二人には出来なくて。言葉が見つからなくて。

重い重い沈黙が個室を包む。

と、そこへまたもノックする音が。

「失礼します」「しつれいします」

やってきたのは、マンダレイ——送崎信乃と、洗汰であつた。

「オ、オールマイト!」「オールマイト……」

「あ、あの……お二人は?」

突然の訪問者に、驚く引子。だが、マンダレイと洗汰も、オールマイトに驚いていた。

「私は送崎信乃——プロヒーロー・マンダレイと言います」「出水洗汰です」

お辞儀をする二人。

「え、えつと、緑谷引子……この子の母親です。出久に御用ですか……?」

引子の疑問に、マンダレイは頷き、洗汰は何度も何度も大きく首を振る。

「お、俺……昨日、出久兄ちゃんに救けられたんだ。俺の——パパとママを殺したやつか

ら!」

「!」

驚くオールマイトと引子。

「あんな、酷いこと言ったのに、左手折れてたのに、それでも救けてもらって——だから、俺、俺……！」

上手く言葉がまとまらない。でも、大怪我をしたと聞いて、居ても立つてもいられない。なくなつてここに来た。

「出久兄ちゃん……救けてくれて……ありがとう……！」

そう言うのと、緑谷に縋るようにして泣いてしまった。その頭を、やさしく慰めるマンダレイ。

「私達も、同じです——恥ずかしながら、私達、プツシーキャッツのうち3人も彼に救けてもらいました。——彼はもう、立派なヒーローです」

「洗汰君……！—— マンダレイ……！」

救けられなかった者が居る。——だけど、救けられた側からは、確かにヒーローなのだ。常闇を救けられなかった悲しみと、救けた側からお礼を言われる嬉しさ——色々と細かい交ぜになって、また涙が溢れる。

「っ——！」

息子は、誰かのヒーローになった。それは嬉しくて、でも——その代わりこんなに傷ついたので怖くて——。

「そ、そうですか……。あ、あの、すいません、少し失礼します——！」
感情が爆発して、泣きながら、引子は外に出ていつてしまった。

「あつ、お母さん——」

手を伸ばそうとするも、その両手は、ギプスの中だった。

「……………」

室内には、沈黙が降りる。——だが、なにか言う前に、緑谷に眠気が訪れて、ベッドに倒れ込む。

「少年……………」

「オールマイト……………洗汰君……………マンダレイ……………お見舞い、ありがとうございます……………ちよつと、まだ、眠くて——」

「ああ、ゆつくり休むと良い……………」
「兄ちゃん……………」
「緑谷君……………お大事に、ね」

三人に見守られ、また意識が遠のいていった。

再び目を覚ますと、まだ明るいままだ。ただ、日めくりカレンダーの日にちが、次の日に進んでいた。

「(また、1日眠っちゃったのか…………)」

眠気眼をこすろうとして、まだギプスがハマっていたことを思い出すが、両手と左足

の感覚がちゃんと有るし痛みもない。恐らくリカバリーガールが治癒して行ってくれたのだろう。

「あー緑谷!!目え覚めてんじゃん!」

オハーとドアを開けたのは、上鳴で、それを皮切りにクラスメイト達がゾロゾロと病室に入ってきた。

「テレビ見たか!? 学校いまマスコミやベーぞ」

「春の時の比じゃねー」

「メロンあるぞ。皆で買ったんだ!」

がやがやと賑やかに入ってくる。

「大丈夫か? 緑谷?」

「うん、多分リカバリーガールが治療してくれたみたいだから……A組皆で来てくれたの?」

心配する障子に安心させるように言う緑谷。実際、痛みはもう泣い。

「いや……葉隠君はガスにやられ、八百万君も頭をひどくやられた——B組には、もつと被害者が多いが……。だが、八百万君も昨日意識が戻ったらしい。だから、来ているのはその3人を除いた……」

「……16人だよ」

ぼつりと、麗日が呟く。

「常闇、いねえからな……」

「ちよつ、轟……」

「……昨日、ちよつと事情は聞いたんだ。——救けられなくて、ごめん」

「……言うなよ。俺らなんて、補習受けてて、なんも、なんも出来なかつたんだ……！」
切島の後悔の言葉に、沈痛な顔になる補習組。皆が命がけで戦っていたのに、安全圏に居た事に、いたたまれなさを感ずってしまう。

「……俺だつて同じだ……！　まだ戦える場所に居たのに、俺は……俺は……！」

夜嵐も、後悔で震えている。自分の知らない所で仲間が拐われたのが余程許せないのだろう。

と、微妙な空気の中更に来客がやってくる。

「失礼するよ」「失礼します！　イズク君、無事!？」

アメリカから日本旅行に来ていたシールド親子が。

「緑谷さん！　大丈夫ですかっ!？」

いつもの調子は何処へやら、心配そうな発目が。

「緑谷さんっ！　心配しましたわ！」

優雅さはどこへやら、印照が。

続々と、見舞いに来ていた。

「デヴィットさん、メリッサさん、発目さん、印照さん……心配かけちゃって、ごめんね

……」

「全く、トシ……いや、オールマイトの様に無茶をする」

「ほ、本当に心配したんだから！」

「あなたが居なくなったら……私のベイビーちゃんは誰が面倒見てくれるんですか

……」

「——無茶、し過ぎですわ」

彼女らも心配してくれる。

「そうだ、剥いてもらったしりんごお食べ！」

と砂藤にりんごを口に突っ込まれつつ、思案する緑谷。——そして、そんな様子を見て意を決したように切島が口を開く。

「なあ、緑谷——常闇、助けに行こう！」

『!』

その言葉に、皆が衝撃に包まれる。

「実は俺と轟と夜嵐さ、昨日も来ててよオ……偶然、八百万とオールマイトと警察の会話

「聞いてしまったんだ」

「何でも、脳無の一体に泡瀬の力を借りて発信機を付けたらしい。そして、八百万は受信デバイスを創れる。」

「……つまりその、受信デバイスを——八百万君に創ってもらおう——と？」

飯田の脳裏に過るのは、かつての自分。感情に身を任せ、ヒーロー殺しに殺意を向け、友達に迷惑をかけた自分。

「ちよっ!? お待ちなさい! あなた方はまだ仮免すら取っていないのですよ!? そんな事、許されせんわ!」

「その通りだ! これはプロに任せるべき案件だ! 生徒おれたちの出で良い舞台ではないんだ馬鹿者!!」

「んなもん分かってるよ!! でもさア! 何つも出来なかつたんだ!! ダチが狙われているって聞いてさア! 緑谷の道具借りて、仲間がただやられてる所見て、拐われたって聞いて、何つつも出来なかつた!! しなかつた!! ここで動けなきや俺ア! ヒーローでも男でも無くなつちまうんだよ!」

「その通りだ! ダチがとつ捕まってるのに、のうのうと家になんぞ居られるかあ!」

激高する切島に夜嵐。それに、同意する轟。意志は、固そうだ。

「待ち給え君たち! I・アイランドの時とは違うんだ! 君たちは“個性”を人に向

けるのすら許されない立場なんだぞ！」

と、デヴィットが大人として、皆を嗜める。

「分かつてます、分かつてますけど！」

「ふざけるのも大概にしたまえ！」

と、暫く言い争いが続く。法律で言えば、動かないのが何より正しい。しかし、皆ヒーローを目指しているのだ。——ヒーローは、こういう時にこそ動くものなのだ。それが、より切島や夜嵐を感情的にさせる。

——が、ここで更に来客が来る。

「静かにしたまえ、諸君。ここは病院だ」

「その有精卵共、落ち着きな」

サー・ナイトアイに、グラントリノ。二人のヒーローがやってきた。

「ふ、二人共、どうしてここに……?」

「お前さんに大事な話があつてな。——すまんが皆さん、席を外して貰えんだろうか」

「すみませんが、ご協力を」

プロヒーロー二人に促され、一同は緑谷の病室を出る。

「サー・ナイトアイに……グラントリノだっけか? 何をしに来たんだろうな?」

「じゃあ、聞いてみるですよ！」

そういうのは、発目だ。出る時こっそり病室にマイクを仕掛けてきたらしい。

「なっ、君！ それは盗聴ではないか！」

「だって、気になるんです！」

その言葉に、皆は否定できない。

「では、こっそり聞いてしまおうか」

『デヴィットさん!』『パパ!』

そんな事を言い出したのは、よりによってブレイキ役となるべきの大人、デヴィットであった。

「——ヒーローを指す君たちは、正しいと思つたことが有るなら止められない。……なら、周りはそれをサポートするだけさ。それに、また緑谷君はなにかに巻き込まれそうになるかもしれないね——」

と、言うデヴィットの目的は、ある程度のガス抜きと——いざという会話が出た時、無理矢理にでも止めることだった。どうせ、こういう事をする子ならば、ある程度管理下に置いたほうが良いというものだ。

と、小型スピーカーから声が流れ始める。その音に、皆が耳を澄ませた。

「……大変だったな小僧——だが、良くやった」

「ええ。ミドルレンジ以上の脳無及びマスキュラーの撃破……そこらのプロヒーローよりも遥かに良い働きをしてくれた」

「……ありがとうございます」

プロヒーロー二人の評価に、頭を下げる緑谷。それがきつと彼らの評価なのだろうが、その評定には納得できないとの感情がありありと浮かぶ。

「身体、もう良いのか？」

「ええ、多分。もう動けそうです」

「そうか……なら、小僧。お前に会いに来たのは勿論見舞いだけじゃない——チームアップの依頼だ」

「!? ぼ、僕がですかっ!？」

「ああ……ヴィラン連合のアジトが割れた。だから、今夜襲撃をかける。……俺なんぞも呼び出される事態だ。……必ず、何かが起きる!」

「……正直、大怪我をした君を呼び出すのは心苦しい。が……ガジェットを装着した君ならば、ミドルレンジ以上が出ても、対応が出来るだろう。オールマイトやエンデヴァーの他に、奴らに対抗できる駒が是非とも欲しい!」

二人共、事態を相当に深刻に受け止めていた。予感がするのだ。オールマイトが本気

をかけざるを得ない何かが起きるのではないかと。

「……それに小僧。お前も、魂が叫んどるんじやろ？ 救いたい、と」

「……何せ、目の前で助けられなかつたのだからね」

返事は、聞くまでも無いだろう。オールマイトの後継者ならば

「はいっ！」

その衝動を、止められるはずが無いのだから。

決戦前

静寂と闇の中、常闇は目を覚ます。自分は——どうなったのか。皆は何処だ？ とあたりを見渡すが、暗闇で何も見えない。そして、動こうとした時に、自分が縛られているのに気がついた。

「わ、俺は今何処に居るのだ……!?!」

不安そうに辺りを見渡すが、誰も何も答えない。

「ケーツケツケツケツ！ 居心地イイゼエ！」

その代りに、己の分身ダークシャドウだけはやたら元気だ。

「ナンダカヨクワカラネーガ、ブツコワシヤナントカナンダロ！」

「待て、状況をよく把握してからでなくては！」

慌てて制御しようとするが、完全な闇の中ではダークシャドウの力の方が強い。

「そうだ、暴れちまえよ。遠慮することなんか無いんだぜ？」

そして、何処からともなくねつとりと絡みつくような声が耳に響く。この声は、確か

「死柄木弔……!?!」

「ヒヤッハー！ ヴィランダ！ ブットバサセロ！」

「おお、覚えてくれていて嬉しいねえ！ ダークシャドウ君も元気そうで何よりだ！」

「俺を、どうするつもりだ……！」

「のぞき見たようで悪いんだが、君とダークシャドウ君が脳無とムーンフィッシュを一撃でボロキレにした上に、クラスメイトまで殺そうとしたと聞いて、是非とも僕らの仲間に誘いたいと思って招待したんだ！ いや、不自由をさせてすまない！」

「そう思っているのなら、すぐに俺を解放しろ……！」 俺はヒーローになる男だ……！

決してヴィランなどにはならん！」

「イマスグゴノハヤブチコワシテヤンゼー!!」

耳障りなヴィランの声、仲間たちを害した事への怒り、そして、何をしてくるか分からないヴィランへの恐怖。様々な負の感情が混ぜこぜになり、ダークシャドウが更に強大になっていく。

「いやいや、表の君はヒーローになりたいのかもしれないけどさ、裏の^{ダークシャドウ}君の意見もちゃんと聞かなきゃ。人を無視するのはいけないことだぜ？ ヒーロー志望なんだろ？ ほら、どうなんだい？ ダークシャドウ君」

「テメエラマトメテブチコロシテヤルゼー!!」

「止めろ、ダークシャドウ……!!」

このやり取りを聞いて、死柄木だけでなく、他のヴィラン達もクスクスと笑う。それがまた、常闇の心をざわめかせる。

「うん、そうか。無理やり連れてきちゃったからね、そう思うのも当然だ。——だから、ダークシャドウ君、君にチャンスをあげよう。この部屋を壊せたら俺らを自由に攻撃するチャンスをおあげよう——」

「ナラズグニブチコワシテ」ただし。この部屋の上か、下か、右か、左か。それとも前か、後ろか。何処かに俺たちとは違うヴィランが居るんだ。ああ、心配しなくていい。人殺しの悪いやつさ。君の力で壊せば、諸共巻き込まれて死んじゃうだろうけど、悪党を懲らしめるのはヒーローの仕事だろう？ 気にする事は無いさ」ヒヤッハー!!」

「や、止める……俺は……人を……殺さない……!」

ありつたけの精神力を使い、ひたすらダークシャドウを押さえつける常闇。

「その強がりが何時まで持つか——ああ、君たちの”話し合い”に俺たちは邪魔か。じゃあ、時間は幾らでも有るんだ。じっくり話し合ってくれ」

そう言うとき、常闇は完全な闇と静寂に包まれる。そして、対面するのはもう一人の自分、ダークシャドウ。

「アバレサセロヨテメエ!!」「そんな事は……させん……!」

もう、二度とむやみに傷つけさせないと、ダークシャドウを抑え続ける。常闇の孤独

な戦いは、何時まで続くか——誰にも分からなかった。

”……それに小僧。お前も、魂が叫んどるんじやろ？ 救きたい、と”

”……何せ、目の前で救けられなかったのだからね”

”はいっ!”

「なっ……んだよ、それっ！ 何で、緑谷だけっ……!」

「俺たち……だつて……!」

「緑谷ちゃん、あんなに大怪我したばかりなのに……」

「出久君に、これ以上無茶させちゃうん……?」

スピーカーから流れる音声聞いた者の表情は様々であった。憤るもの、心配するもの、不安に思うもの——そして。

「(イズク君、それが、君の選択なんだね……)」

ただ、信じて見守る者。デヴィットはつい先程まで、緑谷のヒーロースーツのカラー変更と改造に着手していたのだ。きつと、こうなるだろうと信じて。

「……仕方ねえよ、緑谷だもん。……あいつ、入学した時からずっとスゲー奴だったしよ……」

ぼつりと、峰田が呟く。USJで救けられてから、緑谷の凄い所はずっと見てきた。

一緒に訓練して、お互いの技の意見も出し合ったりして、付き合うのが凄く楽しい友達で、誰よりもヒーローになろうとする熱意が有って……本当に、凄く奴なのだ。——自分とは違うと思ってしまう程に。

「……………」

その峰田の呟きに、否定できない者が多数。それほどまでに、緑谷はクラスの中心であり、凄く奴であり——だからこそ、あそこまでポロポロになったのがショックだった。そして、ひどい状態になっても直ぐにまた、死地に赴く——。その姿に、居ても経つてもいられない者たちがいた。なぜなら、彼らもまたヒーローを目指すものだからだ。

「スゲー奴なのは端っから分かってんだよ！ 入学前から、あいつは熱い奴だったんだよ！ でも、あいつだって、ポロポロになって、手が届かないもんだって有るんだよ！ んなダチを、俺はほっとけねえ！」

「——俺もだ。……あいつを、常闇を、救けてえ」

「俺も、行く！ 出るのは、今日の夜！ 行きたいやつは着いてきてくれ……………」

男3人の熱い想い。それに、皆が何も言えなくなる。デヴィットも、ただ黙って見ている。やがて、誰が言うともなく解散した。それぞれの想いを胸に秘めて。

夜、病院前では夜嵐・轟・切島の3人が八百万を待つていた。やる気は十分漲っているが、それでも八百万が受信機を創ってくれなければどうしようも無い。

「おっ」「出てきたな」

悩んだ表情をして、八百万が出てくる。

「八百万、答え……」

「私は——「待て」……」

八百万が答えようとした時、3人の後ろから声がかかる。飯田だ。歯を食いしばり、怒りに震え、4人を見据える。

「………何で、よりにもよって、君たちなんだ……！ 俺の私的暴走をとがめてくれた……君たち二人がっ！ 何で俺と同じ過ちを犯そうとしている!? あんまりじゃないか……！」

「……ヒーロー殺しの件、か……」

震えて怒り、心配する飯田に、皆が何も言えない。

「俺たちはまだ保護下にいる。ただでさえ雄英が大変な時だぞ！ 君らの行動の責任は

誰が取るのかわかっているのか!？」

「飯田、俺達あ……」

説得しようとする夜嵐を、飯田が思い切り殴りつけた。

「俺だって悔しいさ!! 心配さ!! 当然だ!! 緑谷君一人を送り出す羽目になって、俺だって今すぐに飛び出したい!! だが、俺は学級委員長だ! クラスメイトを心配するんだ!! 常闇君や緑谷君だけじゃない!! 皆の怪我を見て、ガスで昏睡している葉隠君を見て、頭を強く打った八百万君を見て、僕の兄にその姿を重ねた!」

感情のまま、義務感を押し出し、叫ぶ。

「君たちが暴走した挙げ句、兄のように取り返しのつかない事態になったら……っ!! 僕の心配はどうだっていいっていいのか!! 僕の気持ちは……どうでもいいっていいのか……!」

「飯田……」「委員長……」

「飯田」

夜風の両肩に手を置く飯田を、振り向かせるように強く言葉を出す轟。

「俺たちだって何も正面きってカチ込む気なんざねえよ」

「そうツス! 絶対に戦わねえ!」

「戦闘無しで救け出す」

「ようは隠密活動!! それが俺ら卵の出来る……ルールにギリ触れネエ戦い方だろ!」

「私は、夜風さん、轟さん、切島さんを信頼しています……が!! 皆さん熱くなりがちです。万が一を考え私がストッパーとなれるよう……同行するつもりで参りました」

「八百万くん!」「八百万!」

そんな八百万の言葉に驚く飯田に、嬉しそうな切島と夜嵐。

「委員長、お前の熱い思い、確かに受け取った! だけど、俺のこの魂の叫びも、重いんだ! これは、譲れねえ!」

「……常闇の“個性”は、暗闇だと自分でも制御できない程に危ねえ。アイツらに何されてるか分かんねえ以上、出来る限り早く救けてえ」

「俺も……じつとしてなんて居られねえんだ!」

3人の目を見て、説得が無駄だと悟る飯田。このままでは、自分を気絶させてでも行ってしまうだろう。そんなのは、駄目だ。

「平行線か……—ならば、俺も連れて行けっ!」

『!』

「もし、君たちが無茶をしようとするならば……俺が止める——!」

「委員長……」「飯田……」「……」「飯田さん……」

それに、4人が頷いた。と、そこへ更に足音が。

「……全く、皆さん本当にお熱いですわね……」

「印照さん!?!」

意外な人物の登場に、驚く4人。ひよっとして、また止められるのだろうか——。

「どうせ、止めても無駄なのでしょう?」

「ああ。……あんたもついてくるのか?」

「いえ、私は自分の身の程を知っていますの。——あなた方と一緒にではきつと足を引張ってしまいますわ。だから、これを持って行って下さい」

と、アタッシュケースを八百万に差し出す。

「これは?」

「ドローンに、GPS通信機、タブレットに立体映像投射装置に……と。I・アイランドのサポートアイテムですの。いざという時には使って、こちらに連絡を下さい。明日の朝まで、寝ずに待機していますわ」

「……ありがとうございます!」

そう言うのと、深くお辞儀をする八百万に、続く男3人。だが更に声がかかる。

「それなら、私のベイビーも持って行って下さい!」

「発目さん!」

驚く飯田。彼女の手にも、大型のアタッシュケースが。

「ジェットパックに、スタングレネードです! いざつてときに使ってください! 説明書は、中に入ってます!」

「ウツス! ありがたく預かるツス!」

ずしりと重い大型のアタッシユケースを軽々と持ち、夜嵐は思い切り地面に頭を付けて礼をした。

「……必ず、無事に帰ってきなさいね。でないと、緑谷さんも救けられる常闇さんも悲しみますわ」

「はい、必ずやー!」「ウッス!」「ああ」「はい!」

こうして、5人は急いで駅へと向かいだした。

ギプスを外すと、緑谷は変装し、デヴィットから改造されたスーツを受け取り、ヒーロー二人とこっさり病院を出た。そのまま高速に乗り、急ぎ神野区の集合地点へ。そこには、名だたるヒーローが集まっていた。その周りは、機動隊が固めている。

そこに、グラントリノと共に緑谷が入る。改造されたコスチュームの色は、蒼く輝いていて、印象が変わるように各パーツの形も変えられているので、見ただけではゴージャスグリーンだとは分からない。フルフェイスヘルメットを被り、顔を隠しているから尚更だ。

「ん? そのスーツ……彼は誰ですか? グラントリノ?」

「お前の教え子だよ」

「どうも、オールマイト」

「な、なななななっ!? 緑谷少年!?!」

知らされていなかったのか、超絶驚くオールマイト。そして、エンデヴァーもだ。

「な、何故彼がここに!?!」

「儂がサー・ナイトアイと呼びに行つた。ミドルレンジ以上の脳無に対抗できる奴は一人でも多いほうが良い」

その言葉に、ざわつく周囲。ゴージャスグリーン……緑谷出久。雄英体育祭1位、ヒーロー殺しの捕縛、I・アイランドでのテロの鎮圧に、今回の襲撃でもマスキュラー・脳無を撃破している。実績としては十分過ぎたが、不安に思う者はヒーロー・警察問わず多い。

「……俺は賛成だ。この子は強い。そして、敵は手強い」

「エ、エンデヴァーまで……っ!」

だが、エンデヴァーの賛成で、空気がざわめく。No. 2ヒーローエンデヴァーは、お世辞や気休めを言う性格ではない。その彼が認めたというのは、大きな意味を持つ。

「I・アイランドでは貴様とも共闘していただろう。……ガジェットを装備したその子は、必ず役に立つ」

オールマイトはあくまで反対のようだが、エンデヴァーの後押しと、ヘルメットを脱いで真つ直ぐ自分を見据えてくる緑谷を見ると、何も言えなくなる。ヒーローは、身体

が勝手に動いてしまうものだ。

「しかし、グラントリノ。……奴が」

「だからこそ、だ。ナイトアイの予知では、お前が死ぬ。——だが、あの子が居れば……覆せるかもしれん」

「……」

しばし、考え込んでから大きく息を吐くと、緑谷に向き直った。

「……無茶はするなよ、少年」

「状況次第、です！」

その言葉に、周りも苦笑するしか無い。だが、確かな戦力なのだろう。

「あ、それと、この戦いの間は僕はただ“ブルー”とだけ呼んで下さい」

かつて見たあの人の輝きのように。この一夜の間だけ現れて、日が昇れば去っている、そういう存在。

「そうか、ブルー。……ラグドールが拐われたままだ。是非、宜しく頼む」

「虎さん！ はい、勿論です！」

こうして最後のヒーローが集まり、ブリーフィングが始まる。目標はアジトの複数同時制圧。拉致被害者の今いる場所へ主戦力を投入し、奪還を最優先とする。そして、緑谷は勿論奪還側だ。敵主力の脳無を、叩き潰す為に居る。

「今回はスピード勝負だ！ ヴィランに何もさせるな！ 先程の会見、ヴィランを欺くよう校長にのみ協力要請しておいた！ さも難航中かのように装ってもらっている！ あの発言を受け——その日の内に突入されるとは思うまい！ 意趣返ししてやれ！ さア反撃のときだ！」

「流れを覆せ!!! ヒーロー!!!」
決戦が、始まる。

常闇踏陰：オリジン

「ぐっ、うう……!!」

「イイカゲンブツコロサセヤガレヤア!!!」

「もう少しだな」

闇の中、常闇が苦しんでいる。後もう一押だと、ヴィラン連合のメンバーが暗視カメラで様子を見て、後どれ位で落ちるか賭けまで始まる中、唐突に気の抜ける声が響いた。「ドーもオ。ピザーラ神野店です〜」

途端に、轟音。オールマイトが壁を破り、シンリンカムイがウルシ鎖牢で全員を縛り、グラントリノが炎の個性持ちを蹴りで気絶させ、ブルーが指弾で、マスクをしていない口の中に、催涙玉を放り込む。突入してほんの数秒、ヴィラン連合の主要メンバーは皆が拘束された。

「もう逃げられんぞヴィラン連合……何故って!？」

「我々が来た!」

「オールマイト……!! あの会見後にまさか、タイミング示し合わせて——!!」

「木の人! 引っ張んなってば!! 押せよ!!」

「やく!! 何ですかこれ、甘い!! 羊羹?」

拘束され、動けなくなるヴィラン達。そこに、緑谷が指弾で粘着式の発信機を全員に取り付ける。

「……羊羹?」

ふと、ブルーが腰のポーチから催涙玉を取り出すと――

「あれ、これ羊羹玉!!? グラントリノのおやつのみ?」

「……グラントリノ?」

冷たい声がグラントリノに飛ぶが――

「誰だ、君は!?!」

「ボケられた!?!」

と、漫才を繰り広げられるのを忌々しそうに見つめるヴィラン連合。

「全く、締まらないな――攻勢時ほど、守りが疎かになるものだ……ピザラ神野店は、俺たちだけじゃない」

と、エッジショットを先頭に機動隊も突入してくる。

「外はあのエンデヴァーをはじめ、手練のヒーローと警察が包囲している」

この圧倒的不利な状況に、仕方ないと覚悟を決める死柄木。

「仕方がない……俺たちだけじゃない……そりゃあこつちもだ。黒霧。持ってこれるだ

け持つてこい!!!」

だが、何も起きない。

「すみません死柄木弔……所定の位置にあるハズの脳無が……ない……!!!」
「!?」

重なる想定外に、更に混乱する死柄木。

「やはり君はまだまだ青二才だ死柄木!!!」

「あ?」

せめてもと睨みつけるも、そのかすかな抵抗が虚しい。

「ヴィラン連合よ、君らは舐めすぎた。警察のたゆまぬ捜査を。そして、我々の怒りを
!!」

「2階、制圧!」「4階、囚われていたヴィランを発見!」そして嚴重に鍵をかけられた
部屋が有ります! 恐らく、拐われた少年が囚われているものかと!」

他の階の機動隊も、ヒーローを先頭に次々と制圧していく。——そして、残った最後の
部屋を開けようとした時、轟音。部屋を覆っていた鉄板が粉々に引きちぎられ、ヒー
ローや機動隊が吹き飛ばされた。

「なっ?!」 何が起きたのだ!?!」

混乱するヒーローたちに、死柄木が嗤う。

「やっぱり、ちよ〜と遅かったようだな、ヒーロー共」

場面は少し戻り、神野区のとある裏通り。そこには、下手な変装をした雄英生5人が居た。目の前に有るのは、廃倉庫。木を隠すなら森の中と言わんばかりに、堂々と街中に有る。

「電気も点いてねーし、中に人がいる感じはねえな」

「正面のドアは、下に雑草が茂っていますわ。他に出入り口が有るのでしよう……こういう時は、これを使いましょう」

と、八百万はアタツシユケースの中からドローン達を取り出し電源を入れ、皆に咽喉マイクを配る。

”ドローンオンライン……着きましたのね?”

すると即座にドローンから才子の声がする。本当に、ずっと待機してくれていたようだ。

「はい。着きましたわ。こちらもタブレットを起動しますので、是非偵察をお願いします」

”了解しましたわ。今紅茶を補充しますので少しお待ちを。とっておきのダージリンを淹れてきますわ”

彼女の個性は、紅茶の品質によっても左右される。よって、出来る限り高級の淹れたてを使いたいのだろうと皆が納得した。今のうちに、人気がない裏手に回り、5人が食い入るようにタブレットを覗き込む。

” なっ、これは…… ”

『脳無！』

6人が驚いている頃、広域に展開させたドローンが、多数の人影を探知する。それは——ヒーローたち。突如、大きな音と共に、廃倉庫の一角が崩れた。

「あれは……Mt.レディ!？」

” 疾いですわね——もう襲撃をかけてきました ”

「これなら安心ですわね」

と、八百万が締めて帰ろうとした時、それは起きた。

” サーマルセンサーに感有り、奥にもう一人居る……!?”

そして、才子は見た。ベストジーニストが一瞬でその不審人物を拘束したと思ったら、直線上の何をかをも吹き飛ばす攻撃を。

” なっ——!?”

そして、その場に居た5人は動けない。——その、あまりの気迫に。威圧感に。直接対峙しているわけでもないのに、濃密な死を感じさせた。

「こ、これは、ダークシャドウ!?!」

ダークシャドウの叫び声と、常闇の苦悶の声から、何が起きたかを瞬時に察知する。だが、その混乱の中、各ヴィランに、謎の泥の様な物が付着して、何処かへ消える。常闇とダークシャドウもだ。

「すみません皆様ア!!!」

シンリンカムイが自責の念から叫ぶが、エッジショットが冷静にそれをフオローする。

「お前の手落ちじゃない! 俺たちも干渉できなかった! 黒霧の「空間に道を開く」ワープじゃなく、「対象のみを転送する」系と見た!」

「H A L、直ぐに消えた対象の場所を割り出して!」

泥と共に現れた屋内の脳無をオールマイトに任せつつ、ブルーは外に出て、他の脳無の撃破に回る。機動隊の銃は脳無には利いていない。エンデヴァーと手分けしつつ、最小の消耗で撃破していく。

「エンデヴァー!! 大丈夫か!?!」

「どこを見たらそんな疑問が出る!?! 流石のトップも老眼が始まったか!?! いくならとつとと行くがいい! ここは俺たちに任せろ!」

「ああ……任せるね」

そう言うと、オールマイトはもう一つのアジトの方向へと飛び立つ。

「さて、ブルー！ ミドルレンジ以上は任せろ！ お前はもう片方まで取っておけ！」

「はいっ!!」

エンデヴァーに指示され、機動隊の各危ないメンバーをフォローしていく緑谷。一刻も早くオールマイトに追いつくために。

様々なものが吹き飛んだ廃倉庫で、その男はヴィラン連合のメンバーを呼び出し——
更に、もう一人。常闇とダークシャドウも、案内した。

「げあっ!?!」「なんじゃこりやつ!?!」「うえっ、ぺっぺ」

このワープは、色々と体に入るのか、皆吐き出していた。

「また失敗したね用。でも決してめげてはいけないよ。またやり直せばいい。こうして仲間も取り返した。この子もね……君が「大切なコマ」だと考え判断したからだ。いくらでもやり直せ。その為に僕がいるんだよ。全ては、君のために有る」

「ブッコロシガイガアリソウダゼエエエエエエエエ!!」

「ああ、それはまた後にくれたまえ。後からなら、いくらでも標的を与えてあげよう」

暴れるダークシャドウを軽くあしらひながら、死柄木を導こうとする姿。それは、ヴィランの全てを認め導く——悪のカリスマ。そこにいる全員に、否が応でも大物だと確信させる。

「(ここで、動かなきゃ——!!)」

「(動くんだ——!!)」

「(動け——!!)」

今すぐにでも、常闇を救おうとする夜嵐・轟・切島を、止める飯田と八百万。恐怖に震えながらも、それでも絶対に守るんだという決意。そして、その自重は報われる。

空気を切り裂く、独特の音。テレビで、ラジオで何度だつて聞いた、救いの音。はるか高空から一切臆すること無く、殴りかかるヒーロー。

「全て返してもらおうぞ！ オール・フォー・ワン!!」

「また僕を殺すか、オールマイト」

そして、受け止めるは悪のカリスマ。オール・フォー・ワン。両手で組み合う。ただそれだけで、凄まじい衝撃波を周囲に発生させる。

「オールマイトが、来た……!」

途端に5人から緊張が幾分抜ける。オールマイトとは、それほどの安心感を与えるのだ。

——だが、オールマイトは苦戦する。近くに、まだ闇に囚われ暴れる常闇が居るからだ。気絶しているヴィランへの攻撃すらも、オールマイトは防いでいるのだ。その事が、オール・フォー・ワンは愉快でたまらない。

「守るものが多いと大変だねえ、オールマイト——今度は守れるかな？」

耳障りな声で嘲笑するオール・フォー・ワン。だが、それは相手を強敵だと認めてのこと。あらゆる手を使い、オールマイトを弱体化させようとする。

まずは、常闇を止めること——！それが第一と考えた才子は、ドローンの一つを上空から突撃させる。使うのは、機能の一つ。

”スタン・ドローン起動！”

Ｉ・アイランド製の小型静音ドローンから、突如発せられる強い光と轟音——それは、一瞬でダークシャドウを小さくさせる。——が。

「五月蠅い蠅が居たか」

一瞬でドローンが破壊され、再びダークシャドウが暴走する。

「貴様っ！ 常闇少年に何をしたっ!？」

「ふふふふ、彼の半身は、実に闇が好きなようなのでね。少しサービスをしてあげただけさ。彼の周りの、光を“遮断”した。ダークシャドウ君にとって素晴らしく心地よい空間だろう」

「ヒヤッハー！…ゴキゲンダゼー!!!」

個性で作られた闇の中、ダークシャドウがどんどん増長していく。常闇の身体の体積を遥かに超え、今までずっと我慢してきた物がとうとう弾け跳び、開放されようとする。その、開放のカタルシスは喜びに満ちていて、破壊に身を委ねるのは、とても気持ちが良いそう。

「俺は……俺は……ヒーローに……なれないのか……!」

悔しさに涙が溢れる。あんなに、憧れていたのに。そのために、これほど努力してきたのに——憧れの人の足を、ここまで引つ張るなんて……

何とか、常闇を救い出そうとするオール・ナイトだが、オール・フォー・ワンの前では、他に気をつけるなど自殺行為だ。戦闘をしながら、ただ常闇へと話しかける声を止められないことに、血が出るほど歯を食いしばる。

「俺は……俺は……!!」

「そうだとも、君はヴィランにこそ相応しい」

とても優しく、安心させるカリスマを含んだ声。——いつそ、この衝動に身を委ねたら、どんなに安心できるだろうか。心が折れそうになった、その時——

「そんな事、無い!!!」

もう一人、ヒーローが現れたのだ！

「その声は……緑谷！」

「ブルー！」

暗闇の中、友の声が聞こえた。不安を、少し忘れた。

「ゴージャス……グリーン……！ 緑谷出久……！」

姿が見えないこそ、その声ではつきりと分かる。目の前のヒーローの後継者。こちらの都合の悪い時に、何時も現れる目の前の男に、実にそっくりだ。しかも——彼は、自分の弟子と比べて、現時点でも遥かに強い。

「僕は、僕たちは知っている！ 君が、どれだけヒーローに憧れているか！ ヒーローになるために、どんなに君が努力してきたか！ そんな君が、ヒーローになれない筈がない！」

腹の底から力を込めて、クラスメイトに、仲間、親友に届くようにと願いを込めて。その声が、常闇の心に光をもたらず。ダークシャドウの暴走が、少し弱まった。そして、緑谷に触発されるように、また一人声を出した。

「そうだ、常闇い!! お前は、俺のダチで、ライバルだ！ まだ、体育祭のお前のリベンジマッチやってねえだろうが!!!」

オール・フォー・ワンの威圧感に、ただ怯えていた自分の弱気を蹴飛ばし、常闇に向

け、大声で叫ぶ夜嵐。ダークシャドウから、少し主導権を取り戻す。

「そうだ！ 常闇!! お前がなりてえもんはそうじゃないだろ！ 思い出せ！ お前になりてえもんを、ちゃんと見ろ!!! ヴイランなんかじゃ、ねえ!!!」

「俺の、なりたいもの……」

オールマイトに憧れた。ヒーロー達に憧れた。弱きを助け、強きを挫き、夜の平穏を守る。そんな姿に、憧れた。心の光が、また強くなつた気がした。

「五月蠅いんだよ、君たち!」

邪魔だとばかりに、5人の方へ隙を見て、衝撃波を飛ばすオール・フォー・ワン。だが、それを緑谷が渾身の一撃で相殺した。フルガントレットの耐久力を犠牲に、受け止める。

「あいつの攻撃は、全部僕が止める!! だから、皆、声をかけて!」

” 私は1-Aの皆さんに片っ端から連絡を取りますわ! スピーカーを、早く!”

緑谷に守られ、八百万がアタッシュケースの中のスピーカーを慌てて設置する中、切島が続いて叫ぶ!

「常闇い!! お前が暴走するんだつたら、俺達が何時だつて止めてやる!! 俺の”個性”で、全部受け止めてやる!!」

切島が目指すのは、絶対に倒れないヒーロー。だからこそ、仲間が暴走しても止めら

れるようになりたい——いや、止めてみせる!!

「ならば、俺は何時だつて駆けつけよう! 俺はインゲニウムの名を継ぐ者! 友のためならば、いつでもどこへでも駆けつける!」

僕はかけがえない友人たちに救けられた。なら、今度は僕が救ける番だ。友達の様に。そして何より、インゲニウム 兄の様に。

「そうです、闇があなたを強くするというのなら、私は幾らでも光を創り出しましょう!!」

そう言うのと八百万は、まばゆい光を放つサイリウムを沢山作ると、それを常闇へと、思いつきり投げつけた。遮断の内側から、まばゆい光で照らす。——少しずつ、ダークシャドウを操れるようになってきた。

”1—Aの皆さんとの電話、繋がっていきます! もう、ガンガン流しますわね!!”
 「常闇ちゃん、帰ってきて!!」「常闇くん!!みんな待つてるんだからね!!」「俺、そこに行けなかったけど!! 本当は、お前のこと心配してて! それでも、動けなくて、ごめん!!」「また、皆で特訓しようよ!! 大丈夫、常闇君は強いから!!」「僕の光でも、何時でも照らしてあげる☆ だから、皆を信じて!」「お前の個性、本当にすげーよな! だからさ、人助けしたら超沢山の人が救けられると思うんだ!!」「お前、俺よりずっとかっけーじゃねえかよーっ! だから大丈夫だつて!! 帰ってこいよー!」

ここに居る仲間だけではない。クラスメイト全員の声が聞こえる。そして――

「常闇。俺は無駄なことほしない主義だ。だから、無駄な暴走をしたなら、しなくなるまで――お前がプロヒーローになってコントロールできるようになるまで何度だって止めてやる。それが合理的だ」

イレイザーヘッド――相澤先生の声までもが。

「みんな……………」

暴走し、広がっていた闇は、徐々に常闇に収束していく。今、確かに光は届いていないかもしれない。だが、別のものが、常闇の心を照らす。それは、皆の想い――そして「そうだ、俺が、俺がなりたかったものは――」

「そう、君は――!」

緑谷の言葉に、クラスメイトと先生、そしてオールマイト。皆の声が合わさる。

『ヒーローになれる!!!』

「う、うおおおおおおおおおおおお!!!」

暴走していたダークシャドウは完全に抑えられ、また常闇の姿を変える。ダークシャドウを身に纏ったその姿は名付けて

「深淵闇軀!!!」

ダークシャドウを完全に制御下に置き、軀に纏わせる。もう、暴走はしない。どんな

暗闇の中でだってコントロールできるだろう。何故なら――

「我が名はツクヨミ!! 漆黒を操り、深淵に潜む闇から人を救うヒーローなり!!」
心が何よりもまばゆく光っているのだから。

託される想い、受け継がれる意志

「んだよそれ……何だよ、俺らが気持ちよく勝つてたのに、なんだこのクソゲー具合はよ
おとおおおおっ!!」

子供が痲癩を起こしたように、死柄木が叫ぶ。常闇すらも奪い返されて、先生が来た
のにもはや完全に形勢が逆転していた。ダークシャドウを纏った常闇は素早く、あつと
いう間に5人の元へと合流する。

「すまん、皆迷惑をかけた!」

「んな事ねえよ!」「心配してたんだぞ!」「信じてましたわ!」「さあ、行こう!」「……
逃げるぞ!」

そのまま、離脱しようとする6人。

「せめて、てめえらだけでもブツ殺——がはっ!」

ヴィラン連合の注意がここに居る雄英生達に向くが、そうはさせじとブルーがひたす
ら衝撃波を飛ばす。遮蔽物のない戦場は、逆に防御手段の乏しいヴィラン連合を追い詰
める。

「こ、のっ……チート野郎があああああつ!ごはっ!」

「早く、逃げて！」

『了解!!』

立ち上がる度に、何度も何度も吹き飛ばされる。クラスメイトを守る位置から、ひたすら遠距離攻撃をかけ続ける。近くに行つて殴るよりも、オール・フォー・ワンにもヴィラン連合にも遠距離攻撃を放てる位置に居て、ひたすらいやらしく援護に徹する。オールマイトより弱いとは言え、50%で放たれる手足からの衝撃波は、オール・フォー・ワンを苛立たせ、また気を散らすには十分過ぎた。

「SMASAAAAASH!!」

「っ!？」

腹に渾身の一発が突き刺さり、さしものオール・フォー・ワンも形勢の不利を認めざるを得ない。

即座に、ボロボロでも気絶中でもいいので脳無を周りに無差別に呼び寄せ、肉の盾とする。

「チイツ！ またか……!」

「吹き飛ばっ!!」

脳無の突然の登場と攻撃に、ほんの一瞬気が逸れるオールマイト。そこに、街の数ブロック分は吹き飛ばすほどの衝撃を与え、時間を稼ぐ。

『オールマイトっ!』

「心配しなくてもあの程度じゃ死なないよ。だから——君は逃げる、弔」

片手間に緑谷に衝撃波を飛ばしつつ、もう片方の手で謎の黒い触手を黒霧に伸ばす。6人は、下手に緑谷の防御範囲から出れずに足止めをされる。

「ちよ! あなた! 彼やられて気絶してんのよ!?! よくわかんないけどワープを使えるならあなたが逃してちょうだいよ!」

だが、いかにオール・フォー・ワンと言えども全能ではない。

「僕のはまだ出来たてでねマグネ。転送距離はひどく短い上……彼の”座標移動”と違い、僕の元へ持つてくるか僕の元から送り出すしか出来ないんだ。ついでに……送り先は人。なじみ深い人物でないと機能しない」

と、個性を説明しながら、黒霧の個性を強制発動する。

「さあ行け」

と、その時オールマイトを吹き飛ばした方から轟音がする。どうやら、直ぐに復帰したようだ。皆の視線がそちらに向く。

”（あれが、ワープの個性——今なら、ドローンを……!）”

誰も見ていないその一瞬、高空に待機させていたドローンを、才子は今のうちに突撃させる。すぐに通信不能になるかもしれないが、発信機は各ドローンに仕込んである。

隠れ家に分かるだけでもヴィランに更にプレッシャーを与えられる。

「チイツ！ オールマイトが居ねえ！ ブルー！ 大丈夫か!？」

「はいっ!」

少し遅れて、グラントリノも駆けつけてきた。自在に空中を跳ね回り、弱った脳無から仕留めていく。形勢は、ヴィラン連合が明らかに不利だ。

「もう、猶予は無いな。——行け」

また黒い触手を伸ばし、マグネに突き刺し、個性を強制発動させる。皆が、渡我へと一斉に引きずられ、黒い霧の中へと飲み込まれていく。

「待て……駄目だ 先生！ その身体じゃあんた……駄目だ……俺、まだ——!」

必死に手を伸ばす死柄木。だが、その手は届かず、空を掴む。

そして、黒い霧が消えると同時に、オールマイトがまた戦場へと舞い戻る。周りの脳無は次々と倒され——オールマイト・グラントリノ・ブルーの3人のヒーローと、その後ろに居る有精卵達が戦場に残っている。

「今、だ……早く、みんな逃げて!」

『応ッ!』

ようやく隙が出来たと皆が逃げようとして——

「逃がすか」

片腕を異形に変え、渾身の一撃を撃ち込むと、それを守るためにオールマイトが盾になる——そして、さらにもう一つの個性を発動。呼び出すのは、とびっきりの脳無。

「もうちよつと調整したかったが——仕方ない。暴れてもらおうとしよう。——君たちもUSJで戦っただろう？　そのの、ハイエンドモデルだよ」

体色が、黒い脳無。しかも更に悪いことに、翼まで生えている。

「また、脳無——!!」

臨戦態勢を取る、ブルーとグラントリノ。オール・フォー・ワンはオールマイトが相手をする以上、脳無は自分たちでやるしか無い。

「グラントリノ……ブルー……!!」

「分かるとる!」「分かっています!」

オールマイトに応えた二人は、迷わずに脳無に突っ込んでいった。

「100%——セントルイススマアアアアアアアアアアアッシュー!」

フルガントレットの両足、残り耐久1回ずつ。左足で、地面を陥没させながら飛び出し、利き足である右足に渾身の力を込め、思い切り地面に叩きつける。温存はしない、出来ない。初めから全力の一手を。——だが

「GYAAAAAAAAAAAAA!」

対オールマイトを目指して作られた脳無は、それでもまだ動くのだ。ダメージを受けた端から修復し、今度は翼を伸ばして、空を翔ぶ。

「空中戦は、俺に任せろ!」

思い切り肺に空気を吸い込み、足の裏から一気に吐き出す。空中で何度も方位を変え、背中に蹴りを入れるがダメージにならず、逆に弾き飛ばされる。そこを狙われ追撃されるが、今度はブルーが右手の100%で殴り飛ばす。残り、3回。

「硬い、重い、疾い——!」

まるで空を翔ぶオールマイトを相手にしているかのようなようだ。だが、オールマイトの援護は期待できない。オール・フォー・ワンは、街を巻き込むように大規模な衝撃波を次々と飛ばしていくので、オールマイトはひたすら守勢に回されている。側には、雄英生も居る。虎視眈々と脱出の機会を狙っているが、それも難しい。

「クツ……! 何も、出来てねえ……!」

そして、悔しそうに歯を食いしばるグラントリノ。自分は——この二人の助けになれないのかと、無力感に苛まれる。

「おやおやあ? 僕ばかりにかまけて良いのかな? オールマイト。このままでは、どちらか、あるいはどちらも死んでしまう。そう、君の師匠——志村菜奈の様に」

表情は見えない。しかし、その声色だけでニタリと嘲笑っているのが分かる。

「貴様の穢れた口で……お師匠様の名を出すな！」

「理想ばかりが先行しまるで実力の伴わない女だった……い・ワン・フォー・オールのみ親として恥ずかしくなったよ。実にみつともない死に様だった……そして、今キミの未熟さで、後継者さえも失いそうだねえ……いやなんと無様な！」

「Enough!!」

激高し、大振りになった所を高空まで弾き飛ばされた。それを、グラントリノが追い、更に脳無が追撃し、それをブルーが阻止する。両方の手を握り、思い切り振り上げてから、100%の力で振り下ろす。

「スマッシュ!!!」

轟音とともに、また地面へと叩きつけられた脳無。だが、また再生していく。残り、右手2回・左手3回。カウントダウン。100%を出せる限界が、近づいてくる。

「ふむ、先程の組み合わせに、もう少し足してみるか」

狙うは、不確実なヒーローの卵たちではなく、逃げ遅れた市民達。

「行くぞ」

軽い言葉とは裏腹に、直線上のもの全てを吹き飛ばすような衝撃の連打。歯を食いしばり、血を流しながらも、それを何度もSMASHで止めるオールマイト。助けように

も、ブルーとグラントリノは、脳無に掛かりきりだ。このままでは、消耗し尽くしてしまふ。そう思われたその時。

「プロミネンスバーン!!!」

突如として、大火力が脳無とオール・フォー・ワンへと向かう。オール・フォー・ワンは個性で逸らすが、脳無は直撃を受け焼かれる。

「この、炎は——」

『エンデヴァー!』

「貴様が、この騒ぎの元凶——そして、ハイエンドの脳無か……!」

初っ端から最大火力を放ったが、オール・フォー・ワンには逸らされ、脳無はもう再生を始めている。

他のヒーローたちも次々と現着し、周りの人々を助け回収していく。

「エンデヴァー……脳無を、頼む……!」

「チイツ! まさか、貴様から頼まれるとは……だが、任せろ!!」

そう言うと、エンデヴァーは背中のガジェットに炎を通し、そのまま空中へ吹き上がる。I・アイランドの技術者達から提案された新装備だ。彼等曰く——炎を出し続けられるならば、飛べないはずがないとの事だった。だが、試作品なせいもあり、身体に熱をどんどんと溜めていく。そして、空中戦は脳無の方が疾い。

更に悪いことに、オール・フォー・ワンまで空中へと飛び出した。

「こいつらじゃ、空中戦は出来ねえ……！　なら、俺が行くしかねえ……！」

限界をさらに超え、大きくジェットを噴出し、空中へ。ブルーも、何とか下から手を出そうと跳躍するが、既に足のフルガントレットは粉々に砕け散っている。必然、下から直線的に狙うしか出来ない。

「もつと、力が有れば……僕が、この力を使いこなせば……！」

悔しさに、涙が出そうになる。ヘルメットの下で歯を食いしばり、それでも諦めずに空中戦を挑むが、捉えきれない。そして、空中で炎を何度も放っていたエンデヴァーが、とうとう墜落する。熱を、溜め過ぎた。

「ぐっ……がっ……！」

「哀れだな No. 2。所詮、それが君とオールマイトとの一生理められない差だよ」

「っ——親父い!!!」

「轟っ……！」

ヴィランに嘲笑され、落ち行く姿に思わず轟も叫んでしまった。あの親父でさえ、限界を超えて戦っているのに、何も出来ない自分。——だがもし、出来ることが有るのならば。

「夜嵐、頼む——親父を、エンデヴァーを回収してくれっ……！」

「つゝつゝ！ 任せろお！」

威力を限界まで振り絞り、風でエンデヴァーを引き寄せる。その隙は、ブルーが稼いだ。左手で100%の衝撃波を放ち、脳無を吹き飛ばす。残り、2回。

引き寄せられたエンデヴァーを、轟は全力で氷で覆い、冷やしていく。あまりの熱に、凍らせた端から凄まじい水蒸気が出て身体が熱くなるが、構わない。オールマイトも、緑谷も、エンデヴァーも、周りのヒーローたちも皆限界を超えている。なら、自分が超えないでどうするか……！

「エンデヴァー……！ 熱くなりや、何度だって、冷やしてやる。だから——だから——オールマイトを、緑谷を——救ってくれっ……！……！……！」

息子が父に頼む、初めての願い。それに、奮い立つ。

「勿論だ！」

一方、自責の念に駆られている緑谷は、ただ願う。止めたい——捕らえたい——救いたい。生半可なガジェットも、空中へのジャンプも通じない。そして、その強い想いが、かつての想いを呼び寄せる。

”ああ、良いぜ——俺の力を、貸してやる！”

内側から響いてくるのは、聞いたことのない——しかし、安心感を与えてくれる声。

ふと両手を見ると、黒いモヤが溢れる。

”それは俺の個性——黒鞭って言うてな。そりゃーもう良い個性さ”

ブルーの意志に呼応し、形を変え、伸びる。

”俺たちまでの代であいつとの決着を終わらせられなくて、お前さんにも重荷を背負わせちゃって済まないな。——だから、頼む。あいつを、止めてくれ。あいつとの因縁を、終わらせてくれ”

姿は見えないが、こくりと頷く。きつと願いは同じなはずだから。

”使い方は体で覚えな!! 感情を制御して、心を制しろ! そうすれば、必ずお前さんの意志に従う!!”

心の中、薄れゆく願いと自分の願いを託し、その黒い鞭を伸ばす。倒す必要はない。ただ、拘束すればいい……!!

「いっけえええええええええええええええええええ!!」

緑谷の身体から伸びる、多数の黒い線。四方八方から伸ばし、退けようと振るつてきた脳無の腕をそのまま拘束し、翼を縛る。暴れる脳無の圧力に、全身が悲鳴を上げるが、無理やり抑え込む。動きさえ、封じ込めてしまえば——

「待たせたな、ブルー」

ガチガチに身体が冷えたエンデヴァーが、脳無の下に潜り込む。熱を、ただ上へと指

向して、熱を上げる。

「しっかり抑えておけよ!!!」「はいっ!!!」

二人共限界を超える。その時、二人の脳裏によぎるのは、雄英の校訓。

「オールマイトのように……! 限界を、超えて——!!!」

「昔から、この校訓が大嫌いだったよ——!!!」

「行けええええええええっ!! 親父いいいいいいいいっ!」

轟息子の限界温度も、エン自デヴァ分アの限界温度さえも遥かに超え、青い炎で夜空を焦がす。

『PLUS ULTRA!!!』「プロミネンスバーン!!!」

真つ青な炎に包まれ、再生ができないほどに炭化!した脳無。そのまま、地面へと落ち

た。後は、ただ託すのみ。熱で動かなくなった身体を無理やり動かし、叫ぶ。

「行けええええええええええええええっ!!! オールマイトおおおおおとおっ!」

「ああっ!!」

もう、敵はオール・フォー・ワンだけになった。背に、数々の声と想いを受け、オールマイトはまた走り出した。

始まりの終わり、終わりの始まり

オールマイトはただオール・フォー・ワンへと向かって走る。託された様々な想いを背中に受け。それが、平和の象徴としての——自分の最後の役割だと信じて。活動限界は、度重なる衝撃波の打ち消しでとづくに超えた。——だから、もうその後は、捨てた。自分の体に残る、ワン・フォー・オールのその残り火、全てを出し切ろう。そうしても、大丈夫だ。自分が居なくなっても、後を支えるヒーローたちが——これから育つ、正しいヒーローの有精卵達が——そして何より、ワン・フォー・オールを継いだ、新しい力にも目覚めた自分の後継者が居る。

だから、この身に残る全ての力は、この瞬間のために。

そして、覚悟を決めたのはオール・フォー・ワンも同じだった。ヒーローとは、忌々しいほどに何度も限界を超えてくる。5年前、身体をボロボロにされ、同じくボロボロになった筈のオールマイトは、尚も向かってくる。更には、No. 2と、ワン・フォー・オールの後継者。この二人によって、ハイエンドが撃破された。後先も考えぬ、なりふり構わぬその熱さに身を焼かれた。

——ならば。ならば、自分も”その先”を捨てよう。まだ未熟な、テレビを通してこ

の光景を見ているであろう死柄木弔に学ばせてやる最後の事。それは、執念。その目的のためだけに、知恵も、意志も、身体も、全ての限界を突破させる、心の強さ。それを見せよう。でなければ、きつと緑谷出久には敵わない。

もう、オール・フォー・ワンも衝撃波を飛ばす体力も尽きかけてきた。ワン・フォー・オールの後継者が、まだ全力の一撃を出せる手段を残している以上、長々とは伸ばせない。だから——この身全ては、オールマイトを殺すためだけに。正義の象徴が、抵抗虚しくテレビの前で砕け散るのを、見せるためだけに。

余分な個性は抜く。”エアウオーク解除” 身体への負担は、考えない。”腕の肥大を、両手に波及” 大地に根ざしその力を全て受け止めさせる。”地面を硬化。脚力増強*3”

両腕が膨れ上がった異形の姿。対して、オールマイトは、解除されかけのマッスルフォーム。二人が激突した瞬間、音が死んだ。そして、弾けた。

『うおおおおおおおおおおおっ!!』

お互い、小細工の無い真正面からの殴り合い。ただ、泥臭く殴る。お互いの拳を合わせ、お互いの拳から血を流し、口から血を吐き、マスクから血が溢れ、衝撃は周囲を破壊していく。

「君のその残り火、全てをかき消そう!!」

「ならば、私はその火をすべて使い、貴様を捕らえる!! それで、ヒーローだからだ!!!」
体中から蒸気を噴き出し、血を吐きながら異形の腕と何度と無く殴り合う。

「——オールマイト……」

衝撃波に吹き飛ばされた所を、エンデヴァー共々ダークシャドウに回収され、遠くから見守るブルー。……だけど、ただ見ているだけなんて出来ない。ヘルメットを外し、個性も使い、大声で緑谷が叫ぶ。

「あなたが勝つって信じてるよ、オールマイトオオオオオオッ！」

それを皮切りに、皆の思いが噴き出す。

「そうだ、あんたが負けるはずがない……行けえ！」

『オールマイトオ!!!』

皆の叫びが唱和する。ここだけでは無い。テレビを通じて、ラジオを通じて、ネットを通じて状況を知った人たちが、声を出す。今まで、ずっと信じてきて平和を守ってきたくれたヒーローが、負けてほしくない——負ける筈が無いと。

「ははははははっ!! 皆健気だねえ! 君はもう、とっくに限界だと言うのに! そのフォームすら、維持できなくなるほどに!!」

身体から吹き出す蒸気で、大事な何かが抜けていくように、オールマイトの身体が萎んでいく。顔が、腹が、背中が、足が。殴り合いに必要な所から、少しずつ削られ

ていくように。

「——醜い」

吹かずとも消え行く、弱々しい残り火を守るように、役目を全うするまで絶えぬように、必死で抗う姿を幻視するオール・フォー・ワン。

そして、最後の最後。力が消え行くとき、オールマイトの脳裏に過るのは——他の誰でもない、師匠の姿と声。

” 限界だーって感じたら思い出せ”

「うおおおおおおおおおおおおっ!!」

もはや、左手しか維持できなくなつたマッスルフォーム。殴り合いから身体をずらし、渾身の一撃を、オール・フォー・ワンに叩き込み、マスクを吹き飛ばす——が。

「浅いっ……!! 最後の一振り……全てを左腕に込めたが——もう、パワーが無いのか!?!」

見守るグラントリノの脳裏にも、絶望がよぎる。もう、そこまで消えていたかと——。「それが、限界だったか——! もう、死に給え、オールマイト!!」

「いや、ずっと、力を溜めていたのだよ!!」

左手が萎み、他の部位も更に縮み、歯を食いしばり血を流しながら、折れた腕を、振りかぶる。

” 何人もの人がその力を次へと託してきたんだよ。皆のためになりますようにと……一つの希望になりますようにと。次はお前の番だ。頑張ろうな、俊典。”

一筋の光が、色を変える度に太くなる。そして8回目——自分の番だ。残り火を、全て拳に託して。希望になりますようにと願いを込めて。

——さらばだ、オール・フォー・ワン。さらばだ、ワン・フォー・オール——

「（——届かなかったか——次は、頼んだよ。死柄木弔）」

「UNITED STATES OF SMASH」

最後の一撃が——オール・フォー・ワンの顔面に突き刺さった。陥没した地面の中心に、オール・フォー・ワンが突き刺さり、ピクリとも動かない。

そして月明かりの元、オールマイトはマッスルフォームで、左手を突き上げ立っていた。平和の象徴は負けないのだと、皆に伝えるために。その時、日本中が叫んだ。

『オールマイトオ!!!!!!』

平和の象徴は、!!ヒーローは、最後の最後まで——この国の平和を守るために、負けなかつたのだ。

しばらくして、とうとうマッスルフォームの維持すらできなくなったオールマイト。倒れそうになった身体を支えたのは——エンデヴァーだった。

「……エンデヴァー……」

「——無様な姿を晒すな。……俺が背中を追い続けてきた男は——決して倒れん」

「ははっ……相変わらず、厳しいね君は——」

拘束され、メイデンに入れられるオール・フォー・ワンを、主だったヒーロー達全員で監視する。

「次を、頼むよ。エンデヴァー」

「——任せろ」

ずっと、目指し続けてきたNo. 1の地位。それを託された一言は、とてつもなく重かった。——だが、臆するわけにはいかないのだ。次の世代の為に。オール・フォー・ワンがメイデンに入れられた後、ふと横を見た。そこには、息子を含む7人のヒーローの有精卵たち。何のために戦うのか。それは、紛れもなく未来の——そして、彼等のためだ。

今、一つの時代が終わりを迎えた。朝日と共に迎える次の時代はどうなるか——まだ、知る者は誰も居なかった。

新たなる誓いと母の思い

戦いから一夜明け——それでも緑谷は眠り続けていた。オール・フォー・ワンがメイデンに入るのを見届けた後、糸が切れたようにぶつぷりと倒れ込んでしまったのだ。合宿中からの度重なる強敵との連戦、限界を超えた個性の使用に、新たな個性の反動と、その体には恐ろしいほどの負荷がかかっていたようだ。気力で保っていたものがぶつぷりと切れ、他のヒーロー達と同じ病院へと搬送される。

その間に、平和の象徴であるオールマイトが消えた世間は、大きく動き出していた。警察は改革が迫られ、ヴィラン達はオールマイトが居なくなつたことで少しずつ動きを大きくしていく。

そして、監獄タルタロスへと移送されたオール・フォー・ワンは独り思う。

「(負けたよ、オールマイト。実に醜い足掻きだった。——だが、君に弟子が居るように——私にも弟子がいる。頼りにしてきた師が手の届かぬ場所へ去り、彼は憎悪を募らせる。彼は真に先頭を歩んでいく。仲間も居る。仲間を増やすすべも学び始めている。今は潜伏し、時を待て。緑谷出久に立ち向かうために。経験も憎悪も悔恨も全てを糧としろ。そして——私の執念を、受け継いでくれ。次は、君だ)」

思い浮かぶのは、光と闇、二人の後継者。緑谷出久と死柄木吊。まだ、及ばぬ所が多い自分の弟子だが、ポテンシャルは必ず持つている。そして――

「（彼の正体を、君に話すときが楽しみだよオールマイト。戦いの最中であつたならば、君はそれでも奮い立っただろう。しかし、何も出来ない今――それを聞かされたら、果たして君はどれほど後悔してくれるかな?）」

身じろぎ一つとれないこの牢獄で、ただその時を楽しみに待つことにした。

一方、オールマイトの方もグラントリノ、塚内、サー・ナイトアイ、デヴィットの4人に見守られて病室に居た。

「私の中の残り火は消えた。」平和の象徴、は死にました」

病室で包帯だらけでベッドに座り、呟く。

「……今までよく頑張つてきてくれた、俊典」

「今まで、ありがとう。オールマイト……」

「……トシ。お疲れ様。……後はゆつくり、休んでくれ」

「……オール、マイト……今まで、ありがとう……」

四者四様に労う。ずっとずっと、若い頃から平和を守ることが責務としてきた男が、無事生きて戻ってきた。ただそれが、何よりも嬉しかった。

「ところで、逃げたヴィラン連合の残党は……?」

「小僧が身体にくつつけた発信機は全部ぶつ壊されたが、身体に飲み込ませた発信機には気付いとらん様だったな。まだ残つとる」

「え!? あれボケてたんじやないんですか!？」

「当たり前だボケ!!」

あの場面でガジェットを間違えるはずもなく、羊羹玉の中に発信機を仕込んで飲み込ませたのだ。体外に排出されるまではタイムラグが有る筈である。

「敵のアジトにドローンも侵入していてね。破壊されるまでありつたけの写真やら何やらを撮って送ってくれたようだ。——まあ尤も、ただの汚い部屋の様で情報は無かったが。ただ、位置情報が有るから、気が付かれないように嚴重に痕跡を監視する。そして、ヒーロー達の準備が整ったらまた踏み込む。いつそ、黒霧だけを先に捕まえるのも有りかもしれない。隙が有ったら、即拘束しよう」

「……ああ、任せた」

時代は着々と動いていく。だが、それに自分はもう関われない。その事にオールマイトの胸の内には様々な感情が渦巻いていた。

「……もう、私が戦いに出る事は有りません。……なら、せめて、教師として次の世代を守り育てましょう」

だが、戦えなくても見守ることは出来る。次の世代を。新しい、希望達を。

「そうですね。引退するとは言えあなたは、ずっと皆の憧れのヒーローです……が」

「うむ、教師としてはだな。お前、小僧と夜嵐君の試験の時、勝ち筋を残さなきやならぬのに、本気で叩き潰したんだって？」

「——あ。いえその件はですね!？」

よりよつて小言が超キツイ二人にバレてた事に、顔が真っ青になるオールマイト。塚内とデヴィットも呆れ顔だ。

「……まあ、戦いばかりだったお前にそこまで言うのも酷だが。これからは教師に専念するんだ。そこらの心構えもみっちり叩き込んでやるから覚悟しておけ!!」

「事務仕事はサイドキックの頃は私が、その後は塚内警部がこなしていましたが……これからは貴方がご自分で出来るようにキツチリと仕込みましょう」

ゴゴゴゴゴと擬音が出そうになるほどに、圧力をかけてくる二人。

「……お、お手柔らかに頼みます……」

だから、オールマイトに出来るのはそうお願いすることだけだった。

しばらくたつぷりお小言を貰った後、塚内警部は仕事に戻っていったが、他3人はまだ残っていた。なので、オールマイトも含めて、緑谷のお見舞いに行くことにした。連

日の戦闘で限界をとつくに超えていたが、更に新しい”個性”も発動し、身体への反動が大きすぎて戦闘直後は死んだように眠っていたものの、昼も過ぎた辺りによく目が覚めたようだ。

男4人、緑谷に与えられた個室に行くと……そこでは、緑谷の母が出久に林檎の皮を剥いているところだった。

「あつ……オールマイト!? そ、それにグラントリノとサー・ナイトアイに……」

「デヴィット・シールドです。はじめまして、Mrs. ミドリヤ。イズク君のヒーロースーツやガジェットを作らせていただいています」

ゾロゾロと個室に入っていくと、引子は恐縮したように隅に寄り頭を下げる。その態度に、逆に男連中が慌ててしまう。

「あ、ああ、お気になさらずに」「ええ、我らはあくまで見舞客ですので」

椅子を持って隅に寄りつつ、腰を下ろす。じつくりと話さなければならぬ。

「オールマイト……その姿って事は……もう……」

「ああ、私はもう、全て出し尽くしてしまった……だから少年。次は——君だ」

改めて聞くと、涙が溢れる。オールマイトはもう、戦えない。そして、彼に託されたのは、かけがえのない力と、平和への想い。だから、応えなくてはいけないのだ。涙を無理やり止めて、拳を握る。

「——はい！」

万感の思いを込めて。もう大丈夫だと。休んでも良いのだと。平和は、自分が守るのだと決意を込めて。平和を守るために、どんな事でもするヒーローの目。その決意に、男4人は安心したように頷こうとして――

「——また、戦いに行くんですね、出久は」

引子が、ポツリと呟いた。とても心配していて、声が震えている。

『！』

「ずっと”無個性”だったこの子があなたの弟子になって、雄英にトップの成績で入学できたって聞いた時は嬉しかったです。やっとこの子の夢が叶うんだなって。――でも」

頭によぎるのは、入学してから、夏休みまでのほんの短い間。USJで襲われたことを皮切りに、恐ろしいヒーロー殺しや、I・アイランドでのテロリストに、今回の合宿での襲撃。何故、息子たちばかりがこんな危険な目に遭ってしまうのか？そして何より――

「出久は、あの場所に居たのでしょうか？」

『!!』

リカバリーガールのお陰で回復したと思ったら、また疲労困憊で運ばれてきた。熱を

出しようなされ、とても苦しそうだった。そして、理解する。——あの、恐ろしい戦いの只中に居たのだと。

「出久は……出久は、まだ16なんですよ！ まだ、ヒーロー科に入学したばかりなんですよ！ なのに、なのにここまで恐ろしい目に合わなければいけないんですか！ これ以上、まだ未熟なこの子を危険な場所に追いやらないといけないんですか！ 出久の向かう未来が、ヒーローになれる代わりにあんな血みどろの未来かと思うと、私……私……」

涙を溢れさせる引子に、皆が一樣に沈黙する。それは、親としてあまりにも当然の心配。プロヒーロー達が揃う雄英で、保須市で、I・アイランドで、合宿場で、何よりも神野区で。何故、息子がここまで危険な目に遭うのだろうか？

「正直——今の、この危険な雄英高に息子を預けられるほど、私の肝は据わっておりません」

涙ながらに訴える引子に、何も言えない5人。母親の気持ちをないがしろにしてきた当然の帰結。強いから、資格があるからと、戦いへ引つ張り込んだ大人たちは、掛ける言葉が見つからない。

「お母さん……」

「あなたがどれだけ素晴らしいヒーローでも関係ありません。ヴィランに襲われてま

もに授業を続けられない……生徒の大怪我を止められない……戦いに巻き込む……そんな学校に、これ以上通わせたくない。私は……」

この言葉に、グラントリノとサー・ナイトアイが更に深く俯く。オールマイトが助かるかもしれないからと、戦いに巻き込んだのは主にこの二人だ。尚更、向ける顔がない。「モンスターペアレンツかもしれないません。でも、モンスターでいいです。私は出久の夢を奪いたくないんです。どうしてもヒーローになりたいなら別に……雄英でなくても、ヒーロー科はたくさんありますよね」

だが、出久は一切迷いなく言い切る。

「いいよ」

『!?!』

「雄英でなくたって良い。職場体験で、ヴィランから救けた人達が笑ってお礼を言ってくれたんだ。火事から救けた人が、泣きながら命の恩人だと言ってくれたんだ。合宿の時救けた子から——ヒーローどころか”個性”すら嫌ってた子が、ありがとうって言ってくれたんだ……」

オールマイトに憧れた。あの人に憧れた。救ける姿が、かつこよかった。救けられた人の笑顔が素敵だった。そして、その笑顔は、自分にも向けられるようになった。それが、凄く嬉しかった。

「雄英でなくたってどこだって……いいよ！ 僕はヒーローになるから！」

それは決意。憧れが、ただの憧れでなくなった者の願い。そして、出久が——ゴージャスグリーンが素晴らしいヒーローになれると確信しているからこそ、4人の大人達が頭を下げる。

「お母さん、出久少年には素晴らしい才能と意志が有ります。それを見た時、私は喜びました。私の後継に相応しい……平和の象徴になれると、私だけでなくここに居る我々4人が確信しております」

「っ……っ！」

オールマイトの……平和の象徴たちからの深い信頼。それが、心をまたざわめかせる。

「彼の強さに甘え、まだ子供である彼に寄りかかっていた事を、深く謝罪します。そして、雄英教師としての懇願です。確かに私の道は血なまぐさいものでした……！ だからこそ、彼に同じ道を歩ませぬよう、横に立ち共に歩んでいきたいと考えております。それに、雄英には素晴らしい彼の友人たちが居ます」

「オールマイト……っ！」

「今の雄英」や、我々に不安を抱かれるのは仕方のないことです！ しかし、雄英ヒーロー達もこのままではいけないと……変わろうとしています！ どうか？ 今の」では

なく、”これから”の雄英に、そして我々に目を向けて頂けないでしょうか……!!”

社会的地位の有る大人たちが、揃って出久の為に頭を下げている。それほどまでに、出久の存在は大きくなっていったのだと改めて感じる。

「出久少年に私の全てを、注がせてはもらえないでしょうか!!」

「無論、我々も全力で彼の手助けをさせていただきます」

サー・ナイトアイが。

「この老骨の命ある限り、彼を支えることを誓います」

グラントリノが。

「ともに戦うことは出来ませんが、私の持つ全ての知恵と技術を使い、イズク君をサポート致します」

デヴィットが。それぞれの言葉で誓う。そして、最後にオールマイトが。

「この生命に代えても、守り育てます」

その言葉に、へたり込む引子。

「……やっぱり、嫌です……」

その口から出たのは、拒絶の言葉。それに、皆が気落ちする――が。

「だってあなたは、出久の生きがいなんです。雄英が嫌いなわけじゃないんです……私。

出久に……幸せになってほしいだけなんです……だから。命に代えないで。ちゃんと

生きて、守り育てて下さい」

それは、己を犠牲にして戦い続けてきた男に向けられた、願いの言葉。ただ、生きてほしいと言われた。

「それを約束して下さるのなら、私も折れましょう」

その優しさに、また4人一同が深く頭を下げる。

「約束します」

次代の、希望——。その彼の双肩にかかる想いは、とてつもなく重かった。

変わる日常、変わる人々

とある病室で、神聖な誓いの儀式が終わった。これからの時代についてそれぞれが思いを馳せる中、途端にまたまぶたが重くなる緑谷。連日の激闘に次ぐ激闘に、相次ぐリカバリーガールの回復は体力を根こそぎ使い尽くさせていたのだ。

それが分かっているグラントリノ、サー・ナイトアイ、デヴィットの3名は見舞いもそこそこにそれぞれの仕事場へと戻っていく。平和の象徴オールドマイトはもう居ない。今まで以上に、彼らも己の職務に邁進するしか無い。一人に頼りすぎるのではなく、これからは更に個々の力を合わせて激動の時代に対処していかなくてはならない。

それを誰よりも強く感じているのは、No. 1を継ぐ事になったエンデヴァーである。抜かすならば、実力で追い抜きたかった。誰よりもその背中を遠く感じ、誰よりも焦がれて追い求めたあの背中に追いつくこと無く、そしていつの間にかもう二度と見えなくなった。追うべきその背は何処にも無く、そして後ろには大勢のヒーローが続いている。こんな事で頂点に立ちたくなかった。託されたくもなかった。そして、居なくなつてから改めて分かる奴の存在の大きさと、No. 1の重み。様々な感情が胸の中を

吹き荒れ続ける。その感情を誤魔化すように、自宅の鍛錬場でひたすらに身体を虐め抜いた。

「ちよつ、お父さん、そろそろいい加減休まないと……」

娘が心配そうに話しかけてくる。だが、まだだ。

「まだ、大丈夫だ。あのバカは、この程度で弱音など吐かんつ……！」

「お父、さん……」

悲痛な顔をさせてしまった。だが、止まるわけには行かない。今まで自分のしてきた事の償いのためにも、未来のためにも。平和の象徴としての力がなくとも、オールマイトが生涯を賭けて作り上げてきた平和のためにも、絶対に。

そんな気力で無理に体を動かし個性を使っていると、身体に熱が相当に蓄積されていった。少しずつ鈍くなつていく動き。だが、それに構っている暇は無い。奴の様に、自分を超えていこうとする息子や後進達の様に、ブルー緑谷出久の様に、更に向こうへと。だが、気力だけでどうにかなるものでもない。視界が歪んでくる。

「何やってんだよ、クソ親父」

意識も朦朧とし始めてきた時、突然身体が氷で包まれた。体中から噴き上がる蒸気に、鍛錬場が白く染まる。

振り向くと自分の息子が苛ついたような、不安なような、なんとも言えない表情でこ

ちらを見ていた。

「フウ……焦凍か……」

本来ならば凍傷になってもおかしくない冷気に包まれても、体に心地良いだけだ。それ故に今の異常さを知らせてくる。

「オーバーワークは身体を壊すぞ。常識だろうが。ヒーロー活動もしねえ内から体壊してどうするつもりだ」

そう言うのと、こちらにペットボトルを叩きつけるように投げつけてきた。キャッチして手元を見ると、味の不味い経口補水液のラベルが見えた。

「……すまん」

「今はテメエがNO. 1だ。不安がってたら、みんなが不安に思うだろうが」

ぶつきらばうにそう言うのと、踵を返して離れていく。息子にすら苦言を呈される有様に肩を落とすが――

「……それと、オールマイトと緑谷を助けてくれてありがとな。……親父としては認めてねえが……ヒーローとしてのエンデヴァーは凄い奴だった」

「!!」

息子から、初めて認められた。父親としてではない、ヒーローとして、だが。それでも、認めてくれたのだ。

あの夜からずっと、様々な物がのしかかって来た。その重さに、潰されそうにさえ感じた。——だが、簡単なことだった。今まで通り、全力を尽くせば良い。元々最近では事件解決数はオールマイイトよりも上だったのだ。そう悟るとペットボトルを空にして床に倒れ込む。ひんやりした床の感覚が、心地良い。身体と意識がようやく休息へと向かい、意識が薄れていく。今度は、悪夢は見なかった。

世間の大きなうねりの中で雄英もまた迅速に動いていた。ヒーロー科全員のために急ピッチで寮を作ると同時に、それぞれの生徒の家に家庭訪問を行う。1年はA組B組の担任二人の他に、校長と腕は折れているが退院したばかりのオールマイイトも共に向かう。直接の被害者の保護者達だ。学校側も特に気を使って人を送り込む。

教師たち全員が、保護者の方々に強く非難されることを覚悟していた。だが、予想は大凡外れる事になる。

「いや、是非通わせてくださいとこちらが頼みたいくらいです！」
「そッス！俺も雄英で勉強続けたいッス！」

最初に訪れた夜嵐の家では、挨拶もそこそこに二人から熱い言葉が飛んできた。先生二人が面食らってしまった。特にイナサは危険な最前線に居た一人だっただけに父の反応は予想外ですら有った。

「確かに大変な事も沢山有りましたが、その一つ一つを乗り越える度にコイツは大きく変わっていったと思います。それも、いい方向に！ それに、コイツの熱さに付いていける友人もたくさんできた様です。是非、このままコイツを通わせてください！」

「俺からもお願いします！ みんなと一緒にヒーローを目指していきたいっすー！」

親子揃って、テーブルに勢いよく頭を打ち付けて逆に教師二人に懇願する。その勢いに少々驚くも、教師二人は姿勢を正して深々と礼をする。

「謹んでご子息をお預かりさせて頂きます」

「ご子息を含め、ヒーロー科全員が素晴らしいヒーローになれるよう、粉骨砕身努力していきます」

失態続きの雄英だが、それでも信頼しご子息を預けてくれることがとても有り難かった。自分たちの努力が認められたのだと、少し誇らしげな気持ちにもなる。

他の家庭でも、反応は大同小異であった。合宿で大きなダメージを受けた耳郎や葉隠の家でも最初こそ苦言を呈されたものの、後から出てきたのはオールマイトへの好意と感謝であった。

「今日、一杯奢るかい？」

「……そうですね、是非頂きましょう」

普段、あまりこういった事に関わらない相澤だが、返事をした表情は普段よりも柔ら

かく見える。その日の夜には何時もよりも多くアルコールを体内に摂取し、非合理的なことに判断力をやや低下させてしまった。だが、何故だかそれは悪くないように思えた。

それから時は流れて8月上旬、築3日の出来たての寮の前に教師含め1—Aの全員が集まった。生徒の皆はそれぞれ、無事に全員喜びや安堵の笑みを浮かべているが、唯一相澤先生の表情だけはあまり良くない。

「とりあえず1年A組、無事にまた集まれて何よりだ」

「皆許可降りたんだな」「私は苦戦したよ……」「フツーそうだよね……」「二人はガスで直接被害遭ってたもんね」「ウチは大賛成だったツス!」「親父さんも同じノリかっ!」
と、話に出るのはそれぞれの家の事情と

「無事集まれたのは先生もよ。会見を見た時はいなくなってしまうのかと思って悲しかったの」「うん」

心配気に先生を見る複数の生徒の視線。

「……………俺もびつくりさ。まア……………色々あんだらうよ」

あからさまに大人の事情を匂わせる相澤先生だが、手を一つ鳴らすと、話題を変える。

「さて……………! これから寮について軽く説明するが、その前に一つ」

鋭い視線が5人へと向く。

「轟、切島、八百万、飯田、夜嵐。知つての通りこの5人はあの晩あの場所へ常闇救出に赴いた」

とたんに、少し表情を曇らせる5人、そして常闇。他の面々もなんとも言えない表情をしている。

「……………本来なら除籍処分になっている……………と言いたいが。一人、緑谷だけが仲間の中から戦いに行ったからな。居ても立つても居られなかつたか」

ふう、と一つ息を吐く相澤先生。

「我々大人が不甲斐なく、諸君らを色々な事件に巻き込んですまないと思つている。だが、そんな状況を棚上げするが一つだけ言わせて欲しい」

そう言うと、視線を動かし20人を見渡す。

「ヒーロー活動とは、何事も手続きが必要だ。免許を取得した後も事件の報告・損害の報告・各ヒーローの働きの報告。そしてこれらは、正規の手続きによつて行われなければならない。できれば……………次回からは仮免を取り、正規の働きができるようになってから動いてくれるとありがたい」

『はいっ！』

揃つて皆が返事をする。相澤先生もこくりと頷き、踵を返す。

「以上！ さっ！ 中に入るぞ、元氣に行こう」

「新築だヒヤッホー！」「ク、クーラーは!? お風呂は!? ひよつとして使い放題!」「この大ききさだと一人一部屋位ありそうだよね!」「キツチンが大きいと嬉しいわ。全員分のお菓子作れるくらい」「待て待て皆少し落ち着くんだ!」

暗い空気を吹き飛ばし、ワイワイガヤガヤ騒ぎながら寮に入っていく一同。

「(茶番……も偶には良いだろう。この後また特訓が続くしな……)」

そんな教え子たちを、相澤先生は特別に見逃すのだった。

仮免試験へ向けて

相澤先生の話が終わった後は、まずは1日をかけて皆が生活になれるための準備を始めた。それぞれの部屋に運ばれた荷物を思い思いに配置し、各階の構造や非常口を確認し、風呂や洗面所にキッチンやロビーなどそれぞれの施設を皆で確認していく。それが終われば今度は掃除当番や料理当番を決めていく。

「そーだ、ゴミの分別ってどうするんだ？」

「あ、それもあつたわ！ 住んでる所で違うよね？ ウチの所と細かい所違いそう……」
「むっ！ それはきちんと確認せねば！ 収集員や焼却場の皆様にご迷惑がかかってしまうー！」

「じゃあ、ネットで調べてプリントアウトしておくね」

「そういやパソコンにプリンターも共同のが有ったな……持ってない奴も使い方覚えとくと便利じゃね？」

「ご、ゴミの分別ですか……初めての体験ですわ」

「ヤオモモが超お嬢様な発言してる！」

皆が集まってから、会話が途切れずに続いていく。合宿の時、みんなでワイワイガヤ

ガヤしながら訓練をして生活をするのはとても楽しかった。だけれども、今日からはそれが日常になる。しばらくすれば慣れてくるだろうけど、今はそれが凄く楽しくてまたワクワクしてくる。その内B組も巻き込んで、色々なことが起きるのだろう。

「いよーっし！ じゃあ、一通り終わった所で皆の部屋、確認してみようか！」「お披露目、お披露目！」

話もほぼまとまった頃、女子組からそんな声が上がってきた。

「ふえ？ って、わあああああつ?! ダメダメツ?! ちよつと待——!!!」

そしていきなり立ち入られる緑谷の部屋。オールマイトだらけのオールマイト部屋である。フィギュアにポスターにタペストリー、本棚にはオールマイト関連の本がぎっしりと。BDも当然オールマイトだけである。

「オールマイトだらけだ！ オタク部屋だ!!」「うわっ！ すぐえ予想通りだぜ」

お部屋訪問にテンションが上り批評していく皆様方。緑谷は顔を真赤にしている。

「よおし！ 次は夜嵐君の所行ってみよー！」

「俺ツスカ!!!」

特に苦も無く夜嵐の部屋へ。一言でいうとそこは混沌カオスであった。本、ゲーム、トレーニンググッズ、勉強道具など様々なものが棚にギツチリと詰まっている。

「うわっ、濃い！」「本人と同じくらい濃いな」

そして見たものの感想はそのまま濃い、である。

「好きなものを集めてたらこうなったツス！」

何時もと同じテンションで堂々と叫ぶ夜嵐。それに感心する男子連中と

「何か予想の範疇だよね」

『うんうん』

割と評価が厳しい女子の面々。少し見た後すぐ次へ移動すると、そこには常闇が立っていた。

「フン、下らん……」

などと言つてドアに体を預けていた常闇。だがおもむろに峰田と上鳴に押されて退けられ中を見られた。

「おわつ、真つ黒！」 「闇属性だ！」

「出ていけっ！」

珍しく激おこな常闇が皆を追い出し、次は青山の部屋にだ。本人は喜んで迎え入れるも

「予想の範疇だよね」

と、続いて酷評をされる。そんな反応が何度も続くと段々と不満も溜まってくるもので

「ちよつと男への当たりキツくね!」「そーだそーだ! 女子の部屋も見せやがれ!」

早速のドツタンバツタン大騒ぎ。寮生活1日目は、こうして騒がしく過ぎていったのだった。

そんな中、一人蛙吹だけが不安げに見ていたが、1日の終わりに救出しに行ったメンバーと話し合うことで、次からはいつもの調子に戻った様だ。これで、1—Aは全員何時も通り、心機一転して残りの夏休みを過ごしていくこととなったのだ。

そして次の日。夏休みの真っ最中だがここは雄英。もはや通常の授業日と変わらず朝早くから教室に相澤先生含め全員が集まる。

「昨日話した通り、まずは“仮免”取得が当面の目標だ」

『はい!』

早速話し始めた相澤先生に、全員の返事が唱和する。

「ヒーロー免許つてのは人命に直接関わる責任重大な資格だ。当然取得のための試験はとて厳しい。仮免といえどその合格率は例年5割を切る」

「仮免でそんなキツイのかよ」

皆の意見を代弁するように、顔を青くした峰田が呟く。その事実を初めて知る面々は特に、顔色が優れない。

「そこで今日から君等には一人最低でも二つ……」

クイツと指で外から手招きする相澤先生。すると、入ってきたのは3人の先生方。

「必殺技を作ってもらう!!」

『学校つぼくてそれでいて、ヒーローつぼいのキタアア!!』

思いつき盛り上がる一同。必殺技、そう聞いてワクワクしないヒーロー志望は居ないだろう。朝からテンションが一気に上る。

「——とは言っても、諸君らは既に幾つか必殺技を編み出している者も居るな。よって、これは普段の放課後の特訓の延長になるが……夏休み期間だ。授業や帰宅時間に悩まされず、長時間訓練できる上にエクトプラズム先生やセメントス先生がほぼ付きっ切りで見下さる。何時もより効率的だろう。そして、編み出す必殺技に合わせてまたコスチュームの改良も個々に行っていく。皆、PLUS ULTRAの精神で乗り越えるように」

『はいっ!』

それに、元気良く答える一同。こうして、朝からTDLでの特訓が始まった——が。

「さて、その前に。緑谷、夜嵐、轟。お前らはこつちに付いてきてくれ。話がある」

他のクラスメートが教師に引率されてTDLへ行く中、3人が相澤先生に呼び止められた。

「は、はい」「うつす!」「…了解」

「お、1—Aトップ3が呼ばれてる」「なんだろなんだろ?」

3人だけが特別に呼ばれることに興味津々なみんなだが、ひとまずそれぞれの場所へ呼ばれていく。相澤先生に連れられた3人は疑問に思いつつもとある個室へ呼ばれると、そこには既に校長先生が座っていた。

「やあ! よく来たね! まあ座ってくれたまえ!」

校長の隣には相澤先生が、そして向かいのソファーに生徒3人が座る。ますます疑問に思う3人だが、それは早速解消され始める。

「さて、君たちをここに呼んだ理由だが、次の仮免試験の事なんだ」

校長自らがお茶を入れ全員に配りながら話し始める。

「仮免試験、ですか?」

それならば、それこそ1—B含めた全員の前ですればいい話なのに一体何なのだろうか。首を傾げつつ不思議に思う3人だが、聞かされたのは更に予想外な言葉。

「うん、そうさ。次の仮免試験は2段階有るんだけどね、最初の1段階を君たち3人は免除するとの通知が上から来たのさ」

「へっ!?!」「はっ!?!」「なっ!?!」

全くの予想外の内容にびっくりする3人。いまいち事態が飲み込めない。

「い、いやいや、僕らまだ1年生ですよ!?! それなのに何でそんな特別扱いを!?!」
「そ、そうツス! 何か不公平ツス!」

「落ち着けお前ら、それを今から説明するんだ」

ジロリ、と、ドライアイな目で一睨みされると、ピタツと落ち着く二人。それを見ると校長は隣でH A H A H Aと笑いながら話し始める。

「特別扱い、それは当然さ! 何せ君たちは特別なんだからね!」

手を可愛く上げて笑顔な校長。そして相澤先生の説明が続く。

「お前ら、4月に入学してからの事を思い出してみろ。USJでのヴィランの撃破を筆頭に脳無の撃破とステインの捕獲、I・アイランドでの事件の解決に合宿でのヴィラン及び脳無の撃破。事実としてはつきり言っておく。お前ら3人は戦闘に限って言えばすぐにもプロで通用する」

「その通り、試験とはその資格に相応しいかを判断する為に行うんだ。だから既に実力が証明されている君たちには必要無い、と上が判断したんだ」

先生2人、そして上とやらの高評価になんとも言えない感情を抱く3人。特に、真っ直ぐ熱血の夜嵐は複雑そうだ。

「で、でも特別扱つてのは……「夜嵐」」

言葉を募らせようとする夜嵐に、相澤先生は手を伸ばしピタリと言葉を止めさせる。

「お前らの免除は、他の試験を受ける奴への配慮でも有る」

「ほ、他の人ツスカ？」

「そうだよ！ 仮免試験なんだから、プロの基準を100として60位の人を選別するために有るんだよ！ そこに120位有る人をぶつけるのはぶつけられた側の不幸さ！」

「あ、あく……」「そうか……」

何となく、納得する緑谷と轟。この3人ならば他校のトップクラスの生徒にでも勝てるだろうし、それは一人でも多くの強いヒーローを求めている上の思惑とも合致しないのだ。

「実際、お前らはプロヒーローでも撃破が難しい脳無を複数体撃破している。上は何が何でもお前らを現場に出せるようにしておきたいんだろう」

そんな上の思惑に複雑な感情を抱いてしまう教師陣だが、それと同時にこのとてつもなく優秀な3人を遊ばせておく余裕がないというのも分かっただけに、あまり強く反対も出来ないのだ。だから、自分達教師に出来るのはより彼らを優秀なヒーローへと成長させることだ。

「さて、次の仮免の試験は2段階に分かれる。1段階目は戦闘、そして2段階目が救助だ。お前達3人は、2段階目の勉強を重点的にやってもらおう。AEDを筆頭とする救命

道具の使い方や事故、火災現場での迅速な行動、瓦礫への対処法など、覚えることは多岐に渡る。……例年通りならUSJからじつくりと学んでいくんだがな、今年はトラブル続きでどうしても諸君らへは戦闘面ばかりを覚えさせることになってしまった。……本当にすまないと思っている」

と、先生二人が同時に頭を下げる。

「い、いえ、仕方ないと思います」「そうッス！　ずっとトラブル続きだから仕方ないッス！」「訓練が無かったら、もつと辛かった」

「そう言ってもらえると、助かるよ。とにかく、君達は他のクラスメート達と少々やることが変わるから、そこを話しておきたかったんだ」

「3人共それぞれ様々な技を編み出しているしな……が、轟。お前、個性の同時使用はどれくらい出来る？」

「——同時に使うと、少し動きが鈍ります」

今まで個性を使つてこなかったせいかな、どうしても同時使用时には動きも精度も落ちるようだ。

「そうか。じゃあ轟は合宿に引き続きこの個性の同時使用の訓練を重点的にするよ。両手を同時に使うように、氷と炎も同時に使いこなせ。それでお前は更に強くなれる」

えっ！」

「手伝って欲しい事が有ったら、遠慮無く言えよ？ 何時でも手伝うから」

「うんっ！」

新しく出来た目標に、改めて心を燃やす3人。その様子を、二人の教師は表情をほころばせて見守ったのだ。

さて、新たに気合も入った所で3人がTDLの特訓に合流すると、そこではセメントスとエクトプラズムの二人が能力をフル活用して、A組の特訓を指導していた。そこには更にオールマイトもやって来ていて、それぞれへとアドバイスをしている。

「やあ、緑谷君、よく来たね。なにか必要な地形は考えているかい？」

早速セメントスがやって来て地形をカスタマイズしてくれる様だ。

「あ、あの、いろんな形や大きさや重さのブロックや玉なんかを沢山お願いします！ これの、訓練をしたくて！」

手から「黒鞭」を出して、希望を伝える。先代から継承した力の一つ。上手く使いこなさなければ。

「分かった。新しい武器が出来たようだね。使いこなして、ちゃんと自分の強みに出来るようにするんだよ」

「はい！　ありがとうございます！」

こうして緑谷の希望の物を作ると次は夜嵐、そして轟の元へ。周りを見れば、皆はそれぞれ自分の”個性”を発展させて必殺技を作ろうとしている。だが、自分はまずは”個性”を知ることから始めないと。そう思うと、初めに四角いセメントブロックへと黒鞭を伸ばし、掴む所から訓練を開始したのだった。

新しい力、新しい日常

”個性”とは手足の様な物だ。生まれながら、あるいは幼い頃に発現して能力を己の体の一部の様に操れるようになる。初めは意識しながら、そして段々と無意識に、そして他の行動をしながらと、その技術は徐々に熟練していく。使えば使う程に能力が上がるのもまた四肢と同様だ。そしてだからこそ、ここまで遅く発現してしまった力は操るのがとても難しいのだ。

「ふう——、ふう——」

緑谷は、腕から”黒鞭”を出してひたすらに基礎動作を繰り返していた。様々なセメントのブロックを持ち上げる、四角いブロックを積み重ねる、または左右別々に鞭を出すなど、やっている事は只管に地味だ。だが、そんな動作でも高い集中を必要とし、また時々落とすなど不慣れな様子を見せていた。まるで、始めて自転車の補助輪を外した時の様に、おっかなびつくりと何度も失敗を繰り返しながら、動作を学んでいく。

脳無を相手にした時は、心の動くままに力加減も数も何もかも滅茶苦茶だったが、そのお陰で拘束も出来た。だが、その反動は凄まじく体中に痛みが走ったものでまたリカバリーガールの治癒を必要としてしまった。だから、今は限界を見極める段階だ。操れ

る鞭の数、強度、持ち上げられる重さ——様々な事を一つ一つ確認していく。皆が必殺技に磨きをかけている横で行う、とても地味な作業。だがしかし、これも受け継いだ力の一つ。ワン・フォー・オールを継承した一人の大事な力。厭うことも飽きる事も無く、真摯に訓練を続けていた。

「出せる場所は体中何処からでも出せる。でもやっぱり手からのほうが動かしやすい。黒鞭自体も太くしたり鋭くしたりして色々な攻撃の手段として使えそう。それに形も変えられるから手の平みたいにして腕みたいな使い方も出来る。長さも自由自在でものを引き寄せたり逆に僕の体自体を移動させることも出来る。うわこれは凄い応用力だ……網みたいにも出来るだろうしネットみたいにして人が人を運ぶのにも使えそうだし、たくさん出せば一度に沢山の人を運べそう。僕はオールマイトみたいな体格がないから沢山の人を運ぶ時の手段が悩みだったけどこれなら何とか出来るかも？でもまだ技術が追いついてない……いや体に貼り付けるように短く固定すればなんとかなるかも？出来る限界も測らないといけないけどどうやったら少ない労力で目的を達成できるかも調べないといけないし……そうだ、シンリンカムイの技も参考に……それと身近な人と塩崎さんもだ。是非教えてもらわないと。それと昔のヒーローノートにも技がたくさんあったな。そうだ、それにアメリカのマンスパイダーの技も参考に……」

地味な訓練なので隅っこの方で行っているが、同時に凄まじい勢いでブツブツ呟いて

いる。最初は引かれたがもうクラスメイトは慣れたもので生暖かく見守っている。と、そこへ瘦せた一つの影が。

「やあ、少年、精が出るね」

「あつ、オールマイト、怪我は大丈夫なんですか？」

両手の黒鞭でトゲトゲしたブロックを持ちながら緑谷が振り返る。ギプスを巻いて釣られた腕が痛々しい。

「H A H A H A、皆が必殺技の特訓をしていると聞いて居ても立っても居られなくてね。一通りアドバイスをしてきたところさ」

どうやら、既に他の皆のところを回ってきて最後に緑谷の所に来た様だ。没頭しすぎていて、オールマイトが来た事すら気が付かなかった。

「……ところで緑谷少年、その力だが……」

当然、気になるのはその力の事。メールや電話では万が一のことが有るので、こうして直接話すことにしたのだ。

「——ワン・フォー・オールのかつての継承者の人が、あの戦いの時に話しかけてきたんです。決着を先延ばしにしてすまなかった、この力を使えって語りかけてきたんです。黒鞭、って言う個性のようで、今までずっと力を蓄えてきたみたいで僕の方に開花した

——って感じ何だと思います」

「かつての、継承者の”個性”！」

継承者の自分ですら知らなかった受け継がれてきた個性。それが目の前の少年に発現した。それがどれほどの衝撃か。しばし、言葉を失うオールマイト。

「そうか、まだ知らない力が眠っていたのか……。君の時に現れたということは、きっと何か意味が有るのだろう。——未来を頼むよ」

既に、自分守られる側になってしまった。そして、もう戦うことは出来ない。時代の移り変わり、寂しさ、無力さ、頼もしさ、期待——様々な感情がオールマイトの胸に吹き荒れる。

「はい、任せて下さい」

そしてそんな心情を押し量ってか。安心させるように、そして意思を継ぐと言うように、とてもほっこりする笑顔で返事をするのだった。

「フヘエエエ、毎日大変だア……！」「圧縮訓練の名は伊達じゃないね」

訓練が始まってから数日経った後の夕刻、1階ロビーでは今日も今日とてゆったりした時間が流れていた。全員私服で、何かつまんだり飲んだりしながらの談笑タイムである。キツイ毎日の中の数少ない癒やしだ。

「おーい、できたぞー」

と、いい香りを漂わせながらロールケーキを大皿に乗つけて持ってきたのは砂藤だ。週に一度シユガーマンのシユガータイムとの事で、お菓子を作ることにした様だ。

「セットで紅茶もどうぞ」

付け合せは、八百万家から持参した高級茶葉の紅茶で有る。途端に群がる甘い物好きな女子たちとカロリーに飢えている男子達である。

「甘え、ウメエー！」「美味しく♪流石シユガーマンだよね」「これ、店で出せるんじゃないね？」
「学園祭とかで出すのも面白そうだよな！」

「へへっ、どんどん食ってくれよな」

砂藤も照れつつ嬉しそうだ。親元と離れて少し寂しい気はするけれど、それ以上に仲間と一緒に生活はまた楽しいものだ。

「あつ、すみません、印照さん、本当に有難うございます」

「そーいや轟、お前ら3人あの時何で呼ばれたんだ？」

ふと思いつ出したかのように瀬呂が呼び出しの事を聞く。大なり小なりみんな興味が有ったのか、聞き耳を立てる一同。

「……悪い、口止めされてる」「ツス！」

「うわ、マジか。じゃあ仕方ねーな」

が、生徒たちに試練を課すことに余念が無い先生たちだ。3人の不参加はギリギリま

で伏せるらしい。よって、話すことは出来ないのだ。

「しっかし、思い返してみると今年は夏らしいこと全然してない気がする」

「だねー……。合宿に寮生活に特訓の毎日になって本当に大変だったし」

「流石雄英高校だよな。スケジュールの詰め方が中学と全然違うわ」

合宿の女子会の時でも少し話題が出たが、日本一のエリート校だ。色恋沙汰に青春にと楽しむ暇が殆ど無い。だが、それではあんまりとの事で土曜は午前だけ、日曜は休みにしてくれる様だ。

「次のお休み、何をしようかしら」

「そういえば外出する時は行く場所とか報告しないとダメなんだよな。ちよつと窮屈だわ」

「それは仕方ないだろう。ただでさえ入学当初から狙われているのだからね」

「彼女……。彼女が欲しい……。」「出会いは何処だ……。」「

オールナイトが引退してから、徐々に世の中が変わり始めている。そして、自分達もその渦中にいるのだと薄々気が付き初めている。だからこそ、楽しめる時は楽しもうとしているのだろう。

「それじゃあ、予定空いてるか聞いてみますね。じゃあ、また」

Pi、と通話を切り緑谷も匂いにつられてやって来た。

止まらない。

「あ、あはははは……喜んでくれて良かったよ」

I・アイランドとかでも頑張ってたし、これくらいの役得は良いよね、と喜んでくれた事に満足気な緑谷であった。

なお後日

「緑谷あ！俺にも紹介してくれよ！」「あの3人だけずりぞりぞ！俺にも紹介してくれ！」「A組にばかり紹介してB組には紹介してくれないのかい!!」「聖愛のお嬢様ですか！私も興味がありますぞ！」「深遠なる闇……だが時には色の香りが有っても良い……自由とはそんな物だろう？」

「こ、今度また聞いて見るから落ち着いてえええええええつ!？」

と、A組B組の男子組に詰め寄られたのであった。

——以下いつかやってみたいおまけのネタ——

I・アイランドのデヴィット博士の研究室。そこは世界最先端の”個性”科学の研究が行われている場所でも有る。そして今、研究されているのは移動系の”個性”であった。オールマイト、そしてゴージャスグリーンに敵対する組織には、空間を飛び越えて

移動することの出来る個性が複数目撃されている。そのお陰で、ヴィラン連合は少数ながらも転々と場所を変え逃げ延びているのだ。

基本、”個性”は再現が凄まじく難しい。一人一人能力が違い、また似た物は有っても完全に同一、というのはそれこそ一卵性双生児等の極一部の例外に留まる。が、個性にまつわる現物が有れば説明は進むかもしれない。幸い、神野区の際に、転移した時に発生した黒い液体のサンプルを送ってもらえた。新しい研究対象に心が踊ってしまうのは、研究者の性だろうか。

「ど、どうも、お邪魔します」

「あ、パパ、調子はどう?」

「やあ、メリッサ。それにイズク君。新しいスーツやガジェットの調子はどうだい?」

そんな事を考えていると、スーツの調整を終えたのか緑谷とメリッサが研究室に入ってきた。調子が良かったのか二人共表情は明るい。

「は、はい、凄くいい感じです! 黒鞭に合わせてあちこちカスタマイズもされていますし、ガジェットも細かい点が改良されてて凄く使いやすくて!」

「データもバッチリ採ってきたわ。パパ」

二人の様子に嬉しそうに目を細める。オールマイトはもう戦えなくなってしまうが、その後継者も、そして自分の娘もしっかりと育っている。その内抜かれてしまうか

もしれないな、と思っていると突如アラームが鳴り響く。

「ななっ!」「パパ、どうしたの!」「これは、一体……!?!」

慌ててモニターを確認すると、そこには見たことも無い異常な数値が現れ、また黒い液体が沸騰したかのように暴走している。そして、そのまま容器から溢れ出ると、そのまま3人を飲み込み——後には静寂だけが残った。

「ぶはっ!?!」「ここはっ!?!」「ゲホッ、ゲホッ、い、一体何が起きたっ!?!」「う、うええ……酷い味……」

ほんの数秒後、3人は研究室とは全く違う場所に飛ばされていた。慌てて周りを見てみると、どうやら街中のような。緑谷には全く見覚えがないが、デヴィットには何となく似ていると思える場所があった。

「ここは……ニューヨークか?」しかし、前に見たときと大分様子が違う様な……」

訝しげに周囲を見してみる。まず目に付くのは車だ。だが、随分と旧世代な車が多い気がする。いや、車だけではない——と、考え事をしてしていると、途端に、複数の爆発音。そして、上がる複数の悲鳴。

「きゃっ!?!」「な、何だっ!?!」

緑谷は慌ててヘルメットを展開すると、情報収集を始める。そして聞こえる飛行音。

その姿をHALと共に視界に捉えるが、その姿も乗り物も今まで見たことも無い物だ。しかも、統一されている。

”未知の成分及びエネルギー源を探知。恐らく、地球由来の物では有りません”

「はああつ!? う、宇宙人!?”

その分析に人生でもトップクラスの驚愕をするが、とりあえず今分かっていることは、その宇宙人に人々が襲われているという事だけだ。

「デヴィットさん、メリツサさん、物陰に隠れて!」

そう言うと、飛び上がり手近な1体を殴りで地面へ叩き落とす。数は沢山、状況も場所もさっぱり分からない。でも、そんなものは誰かを救わない理由になりはしない。

ゴージャスグリーンを驚異と見たか、異形の宇宙人達は緑谷を囲み始める。だが、それに臆する事も無い。

「さあ、僕が相手だ!」

地面を蹴り、先手を取って端から殴り、蹴り碎き、投げて吹き飛ばし、投擲で無力化する。圧倒的な科学力を持つ筈の宇宙人が、ただ単純な暴力に蹂躪されていた。

そして――

「おい、何だありゃ? あんな奴見たことが有るか? データにも無いぞ!」

宇宙人を引きつけながら、上空からその戦闘を見下ろす鋼鉄アイアンマンの男。異なる世界のヒー

ローが今、邂逅しようとしていた。

島、回原、円場、砂藤などの彼女が欲しいと常々思っている面々にも冷や汗が流れる。そういえばそんな服、用意してねえ。

「どうする、どうするよ!?」「どうするもこうするも、明日だろ!? もう時間ねえだろ!?」「今からでも買いに行くつきやねえ! とつとと申請するぞお前ら!」

どやどやと慌てて校舎に駆け込もうとした時、「あれ、どうしたの3人共?」なんて気の抜ける声と共に緑谷が現れた。シャワーを浴びていたのか、髪が仄かに濡れている。そして、緑谷の着ているTシャツを見る3人。白地に「頑張るTシャツ」なんて文字が書かれている。恐ろしくダサイ。緑谷の両肩に瀬呂と上鳴の手が伸び、ガシツと掴まれる。

「緑谷あー! お前も今すぐ外出申請して来い!」「服買いに行くぞ服う! おめー、そんな服で聖愛のお嬢様方に会いに行く気か!?」「そんなTシャツ何処で売ってんのか逆に不思議だよ! お前のセンスどうなってんだよ!」

迫真の表情で迫る3人。流石にこの友人のセンスをほっとけなくなつたようだ。

「え?え?え? あ、明日は3人で会いに行くんじや……」

「ばつかおめーハードルたけーよそれ!」「付いてきてくれよお! 俺ら3人で会いに行くとか難易度高いんだよ!」「主催がお前なんだから取り持つてくれよ頼むよ!」

「で、でもでも……」尚も洩る緑谷。だがそこにさらなる追撃が降りかかる。

「あく、緑谷、ごめん、それウチらから見てもどうかと思う」「ぐはっ!!」

耳郎の口撃により1HIT

「うんうん、正直ものすごいダサイよね」「がはっ!!」

葉隠の口撃により2HIT

「センスがゼロじゃなくてマイナスデース」「ごはっ!!」

角取の口撃により3HIT

「ヒーローって格好良さも大事じゃない？ 正直、今の緑谷ってヒーロー失格レベルでダサイからどうかしたほうが良いと思うの」「かはあああああああああっ!!」

小森の本気の心配によりトドメの4HIT

吐血して床に崩れ落ちる緑谷。意識が無い、どうやら致命傷の様だ。

『み、緑谷あああああああっ!!』

そしてこの場にいる男子全員からの悲痛な叫び。頼れる友人の今までで一番情けない姿に涙が止まらなかつた。

「……どうする?」「どうするよ?」「とりあえず、連れてくか」

瀬呂と上鳴がよっこいせと上半身と下半身を持ち、えっほえっほと部屋まで運んで起こす。それから重傷を負い虚ろな緑谷をあの手この手で準備をさせて、またえっほえっほと肩を貸して外出許可を取りに行く。なお、今日の担当はミッドナイトだった様

で

「あら、4人揃って外出? 何処に行くのかしら?」

「えーっと、買い物ツス。明日、ちよっと出かけるんで皆で服をつて……」

「うーん、若人の青み、良いわあ♪ よし、行ってらっしゃい! 特に緑谷はそのダサイ服をなんとかしないとね」「うわああああああああつ?!」

『み、緑谷ああああああ!』

そしてまさかの何気ない追撃の5HIT目である。もう緑谷の心はボロボロだ。完全に意識が吹っ飛んだその身体を、ショッピングモールまで上鳴と瀬呂が交代で運ぶ目になるのであった。

「はっ!? ここはどこ? 僕は誰?」

あまりの精神ダメージに記憶も曖昧になりながら覚醒する緑谷。ふと周りを見渡せばショッピングモールである。

「ここは雄英近くのショッピングモールだぜ」「それでお前は緑谷出久、雄英1年A組所属」「は、重かった」

そして、ようやく一息ついたとベンチに腰を下ろす瀬呂と上鳴。

「あ、ごめんね?」

「いや、良いさ」「そつ！ 女の子紹介してくれたいしこれくらいは余裕っしょ！」
だが流石に鍛えているヒーロー科だけあって休憩もそこそこ、すぐに回復したよう
だ。

「よし、じゃあ服に靴にアクセに、一通り見てくか」「地図確保しといたぞ。とりあえず
手近な所から見てみるか」「オイラに合ったサイズの服探さねえと」

既に準備は終えていたようで、よしと立ち上がる3人。それに、緑谷も続く。何だが、
笑顔になって。

「お？ 緑谷、もう回復したのか？」

そんな様子に、目聡く瀬呂が気がつく。

「うん、なんだか……こうして友達と一緒に外を回るって思うと楽しくなってきた！」

普段とは違う緑谷の喜び方に、色々と察してしまふ瀬呂だ。だが、それを表に出さず、
同じく微笑に笑う。

「そつか、んじゃ全員で選ぶか！」「おっしやあ！」「行くぜえ！」「うんっ！」

男4人、モテる為に頑張ろうと歩き出すのだった。

「しっかし、いざかつこいい服を選ぼうってなると悩むもんだな……」

「女の子に会う時の服とか、デート用の服とか、多分何時もと勝手が違うよな？」

「オイラの場合特注になるから早めに決めないと」

この“個性”社会、服は基本的にオーダーメイドである。普通人の一番多い体格の服は既製品がそれなりにあるが、異形型も多いので、一人ひとりに合わせたオーダーメイドが店で出来ることが基本である。男4人、持ち寄ったファッション雑誌を見比べたりスマホでファッションサイトを大量に見ていつたり身を寄せ合い真剣に選んでいる。全員が全員必死で有る。が、この手の経験が無い緑谷は特にどうしたら良いかという基準が自分の中に無いので堂々巡りである。

だがしかし、ここはそれなりな大きさの洋服店。そんな悩んでいる男子はいいお客様とばかりに、店員が寄ってくるのである。

「何かお悩みでしょうか？」

やって来たのは営業スマイルのお姉さん。声をかけられると4人が一斉に振り向く。

「あ、あのえーつと」ゴゴ、合コンみたいな感じのイベントが有って、それに着てく服を選ぼうと思ってるツス！」

経験がないのでしどろもどろな緑谷に、多少は慣れているのか受け答えをする上鳴。

「はい、お相手はどの様な方々でしょうか？」

「えーつと、聖愛の……多分お嬢様っぽい上品な感じだと思っんですよ」

柔らかな口調で根掘り葉掘り、男子4人の要望や条件を掘り下げていく。夏・相手は

上品・服一式にアクセサリなども考えているとの事で、相槌を打ちながら話を引き出し、女性目線で次々とアドバイスを送っていく。何より、この4人は素材が良いのである。ヒーロー科であり、全員が毎日鍛え身体が引き締まり筋肉が付いている。ガッチリした体格と筋肉は、男の身体を映えさせるのだ。

女性が御洒落をして来る分、男性はあまりゴテゴテせずにシンプル、爽やかに。ネックレスなどのアクセサリで身を引き立たせ、瀬呂や峰田は“個性”で変形した身体を装いの一部として取り込むように。

女性から褒められ、言葉巧みに芽生えた見栄やオシャレ心をくすぐられると財布の紐も緩くなるうという物。特に職場体験で臨時収入が有ったことも有り、両手に次々と商品が積み上がっていく。

「えーっと、それじゃあこれも！ あ、このシルバーのネックレスとかこのシャツと合いそう……」

「俺としてはエスニックに攻めたいけど……浮きそうだからアクセ辺りで主張しておくか」

「これ、良くね？ 普段のギャップで攻められね？」

「オイラはモギモギが有るから……いつそそれに合わせて……」

男4人、それと店員さんが代わる代わる来て話し合いながら商品を選んでいく。そし

て気がつく」と

「ありがとうございまして〜♪」

両手にどっさりどと戦利品を抱えた4人の姿が有ったのだ。

「やべえ、めっちゃ買い込んだ」「俺、こんなに買ったの始めてだぜ……」「へ、部屋に戻ったら整理しないと……」「オイラはこれからモテる男になってやるぜええええええっ!」
何はともあれ、オシヤレの土台は整った。すっかり日も暮れた辺りでえっちらおっちら学校へ戻ると、ロビーの面々から出迎えられる。

「あ、おかえり〜!」

元気に手を振る芦戸を筆頭に、男女問わず抱えている物の多さにびっくりだ。そして、やはり気になるのは買い物の中身だ。特に緑谷や峰田は一体どんな変身を見せてくれるのか。

「ねーねー、着替えてきてよ!」「お、俺もちよつと参考にしてみたいわ……」「新たな装い——俺も興味があるな」

そしてそれから暫く、有志によるファッションチェックが始まったのであった。

ヒーローの在り方

仲間たちの前でファッションショーをやった次の日、緊張から早起きをした4人。共同で作ったご飯をしっかりと食べた後、そそくさと部屋に戻り着替えをする。先にシャワーを浴びたりして身だしなみはしっかりと。着こなしは昨日着た服装の中から評判の良かったものを。絶対に遅刻できないと早めに許可を貰いに行く。

「あらあら、そんなにめかしこんじゃって。その青臭さが良いわあ……♪」
『っ!?!』

なぜだか昨日に引き続き2連続で当直していたミッドナイトのとてもいい笑顔にほんのちよつぱり寒気がする4人だったがそんな事より相手を待たせないことが大事である。バス・電車を乗り継ぎ雄英近くの繁華街へ。待ち合わせ50分前に着いてしまったのはご愛嬌だろうか。緊張で普段より固くなりながらとりあえず真つ先にやる事は……

「いいか、峰田、お前今日は絶対セクハラするんじゃねえぞ!」「したら電気ショックで昏倒させつかんない!」「(いざって時は黒鞭での咄嗟の拘束……いや、携帯用ロープで縛る……)」

剣呑な3人。まあ今までの実績を振り返れば当然とも言える。

「流石にオイラもこの状況じゃしねえよ!」

とは言えこれは峰田にとつても降つて湧いた大チャンス。相手から寄つて来てくれるのであれば普段のがつつき具合も幾らか落ち着こうというもの。というより、お嬢様学園の生徒が興味を持つて向こうから寄つてきてくれるとか初めての経験すぎて半ばパニックである。

「いよおしとりあえず落ち着け、まずはプランを思い出してだな……」

「音楽とかやつぱりクラシックとかが好きなのかな? ロックじゃダメ? やつぱ?」

「オシャレなカフェとか調べてきたけどネット上の評判と違つたらどうすりゃいい……」

この期に及んでも顔を突きつけあわせて知恵を絞り出そうとする。とにかく失敗はしたく無いのだ。かつてないレベルで頭を使う。

「あ、オールマイトシヨップとかは『ダメに決まつてんだろ!!』はいいいいつ!」

そして急に行くことが決まつたので考えきれていない緑谷。オールマイトなら人気が申し分ないんじゃないと軽い気持ちで言つたらものすごい剣幕でダメ出しされる。

「お、おい、緑谷俺たちでフォローしないとダメじゃねーか?」「あいつに任せるとオールマイトグッズの店を梯子しかねねーぞ……」「あいつにこんな弱点が有つたんだな

……」

勉強に訓練に戦闘にと、学校生活上は弱点と言えるものがまるで見えない緑谷だが、まさか私生活がここまで抜けてるとはと意外な弱点になんとも言えない気持ちになると同時に、”あの”ゴージャスグリーンにも弱みがある所に何だか安心する。

とまあ、ミッドナイトが見たら悶え狂いそうな青春の一コマを男4人で展開していると待ち時間30分前に緑谷が見慣れた顔を見つけた。

「あつ、印照……さ、ん……」

そしてその姿を認めてドキツとする。普段は夏でも制服を華麗に着こなしている知的な女性が、麦わら帽子にノースリーブ、そしてキュロットスカート。知的ながらも普段よりも強くセクシーさを漂わせる容貌に、言葉が詰まる。I・アイランドで思い知らされた筈なのだが改めて思う。女性とは、服装でここまで変わってしまうのか。

「うおお……」「うわっ……」「すっげ……」

そして絶句しているのは他3人も同じである。才子の後ろに引き連れている女の子達も、女性との経験が乏しい彼らですら分かる気合の入れ様だ。自分達も相当に気合を入れていたが、相手側も本気だと分かる様に、一気に緊張が高まる。

その様を見ると才子はくすりと笑い、緑谷へ話しかける。

「こんには緑谷さん、それに皆さん。早速ですけど紹介をお願いしますか？」

「どうやら代表して緑谷に紹介をお願いするようだ。「は、はいっ！」と向き直ると、端からそれぞれ紹介していく。

「まずは瀬呂範太君、汎用性の高い”個性”で判断力も高く、何時も凄いいい所でフォローしてくれる頼れる仲間です」

「ど、どうも」

頼れると言われて照れつつぺこりと頭を下げる瀬呂。

「こつちが上鳴電気君。クラスのムードメーカーで、”個性”は範囲も調整できて高火力。複数相手だと本当に頼りになるんだ。I・アイランドでは警備ロボットを一網打尽にしたり」

「よ、よろしくツスー」

同じく照れつつ礼をする上鳴。

「更に、峰田実君。サポート向けの”個性”を持つ努力家で、自分でも色々なガジェットを使った道具を考案したりする努力家で、要所要所で助けてもらったんだ」

「お、おうっ！」

面と向かって褒められることに慣れない峰田も照れて声が上がりにながら答える。

「そして僕は……緑谷出久です。最高のヒーローを、目指しています。えーと後は……か、カツ丼が好きです」

そして緑谷の自己紹介。だけど何を言って良いのかよく分からず思わず自分の好みを言ってしまう。そのことにずっこける男3人だが才子はくすりと笑って微笑みかけてくれた。

そして、目を輝かせる聖愛の後ろの3人。何だか憧れっぽい視線を向けられて雄英組は凄いい戸惑っている。その様がおかしいのか、才子は更にくすくすと笑う。

「あら、皆様は不思議がつていらっしやる様ですわね？」

「え、は、はい」「しよ、正直」「こ、こんな風に見られた事なかったつて言うか……」「ツス」

こくこくと4人ぴったり息の合った頷きである。ここまで自覚が無いとは不思議である。

「良いですこと？ あなた方は、1年にたった40人しか入れない日本一のエリート校のヒーロー化の生徒で、しかも1年の内から立て続けに大きな事件を解決していたりするホープですよ？」

『……ああつ!?!』

そう、客観的に指摘されて声を上げる4人。そういえば、周りも全員同レベルで他の学校との交流もあまりなかったから気が付かなかつたが、自分達はエリート校の学生なのだ。そんな事に今更ながら気がついた様子がおかしいのか才子のくすくすは止まら

ない。

「この子達も、雄英の人とお近づきになれるって聞くとハイつてすぐに手を上げてくれましたわ」

「うおおおっ!!」「マジかつ……!!」「えっ、モテ期? ひよっとしてモテ期!!」

衝撃のあまり思考がぐるぐるんと巡るが、そこに畳み掛けるかのように相手側の自己紹介が続く。

「……水流雫」「千里遠見ですの」「紙絵切子よ、よろしくね!」

水色の髪の無口っ子系、長身ふわふわおっとり系、さっぱりシヨートの元氣系の子がそれぞれ自己紹介をしていく。

『よ、よろしくおねがいます!』

とりあえずハモる事の多い男子4人、またも同じ動作と同じ言葉でご挨拶。

「さてと、まずどなたか希望などは……」

と才子が意見を纏めようとした所で

「あ、あの、お姉様、緑谷さんと話が有るんでしたよね!」

「へ?」

「大事なご用事なのでしょう? 是非とも直接お話をすべきですわ」

「え? え?」

「……こつちは大丈夫。きつと、楽しくやれる」
「ふえええつ？」

と、ぐいぐいと才子が緑谷の方に押される。戸惑う緑谷と才子。その間に、残った三人と一緒に他の場所に行こうとする。

「じゃ、行こ行こ！ 何処から回る？」「殿方と出かけるのは始めてなので楽しみですわ」
「ゲーセンでも可。音ゲーには自信アリ」

そんな女子三人の勢いと思惑を何となく察したか男子組もそれに合わせて別の場所に行く。

「お、おお！ それじゃ行きますか！」「おつ、ゲーセンとかアリなの？ 見せちゃうよ？ 俺良い所見せちゃうよ！」「カラオケとかも有りか？ やつべ、何かワクワクしてきた」

そして取り残される緑谷と才子。ぽつんと二人残され顔を見合わせ——
「じゃ、じゃあ、とりあえず何処から巡りましようか？」

「は、はいっ！ ど、何処でも大丈夫ですっ！」
どうやら、初めのスポットを決めるのは中々に時間がかかりそうである。

「お姉様、少しでも元気が出てくれると良いんですけど」

二人の姿が見えなくなつてから、紙絵がポツリと零す。他二人も表情は同じ、何だか心配そうである。

「何か有つたんですか？」

と、女子側がそんな様子だとやはり気になる男子側。代表して瀬呂が聞いてみると、こくりと頷く。

「もうすぐお姉様は仮免試験だからね……それとお姉様の”個性”は正面戦闘向けじゃないから」

「……才様は戦闘力が低いことに何時も気にしていた」

「でも、緑谷さんと出会つてから変わり始めましたの。今日も、いいきっかけになればと思ひまして」

それを聞くとふむ、と考え込む男子。特に上鳴と峰田はI・アイランドで一緒に戦つただけに思う所が有るのだろう。

「紅茶飲んで目を閉じたらあつという間に作戦思いついて凄かつたけどなあ。それにガジェットかなり使いこなしてたぜ」「だよな。頭良い人隣りにいるとすつげー楽だったわ。……あー、でも鞭はまだ慣れてない感じがしたか」

いかにも女王様な鞭は才子の姿にピッタリ合つていた。不埒な事を考えて打たれた

峰田や上鳴がついついゾクゾクしてしまふ程度には。

「成程な。体育祭の心操みたいに、やつぱりガチンコの殴り合い云々はヒーロー目指す上でどうしても考えちゃうわな」

それを聞いて瀬呂も頷く。だが、まあ――

「ま、緑谷なら戦闘面ではアドバイス出来るつしよ」「だよな」「だな」

上鳴の言葉に頷く二人。女性の扱いに関しては樂觀できる要素は全く無いが、事戦闘面ならきつと大丈夫だろう。そうするだけの信頼が彼らには合った。

「ふふつ、頼もしいんですね」「そうだね、じゃあお姉様の事は緑谷さんに任せて、私達は遊びましょー!」「……ふふふ、楽しみ」

『喜んで!』

こうして6人の1日は始まるのであった。

緑谷出久は人生経験に乏しい。まだ16の学生であるので当然では有るのだが、幼い頃から苛められ、更にヒーローを目指してからも孤立気味で友達と遊びに行く――なんて経験は本当に乏しかった。ましてや女性と二人で街に出かけるなどどうしたら良いのか検討も付かない。I・アイランドでメリッサと幾度か街を見たが、あれは案内してもらおうという言い方がしつくり来る。そんな訳で自主的に女性をエスコートしなければ

ばならない緑谷の頭はとてつもなく沸騰していたのである。

「(ど、どうするどうするどうする!!) 僕が案内できる場所って言うとおールマイトシヨップとかオールマイト記念館とかオールマイト博物館とかオールマイト遊園地オールマイト事務所とかだけど……!!)」

もはや偏つているとかいうレベルではない

「そうですね……」

だが、よくよく見ると才子の方も何処か上の空だ。普段と違う表情に首をかしげろが、そういうえば他の聖愛の子たちが話が有ると言っていた。

「え、えーつと、何か悩み事、有りますか? 僕で良ければその、相談に乗りますけど」
ともかく、悩んでいても仕方ないと、意を決して聞いてみる。すると、少し逡巡した後、ぼつぼつと語りだす。

「もうすぐ、仮免試験ですわね」

「は、はい! 僕は1年の内から出るって事で今も学校で特訓期間で」

緑谷自信は言わばシード枠とも言うべき立場だが、他の皆は1次試験から通過しないといけないので訓練に余念が無い。

「ええ、私もそれを受けることになっています。……でも」

表情が、優れない。いつもの優雅で自身に満ちた表情が、見えない。何となく、良く

ないことだと緑谷は思った。

「……オールマイトの引退から、ヴィランの活動が活発になっていきます。これからは、ヒーローはより戦闘力を求められる時代になって行くでしょう」

そこまで言われれば、察する。彼女は、己自身の強さに悩んでいるのだ。

「I・アイランドでみなさんと一緒に事件を解決して。そして、神野区の事件でヒーローたちの活躍を見て、こう思ってしまったのですわ。………羨ましい、と」

ドクン、と心臓が跳ねる。理解^{わか}る。理解らない筈が無い。かつて、自分が何処までも焦がれた物。決して届かなかった物。

「私を慕う子達の事は、強さも弱さも全て把握しています。そして、私の能力も。集団戦ならば、引けを取るとは思いません。——でも」

彼女が自身を見る表情は見間違いようがない。羨望だ。

「轟さんが 夜嵐さんが 八百万さんが 耳郎さんが 上鳴さんが 峰田さんが 飯田さんが 麗日さんが 蛙吹さんが」

一人一人紡がれていく名前

「そして、何よりも——貴方が。とても、羨ましかったのです」

羨望、嫉妬、そして何より自己嫌悪。その哀しさに、緑谷は確かに嘗ての自分を重ねた。

ただの慰めなんて、何の意味すら持たない。幸運にも力を引き継ぐことが出来た”個性”の自分が言えることなど何が有ろうか。——でも、彼女は昔自分が持つていなかったものが有る。それは分野が違うとはいえ、確かな強い”個性”だ。

気持ちは理解ります。その言葉を、飲み込んだ。

「……………インターン、やるとしたら場所は決まっていますか？」

「？ いえ、まだ取得も出来てませんので」

突然の話題転換に、首をかしげる。だが、緑谷は好都合と言葉を続ける。

「なら、もしお互い仮免を取得出来たら、同じ場所で働きませんか？」

突然のお誘いだ。ますます、疑問が深まる。

「印照さんの能力は、素早い判断が必要な現場でもとても重宝します、間違いなく」

咄嗟の判断だけでなく、全体を見ての判断や、その現場に直にいる事で感じる空気や、ヒーローが与える安心感。前線にも、頭脳は必要だと言うのが緑谷の経験から得た判断だ。

「強くなりたいたいなら、訓練にも付き合います。そして、僕の働きで証明してみせます。あなたの頭脳は、適切に扱えば僕一人より、僕や現場のヒーローだけより、もっと沢山の人を救えるんだって！」

ぶつけられる真っ直ぐな想い。そして理解する。彼は今のこの自分も救けようとする

るヒーローなのだ。強さで悩む自分にとつては、少しズレた答えなのかもしれない。だけれども

「ええ、もしお互い取得できれば……お願いしてみようかしら」

「こつも真つ直ぐに救けようとする意思を向けられるのは、何だかむず痒いけれど悪くはなかつた。」

「ええ。こんな愚痴を聞いていただきまして有難うございます」

「い、いえ！ とんでもないです！」

「それじゃあ、せつかくですし何処かに行つてみましょうか。お勧めの場所は有りますか？」

ふふつと微笑みかけて聞いてみると、目の前のヒーローは慌てて候補を上げてくる。

「そ、そうですね、この近くだとオールマイト記念館とかありますし、電車で2駅離ればオールマイト博物館もありますし、他にも……」

余程テンパつたのか、さつきダメ出しされたオールマイトシヨップ以外を上げてしまふ緑谷。それに、目をパチクリする才子。映画館などにも誘われるかと思つていたらびつくりだ。そして、何だかおかしくなつてクスクスと笑つてしまふ。そして、その反応に顔を真赤にして硬直する緑谷。やっぱり何だか拙かつたかだろうかいやでも他つて言う……！

「ええ、じゃあ案内をお願いしようかしら」

彼本人には悪気は一切ないのも本気なものも分かっている。こちらはこんな悩みを言ってしまったのだから、そのお礼として彼と一緒に楽しよう。そう思うと、才子は年上として優雅な笑みを浮かべて微笑むのだった。